平成23年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発 掘 調 査 報 告 書

2013.3

大 阪 市 教 育 委 員 会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

例　　言

1. 本報告書は平成23年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたもので、平成24年度事業により作成した。
2. これらの調査は大阪市教育委員会が（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所に委託して実施したものである。
3. 本報告書の執筆は（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所　南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

目　次

北　区
天満本願寺跡発掘調査（TN11－3）報告書……1

都島区
榎並城跡伝承地発掘調査（EN11－2）報告書……15

中央区
大坂城跡発掘調査（OS11－6）報告書……31
大坂城跡発掘調査（OS11－9）報告書……41
大坂城跡発掘調査（OS11－13）報告書……49
大坂城跡発掘調査（OS11－19）報告書……57
上本町遺跡発掘調査（UH11－6）報告書……67
上本町遺跡発掘調査（UH11－9）報告書……75

天王寺区
上本町遺跡発掘調査（UH11－2）報告書……85
上本町遺跡発掘調査（UH11－11）報告書……93
上本町遺跡発掘調査（UH11－14）報告書……99

旭　区
森小路遺跡発掘調査（MS11－3）報告書……105
森小路遺跡発掘調査（MS11－5）報告書……111
森小路遺跡発掘調査（MS11－8）報告書……117

阿倍野区
阿倍寺跡発掘調査（AB11－2）報告書……125
阿倍寺跡発掘調査（AB11－4）報告書……137
阿倍寺跡発掘調査（AB11－6）報告書……147

住吉区
荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査（SG11－2）報告書……155

東住吉区
難波大道跡発掘調査（ND11－2）報告書……163
難波大道跡発掘調査（ND11－4）報告書……169
難波大道跡発掘調査（ND11－6）報告書……175
難波大道跡発掘調査（ND11－8）報告書……181
酒君塚古墳発掘調査（SA11－2）報告書……187

平野区
瓜破遺跡発掘調査（UR11－3）報告書……195

北区天満一丁目９－６・９－８における建設工事に伴う
天満本願寺跡発掘調査(TN11－３)報告書

調査個所	大阪市北区天満1丁目9－6・9－8
調査面積	13㎡
調査期間	平成23年8月3日～8月6日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、佐藤 隆

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は、大川の右岸に位置して、天正13(1585)年から同19(1591)年までの間、天満の地に置かれた天満本願寺の推定範囲内の南半部に当たる。この天満本願寺は、羽柴秀吉が泉州貝塚に移転していた本願寺に対して天満に寺地を与えたことで造営され、天満城下町の発展に寄与した。天満城下町は本願寺が京都に移転した後も慶長3(1598)年に天満堀川が開削されるなどの整備が続けられ、慶長19(1614)年の大坂冬ノ陣の際に船場とともに焼き払われたが、徳川期に復興され、再び市街地として発展した。

本遺跡内では1993年度以来数多くの調査を行っており、造幣局構内を中心として北半部の調査が比較的多く、南半部は少ない。そのうち、本調査地の南西約100mの地点で行ったTN04－1次調査(図1)では豊臣期～徳川期の遺構・遺物のほか、古墳時代中期の建物跡や、鎌倉時代の柵・柱穴・土器埋納壙などが見つかっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。また、その南のTN07－2次調査においては、同様の時期の遺構・遺物に加えて飛鳥時代に係わる成果が得られている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。

本調査に先立って行われた大阪市教育委員会による試掘調査では、現地表下約1.0m以下で豊臣期～徳川期の遺物包含層および遺構面が確認された。その結果をうけて、事業者との協議が行われ、本発掘調査が実施されることとなった。

調査は、事業者が調査区予定部分を含む約50㎡の範囲について現地表下約1.0mまで重機で掘り下げた後、平成23年8月3日に開始した。その範囲のほぼ中央部に東西3.5m、南北3.5mの13㎡の調査区を設定し(図2)、以下は人力によって掘り下げた。その間、並行して適宜、写真撮影や実測といっ

図1　今回の調査地

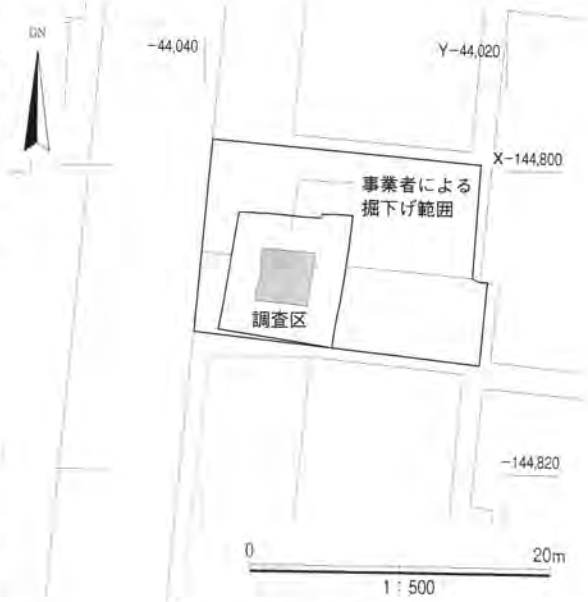


図2　調査区の配置図

た記録作業を行い、8月6日に機材などを搬出して現地における作業を完了した。埋戻しは行っていない。調査期間中には2度の局地的なゲリラ豪雨に見舞われ、記録前の壁面が崩壊するなどの被害があった。

なお、本報告書で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと記した。また、挿図中の方位は、世界測地系の座標北を基準にしている。

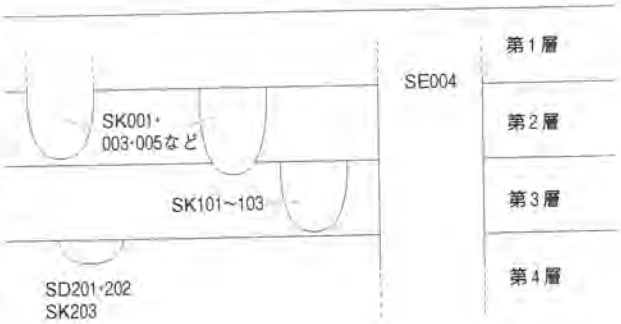


図3　地層と遺構の関係

2)調査の結果

i)層序

調査地の層序は以下のとおりである(図3・4)。

第0層　近現代の盛土層である。事業者が掘削した範囲の壁面を観察して確認した。

第1層　灰オリーブ色の細粒砂と粗粒砂の互層、オリーブ褐色砂質シルト、オリーブ褐色シルト極細粒～細粒砂からなる近世の整地層である。事業者が掘削した範囲の壁面を観察して確認した(図4上段)。本層中から掘り込まれている可能性のある遺構についても、後述する第2層上面遺構と同一面で検出した。

第2層　炭・焼土を含む灰オリーブ色砂質シルト～にぶい黄褐色極細粒～細粒砂からなる整地層である。層厚は20～40cmである。本層上面で近世の遺構を多く検出した。本層の直下に豊臣後期の遺構が存在し、わずかながら炭・焼土を含むこと、17世紀前半の肥前陶器が出土することから、大坂冬ノ陣後の整地層である。

第3層　上位から、オリーブ褐色シルト質極細粒～細粒砂、礫を含むオリーブ褐色シルト質極細粒～細粒砂、シルト・礫を含む暗オリーブ色極細粒～細粒砂の3層に細分されるが、それぞれの層理面は不明瞭である。層厚は50cm前後である。本層の上部からは豊臣期の陶磁器が見られるものの、下部からは鎌倉～室町時代の陶磁器が出土する。上面では豊臣後期の土壙が検出された。鎌倉時代～豊臣期に形成された地層である。

第4層　黄褐色細粒～中粒砂からなる河川堆積層である。遺物は出土しなかった。本層上面で鎌倉時代の溝SD201・202や土壙SK203が検出された。

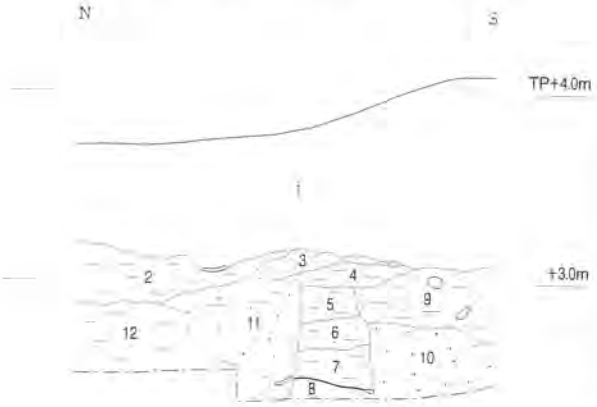
ii)遺構と遺物

13～15世紀の遺構と遺物

第4層上面において、調査区の中央部で東西方向の溝SD201・202を、また、東南隅でSK203を検出した(図5)。

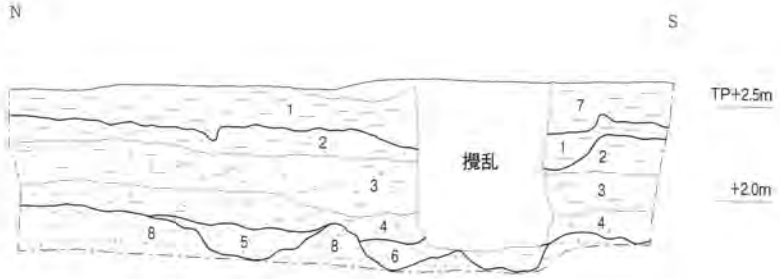
SD201は幅1.2m、深さ0.2mで、埋土は暗灰黄色極細粒～細粒砂である。水が流れた痕跡はない。瓦器椀1、須恵器甕口縁部8が出土した(図6)。1は13世紀後半～14世紀初頭のものである。8は古

事業者掘下げ範囲東壁断面



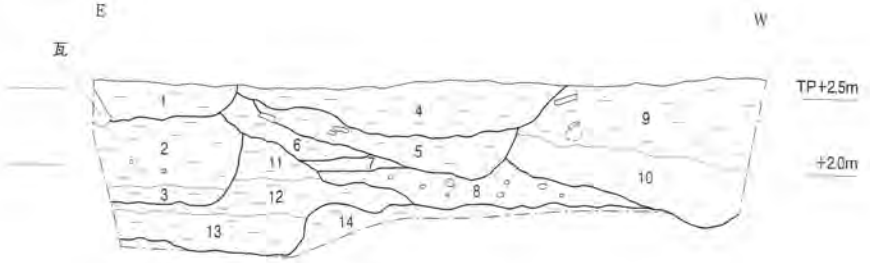
1：レンガ・礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)
細粒～粗粒砂(第0層)
2：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂
5：灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂と粗粒砂の互層(第1層)
6：オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト(第1層)
7：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂(第1層)
8：オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂質シルト(第2層)
9：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂
10：炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～細粒砂
11：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂
12：シルト偽礫を含むオリーブ黒色(5Y3/2)
シルト質極細粒～細粒砂

東壁断面



1：炭を含む灰オリーブ色(5Y5/2)砂質シルト(第2層)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～細粒砂(第3層)
3：礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂(第3層)
4：シルト・礫を含む暗オリーブ色(5Y4/3)極細粒～細粒砂(第3層)
5：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～細粒砂(SD201)
6：灰オリーブ色(7.5Y4/2)極細粒～細粒砂(SD202)
7：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂(SK005)
8：黄褐色(2.5Y5/4)細粒～中粒砂(水成層　第4層)

南壁断面



1：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂(SK005)
2：炭を含む褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～細粒砂(SK103)
3：炭・焼土を含む黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト(SK103)
4：礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト(SK003)
5：黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒～細粒砂(SK014)
6：炭・焼土を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト(第2層)
7：にぶい黄褐色(10YR5/3)極細粒～細粒砂(SK102)
8：礫・炭・焼土を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒～細粒砂
9：礫・炭・焼土を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)
～暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂(SK008)
10：礫・炭・焼土を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)
極細粒～中粒砂(SK008)
11：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒～細粒砂(第3層)
12：礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)
シルト質極細粒～細粒砂(第3層)
13：シルト・礫を含む暗オリーブ色(5Y4/3)
極細粒～細粒砂(第3層)
14：黄褐色(10YR5/6)細粒砂(水成層　第4層)

0　1　2m
1：40

図4　地層断面図

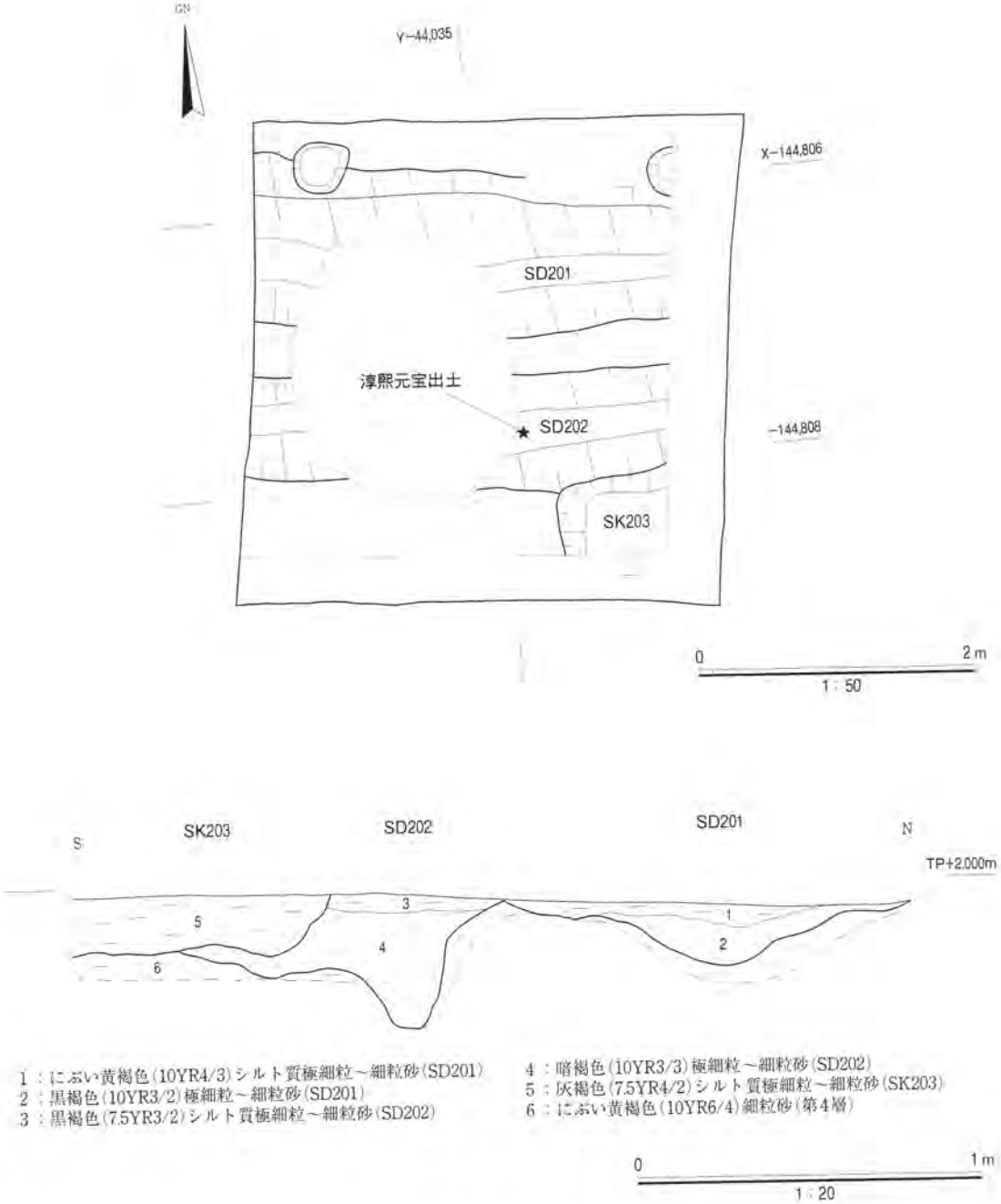


図５　第４層上面遺構平面・断面図

墳時代後期のもので、南方で検出されている同時代の遺構・遺物が本調査地周辺にも分布している可能性を示している。

SD202は幅0.8m、深さ0.4mで、SD201よりやや幅が狭い。埋土は灰オリーブ色極細粒～細粒砂である。水が流れた痕跡はない。淳熙元宝13が出土した(図７・図版)。初鋳年は1174年である。

SK203は南北0.6m以上、東西0.8m以上、深さ0.2mである。埋土は灰褐色シルト質極細粒～細粒砂である。瓦器椀２、土師器皿３、中国産白磁皿５が出土した。５は口縁部の釉が掻き取られている。横田賢次郎・森田勉氏の分類による皿Ⅸ類[横田・森田1978]である。２は13世紀後半頃の年代が与え

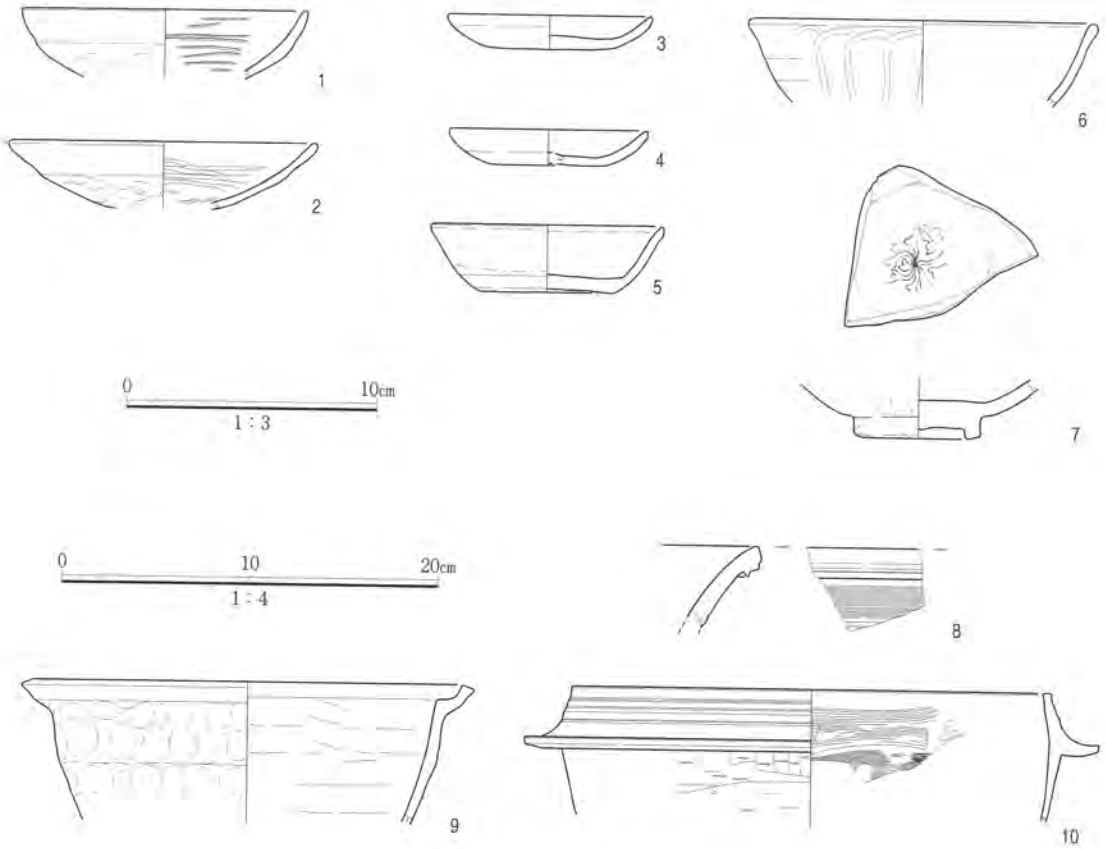


図６　古代～中世の遺物

SD201(１・８)、SD203(２・３・５)、SK103(７)、第３層(４・６・９・10)

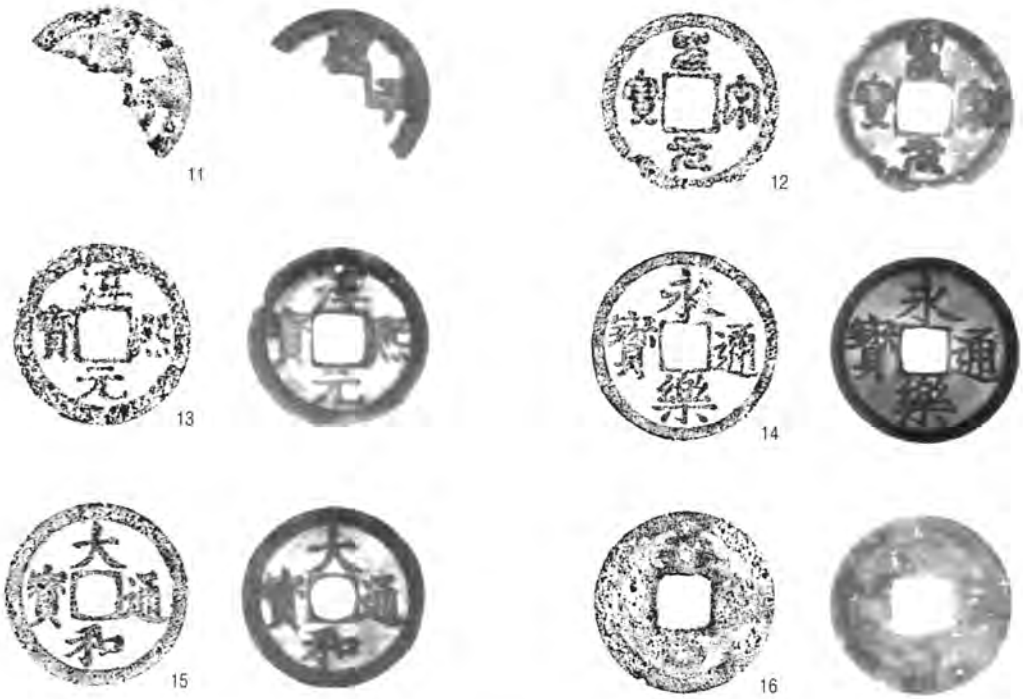


図７　銅銭拓影・X線透過写真(縮尺：原寸)

SD202(13)、第３層(14)、SP012(11)、SK008(12・15・16)

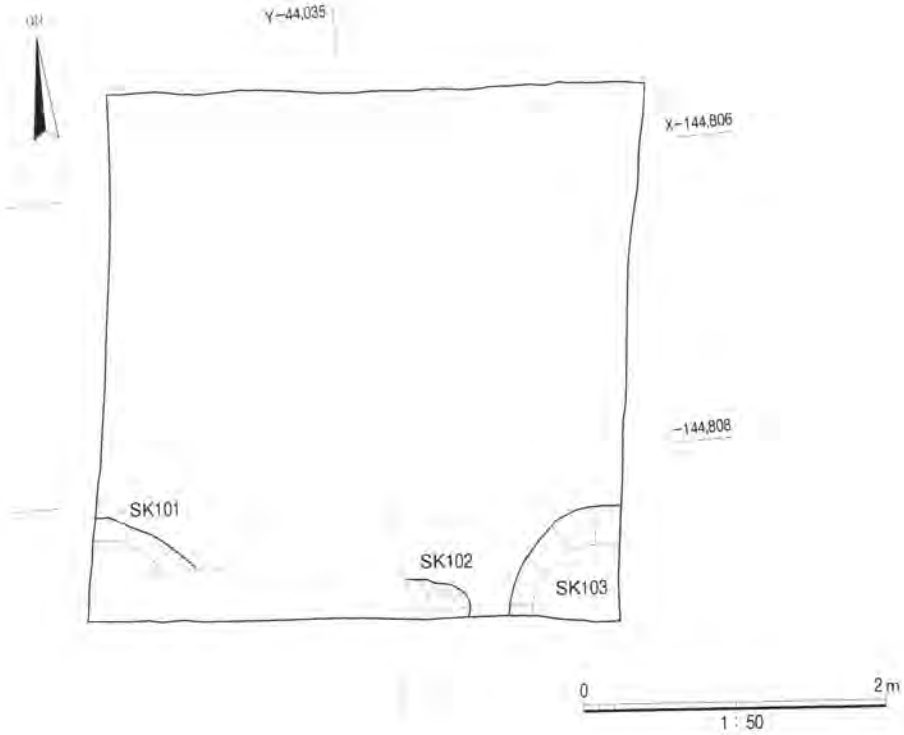


図８　第３層上面遺構平面図

られる。３・５についても同様の年代のものである。

上記のほか、上位の第３層から出土したものとして、土師器皿４、中国産青磁蓮弁文碗６、瓦質土器鍋９・羽釜10・永楽通宝14がある(図６・７・図版)。６の外面は片切彫りの蓮弁文である。９・10は14～15世紀のものである。永楽通宝の初鋳年は1411年である。また、上位の豊臣後期の遺構SK103に混入して中国産青磁蓮弁文碗７が出土している。底部内面に陰刻の花文がある。高台の特徴から13世紀後半～14世紀のものであろう。ほかにもSP012からは熙寧元宝とみられる銅銭11が、SK008からは聖宋元宝12・大和通宝15・判読不能16が出土した(図７・図版)。それぞれの初鋳年は、熙寧元宝が1068年、聖宋元宝12が1101年である。大和通宝はベトナム王朝の貨幣で、初鋳は1443年とされる。

17世紀初頭の遺構と遺物

第３層上面において、SK101～103を検出した(図４・８)。

SK103は調査区東南隅で検出した土壙である。平面形は南北0.8m以上、東西0.7m以上の不整円形で、深さは0.5mである。埋土には炭や焼土が含まれており、大坂冬ノ陣直後に埋められた可能性もある。肥前陶器碗17・18・20・21、中国産青花皿27、丸瓦47が出土した(図10・11)。17・18の底部内面には降灰の跡が見られる。18の高台内には窯道具(ハマか)の一部が熔着している。27の高台脇には砂が付着している。これらは豊臣後期のものである。

SK101・102からは中国産白磁や瓦器の細片が出土したが、図化はできなかった。

17世紀前半以後の遺構と遺物

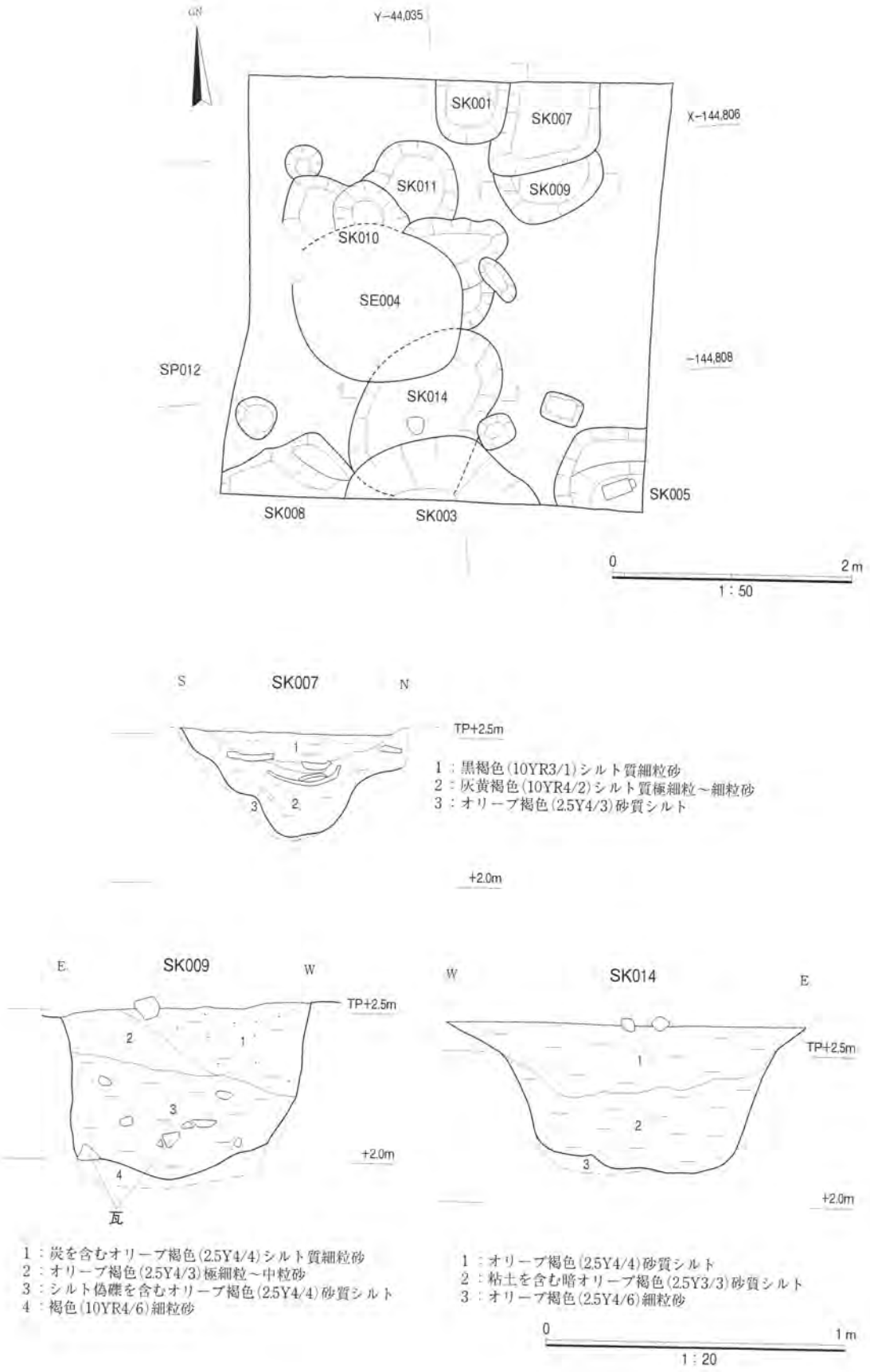


図９　第２層上面および第１層中の遺構平面・断面図

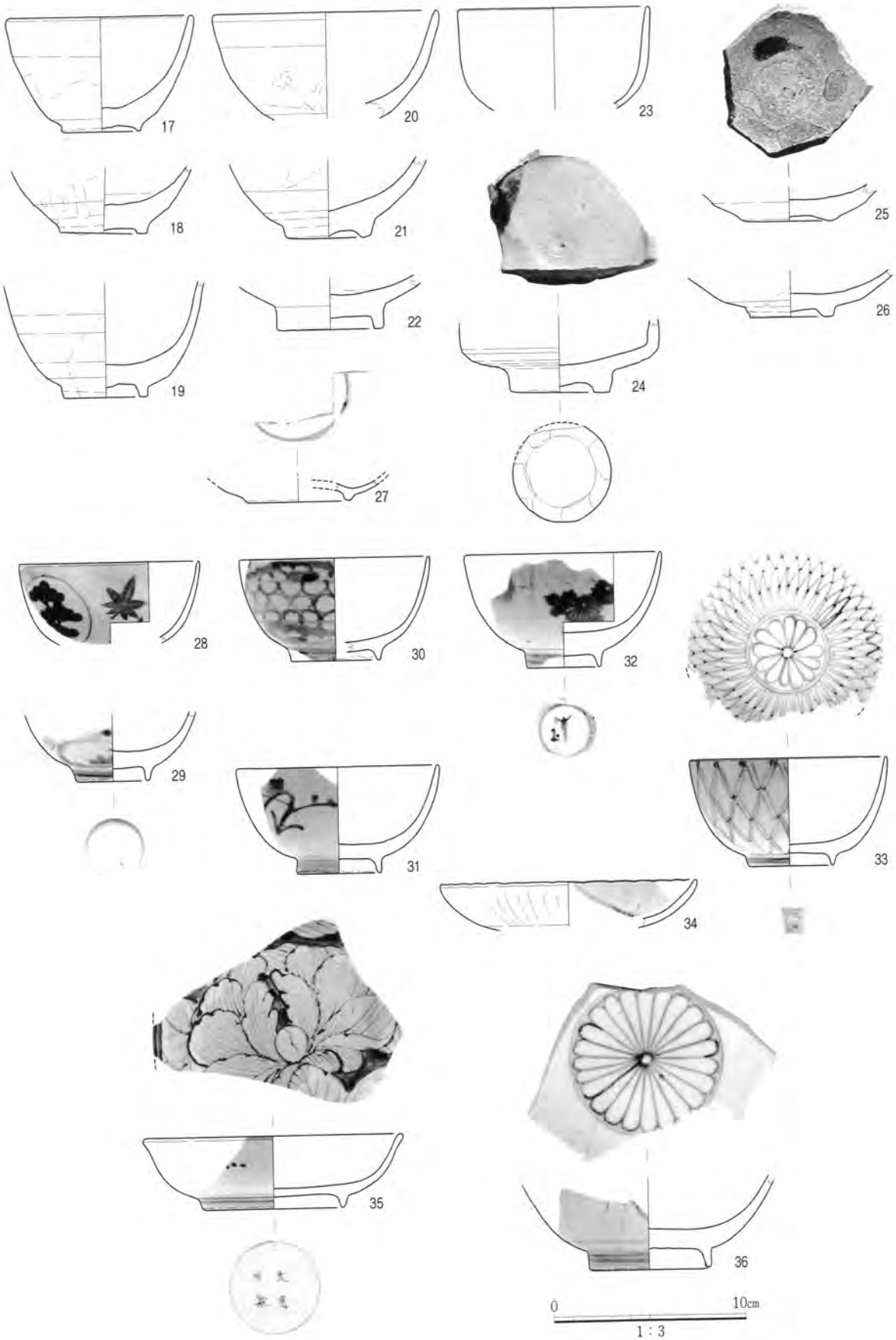


図10　近世の遺物（その１）

SK103(17・18・20・21・27)、SK014(19・22・34)、SK005(23・26)、
SK008(24・28)、SK007(31・35)、SK009(29・30・32：33・36)、第２層(25)

第２層上面あるいは第１層中の遺構として、土壙SK001・003・005・007～011・014、小穴SP012、井戸SE004といった遺構を検出した。土壙はほとんどが塵芥処理用と考えられる。以下、遺構ごとの出土遺物について述べる。

SK014からは肥前陶器碗19・22、肥前磁器輪花皿34、土師器皿43・44が出土した。19の底部内面には降灰の跡がある。22は呉器手碗のような形態か。34の内面にはわずかに呉須絵が認められる。43・44は口縁端部をかるくつまみ上げ、体部のヨコナデにより底部内面との境は明瞭である。43は灯明皿として使用されている。これらは17世紀前半～中頃のものである。

SK005では肥前陶器呉器手碗23・皿26、土師器皿45・焙烙46を図化した。26の内面は銅緑釉、外面は灰釉を掛ける。底部内面は蛇の目釉剝ぎである。45は体部内面と底部内面の境が明瞭である。灯明皿として使用されている。46は底部を型でつくり、口縁部から体部外面はヨコナデ調整である。体

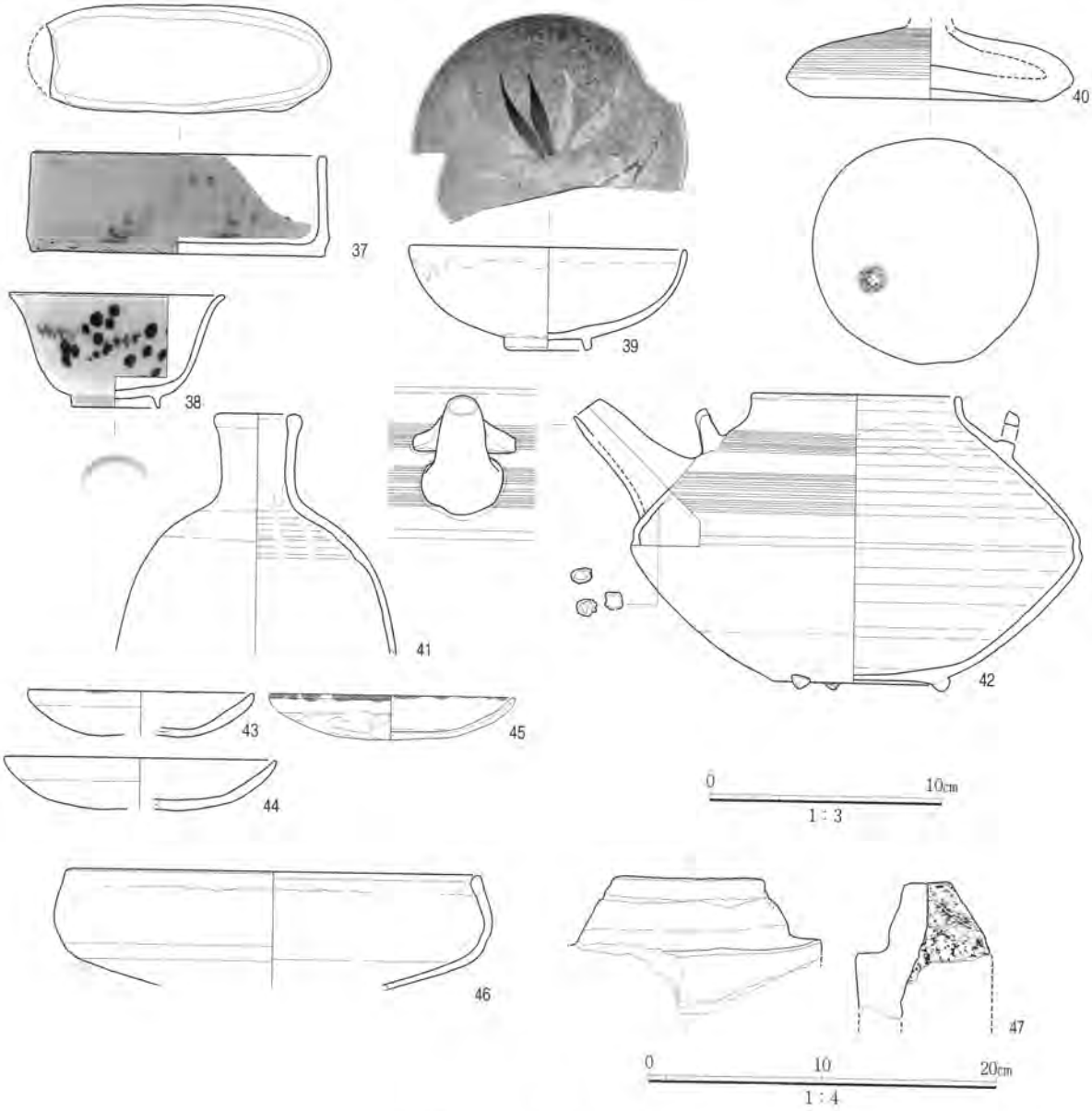


図11　近世の遺物（その２）

SK103(47)、SK014(43・44)、SK005(45・46)、SK007(37)、SK010(38～42)

部下半には凸凹が目立ち、底部との境に回転を利用した粘土の切取り痕がない。こうした特徴から難波洋三氏の編年によるE類である[難波1992]。これらには17世紀後半の年代が与えられる。

SK008では肥前陶器筒茶碗24、肥前磁器碗28を図化した。24の底部内面は透明釉と緑灰色を呈する灰釉とを掛け分けている。高台には砂目が4箇所に残る。28の外面には、手描きした円の中にコンニャク印判の松文を施した文様と、コンニャク印判の紅葉文を配する。18世紀初頭頃のものである。

SK007では肥前磁器碗31・皿35、瀬戸美濃焼鬢水入37を図化した。31の外面には草木文を描く。底部内面は蛇の目釉剝ぎである。35の内面は牡丹文である。高台内に円圏と「大明年製」銘がある。外面は梅樹文か。37の体部外面には淡い木賊文と思われる鉄絵が描かれている。これらは18世紀前葉のものである。

SK009では肥前磁器碗29・30・32・33・鉢36を図化した。29の外面には草木文を描く。30の外面には上部と下部に雲か波の文様を巡らせ、その中を丸文で埋めている。32は外面に菊文のコンニャク印判を施す。高台内に円圏とかなり形骸化した「大明年製」銘がある。33の体部外面は二重網目文で、高台内に二重方形枠と渦福の銘を描く。体部内面は一重網目文で、底部内面は菊文である。36の底部内面には菊文を描く。これらは18世紀前半のものである。

SK010では瀬戸美濃焼磁器染付碗38、京焼色絵平碗39、備前焼油壺40、関西系陶器徳利41・土瓶42を図化した。38は焼き継ぎされている。39は内面に赤と緑で花文が上絵付けされている。40の底部外面には丸に「井」の字の刻印がある。41は外面に栗皮釉を掛ける。これらは18世紀後葉～19世紀前半のものである、

上記のほかに、図化は行っていないが年代が推定できる遺構は、次のとおりである。SK003は18世紀代、SK001は19世紀前半、SE004は井戸瓦を用いており、19世紀の陶磁器が出土している。

また、第2層から肥前陶器皿25が出土した。底部内面に砂目が4箇所残る。徳川初期、17世紀前半の年代が与えられる。

3）まとめ

今回の調査では、鎌倉時代から江戸時代における3層準において遺構面を検出し、遺構・遺物を確認することができた。以下、成果を列記する。

古墳時代

後世の遺構に混入したものではあるが、古墳時代後期の須恵器甕の口縁部が出土した。本調査地から南方の既調査地で見つかっている同時代の遺構・遺物の分布が周辺まで及ぶ可能性を示す。

鎌倉～室町時代

第4層上面で溝・土壙といった遺構が検出されたほか、上位の第3層などから中国産青磁・白磁や輸入銅銭をはじめとする遺物が多く出土した。天満本願寺造営や城下町の整備以前の中世の段階から、本調査地周辺が開発されていたことをがわかる。

豊臣期

天満城下町の遺構として第3層上面で3基の土壙を検出した。明確な大坂冬ノ陣の焼土層は遺存し

ていないが、上位の整地層や遺構の埋土に小さな焼土塊や炭が含まれている。こうした状況は北方で行ったTN10－２次調査でも確認されている[大阪文化財研究所2011]。

徳川期

第２層上面あるいは第１層中の遺構が多く見つかった。年代は17世紀前半から19世紀にわたる。大坂冬ノ陣以後に復興した市街地の発展を示す。特に17世紀前半の遺構が確認できることから、市街地の復興が大坂ノ陣後ほどなくして始まったことがわかる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「天満本願寺跡発掘調査(TN04－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.13－32

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「天満本願寺跡発掘調査(TN07－2)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.33－50

大阪文化財研究所2011、『北区天満一丁目における建設工事に伴う天満本願寺跡発掘調査(TN10－2)報告書』

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」:『難波宮址の研究』第九、pp.373－400

横田賢次郎・森田勉1978、「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」:『九州歴史資料館研究論集』4、pp.1－26

東壁地層断面(西から)

南壁地層断面(北から)

第4層上面遺構
(検出時、西から)

第４層上面遺構
（西から）

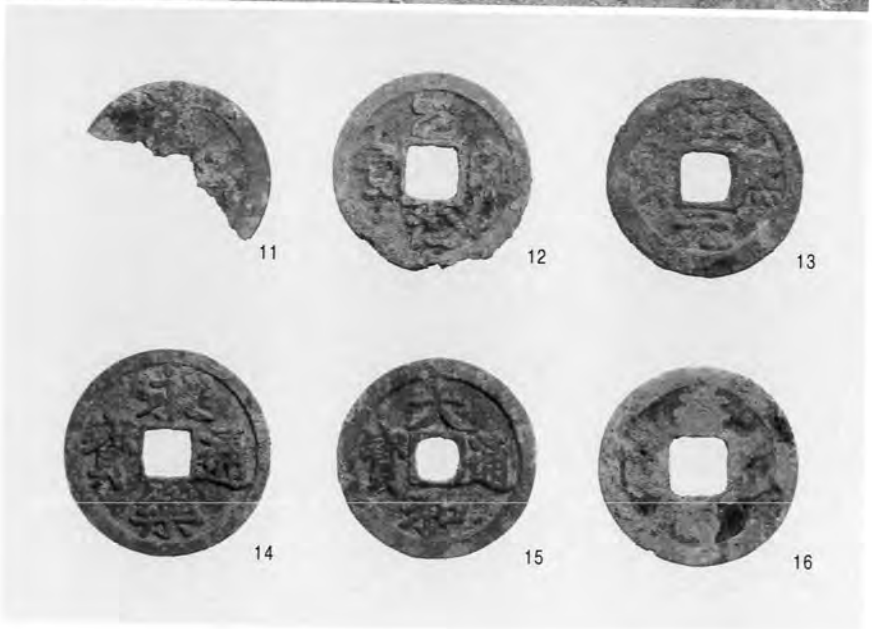
SD202淳熙元宝
出土状況

SK103（第３層上面、
北から）

第２層上面および
第１層中の遺構
（西から）

SE004（第２層上面
または第１層中、
東から）

出土銅銭



都島区内代町一丁目における建設工事に伴う
榎並城跡伝承地発掘調査(EN11－２)報告書

調査個所	大阪市都島区内代町1丁目68－2
調査面積	30㎡
調査期間	平成24年3月24日～平成24年3月29日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、田中清美

1）調査に至る経緯と経過

榎並城跡伝承地は、中世の榎並庄に築かれ数々の文献に登場する榎並城跡に係る埋蔵文化財包蔵地で、調査地南東200mの野江水神社付近を中心とする（図１）。本遺跡での本調査は同神社南東側で行われたEN01－５次調査が初めてで、13～15世紀の溝、柱穴が検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]。今回の調査地の北東約40mのEN10－１次調査地では弥生時代中期後葉（畿内第Ⅳ様式）の遺構や遺物が検出された[大阪文化財研究所2010]。当該地においては、調査に先立って大阪市教育委員会が行った試掘調査においても地表下0.7～0.9mで弥生土器が発見されたため、本調査を実施することになった。

調査は、平成24年３月24日、敷地の南東部に東西６m、南北５mの調査区を設けて開始した（図２）。現代の整地層（第０層）および第１～３層の作土層、第４層の水成層を重機で除去したあと、弥生時代中期後葉の遺物を含む第５層を人力で掘り下げた。28日には第６層上面で検出した弥生時代中期後葉の遺構の写真撮影および図化作業を終えて、29日には調査区を埋め戻し、器材の搬出を含めすべての調査を完了した。

また、基準点はmagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）で本文・図中ではTP＋○mと記した。

2）調査の結果

ⅰ）層序

調査地の現地表面はTP＋0.9～1.0mとほぼ平坦である。本調査では層厚50cm前後の現代の整地層（第

図１　今回の調査地

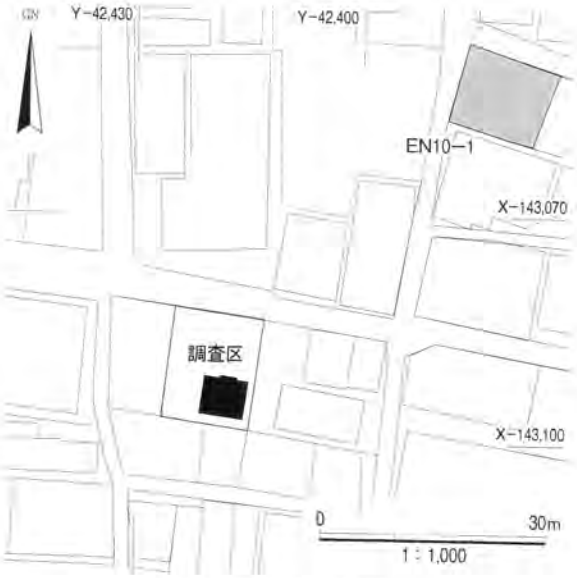


図２　調査区の配置図

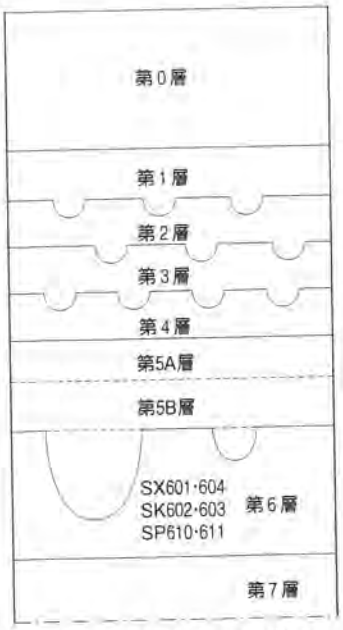


図3　地層と遺構の関係図

0層)下に第1～7層の各層を確認した(図3・4)。第0層の上面の標高はTP+1m前後ある。

第1層：黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトからなる江戸時代～近代の作土層で、層厚は約5cmある。

第2層：黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は約10cmある。江戸時代の作土層であろう。本層の下面には鋤溝が見られる。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は約15cmある。本層の年代は江戸時代以前と考えられる。下面で鋤溝が確認された。

第4層：黒褐色(10YR3/1)シルト～極細粒砂質シルトからなる水成層で、層厚は10～15cmある。

第5層：本層は黒褐色(10YR3/1)シルト質極細粒砂～黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒砂からなる暗色帯である。層厚は20cm前後あり、微細な炭片や炭化物のほか、弥生時代中期末(畿内第Ⅳ様式新相)の土器片を多量に含む。5A・5B層の2層に区分した。

第6層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂および黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒砂～極細粒砂からなる水成層で、層厚は100cm以上ある。本層上面の標高はTP+0.1m前後あり、上面でSX601・604、SK602・603、SP610・611など弥生時代中期末の遺構を検出した(図5・6)。また、調査区の西部では本層の上部に炭化した草本科植物からなる薄層が確認された。

第7層：灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒砂・黒褐色(2.5Y3/1)シルト・黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂質シルト・オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質極細粒砂・灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂・灰色(7.5Y4/1)極細粒砂質シルトなどからなる水成層で、層厚は50cm以上ある。本層は調査箇所の東部で西に向かって傾斜するように堆積しており、上面が暗色化していた。

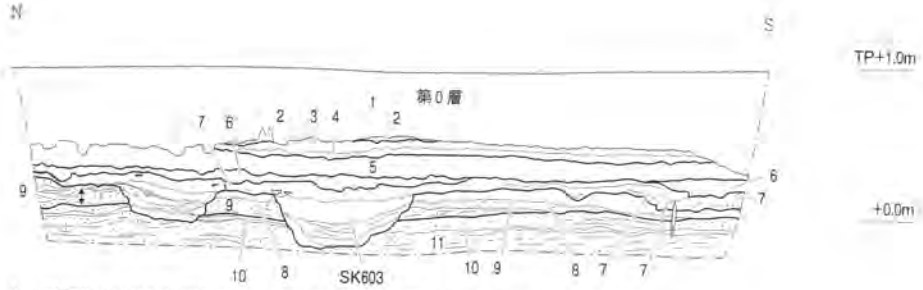
ⅱ)遺構と遺物

第6層の上面では弥生時代中期末(畿内第Ⅳ様式新相)の土器を伴う土壙や落込みをはじめ、柱穴を検出した。以下、主な遺構・遺物について述べる。

SX601　調査区の中央以北に位置する東西6m以上、南北2m以上の落込み状の遺構で、東南から西北方向に向って深くなる。遺構内にはオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂が堆積しており、西北部では多くの草本科植物遺体や流木の断片が見られたほか、弥生時代中期末(畿内第Ⅳ様式新相)の土器片や石器、一握りほどの炭化したコメが出土した(図6・7)。

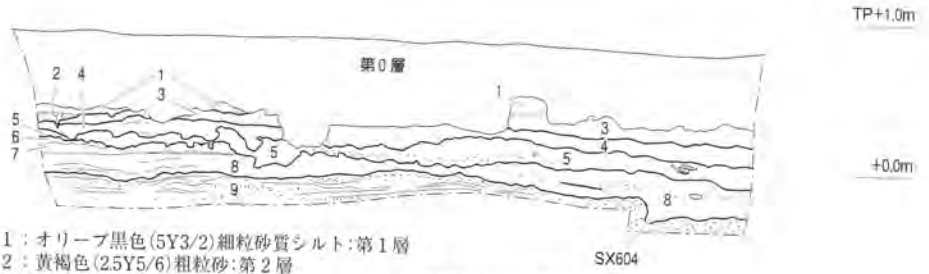
1～5・7・8は広口壺である。1・3は口縁部を垂下しており、後者は前者に比べて短い。前者の口縁部の外端面には刺突文が、後者の頸部の外面には粗い櫛描簾状文が巡る。ともに角閃石の細粒を含む生駒西麓産の胎土である。2は上下に肥厚した口縁部の外端面に3条の凹線文が、4・5は頸部から水平に開く口縁部の外端面に1条の浅い沈線が巡る。後者の沈線はキザミメのあとに施されており、口縁部の内側に2孔一対の紐孔を3方向に穿つ。7・8も広口壺の断片で、ともに口縁部を垂

東壁断面



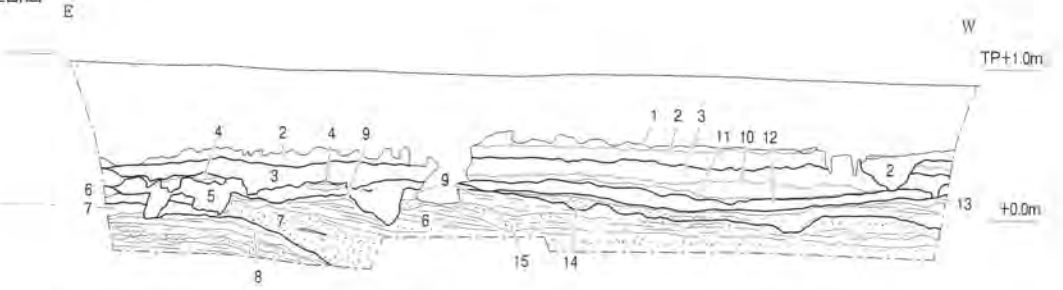
1：黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂質シルト(レンガ・石炭ガラを多量に含む)：第0層
2：黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト(作土層)：第1層
3：黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルト(作土層：Mn・Feを多く含む)：第2層
4：暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルト(作土層)：第2層
5：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒砂質シルト(作土層)：第3層
6：黒褐色(10YR3/1)シルト～極細粒砂質シルト：第4層
7：黒褐色(10YR3/1)シルト質極細粒砂(炭片・炭化物を多く含む)：第5層
8：黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒砂：第6層
9：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂：第6層
10：黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒砂～極細粒砂～黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルト：第7層
11：黒褐色(10YR3/1)極細粒砂～シルト質極細粒砂：第7層

西壁断面



1：オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルト：第1層
2：黄褐色(2.5Y5/6)粗粒砂：第2層
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質～極細粒砂混り粘土質シルト：第2層
4：黄灰色(2.5Y4/1)極細粒砂質シルト(作土層)：第3層
5：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂：第4層
6：灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルト：第5層
7：黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト：第5層
8：灰色(5Y4/1)シルト～極細粒砂質シルト：第5層
9：灰色(7.5Y4/1)極細粒砂質シルト～細粒～極細粒砂：第6層

南壁断面



1：オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルト(作土層)：第1層
2：黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルト(作土層)：第1層
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒砂質シルト(作土層)：第3層
4：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂：第4層
5：黒褐色(10YR3/1)シルト～極細粒砂質シルト：第5層
6：黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルト：第6層
7：黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒砂～極細粒砂：第6層
8：灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質細粒砂・
黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂質シルト・
オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質極細粒砂・
灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂・
灰色(7.5Y4/1)極細粒砂質シルト・
黒褐色(2.5Y3/1)シルト：第7層
9：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト：第6層
10：黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト：第3層
11：黒褐色(2.5Y3/1)シルト質極細粒砂：第3層
12：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質極細粒砂：第4層
13：黒色(2.5Y2/1)極細粒砂質シルト：第5層
14：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質極細粒砂：第5層
15：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂：第6層

0　2m
1：50

図4　地層断面図

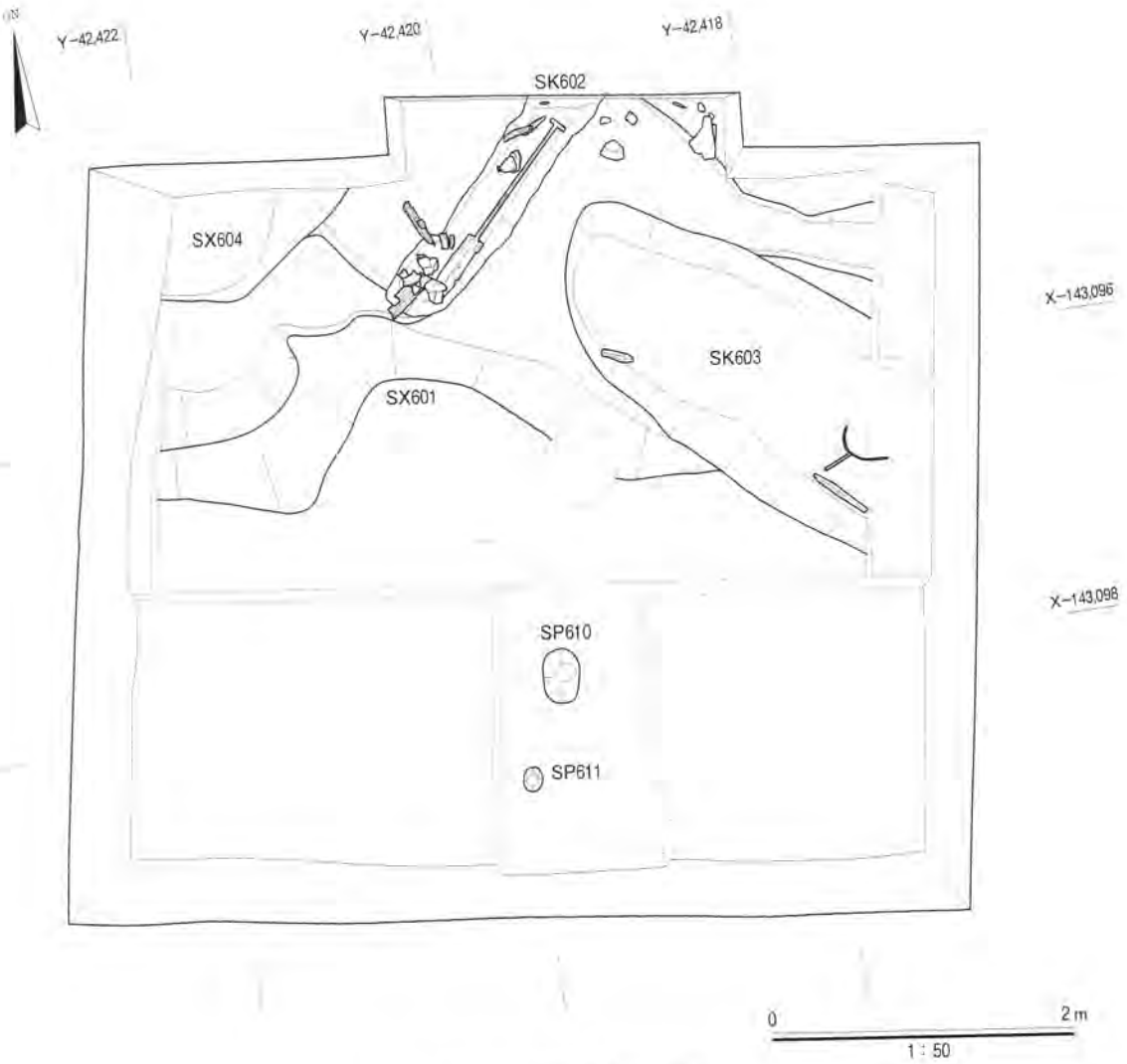


図５　第６層上面検出遺構配置図

下しており、前者は口縁部の外端面に浅いヘラ描きの複合鋸歯文、内面にも斜格子文を、後者の口縁部の外端面には粗い沈線のあと、９条一単位のヘラ描集線文を施している。６は小型の壺蓋であろう。天井部の中央に中凹みの低いつまみがある。

９は脚台付き無頸壺の脚台の破片である。器体の外面にはにぶい凹線文が巡り、内面はヘラケズリ調整している。

10～13は鉢の口縁部から体部上半の破片で、扁平な段状口縁部の11以外は口縁端部を内側か、左右にわずかに肥厚している。口縁部の外端面から体部の上半にかけて櫛描刺突文を施す11以外は、体部の中程に２～４条の凹線文が巡る。器体の調整は10の内面が横方向のヘラミガキ、11の内面は横方のハケ、12は外面がヘラミガキで、内面は左上がりの粗いハケ、13は内外面が細筋のヘラミガキである。

14～21は甕の破片で、14～17は短く開く口縁部の端部を上方に肥厚している。器面の調整は14が左上がりのハケ、15の外面は平行タタキのあと、左上がりのハケ、内面はユビオサエおよび左上がりのナデ、16・17は内外面とも左上がりのハケである。18は大型の甕の体部片で、外面は左上がりの平行タタキで整形しており、内面は横方向の粗いハケおよびナデで調整している。19～21は甕の底部で、

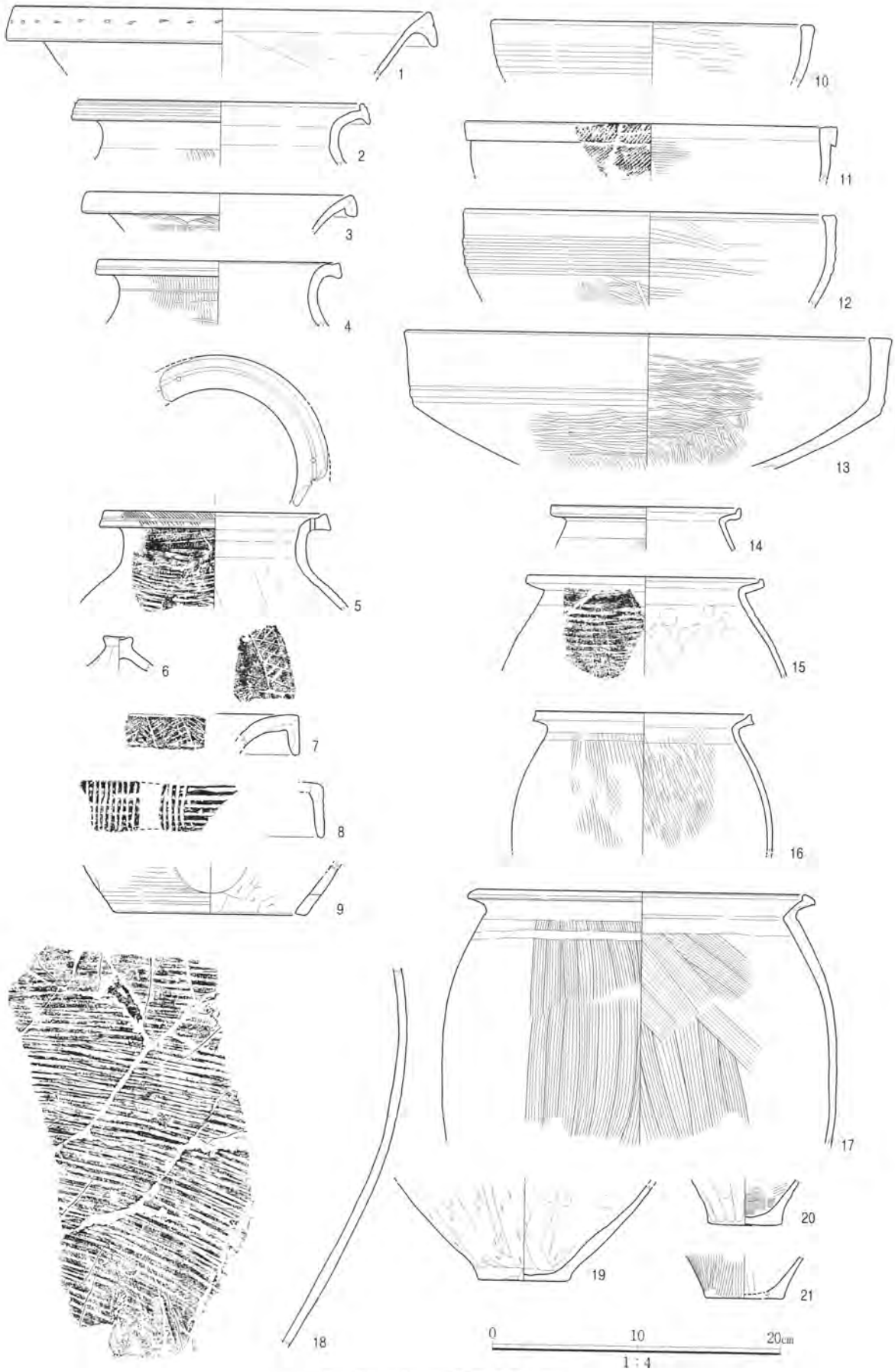


図6　SX601出土遺物実測図(1)

外面を19はヘラケズリ、20はナデ、21は縦方向のハケで調整している。内面の調整はハケメである20以外はナデである。

22～28は石器である。22は最大長6.4cm、最大幅2.8cm、最大厚1.2cmの縦長のサヌカイトの剥片に細部調整を加えたスクレイパーである。刃部には使用痕が見られるほか、基部に自然面が残る。23は最大長3.3cm、最大幅2.8cm、最大厚0.9cmのサヌカイトの剥片で、外縁に自然面が残る。24は最大長5.6cm、最大幅10.5cm、最大厚1.6cmの結晶片岩製の石庖丁の未成品である。表面が風化しており、加工痕は見られない。25は最大長6.2cm、最大幅5.9cm、最大厚1.6cmの扁平な砂岩の礫を使った石錘である。上下端に紐をかけた凹みがある。26･27は長さ7.4～12.6cm、幅3.2～4.3cmの縦長の砂岩の礫を使った磨石で、ともに長軸側の上下端に敲打痕がある。28は最大長10.1cm、最大幅5.2cmの礫岩を使った磨石で、4面に使用痕が見られる。

以上の遺物のうち、弥生土器は、広口壺や鉢の凹線文が鈍いことや、生駒西麓産の広口壺の口縁部の外端面や頸部に櫛描簾状文が施文されたものが少ないことなどから、畿内第Ⅳ様式でも新しい段階に属するものと考える。

SK602　調査区の中央北部に位置する長さ1.8m以上、幅0.5m、深さ約0.3mの土壙である。埋土は下から黒色(5Y2/1)炭･灰･炭化物質シルト、黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト、黒褐色(2.5Y3/1)シルトであり、弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式新相)に属する壺・甕・高杯を伴って、台石や木製品が出土した(図9)。

29の口縁部は短く立つ頸部から水平に開く。口縁端部を上方に肥厚しており、下端にキザミメを施す。体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面はユビオサエおよびナデである。30は最大径が体部の上半にある甕で、口縁部は頸部から外上方に大きく開く。口縁端部を上方に肥厚する。体部の調整は内外面ともハケである。31・32は壺の頸部片で、前者の頸部の下端にはにぶい1条の突帯があり、これの上に浅い凹線文、下に櫛描波状文が巡る。33は口縁部の下端が欠損した高杯の杯部片で、口縁部の外端面にはにぶい凹線文が巡る。杯部の内面の調整はハケの後、ヘラミガキである。34は高杯の脚裾部片で、下端部を上方に肥厚している。調整は外面がヘラミガキで、内面はヘラケズリである。35は大型の鉢で、口縁部は緩やかに内湾しながら開く体部から直立する。調整は外面が縦方向のハケのあと左上がりのヘラミガキで、内面は左右のヘラミガキである。

36は敲打痕や磨痕および被熱痕が見られる台石で、土壙の南小口に近い位置から出土した。石材は砂岩である。

37は身幅が約20cmに復元しうる一木鋤と見られる木製品の断片で残りは悪い。身の背に当たる側の上端は少し反っており、下端を切断している。柄も大半を欠損しているが、幅は約5cmあり、断面形は長方形を呈する。木取は板目である。

38は全長が1.39mのほぼ全形を留めた一木鋤である(図10)。全体に腐食が進んでおり、加工痕は見られない。身の最大長は48.0cm、最大幅は16.2cmあり、裏面側には柄から延びる突起が身の先端近くまで造り出されている。柄の幅は3.0cmで、握りはT字形を呈し、長さ2.5cm、幅10.3cmある。37・38ともに樹種はアラカシであろう。

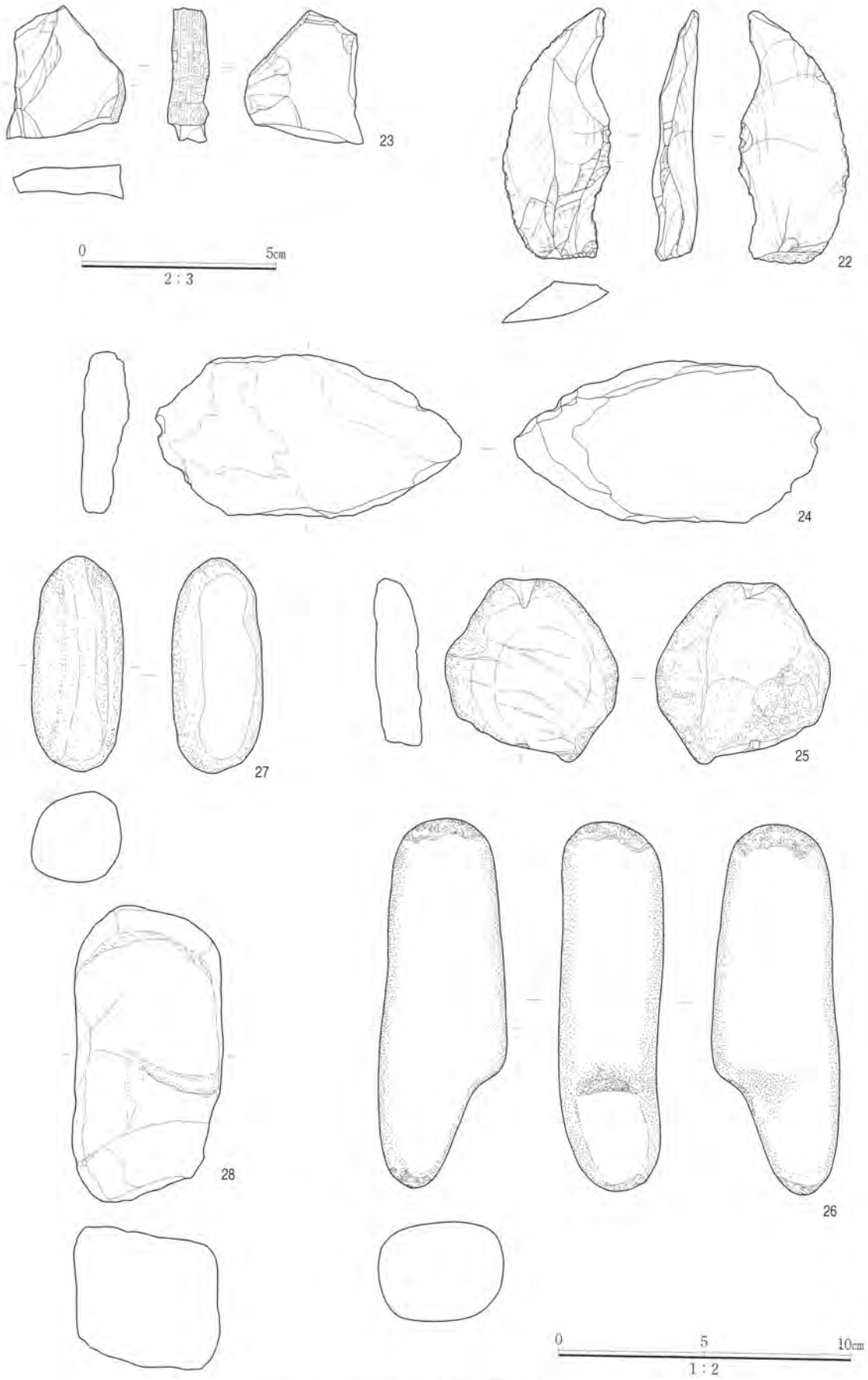


図7　SX601出土遺物実測図(2)

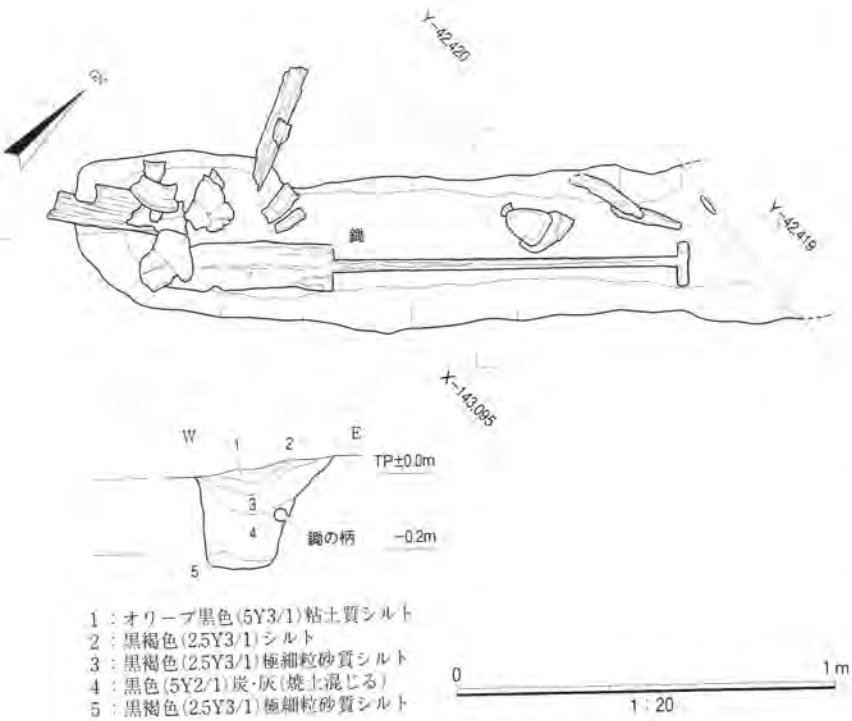


図8　SK602平面・断面図

以上の遺物のうち、弥生土器は畿内第Ⅳ様式新相に属するものである。

SK603　調査区の北東部に位置する長さ2.8m以上、幅約1.3m、深さ0.3m前後の土壙である。土壙内には下から水つきの黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト、オリーブ黒色(5Y3/1)極細粒砂質シルトが堆積しており、弥生時代中期後葉の壺・甕・高杯・鉢に伴って、玉網・鋤・樋などの木製品が出土した。

40は甕の底部で、器体の内外面を幅の広い縦方向の幅広いヘラミガキ状のナデで調整している。41は最大径が体部の中程にある甕で、口縁端部を上方に肥厚している。体部の調整は外面がナデ、内面はユビオサエのあと、縦方向のハケである。39・42は高杯の柱状部である。ともに外面調の整は縦方向のヘラミガキで、後者は4～6本一単位の細いヘラ描沈線文を施している。内面の調整はともにヘラケズリであるが、42の上半にはシボリメがある。

43～45は木製品である。43は最大長21.7cm、最大幅9.2cmの樋とみられる残欠である。長軸に対して平行な把手とみられる幅3.5～4cm、高さ約2cmの突起がある。木取は正目取りである。44は身の幅が約13cmに復元された鋤先で、柄の大半および身の先端を欠損している。45は長径約30cm、短径約24cmに復元された玉網で、径約2cmの柄の上部には条線を彫っている。玉網には2cm前後の網を固定した際の紐の痕跡がある。樹種はカヤである。

以上の遺物のうち、弥生土器は畿内第Ⅳ様式新相に属するものである。

SX604　調査区の北西部に位置する東西1.5m以上、南北2m以上、深さ約0.4mの落込みである。遺構内には水つきの灰色(5Y4/1)シルト～極細粒砂質シルト、オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂(微細な炭や炭化物を含む)が堆積しており、畿内第Ⅳ様式に属する壺・甕・高杯・鉢などの多くの土器片、サヌカイトの剥片・結晶片岩、薄板などが出土した。

SP610　調査区の中央南部に位置する長径0.3m、短径0.2m、深さ約0.2mの柱穴である。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細粒砂・オリーブ黒色(5Y3/2)極細粒砂質シルトで、弥生土器の細片が出土した。柱は抜かれた可能性がある。

iii)各層出土の遺物

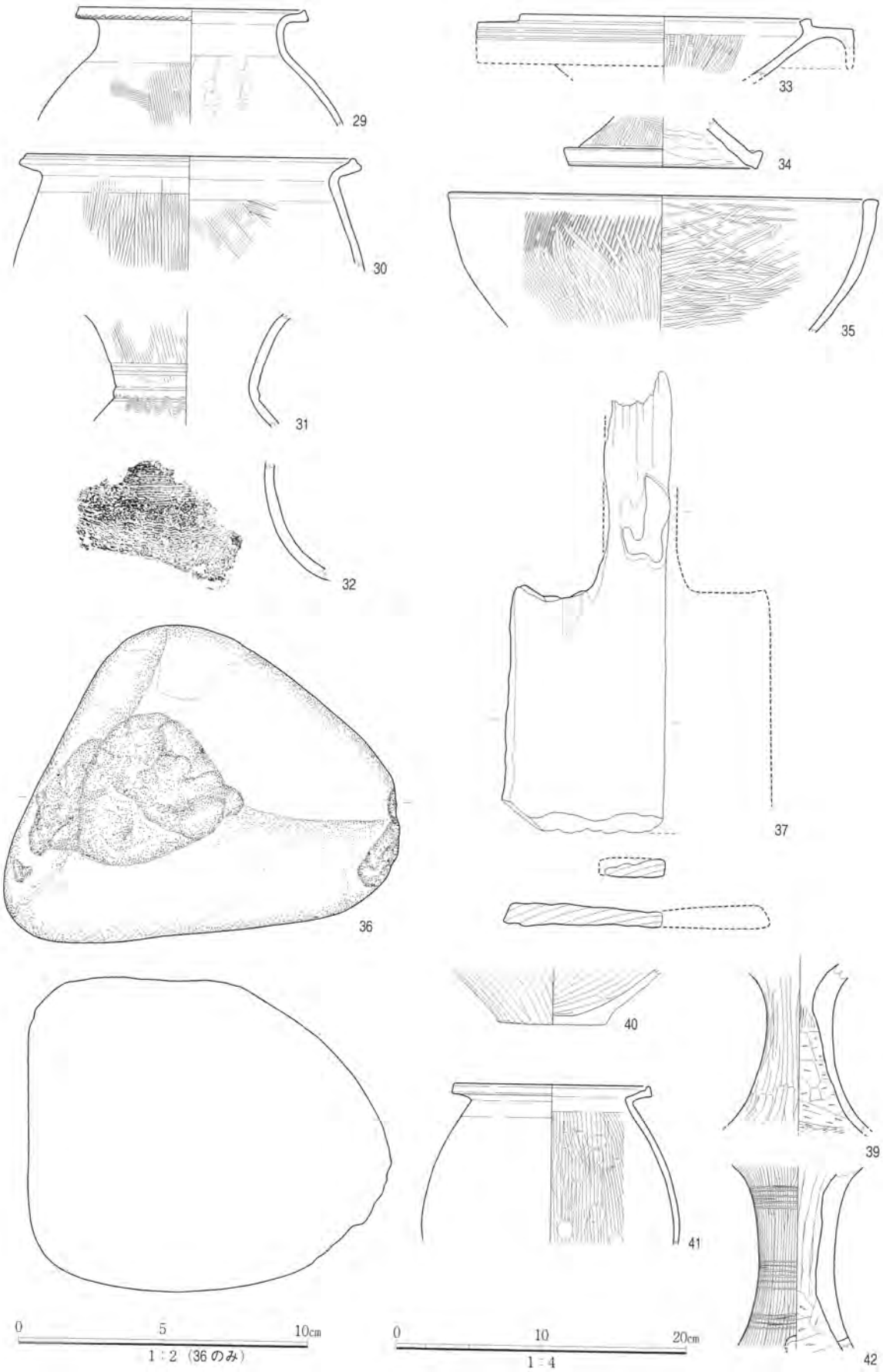


図9　SK602・603出土遺物実測図
SK602(29～37)、SK603(39～42)

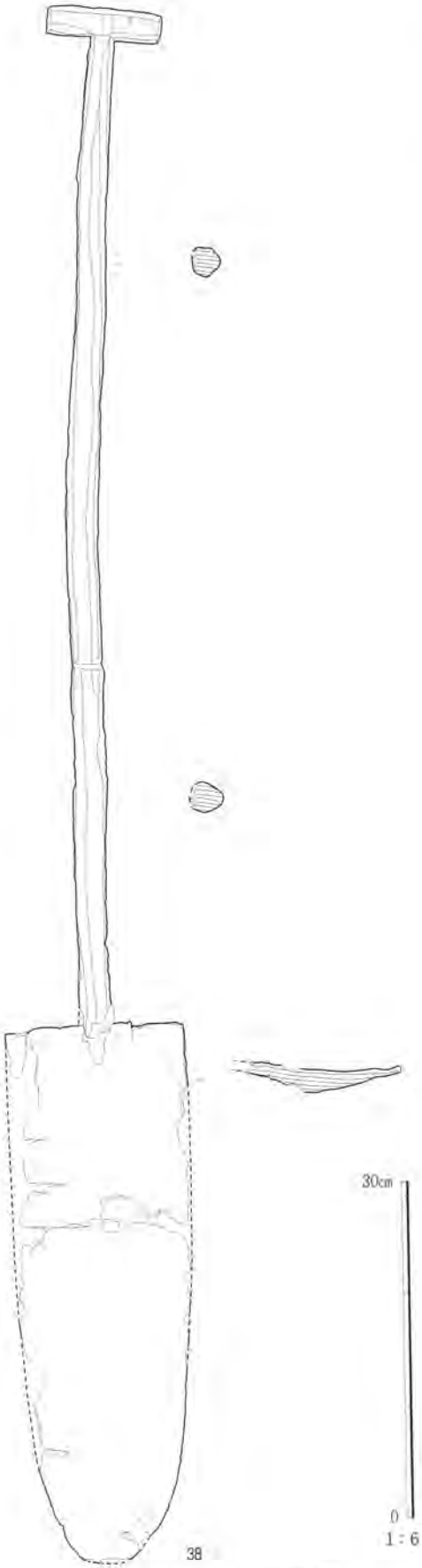


図10　SK602出土遺物実測図

第6層を覆う第5層から弥生土器および石器が出土したが、土器は破片が多く、器形の全体を復元しえたものはない。また、結晶片岩の多くは表面の風化が進んでおり、取り上げ時に破砕したものがあった。

46～54は弥生土器である(図11)。46は筒状の頸部から口縁部が袋状に内湾しながら立つ壺である。口縁部から頸部の外面にヨコナデ調整のあと、7条の浅い凹線文と櫛描直線文を施しており、頸部の内面には左上がりのハケメが残る。47は壺の頸部下端から体部にかけての破片で、摂津地域の特徴である断面三角形の2条の突帯文の下に櫛描直線文および波状文を施している。48は体部の上端の偽口縁に丸い粘土紐を貼り付けて成形し、器体の内外面をヨコナデ調整した無文土器の鉢である。外面に煤が、内面に炭化物が付着していることから炊飯に使用されたものであろう。同様な器形の無文土器は、韓国慶尚南道の勒島遺跡から北部九州の弥生時代中期末の須玖Ⅱ式土器に共伴しており、時期的にも整合する。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)で、胎土中に微細な長石・石英・ウンモ粒を含んでおり、在地の土器ではない。49・50は高杯の脚裾部の破片で、ともに器体の外面にヘラミガキ調整のあと、円形透かし孔を穿つ。50の裾部下端近くには3条の細いヘラ描沈線文が巡る。51は試掘調査時に出土した杯部の大半を欠損した高杯である。器面の調整は内外面ともに粗い縦方向のヘラミガキで、脚裾部の外面に竹管文を施している。外面に厚い煤が付着していることから甕の蓋に転用されたものであろう。52は櫛描刺突文を加えた幅広い突帯文が巡る頸部から一旦外上方に開いた口縁部がわずかに内湾しながら2段に立つ広口壺であ

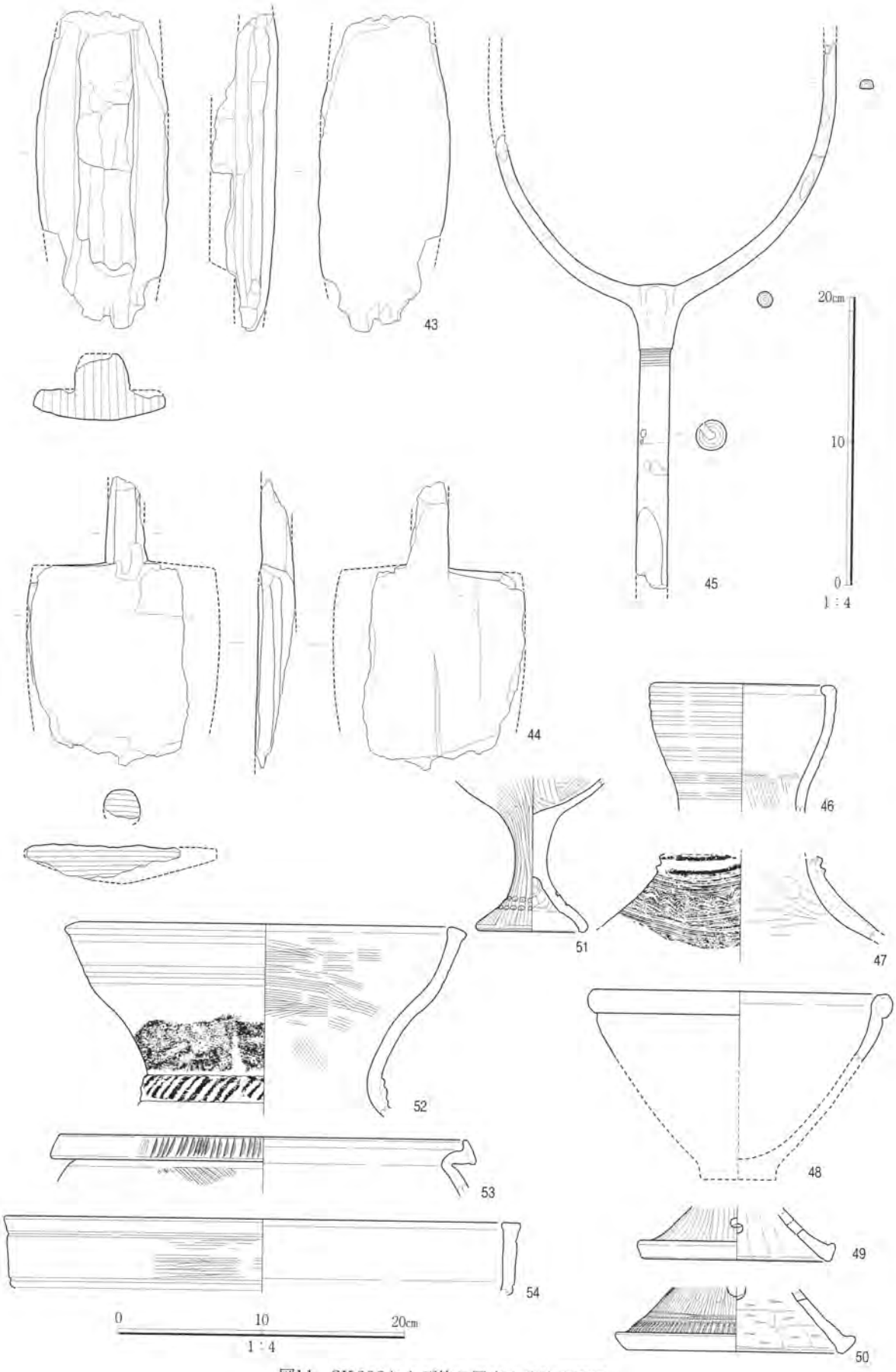


図11　SK603および第５層出土遺物実測図
SK603(43～45)、第５層(46～54)

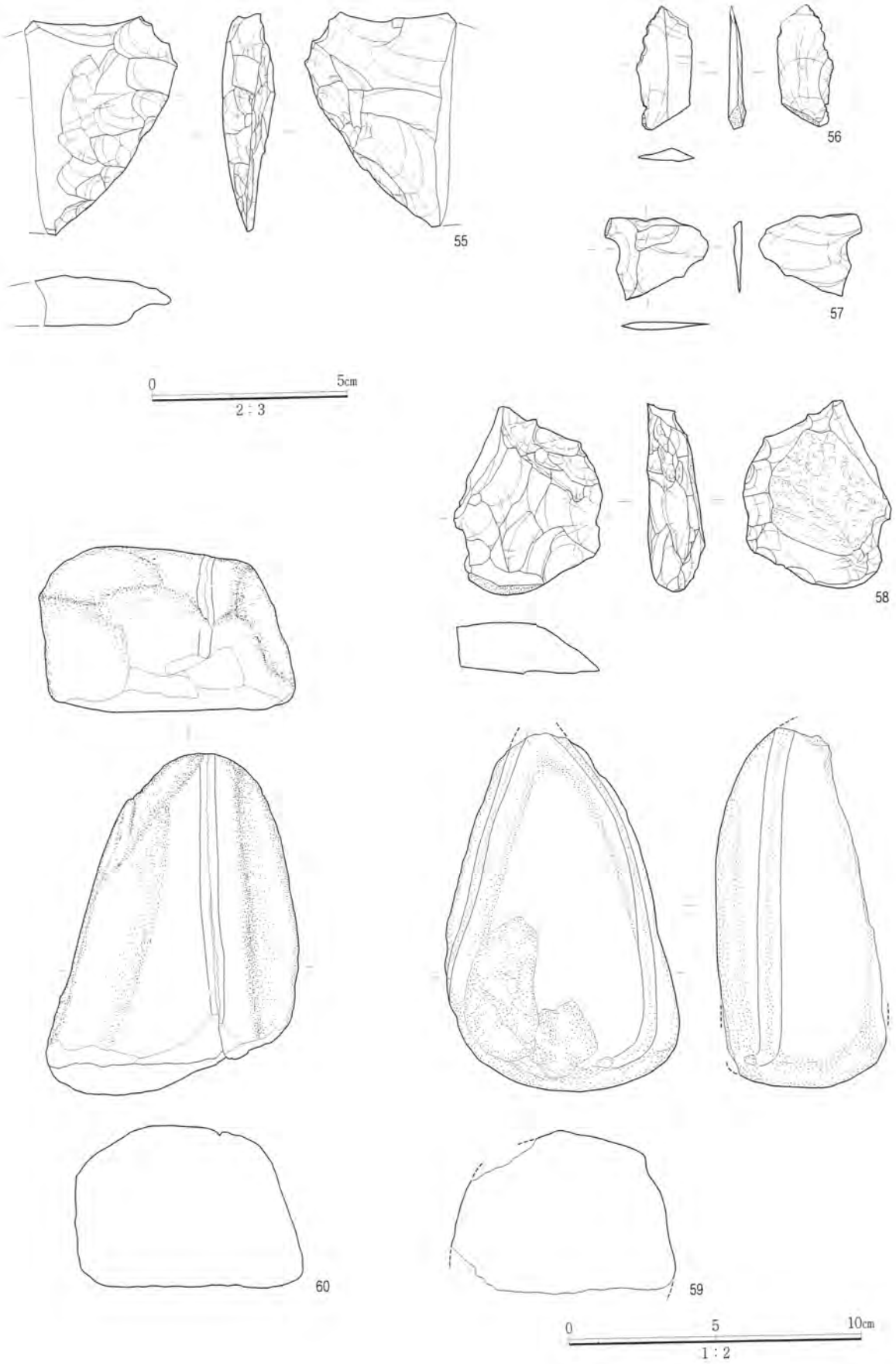


図12　第５層出土遺物実測図

る。口縁端部を内外に拡張しており、口縁端部の直下および口縁部の下方に浅い凹線文を施している。口頸部の内面の調整は左上がりの粗いハケである。摂津地域の典型的な広口壺である。53は張のある体部から短く開いた口縁部に粘土紐を足して口縁端部を上下に肥厚した甕で、体部の外面を右上がりの粗いタタキで整形している。口縁部の外端面に櫛描刺突文を施文している。54は体部から一旦立つ口縁部の上端に強いヨコナデ調整を加えて、口縁端部を左右に肥厚した大型の鉢である。口縁部の直下および体部上半の屈折部に浅い凹線文を施している。これらのほかにも図化しなかったが、生駒西麓地域から搬入された色調が茶褐色を呈し、胎土中に多量の角閃石粒を含む口縁部が水平に折り曲げられた甕や粗い櫛描簾状文が見られる壺の体部片などがある。

55～58はサヌカイト製の石器で、55は外縁部を細部調整した楔とみられるもので、一端が折れている。56・57は剥片である。58も細部調整の見られる剥片で、表面および側面に自然面が残る。59・60は長さ10.5～12.2cm、幅7.6～7.7cmの砂岩製の石錘である。ともに外縁部に長軸方向の幅６～８㎜、深さ２～３㎜の紐をかけた跡がある。59・60とも敲石および磨石として二次使用されており、下端あるいは上端部を大きく欠損している(図12)。

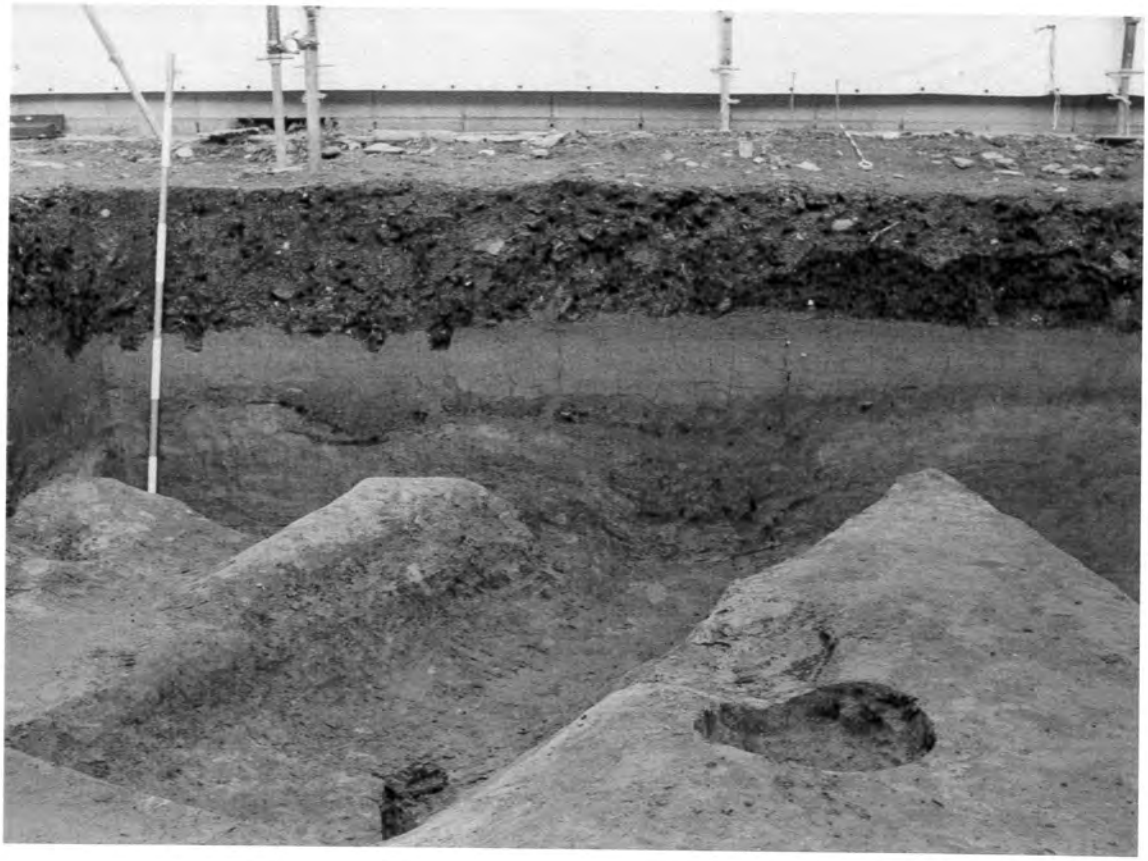
３)まとめ

本調査地は面積が30㎡と狭小であったにもかかわらず、弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式新相)の集落に関わる遺構や遺物を検出することができた。中でも畿内第Ⅳ様式(新相)の土器群に共伴した鋤・玉網・櫂などの各種の木製品、大型の石錘などはこれらを残した当遺跡に形成された弥生時代中期末頃の集落の性格を明らかにする上で重要な資料といえよう。また、本調査では第５層から朝鮮半島の初期鉄器時代の勒島式に属する無文土器が出土して注目された。この種の無文土器の年代は紀元前20年頃と推定されており、これに共伴した畿内第Ⅳ様式土器の年代もさほどかわらないことが確認された。これによって、朝鮮半島南部地域(勒島式)から北部九州地域(須玖Ⅱ式)を経て、畿内地域(畿内第Ⅳ様式新相)に至る地域の土器の年代観や併行関係が明らかになった意義は大きい。さらに、淀川左岸の沖積低地上に位置する本遺跡の性格は、同じ旭区に所在する森小路遺跡と同様に、船を利用した河内湖や淀川の交通網の拠点的な集落であったことを示唆している。今後も古環境や地形復元などを視野に入れた総合的な調査を行うとともに、本遺跡の実態を明らかにするためにも調査箇所の周辺の考古学的な資料の蓄積を図る継続的な発掘調査が必要であろう。

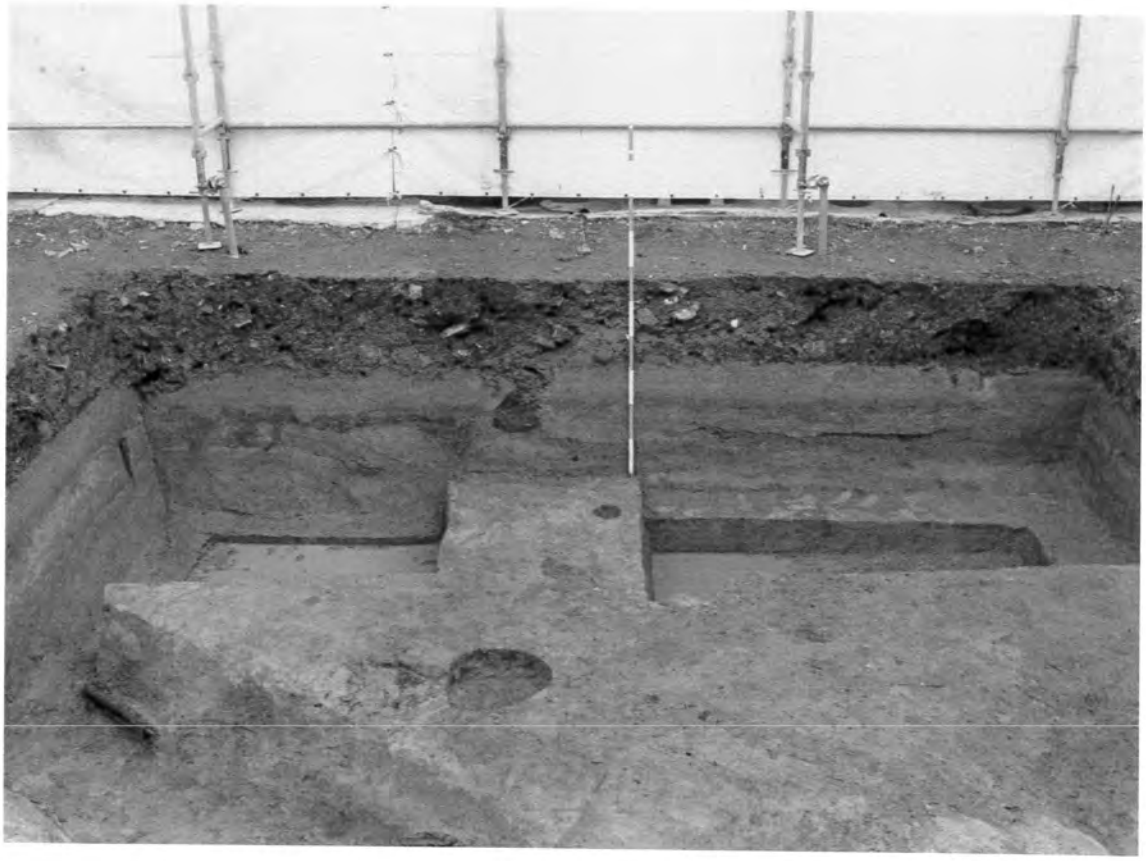
参考文献

大阪文化財研究所2010、『都島区内代一丁目における建設工事に伴う榎並城跡伝承地発掘調査(EN10－１)報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「榎並城跡伝承地発掘調査(EN01－５)報告書」:『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83－87



東壁地層断面(西から)



南壁地層断面(北から)

第６層上面検出遺構全景（南西から）

SK602・603遺物出土状況（北から）

SK602全景(南西から)

SK602東西断面(南から)

SK603玉網出土状況
(南西から)

中央区森ノ宮中央一丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－6)報告書

調査個所	大阪市中央区森ノ宮中央1丁目420－2・421－4・422－2
調査面積	32㎡
調査期間	平成23年9月9日～9月14日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、市川 創

1)調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地北部の東縁を南北に走る玉造筋の東側に位置し、大坂城惣構の東縁を限る猫間川よりは西に位置している(図1)。周辺では多数の調査を行っており、豊臣期や徳川期の遺構・遺物が見つかっているほか、弥生時代の遺構・遺物も見つかっている[大阪市文化財協会2002など]。中でも調査区の南方に位置するOS10－9次調査では、縄文時代から幕末までの地層を確認し、海底から扇状地、湿地、耕作地、沼地、耕作地、造成地を経て再び耕作地として利用されるという、堆積環境および土地利用の変化が把握されている[大阪文化財研究所2011]。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の試掘調査が行われた。その結果、現地表下1.8m以深で弥生時代～徳川期の遺物包含層や遺構面が確認されたため、発掘調査を実施することになった(図2)。

事前に事業者によって現地表下約1.8mまでの重機掘削を行ったのち、9月9日から調査を開始した。調査における掘削はすべて人力によって行い、遺構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。こうした工程を経て、9月14日には機材類の撤収を含むすべての作業を完了した。

以下、本報告書で使用した方位は、座標北を基準にした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP＋○mと表記する。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

現地表下180cmから380cmまでの地層について、第1～7層に区分した。

図1　調査地位置図

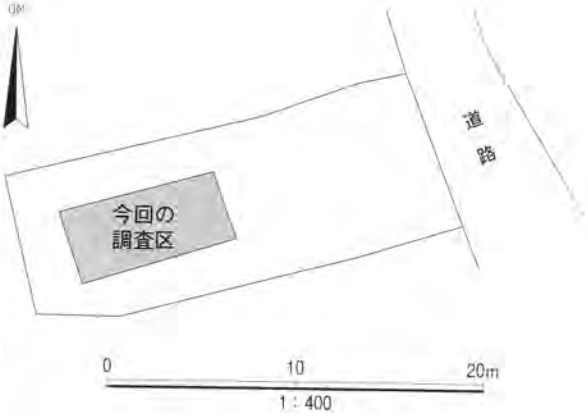


図2　調査区配置図

第１層：下位層を耕起した水田作土層である。層厚は最大で22cmであった。黒色の細粒砂混り粘土質シルト層からなり、下部には炭酸第一鉄の結核を産する。時期を特定できる遺物は出土しなかったが、遺構の切合い関係から中世～近世前期の地層である。本層に係わる遺構として、SR202のほか、これを切る溝SD201、土壙SK203を検出した。

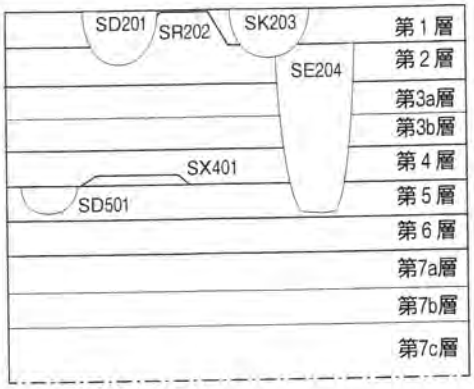


図３　層序と遺構の関係図

第２層:オリーブ黒色の細礫混り粘土質シルトからなり、層厚は最大で15cmであった。SR202は本層を削り残した畦畔である。第１層と同じく時期を特定できる遺物は出土していない。本層上面ではSE204を検出した。

第３層：上下に２分でき、上位のものを第3a層、下位のものを第3b層とした。第3a層は灰オリーブ色の細礫混り粘土質シルトからなり、層厚は最大で15cmであった。第3b層は灰色の粗粒砂～細礫混り粘土質シルトからなり、層厚は最大38cmであった。本層からは弥生土器・埴輪・須恵器・瓦・木製品・サヌカイトなどが出土した。ただし下位の第４層から瓦器が出土しているため、本層の時期は少なくとも中世前期に降る。本層に伴う遺構は検出できなかったが、堆積物の分級が悪いことから作土層である可能性がある。

写真１　第５層下面の踏込み

写真２　第６層の変形

第４層：オリーブ黒色の細礫混り粘土質シルトからなる中世前期の地層である。層厚は最大で28cmであった。本層からは弥生土器のほか土師器・須恵器・瓦器が出土した。また上面ではSX401を検出している。

第５層：黒色のシルト質中粒砂～中礫からなる、弥生時代中期～古墳時代の地層である。層厚は10cmであった。分級は悪く、層内では幅１cm程度、長さ10cm以上で主として水平方向に延びるシルトの偽礫が観察でき、アシなど

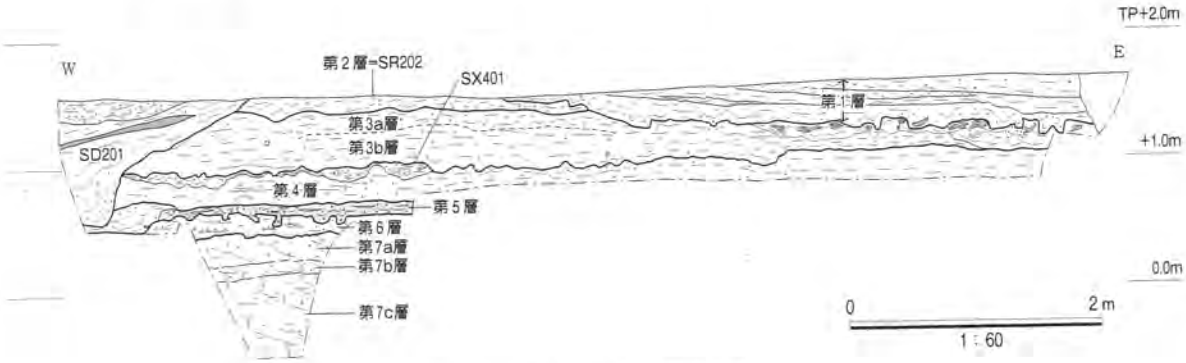


図４　調査区北壁地層断面図

の地下茎の痕跡である可能性が高い。また下面ではヒトや動物の足跡と思われる踏込みを検出した(写真１)。本層からは弥生Ⅱ～Ⅳ様式の土器のほか、須恵器・埴輪・サヌカイト製の石鏃などが出土した。堆積物の特徴および出土遺物から、本層は湿地状の環境下で弥生時代中期から古墳時代までかけて徐々に堆積したものとわかる。ただし、本層上面で中世前期の溝SD501を検出していることから、本層の下限が中世前期にまで降る可能性もある。

第６層：オリーブ黒色のシルト～極細粒砂からなる自然堆積層であり、下部には植物遺体が多く含まれた。層厚は最大で18cmである。地層の上部ではラミナが発達するが、部分的に水平断層が確認でき(写真２)、地震により攪乱された可能性がある。本層から遺物は出土しなかった。

第７層：自然堆積層であり、第7a～7cの３層に細分した。第7a層は黒色のシルト質中粒～粗粒砂からなり、層厚は25cmであった。わずかに東へ傾斜するフォアセット・ラミナが観察できた。第7b層は黒色を呈するシルト質中粒砂～粗粒砂からなり、層厚は10cmであった。第7c層は黒色のシルト質中粒～細礫からなり、層厚は65cm以上ある。このうち、第7b・7c層では垂直方向に延びる巣穴の生痕化石が観察でき、貝類や甲殻類が棲息できる水底であったことが推定できる。また、第７層から遺物は出土していない。

ⅱ)遺構と遺物

a．中世前期の遺構

残土置き場などの都合上、第４層については調査区の北半、第５層については調査区の西北部に限って遺構検出を行った(図５)。

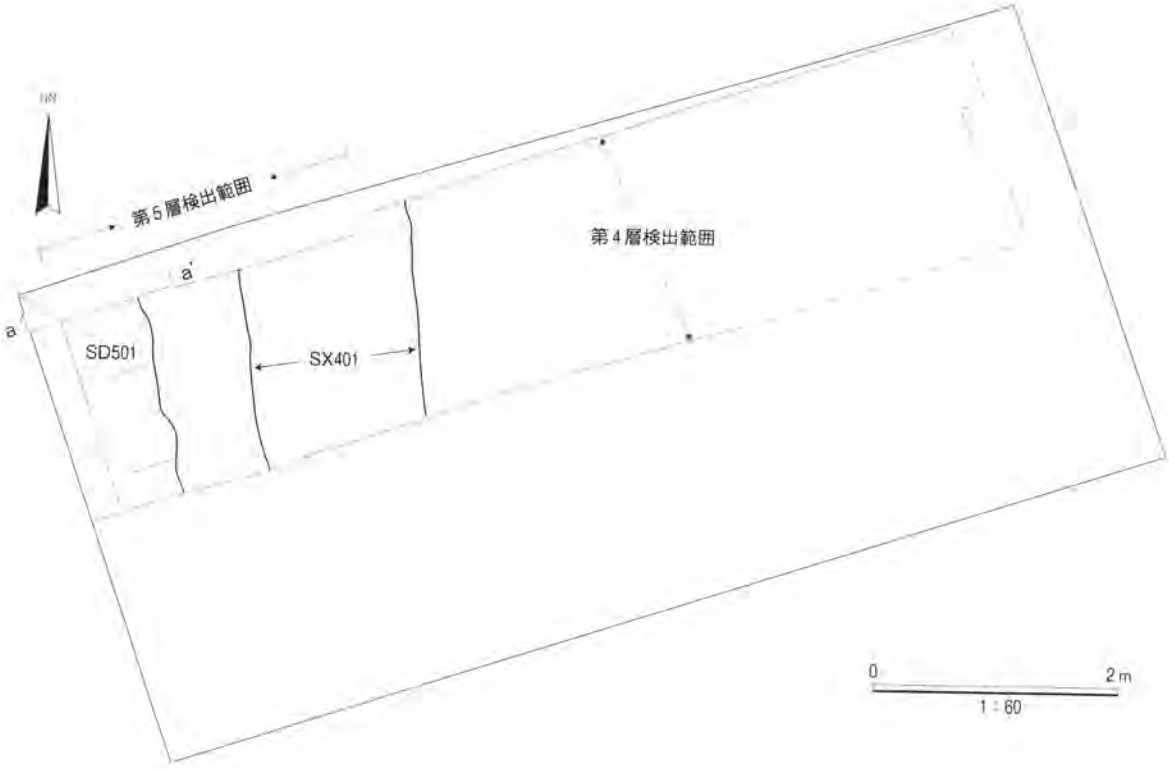


図５　中世前期の遺構平面図

図6　SD501断面図
（断面の位置は図5参照）

このうち、第5層の上面では南北方向に延びる溝SD501を検出した（図5）。SD501は幅0.8m以上、長さ1.6m以上の規模があり、検出面からの深さは最大で0.2mであった。埋土は黒色の砂質シルトであり、12世紀代の瓦器のほか、弥生土器、サヌカイトが出土した（図6）。

第4層の上面では、南北1.5m以上、東西1.4mの範囲に拡がる最大厚8cmの盛土SX401を検出した。盛土は中粒砂の偽礫を含む砂・粘土質シルトからなる。性格は特定できなかったが、水田畦畔などの可能性も考えうる。

b．中世後期～徳川前期の遺構と遺物

第2・1層に係わる遺構として、溝SD201、畦畔SR202、土壙SK203、井戸SE204を検出した（図7）。

SD201　第1層の上面において、調査区の西端で検出した。南北に延びる溝である。SR202を破壊し、長さ2.8m以上、幅1.0m以上、検出面からの深さ0.5m以上の規模がある。埋土は下部に炭・細粒砂の偽礫を含む粘土質シルトがあり、その上位にシルトおよびシルト質細粒砂が堆積する（図8）。その上に厚さ1cmの植物遺体層が形成されたのち、最終的には炭・細粒砂の偽礫を含む粘土質シルトで埋められていた。当遺構からは弥生土器や須恵器、中国産青磁、箸・杭などの木製品が出土し、このうち中国産青磁碗1を図示した（図9）。1は龍泉窯系の青磁碗で、外面には蓮弁文を施す。蓮弁の施文は退行したものであり、15世紀に属する資料である。

SR202　調査区をおおよそ東西に延びる不整形な畦畔である。第2層を削り出して形成されており、

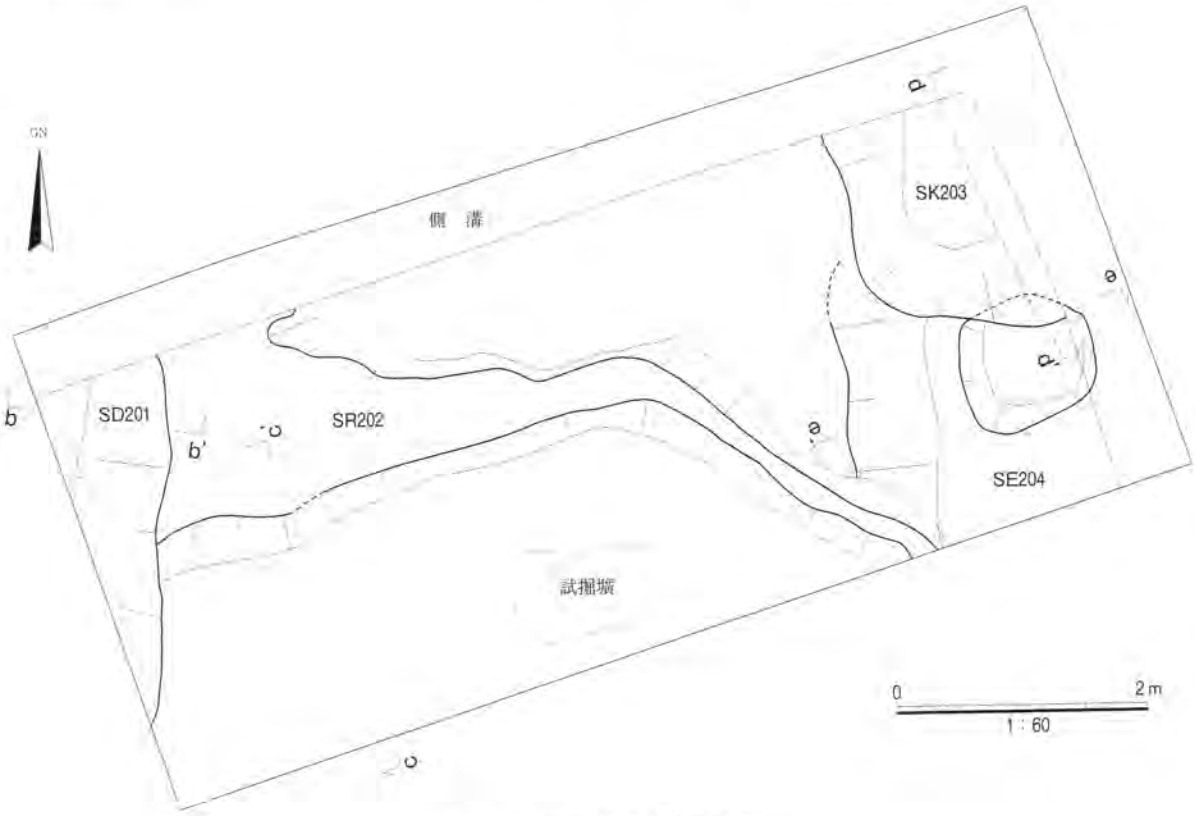


図7　第1・2層の遺構平面図

第１層は当畦畔に伴う作土である（図８）。畦畔の幅は最も狭い部分で0.15m、最も広い部分では1.4mであった。

SK203　第１層の上面において、調査区の東北隅で検出した土壙である。SE204を破壊していた。平面形は不整形な円形を呈し直径は2.0m以上あり、検出面からの深さは0.8mであった。埋土は下部に加工時形成層の可能性があるシルトの偽礫混りの中粒～粗粒砂質シルト層があり、その上位にはわずかに炭を含むシルトが堆積し、最終的にはラミナが明瞭に観察できるシルト質細粒～中粒砂によっ

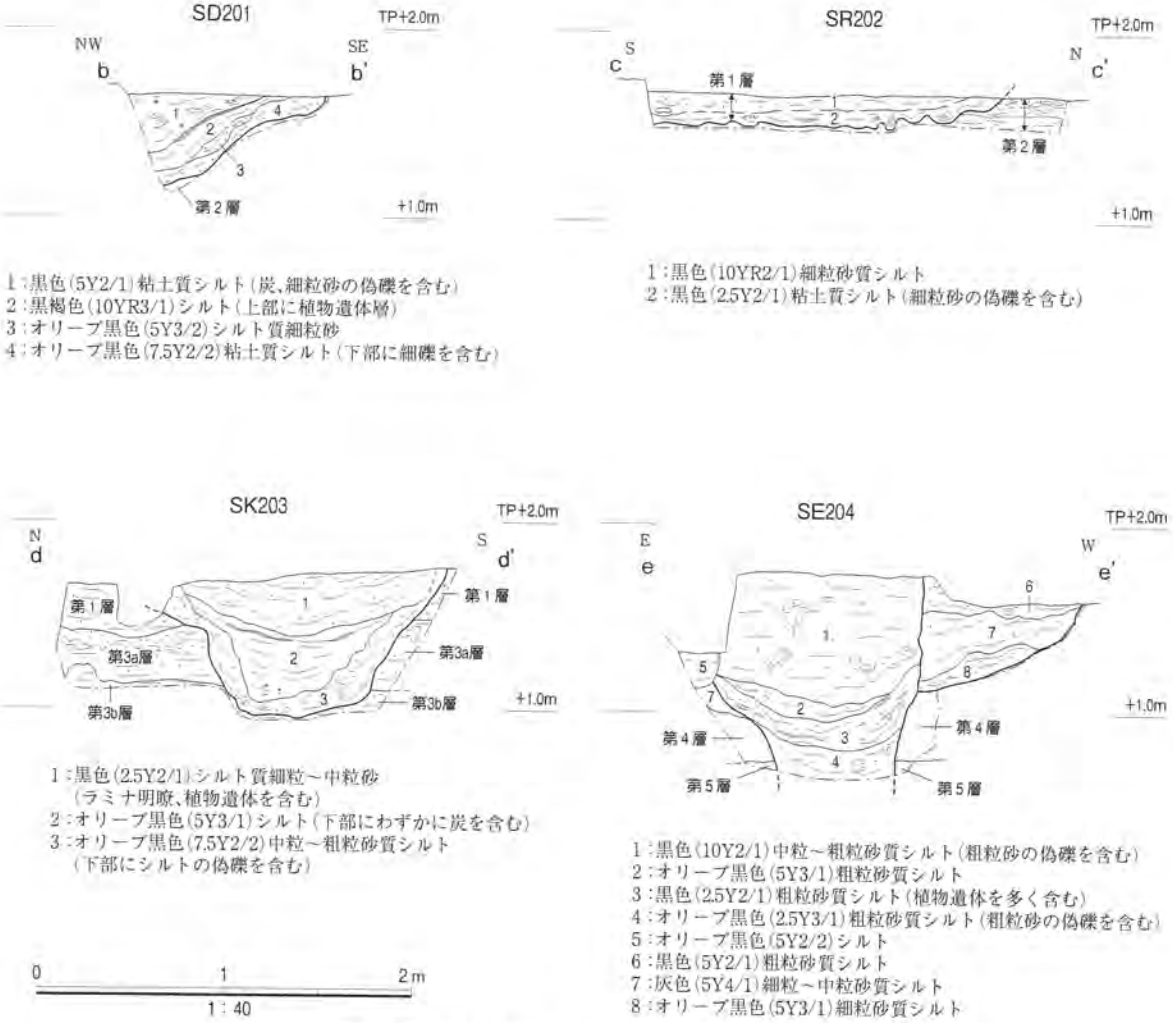


図８　第２層の遺構断面図（断面の位置は図７参照）

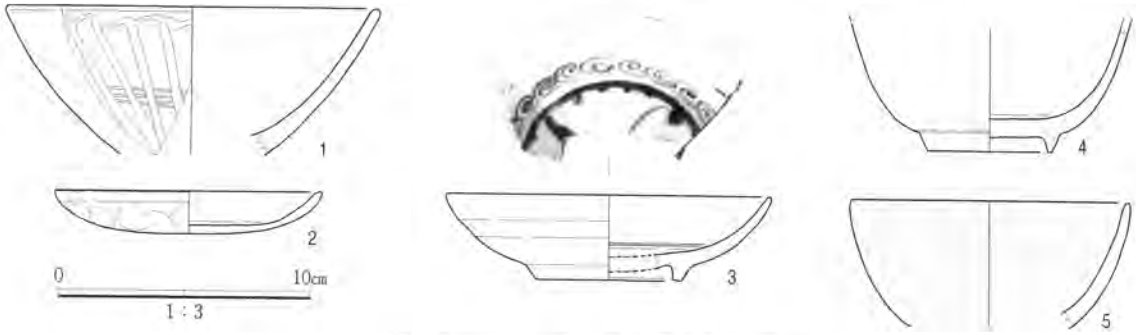


図９　SD201・SK203出土遺物実測図
SD201（１）、SK203（２～５）

て埋没していた(図８)。当遺構からは土師器・瀬戸美濃焼・中国産青花・肥前磁器・木製品・瓦が出土し、このうち土師器皿２、肥前磁器３～５を図示した(図９)。このうち土師器皿２は口径10.6cmで、手づくねによる成形である。染付皿３は二次的に被熱している。高台部の処理は雑で、砂が付着している。４は白磁碗、５は青磁である。このうち５は外面に融着痕があり、二次的に被熱したことがわかる。

SE204　検出面は第２層の上面である。調査区の東南隅で検出した井戸で、SK203によって破壊されていた。遺構の規模は直径1.0mで、検出面からの深さは1.1m以上ある(図８)。井戸の周囲は土壙状に窪んでおり、井戸掘削に伴う掘下げと考えた。埋土は下位に植物遺体のラミナを挟む砂質シルトがあり(図８－３層)、その上に偽礫を含む中粒～粗粒砂質シルトが堆積していた。すなわち、井戸の廃絶後一定の放置期間を経て埋められたものとわかる。当遺構からは弥生土器・平瓦が出土したが、遺構の時期を示す遺物は得られなかった。

c．各地層出土の遺物(図10)

第５層出土遺物では、石製品６、弥生土器７～13を図示した。サヌカイト製の石鏃６は凸基有茎の形態からみて弥生時代中期に属するものである。先端をわずかに欠損している。壺には７・８・10・

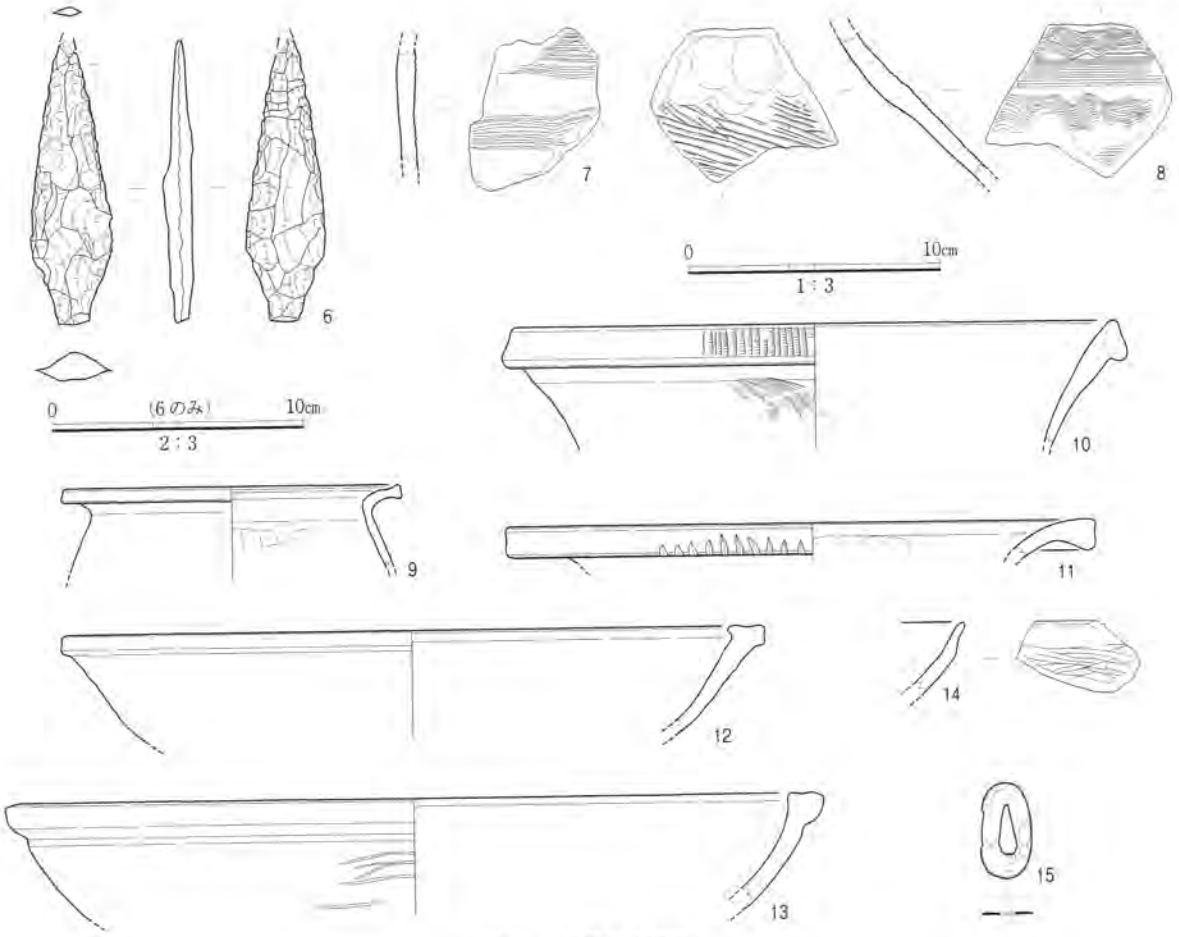


図10　各層出土遺物
第５層(６～13)、第４層(14)、第２層(15)

11がある。7は外面に櫛描きの直線文を施している。8は外面に櫛描きの直線文と波状文を施す。内面調整は下半が粗いハケメであり、上半には指頭圧痕を残す。10は口縁端部に簾状文を施し、外面にはハケメがわずかに観察できる。また、茶褐色を呈し角閃石を含むいわゆる生駒山西麓産の胎土を使用している。口縁端部が強く外反する11は口縁端部外面にキザミメを施している。また、雲母を多く含有する特徴的な胎土を使用している。口縁端部を肥厚させる高杯12・13はともに内外面をヘラミガキ調整している。これら第5層から出土した弥生土器は、7など中期前半に遡る可能性のあるものを少量含むが、多くは中期後半に属する資料である。

第4層出土遺物では、瓦器椀14を図示した。内外面とも密なヘラミガキを施しており、12世紀前半頃の資料であろう。

第2層出土遺物では、刀の切羽15を図示した。厚さ約1㎜の薄い金属製品で、外周には細かな切り込みを隙間なく施している。

3)まとめ

今回の調査では、弥生時代から徳川前期までの地層と遺構・遺物を確認することができ、当地における堆積環境の変化、そしてヒトによる開発過程の一端を明らかにすることができた。周辺調査との詳細な比較などは今後を期したいが、上町台地東側の土地利用の変遷を把握する上で貴重な成果が得られたといえるだろう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、「森の宮地区の調査」:『大坂城跡Ⅵ』、pp.189－204

大阪文化財研究所2011、『中央区玉造一丁目540－1ほか12筆における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS10－9次)報告書』

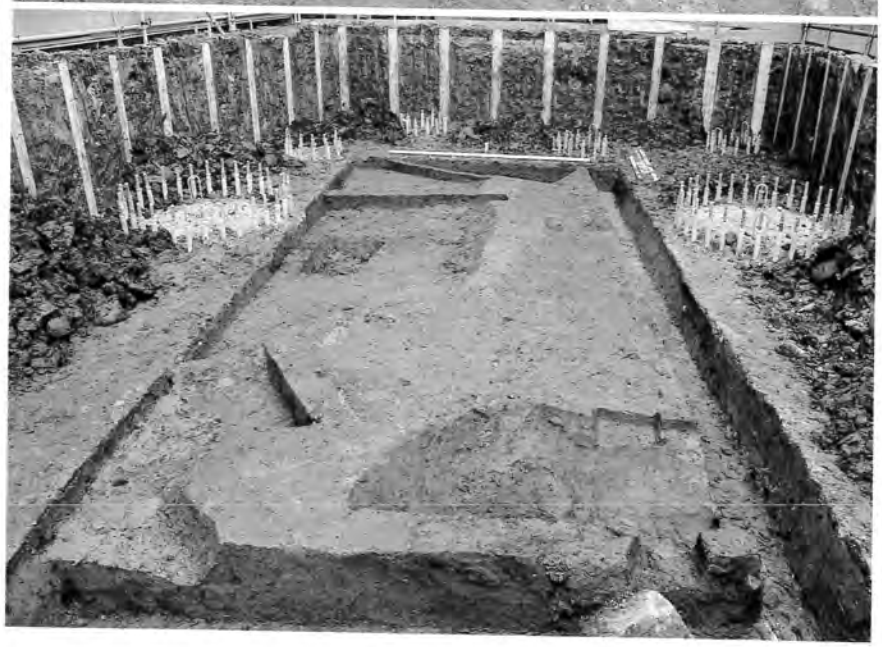
調査区北壁地層断面
（南東から）

深掘り地層断面（南東から）

第５層上面検出状況
（東から）

第４層上面検出状況
（東から）

第１・２層の遺構
（東から）



中央区谷町一丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－9)報告書

調査個所	大阪市中央区谷町1丁目3－3
調査面積	約42㎡
調査期間	平成23年8月24日～8月29日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、地下鉄谷町線天満橋駅から南すぐの谷町筋に面した東側に当る(図1)。旧地形でいえば南西へ続く「釣鐘谷」の最奥部になり、豊臣期の初めの遺構面で現地表より4m以上深い。調査地の西隣には、谷町筋の地下駐車場建設に伴うOS97－1次調査A区があり、釣鐘谷の中で平安時代の井戸、豊臣前期の礎石建物・掘立柱建物や柵、豊臣後期の大規模な南北塀などが検出されている[大阪市文化財協会1999]。

敷地にはかつての建物基礎が深くまで入っていたが、基礎による破壊が及んでいないTP+約11m以下について、中央からやや北西寄りの東西約7m、南北約6mの範囲を発掘調査した(図2)。8月27日午後に記録的な集中豪雨があり、以降の調査はその影響を受けた。第2層以下は、調査区の東北部約3.5m四方に限って地層ごとに第6層上面まで掘り下げ、最後に東西トレンチの地層断面図を作成し、調査を終了した。

本報告では、GPS測量を行って得た世界測地系座標を使用し、方位は座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・5)

第1層：緑灰色(5G5/1)粗粒～極粗粒砂層で、層厚25cm以上である。調査区の東半と西辺に残存していた。豊臣初期の整地層である。本層上面にSD101・SB102・SX103などがある。

第2層：オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂層の軟弱な盛土で、最大層厚55cmである。一部にラミナが

図1　調査地位置図

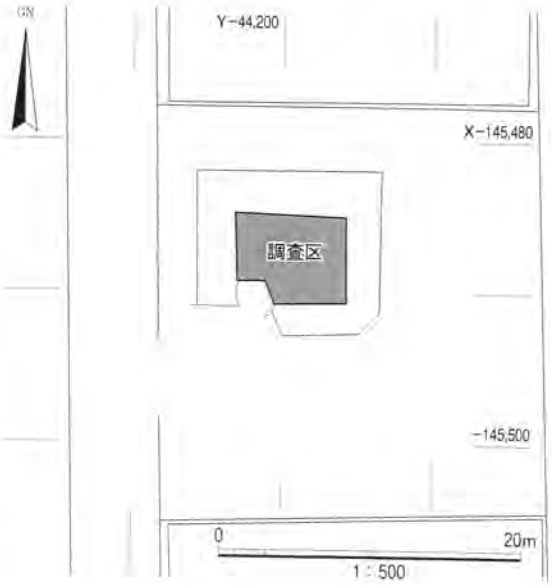


図2　調査区位置図

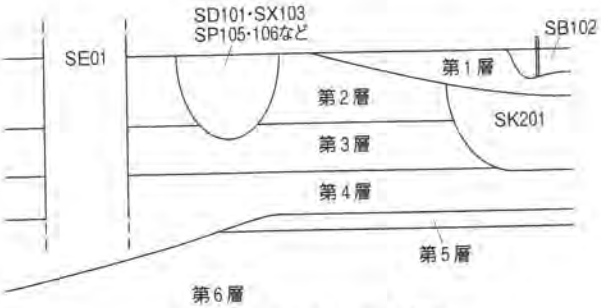


図3　地層と遺構の関係図

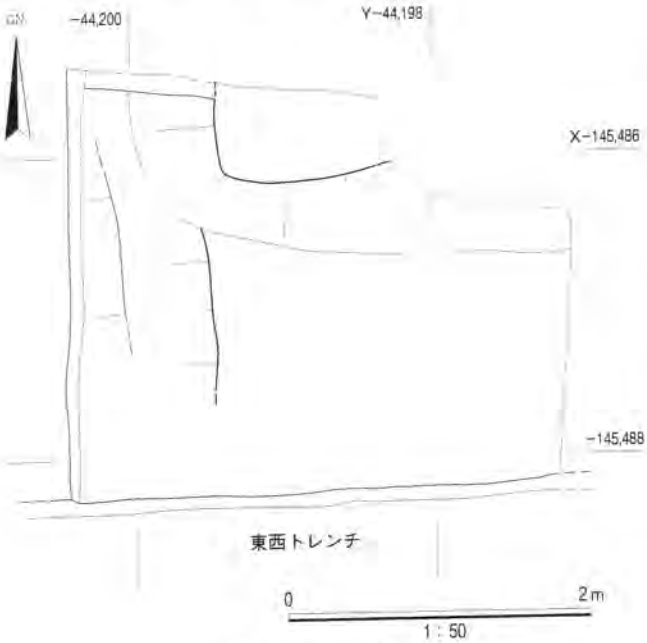


図4　第6層上面遺構平面図

見られるところもある。層中に浅いゴミ穴があり、上面にはSK201がある。大坂本願寺期と推定される。第2層上部から瀬戸美濃焼天目碗5と中国産青花皿6が出土した(図6)。また、中国産白磁皿3と墨書で目盛を描いた木製品7は第2層以下の出土である。

第3層：灰色(10Y4/1)中粒砂質シルト層で、層厚は20～28cmである。時期は特定できないが、中世のいずれかと推定される。

第4層：灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルト層である。層厚は15～75cm以上で、南西方向へ深くなる谷を埋めている。古代の平瓦1・2が出土した。図6の4の釣手のある須恵器蛸壺は、本層に伴う可能性が高い。

第5層：灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質粗粒砂層で、層厚は5cmである。

第6層：オリーブ灰色(10Y4/2)中粒～粗粒砂層で、いわゆる上町台地の地山である。

ii)遺構と遺物(図4～6)

第6層上面の標高は調査区東北隅が最も高くTP+10.3m、西南隅へ低くなってTP+9m未満であり、釣鐘谷の中心へ向けて低くなっていくと推定される(図4)。第6～3層の間では遺構は検出していない。

第2層上面にはSK201がある。SK201は東西2.5m以上、南北1.2m以上、深さ1m以上の土壙である。灰色(10Y5/1)極細粒砂偽礫混りの黄灰色(5Y5/3)極粗粒砂～細礫で一気に埋められ、上層に炭混りのオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質中粒砂層がある。SK201が埋まった後にSB102が建てられる。出土遺物から特定はできないが、SK201は大坂本願寺末～豊臣初期と考えられる。

第1層上面のおもな遺構にSD101・SB102・SX103がある。SD101はほぼ南北の溝で、最大幅2.7m、深さ0.85m以上である。検出状態は削平されており、南端を除いて本来より幅が狭い可能性が高い。下層は明赤褐色(5YR5/8)粗粒砂層(水成)で、中層はオリーブ灰色(2.5GY5/1)粗粒～極粗粒砂層、上層は灰色(5Y4/1)細粒砂層である。中・上層は水成層と埋め土が混淆する。SD101からは瀬戸美濃焼丸皿8、黒漆塗りの木製小箱の一部9、木簡10が出土した。豊臣前期の遺構と推定される。

SB102は塼列建物の外周部の西南角である。塼積の検出長は2.05mで、方向は北で東へ6°振って

いる。溝状の掘形の内壁に沿って塼を２段に積み上げ埋め戻している。15は使用された塼の１枚で、長さ26.0cm、幅22.5cm、厚さ1.9cmで、製作技法や焼成は平瓦と同じである。大きさ・厚さは個々に違いがあるとはいえ近似している。SB102の掘形から粗製の中国産青花皿11、中国産白磁皿12が出土した。遺物は大坂本願寺期でもおかしくないが、層位とSD101などの他の遺構との関係から豊臣前期

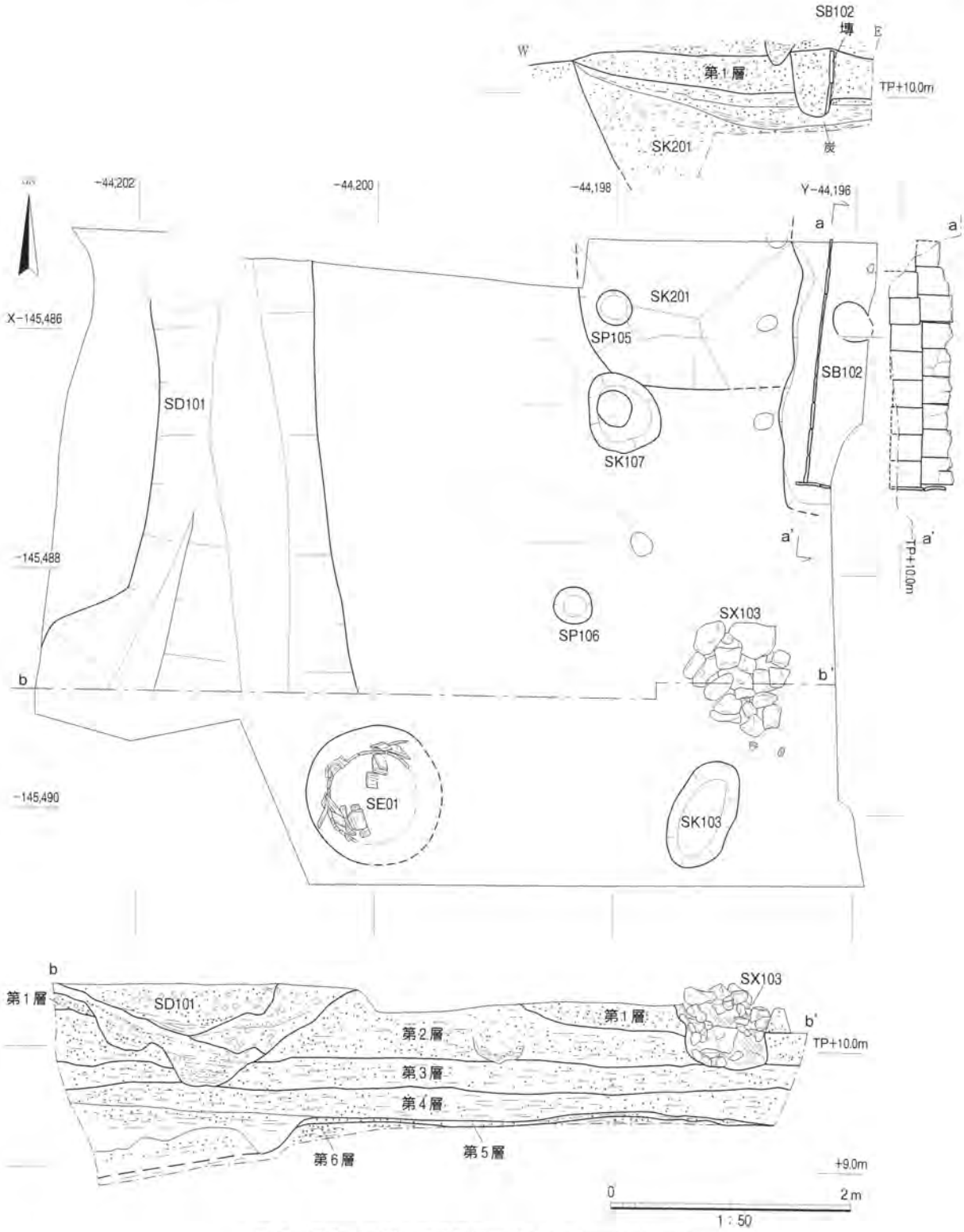


図５　第１・２層上面遺構平面図および東西地層断面図

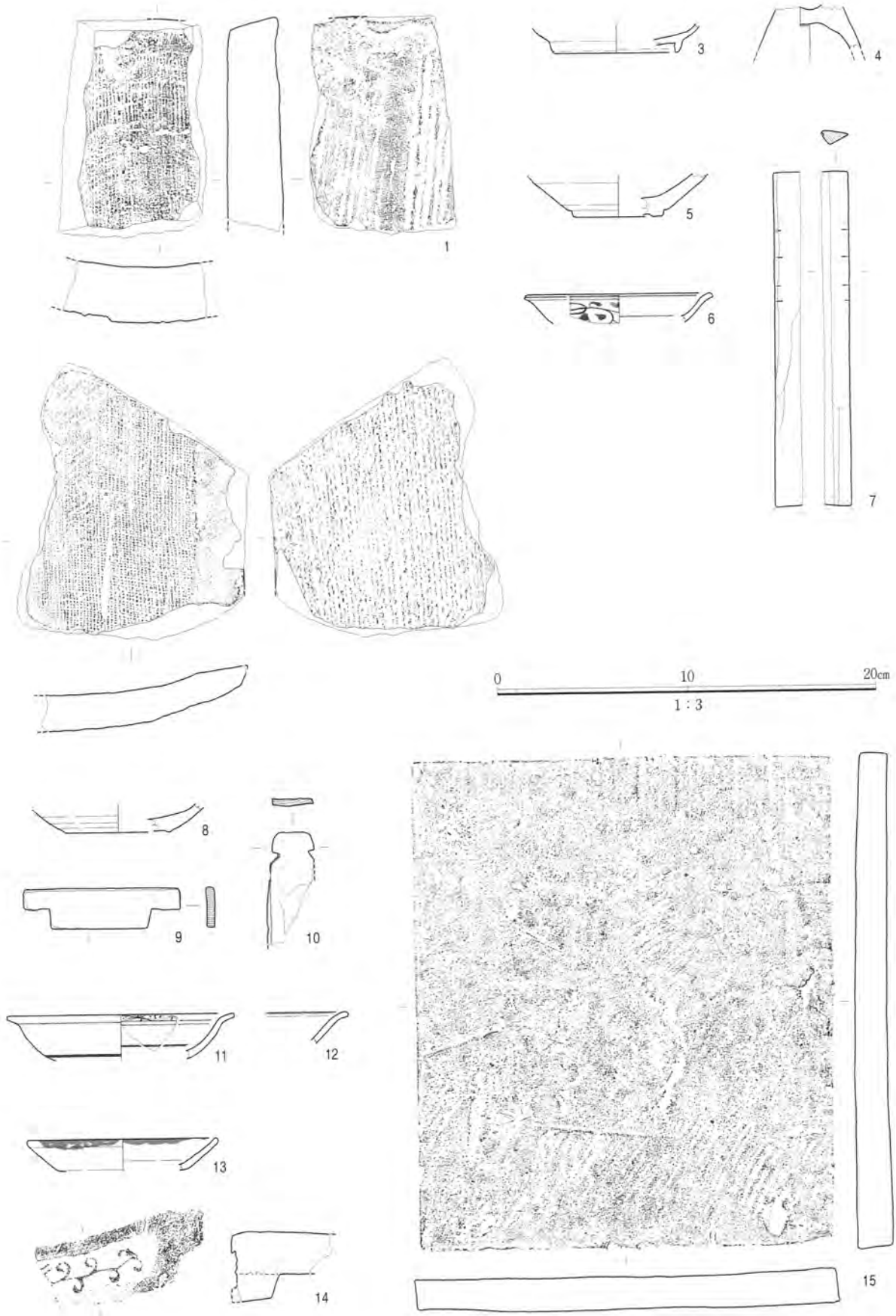


図6　出土遺物実測図

第4層(1・2)、第4層?(4)、第2層以下(3・7)、第2層上部(5・6)、
SD101(8～10)、SB102(11・12・15)、SX103(13・14)

と推定される。

SX103は直径0.85～0.95m、深さ0.70mの集石遺構である。この上に大きな礎石を載せたりする、何らかの基礎と推測される。SX103からは土師器皿13と軒平瓦の瓦当14が出土した。SX103も豊臣前期と推定される。

以上の他に第1層上面では小規模な土壙や小穴、杭跡などを検出した。SE01は木枠の井戸で、本来はかなり上の遺構面に伴うものである。

3)まとめ

調査地点は開析谷の中になり周囲よりかなり低いが、豊臣前期の段階に建物が建てられていた。これは西隣のOS97－1次調査地の所見と一致し、建物などの遺構の方向も周囲の町割とかわらない。SD101は排水のための主要な溝であろう。城に近い調査地周辺は、たとえ地形条件の悪いところでも豊臣前期の段階に隙間なく開発されていたことがわかる。

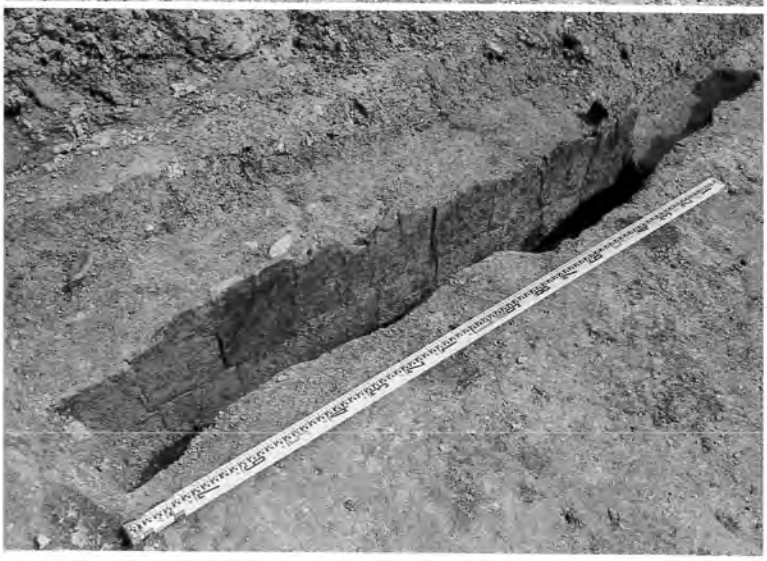
引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『大坂城跡』Ⅳ

第６層上面全景
（東から）

第１層上面全景
（北から）

SB102塼積
（北西から）



中央区天満橋京町における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－13)報告書

調査個所	大阪市中央区天満橋京町17－1・17－5・8－3
調査面積	24㎡
調査期間	平成23年10月20日～10月26日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、平田洋司

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城の惣構内北端付近に位置し、大川南岸沿いの土佐堀通に面している。周辺の現地形は南から北へと急激に低くなり、今回調査地と南側の敷地とは約10mもの標高差があり、石垣を伴って北面する崖面となっている。周辺ではこれまでいくつかの調査が行われており(図1)、豊臣期を中心に古代～徳川期の遺構・遺物が検出されている。これらの成果をもとに、南約100mにある東西方向の道路である島町通以北では豊臣前期・後期ともに検出される遺構の方位が現在の地割と同じであることから、豊臣前期の段階から現在の地割が存在したことが指摘されている[松尾信裕2003]。

今回の調査地では事前に大阪市教育委員会によって行われた試掘調査の結果、現地表下約0.6mで大坂夏ノ陣と推定される焼土層と、その下位から厚い整地層が確認されたことから調査を実施することとなった。事業者側により敷地全域が現地表下0.6mまで掘削されたのち、10月20日から調査に着手した。敷地南側に南北8m、東西3mの調査区を設定し(図2)、掘削はすべて人力で行った。適宜、遺構の検出・記録を行いつつ調査を進めたところ、後述の第3層上面の遺構までを調査した時点で、排土置場の確保が困難となった。そのため下位層については北端部のみを調査対象とし、さらに掘削を進め、10月26日にはすべての作業を完了した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP+○mと表記した。

図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

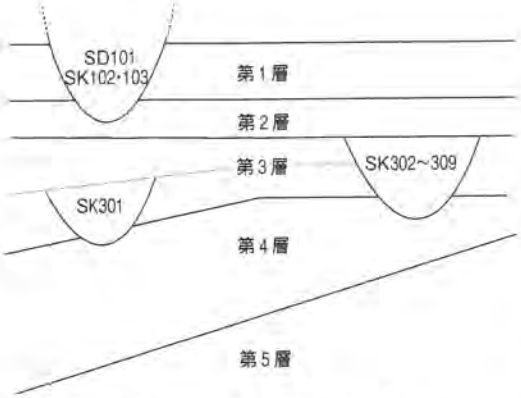


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査を開始した現地表下約0.6m以下の層序を第1層～第4層に区分した。

第1層：シルト偽礫を含むオリーブ褐色シルト質中粒～粗粒砂からなる整地層で、層厚は30cm以上である。土師器片のほか瓦片を含み、徳川期の17世紀前半に位置づけられる。

第2層：層厚15cm未満の焼土層であり、調査区東北端にのみ遺存していた。土師器片を含む。上層および下層の遺物から1615年の大坂夏ノ陣の焼土層に比定できる。

第3層：にぶい黄褐色シルト質粗粒砂および灰黄色粗粒砂などからなる整地層でシルト偽礫を多く含む。本層上面にて礎石のほか土壙を検出した。南部では層厚20cmで平均しているが、北部では50cm以上に厚みを増す。2～3層に細分可能であり、層内では土壙も検出された。このことから後述の第4層による整地後にも北へ下がる傾斜は残されており、この傾斜を徐々に平坦化したのが本層と判断できる。瓦片・土師器片が出土した。豊臣後期の整地層であろう。

第4層：シルトおよびシルト質細粒砂の偽礫を含む細粒砂～細礫を主体をする整地層である。にぶい黄色～灰黄色を呈する。北に向かうほど厚く堆積し、北端では層厚は120cm以上である。遺物は少なく少量の瓦片のほか須恵器・緑釉陶器が出土したが、時期を決するものではない。周辺の調査成果からは豊臣前期あるいは1598年の三ノ丸造成に伴う整地層と判断できる。

第5層：明褐色粗粒砂～細礫を主体する自然堆積層で固く締まる。本層より下位は掘削していないため断定はできないが段丘構成層の可能性がある。

ii)遺構(図4)

a．豊臣後期以前の遺構と遺物(図4～7)

第5層上面では1.6m以上北東へと下がる斜面を検出した。大坂城築城以前の旧地形と考えられる。

図4　地層断面図

これを埋める第４層からは須恵器杯蓋１および緑釉陶器２が出土した。１は７世紀前半頃、２は９世紀中葉に比定できるが、周辺の調査成果から整地の時期は豊臣期と推定できる。

第３層内では土壙SK301を検出した。

SK301　最大長1.0mの平面形が楕円形の土壙で、深さは0.3mである。埋土はシルト偽礫および炭を含む黄褐色シルト質中粒砂である。遺物は出土しなかった。

第３層からは瓦片のほか土師器・瀬戸美濃焼が出土した。３は瀬戸美濃焼天目碗である。

第３層上面では礎石のほか土壙などを検出した。以下、主要な遺構について記す。

礎石　調査区東北端で１基確認した。拡がりについては不明である。

SK302　調査区西北部にある南北3.5m以上、東西1.5m以上の平面形が長方形の土壙である。深さ

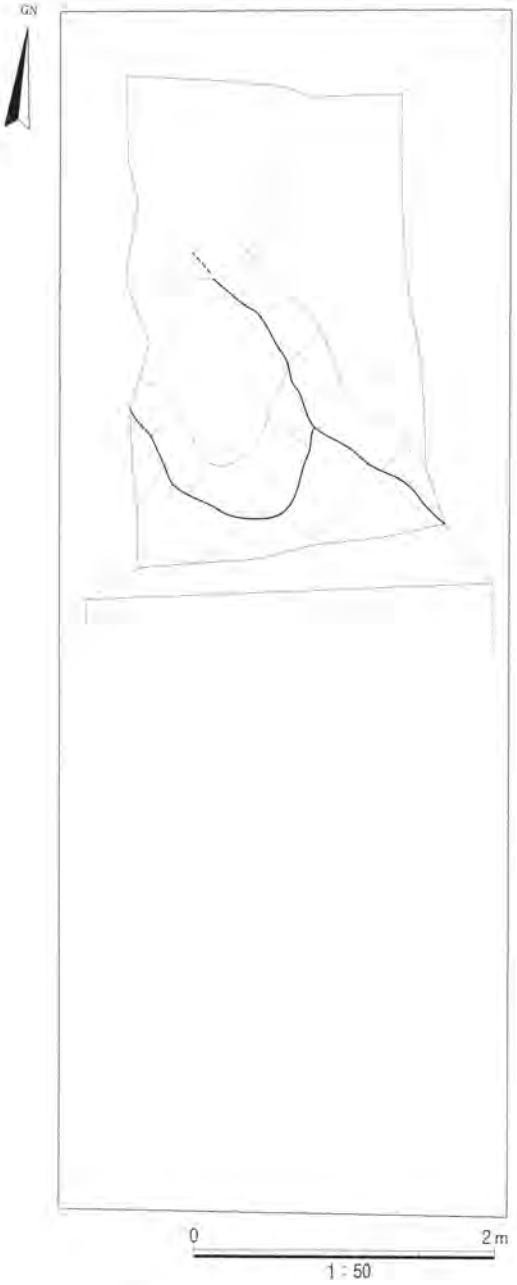


図５　第５層上面の地形

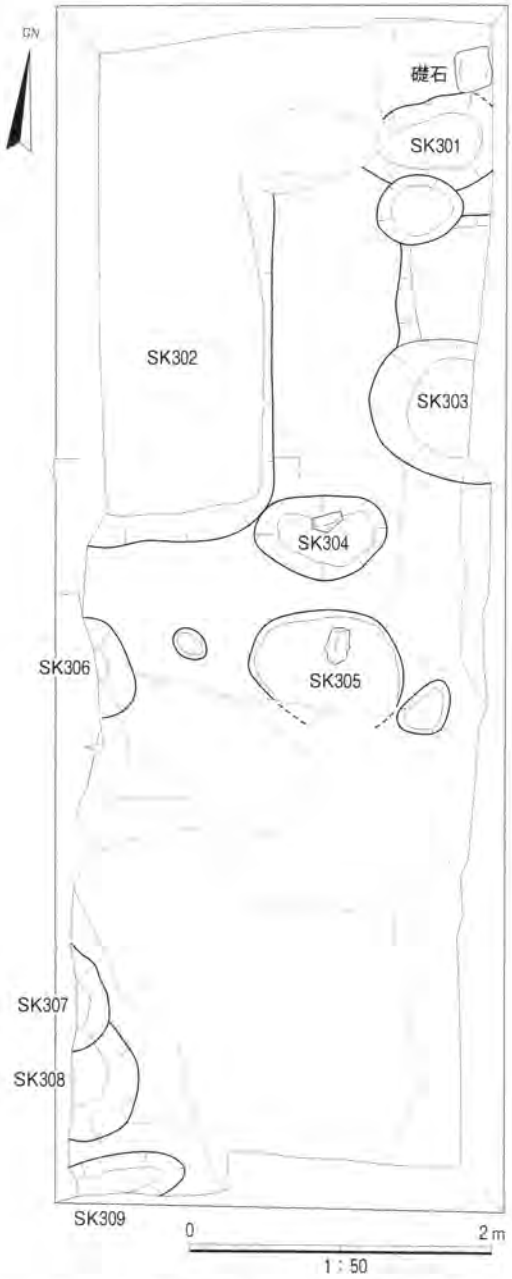


図６　第３層上面の遺構(SK301は第３層内)

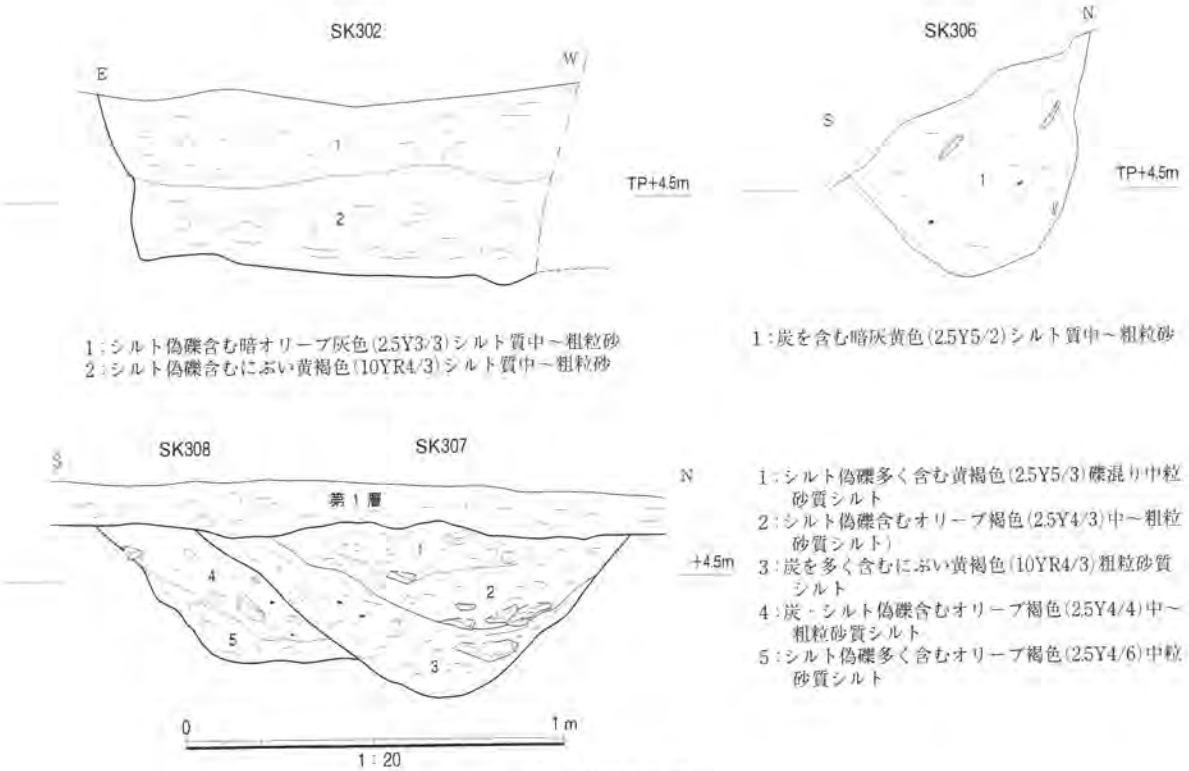


図7　遺構断面図

は0.5mで底は平坦である。埋土はシルト偽礫を含む暗オリーブ褐色～にぶい黄褐色のシルト質中～粗粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK303　直径0.7mの平面形が円形の土壙で、深さは0.5mである。北には1辺0.6m、深さ0.2～0.3mの一段浅い部分が取付く。埋土はシルト偽礫を含むにぶい黄褐色シルト質中粒～粗粒砂で、北の一段浅い部分には炭を多く含む。土師器・須恵器のほか中国産青花・肥前陶器が出土した。4は青花碗、5は肥前陶器皿である。

SK304　調査区中央で検出した最大長0.8m、深さ0.1mの平面形が楕円形の土壙である。土師器皿のほか瓦片が出土した。

SK305　SK304の南に位置する最大長1.0m、深さ0.2mの平面形が楕円形の土壙である。遺物は出土しなかった。

SK306　SK304の西に位置する最大長0.7m、深さ0.6mの土壙である。埋土は炭を含む暗灰黄色シルト質中粒～粗粒砂である。土師器片のほか瓦片が多く出土した。

SK307　直径1.1m、深さ0.4mの平面形が円形の土壙で、SK308に後出する。埋土は大きく2層に分かれ、下位は炭を多く含むにぶい黄褐色中粒砂シルトからなる機能時堆積層、上位はシルト偽礫を多く含む埋戻し土である。土師器・備前焼・肥前陶器のほか瓦片が多数出土した。6は土師器皿、7は肥前陶器皿で内面の目痕は胎土目である。

SK308　SK307の南にある直径1.2m、深さ0.3mの土壙である。埋土はシルト偽礫を多く含む埋戻し土である。肥前陶器向付8が出土した。8は口縁部を方形に変形させている。

SK303～308は形状や埋土の特徴から廃棄土壙としての機能が推定できる。

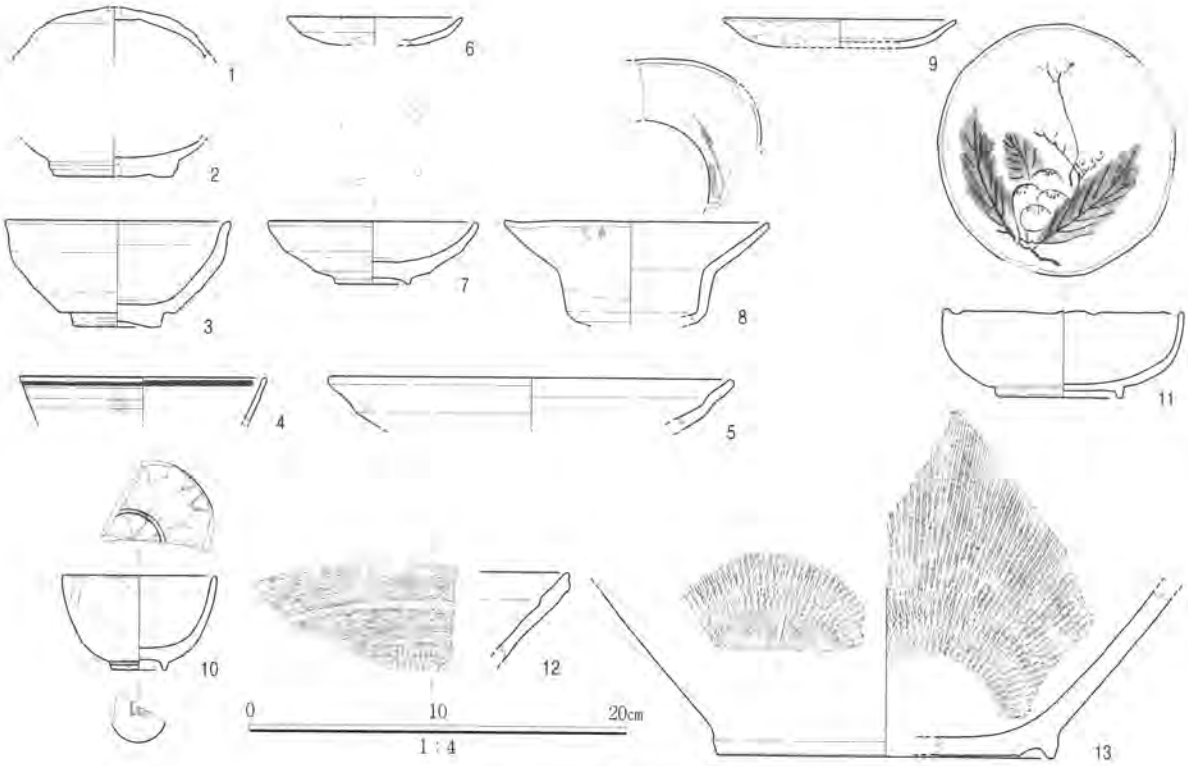


図８　出土遺物実測図

第４層（１・２）、第３層（３）、SK303（４・５）、SK307（６・７）、SK308（８）、第１層（９）、SD101（10）、SK102（11～13）

SK309　調査区西南で検出した東西0.8m以上、南北0.3m、深さ0.2mの土壙である。瀬戸美濃焼皿が出土した。

これら第３層上面の遺構群は出土遺物から豊臣後期に位置づけられる。遺構面は平坦であることから、南の敷地との段差はこの時期には存在していたといえる。また、遺構の方位も現在の地割と同方位であり、現在の地割が豊臣期まで遡ることが追認された。なお、大坂夏ノ陣に相当する焼土層である第２層は調査区北端でのみ検出され、第２層が確認された試掘壙も調査区の北側に位置する。今回の調査区内では廃棄土壙と推定される土壙が検出されたことから、建物は調査地の北側、現在の土佐堀通に近い部分に存在したのであろう。

ｂ．徳川期の遺構と遺物（図８・９）

調査を開始した第１層上の遺構が相当する。上位の地層が失われているため、本来の生活面は不明である。第１層からは土師器皿９が出土した。以下におもな遺構について記す。

SD101　幅0.5mの南北方向の溝で、深さは0.2～0.5mと北に行くほど深くなっている。溝内には長さ20～50cmの石が多量に詰め込まれている。これらの石の上端は比較的平坦に揃えられていることから、上部に構造物があった可能性もあるが、これらの石を覆う埋土が溝の埋土と変わらないこと、溝底が敷地境と推定される南へと下がっていることから暗渠の機能があると判断した。土師器・肥前陶器および磁器・瓦などが出土した。10は肥前磁器染付碗である。18世紀前半に位置づけられる。

SK102　直径1.0m、深さ0.4mの平面形が円形の土壙である。埋土は下位が偽礫を多く含む加工時の形成層、上位が炭を多く含む暗灰黄色シルト質中粒～粗粒砂からなる機能時形成層である。多くの

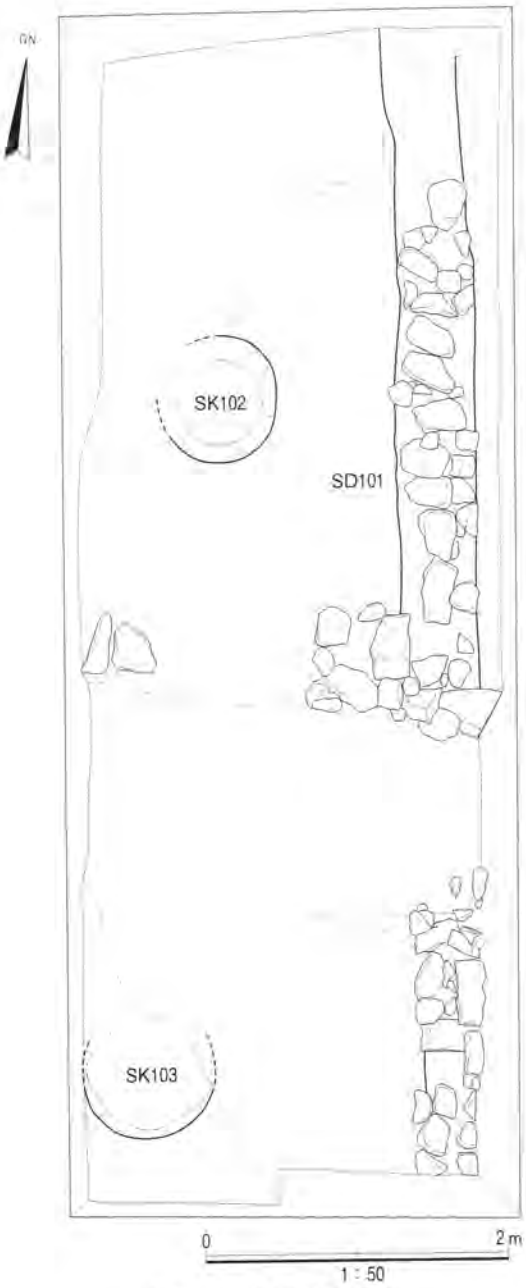


図9　第1層上面の遺構

瓦片のほか以下の陶磁器類が出土した。11は関西系陶器稜花皿、12は丹波焼擂鉢、13は堺擂鉢である。これらの遺物は18世紀中～後葉に位置づけられる。

SK103　調査区西南で検出した直径0.9m、深さ0.1mの土壙である。埋土は偽礫を含む灰褐色のシルトである。備前焼擂鉢・肥前陶器が出土した。

その他の遺構としては、2箇所にて集石が認められたが、事前の機械掘削のためか原位置を動いているものが多く、正確な構造は不明である。東西方向に並ぶことから、建物の基礎の可能性がある。

3）まとめ

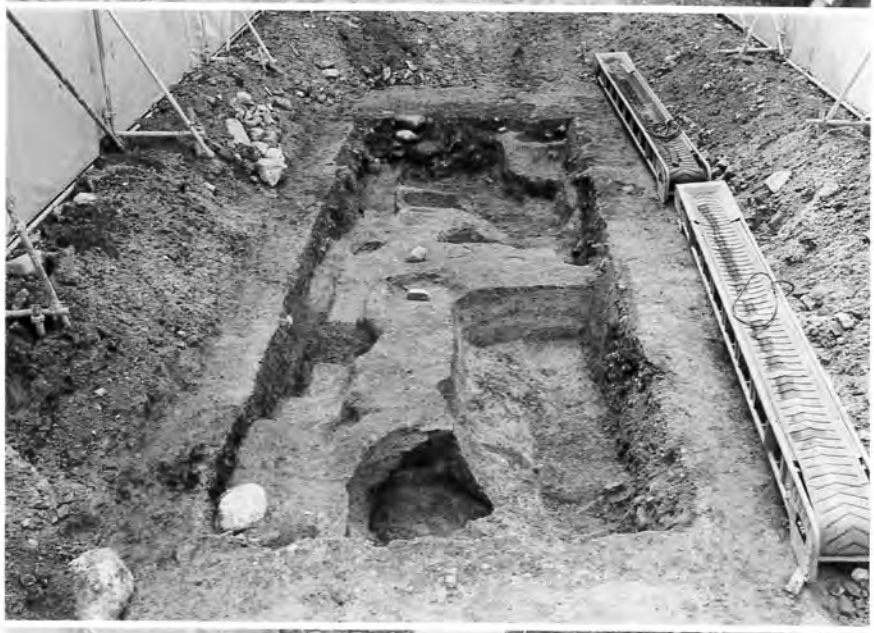
今回の調査では、惣構北端域の開発のようすを探ることができた。旧地形は急激に北へと下がる斜面であったものを豊臣期に厚い整地を施すことにより平坦地を形成している。遺構の方位から少なくとも豊臣後期の段階には、現在と同様の地割が行われていることを追認した。南側敷地との境をなす段は規模や若干の位置の違いこそあれ、この整地の際に雛壇的な造成がなされた結果、形成されたものであろう。

引用・参考文献

松尾信裕2003、「豊臣氏大坂城惣構内の町割」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅶ、pp.325－338

東壁地層断面
（北西から）

第３層上面の遺構
（南から）



第１層上面の遺構
（南から）

中央区松屋町住吉における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－19)報告書

調査個所	大阪市中央区松屋町住吉14－2・15－1
調査面積	24㎡
調査期間	平成23年11月28日～12月1日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城の惣構西南部に位置し、徳川期には町屋が立ち並んでいたところである。東北方330mのOS02－8次調査[大阪市文化財協会2003]では、豊臣期の瓦焼成用の達磨窯9基が検出され、南東150mのOS06－1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]では、土採り穴とそれを埋める17世紀前半の層厚約1～2mの盛土層が見つかっている。大坂夏ノ陣(1615年)の焼土層とそれを埋める盛土層が検出された地点としては、北方240mのOS88－73次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990]がある。周辺は豊臣期には手工業生産が行われていた可能性の高いところである(図1)。

当該地で大阪市教育委員会によって行われた試掘調査では、地下約1.2m以下で豊臣期から徳川前期と考えられる客土層が検出された。今回の調査はこのような地層や下位層の状況および遺構・遺物の有無を明らかにして、当地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的に実施した。

平成23年11月28日、調査に着手し、試掘調査に鑑み遺構の残りの良い敷地西寄りに南北6m×東西4mの調査区を設け、地表面下0.8mの第2a層下面まで機械掘削し、その後は人力で掘削しながら、遺構の平面図・断面図等の作成、写真撮影で記録保存を行った。調査終了後は土壌改良した土で埋め戻して、12月1日に全ての現場での作業を終えて撤収した。

本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

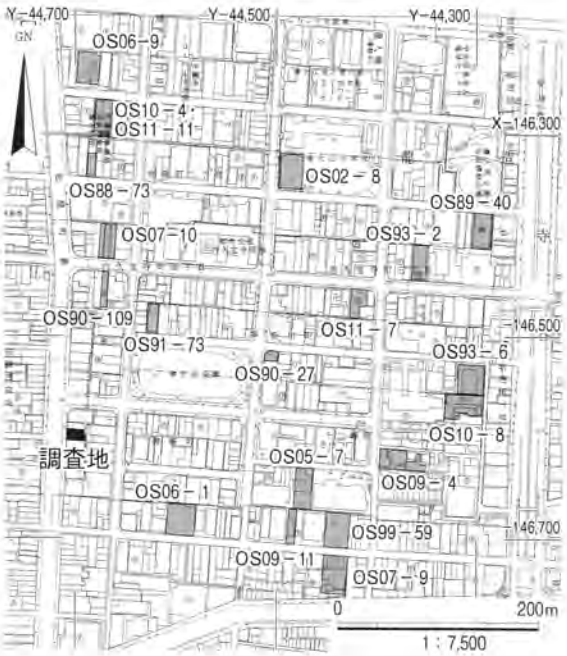


図1　調査地位置図

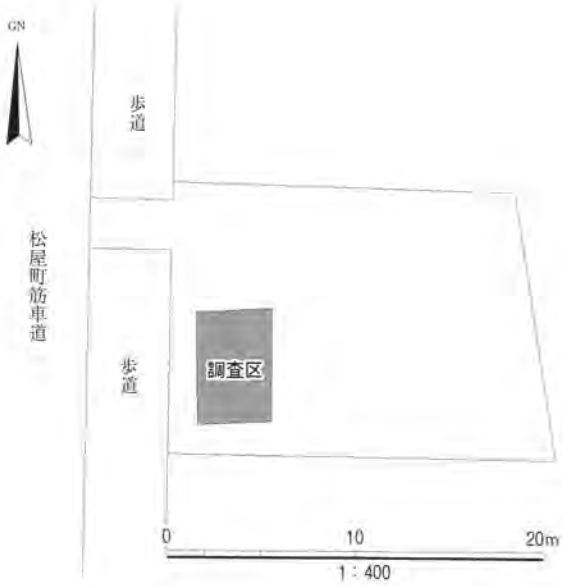


図2　調査区位置図

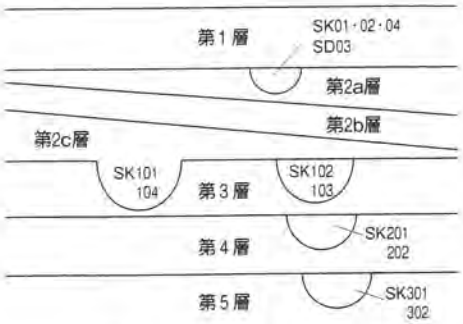


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3・4・8)

第1層：層厚60～90cmの現代盛土層である。

第2a層：層厚20～40cmの黄色(2.5Y8/6)細礫質粗粒砂の盛土層である。

第2b層：直径10～40cmの明黄褐色(10YR6/6)粘土偽礫を多く含む層厚10～80cm明黄褐色(10YR7/6)粘土質粗粒砂の盛土層である。唐草文軒平瓦13、三巴文軒丸瓦14が見つかった。

第2c層：大坂夏ノ陣の焼土偽礫を多く含む層厚10～50cmの淡黄色(5Y7/4)粘土質粗粒砂の盛土層で、SK101・104は本層で埋没する。唐草文軒平瓦9、三巴文鳥衾10、宝珠文二の鬼瓦11が出土した。

第3層：層厚20～40cmのにぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質粗粒砂の整地層で、三巴文軒丸瓦8が見つかった。

第4層：層厚10～40mの中礫・粘土偽礫を含む明黄褐色(10YR6/6)粘土質粗粒砂の整地層で、豊臣期の土師器皿7が出土した。

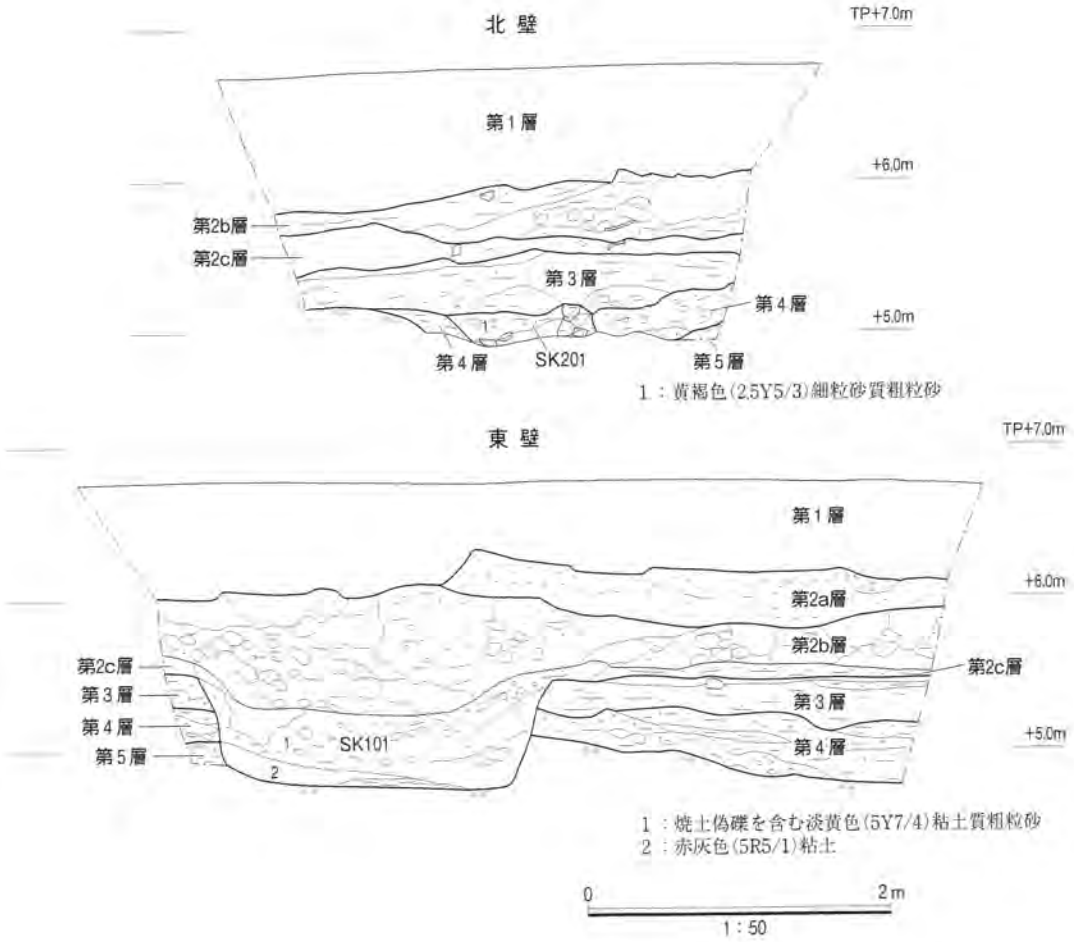
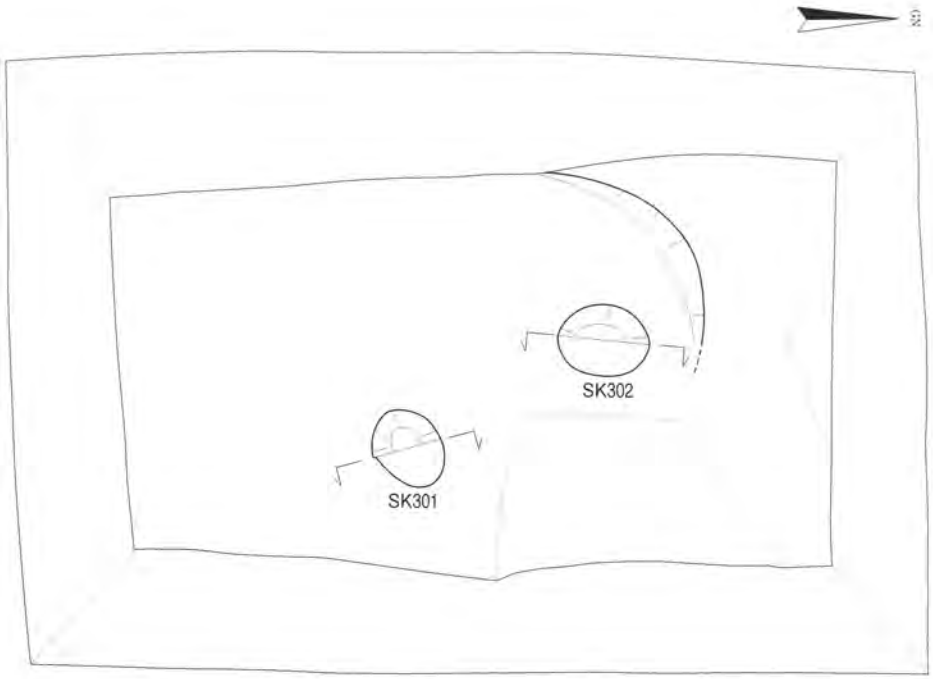
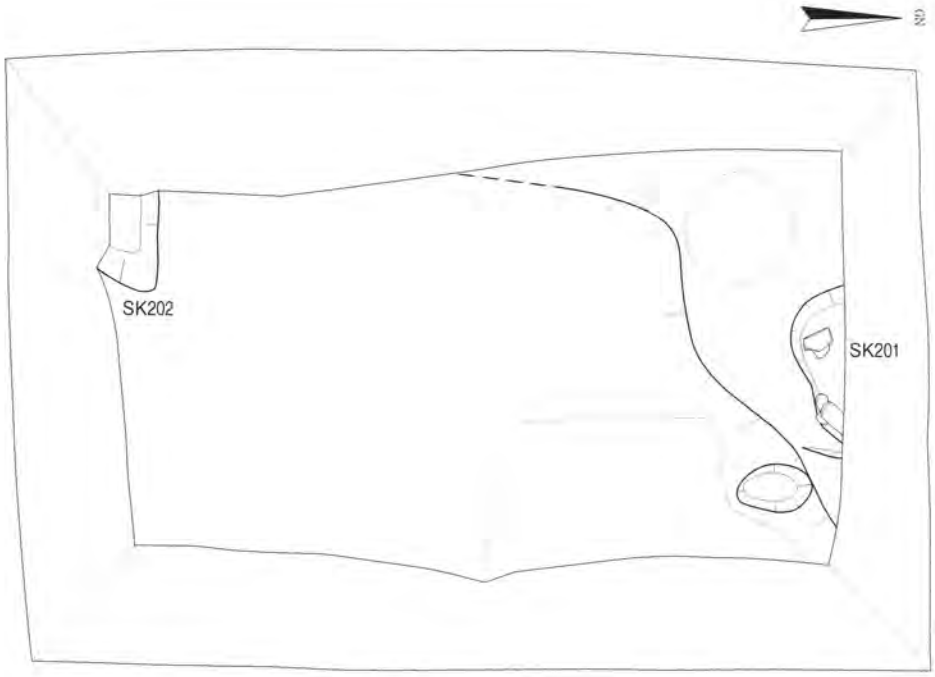


図4　地層断面図



第5層上面



第4層上面

0　2m
1：50

図5　第5層上面および第4層上面遺構平面図

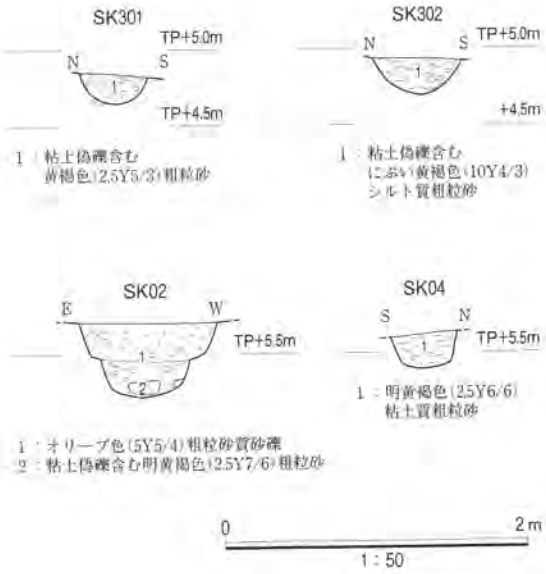


図５　遺構断面図

第５層：灰オリーブ色(5Y6/2)粘土質粗粒砂～明黄褐色(10YR6/6)粘土の地山層である。

ⅱ)遺構と遺物

豊臣期(第５層上面)遺構(図５・６・８)

SK301　長径0.6m、短径0.4m、深さ0.2mの楕円形を呈する土壙で、粘土偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂で埋まる。

SK302　長径0.6m、短径0.5m、深さ0.3mの楕円形を呈する土壙で、明黄褐色(2.5Y6/6)粘土質粗粒砂を埋土とする。

豊臣後期(第４層上面)遺構(図５)

SK201　長さ1.0m、幅0.3m以上、深さ0.2mの不整円形の土壙で、黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質粗粒砂で埋まる。

SK202　長さ0.7m以上、幅0.3m以上、深さ0.2mの土壙で、明黄褐色(10YR6/6)粘土質粗粒砂を埋土とする。

豊臣後期(第３層上面)遺構(図７・８)

SK101　南北2.3m、東西1.2m以上、深さ0.7mの平面が台形を呈する土壙で、第2b層で埋没するが、底部には水成と思われる赤灰色(5R5/1)粘土が堆積していたことから、開口していた土壙を第2b層で一気に埋めたと考えられる。土採り穴の可能性がある。備前焼建水口の鉢１、水指２・３、擂鉢４、丸瓦５、土師質火入れなどが出土した。特に備前焼は種類・点数ともに豊富で、擂鉢は６個体以上を数えた。５は全長25.8cmで、凹面にコビキB痕跡を見せる。

SK102　調査区南西隅の長さ1.2m以上、幅0.7m以上、深さ0.1mの土壙で、明黄褐色(2.5Y6/6)粘土質粗粒砂を埋土とする。備前焼鉢が出土した。

SK103　長径1.2m以上、幅1.0m、深さ0.3mの土壙で、第2b層の焼土で埋まる。礎石に使用されたと思われる長さ0.3m、幅0.2m、厚さ0.2mの石や丸瓦、平瓦、分厚い壁片が見つかった。開口していた土採り穴の可能性がある。

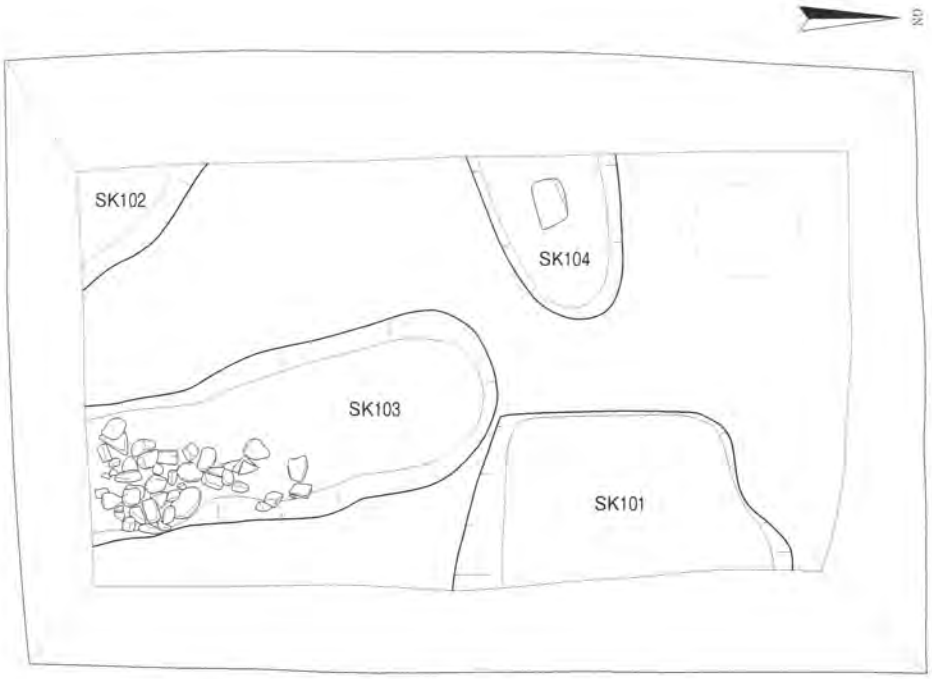
SK104　長さ2.7m以上、幅0.9～1.2m、深さ0.2mの溝状の土壙で、南半はコブシ大の石を敷き詰めている。丸瓦・平瓦や備前焼擂鉢が出土した。

徳川期(第2b層上面)遺構(図６～８)

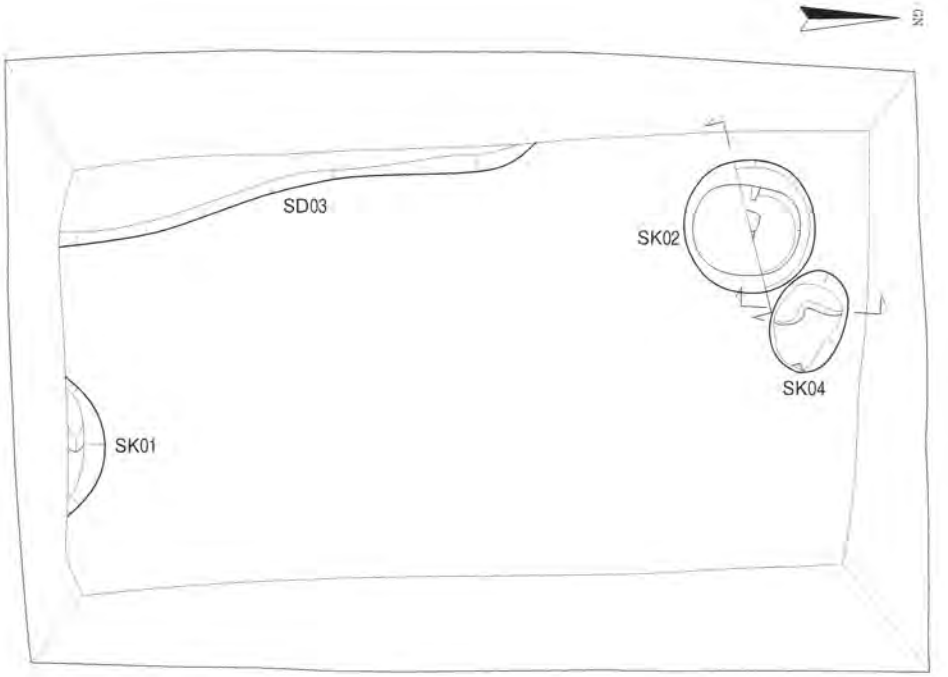
第2b層上面が平坦地化されてないことから、第2b層の盛土とほぼ同時に施工されたと思われ、したがって第2b層上面検出の遺構は本層上面から掘り込まれたと考えられる。

SD03　長さ3.2m以上、幅0.5m以上の.6m、短径0.4m、深さ0.2mの楕円形を呈する土壙で、粘土偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂で埋まる。

SK01　南壁際で検出した直径1.0mの灰オリーブ色(5Y6/2)粘土質粗粒砂を埋土とし、鋳型や瓦片、



第3層上面



第2b層上面

0　2m
1：50

図7　第3層上面および第2b層上面遺構平面図

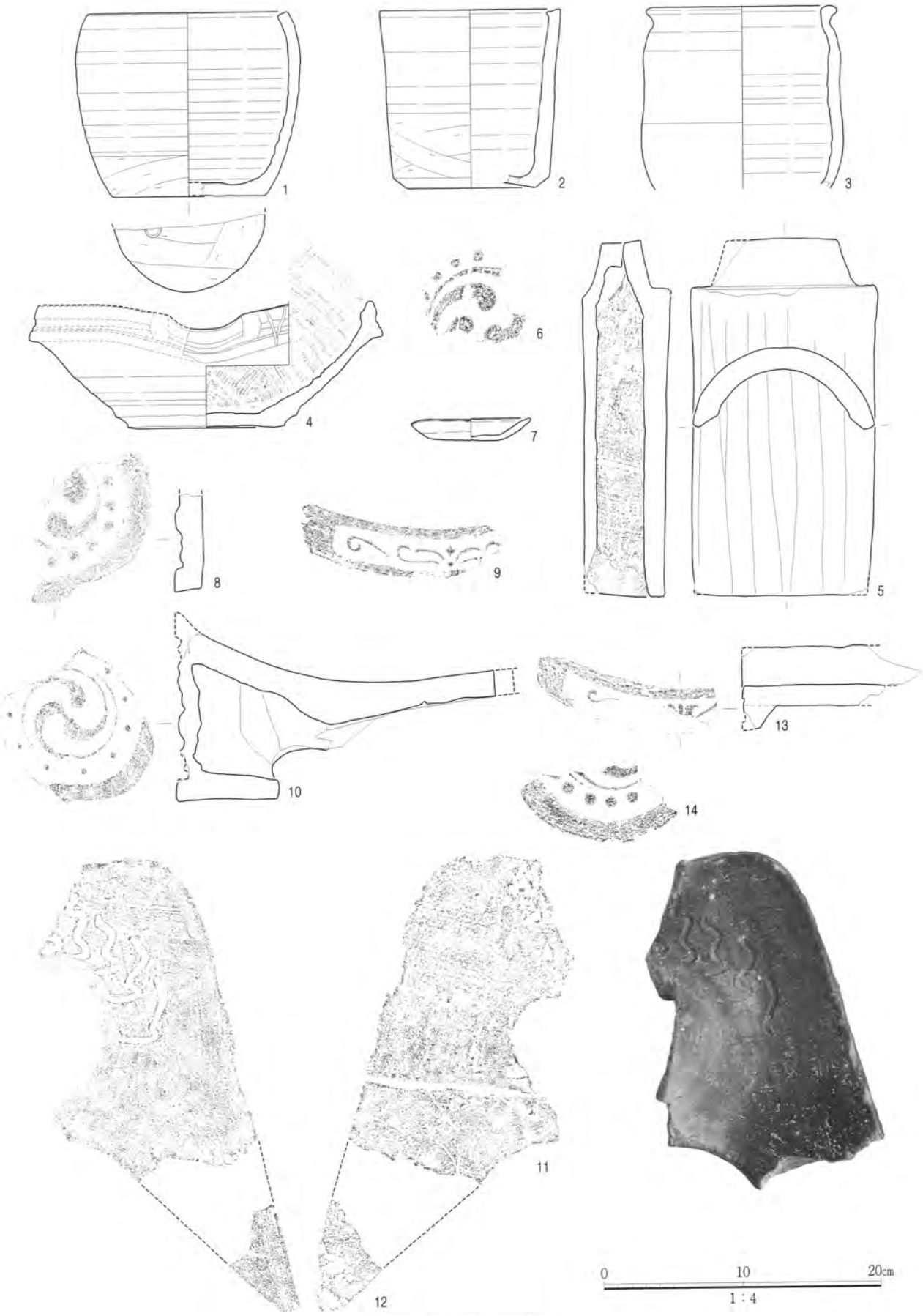


図８　出土遺物実測図

SK101（１～５）、SK04（６・12）、第４層（７）、第３層（８）、第2c層（９～11）、第2b層（13・14）

肥前磁器を含む。18世紀後半の土壙である。

SK02　直径0.9m、深さ0.5mの円形土壙で、途中にテラスがあり、鉢を上下に重ねたような形状をなす。上部の埋土はオリーブ色(5Y5/4)粗粒砂質細礫、下部は粘土偽礫を含む明黄褐色(2.5Y7/6)粗粒砂で、丸瓦・平瓦、瓦質火入れが出土した。

SK04　長径0.7 m、短径0.5m、深さ0.2mの楕円形を呈する土壙で、明黄褐色(2.5Y6/6)粘土質粗粒砂で埋まり、左巻き三巴文軒丸瓦6と宝珠文二の鬼瓦の足元破片12が見つかった。6は復元珠文数16個である。

iii)各層出土遺物(図8)

第4層出土遺物

7は直径8.4cm、高さ1.4cmの土師器皿で、底部からやや肥厚した体部が斜め方向に立ち上がる。口縁端部にススが付着する。

第3層出土遺物

8は復元径13.5cm、復元珠文数14個の左巻き三巴文軒丸瓦で、離型剤として細粒砂を用いる。

第2c層出土遺物

9は三葉一点珠の中心飾の左右に唐草2転を配する軒平瓦で、三葉の中心葉は十字を呈し、旧大阪市中央体育館敷地の調査[大阪市文化財協会1992]の3683と同笵の可能性がある。10は復元径14.0cm、復元珠文数11個で、巴頭2個を繋ぐ笵傷をもつ左巻き三巴文鳥衾である。胴部は凹面にコビキB痕跡を見せる丸瓦である。11は復元高32.5cmの宝珠文二の鬼瓦で、板状の母屋は厚さ2.0～2.5cmで、母屋中央をタテの棒状の把手部分を残して直径5.5cmの円形に刳り抜き、半径5.0cmの半球形の宝珠を貼り付け、母屋表面にヘラで火炎を描いたものである。

第2b層出土遺物

軒平瓦13の中心飾は左右葉が外反する三葉で、唐草文は枝が長いものの2転と思われる。14は復元径14.4cm、復元珠文数16個の左巻き三巴文軒丸瓦である。

第4～2b層出土遺物はいずれも豊臣期のものである。

3)まとめ

豊臣後期を中心とする遺構・遺物を検出することができた。北方のOS88－73・07－10次調査に似た状況である。SK101・103は開口していた土採り穴を盛土造成の客土で一気に埋めた可能性が高い。

備前焼や軒瓦・鬼瓦など、豊臣期の遺物や遺構を多く検出できたことで、豊臣氏大坂城惣構の遺構の残存が良好であることが確認され、周囲の調査の進展が大いに期待される。

参考文献

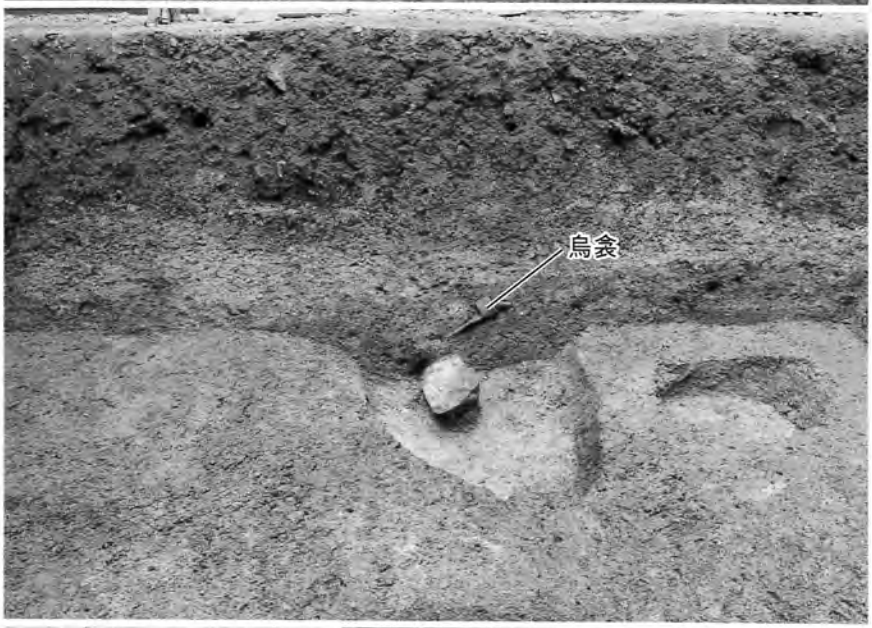
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990、「川端氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS88－73)略報」:『昭和63年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83－91

2008、「大坂城跡発掘調査(OS06－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地

発掘調査報告書(2006)』、pp.97－104
大阪市文化財協会1992、『難波宮址の研究』第九
2003、「OS02－８次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』pp.49－74

第３層上面
（南から）

第３層上面と
西壁地層断面
（東から）



第５層（地山）上面
と東壁地層断面
（西から）

中央区上汐二丁目における建設工事に伴う

上本町遺跡発掘調査(UH11－6)報告書

調査個所	大阪市中央区上汐2丁目2－19
調査面積	36㎡
調査期間	平成23年8月5日～8月9日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、京嶋 覚

1)調査の経過

調査地は上本町遺跡の中央部に当り、近世の平野町を通る熊野街道に面する位置にあり、近接した調査事例は少ないが、北約400mの上汐一丁目一帯では古代から近世の建物が各所で検出されている。

大阪市教育委員会による事前の試掘調査により、現地表から0.8m下で中世～近世の地層や遺構が確認されたため、発掘調査を行うことになった。

調査地内の東側に東西８m、南北4.5mの調査区を設定し、８月５日に重機による表土掘削を行った。現地表から約0.5m下で地山層と思われる地層を確認し、そこで検出された遺構の人力掘削を開始した。９日に遺構掘削および記録作業を完了し、埋戻し作業および重機・機材の撤収作業を行って現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は座標北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTP＋○mと省略した。

2)調査の結果

i)層序(図３・４)

第１層：コンクリートガラや戦災による焼土層などが含まれる近現代の整地層ないし攪乱壙の埋土である。厚さは40～90cmである。

第２層：褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト～細粒砂質シルト層で細礫を含む整地層である。調査区東端のみに遺存し、層厚は最大で20cmである。瓦器の細片を含む。ほとんどの遺構は本層以上から掘り込まれている。後述するSE01埋土上層は本層と類似しており、SE01は第２層より下位の第３層上面

図１　調査地位置図

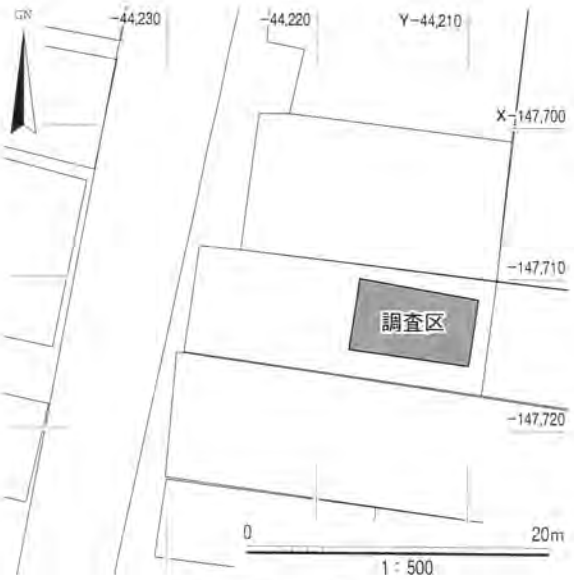


図２　調査区位置図

図3　地層と遺構の関係図

図4　断面実測図

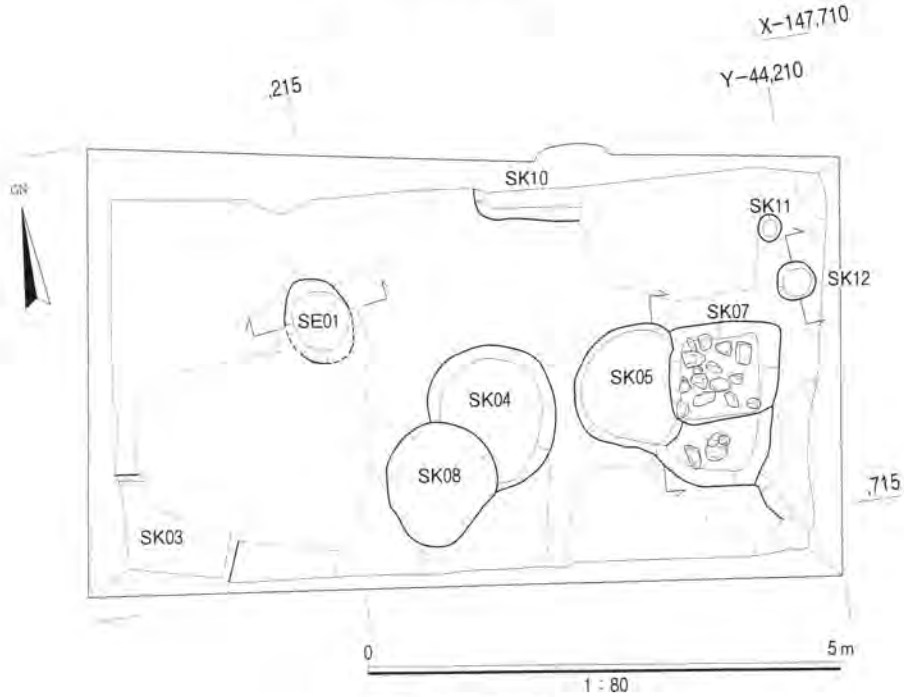


図5　平面実測図

の遺構であろう。

第3層：灰黄褐色(10YR4/2)～明黄褐色(10YR6/8)中粒砂～細礫層の地山層である。

ii)遺構と遺物(図5～8)

調査区西部でSE01を検出した。直径約0.7～0.9mの円形の井戸で、深さは2.4mである。検出面から1.6mまでは第2層堆積物に類似した均質な黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトで埋まっており、それ以下の底面までは黄灰色シルト質細粒～中粒砂が堆積していた。掘形が小さいため図化できなかった

が、底面には直径５cm前後の円礫が敷かれており、その上から土師器羽釜が割れて出土した。底面の水溜に羽釜が使用された可能性がある。

底面付近では須恵器甕１・鉢・壺２、土師器羽釜10、瓦器椀５・６・三足釜９、瓦質土器鍋・甕のほか、単弁軒丸瓦11、凹面に布目、凸面に縄目および格子目の叩きが残る古代の丸・平瓦12～15や離れ砂が見られる中世瓦が出土した。埋土下半からは土師器小皿４、須恵器鉢７・８、瓦器椀、格子叩き目の平瓦片が出土した。上半部でも土師器小皿３・移動式竈、須恵器甕細片、瓦器椀、瓦質土器羽釜が少量出土している。これらの遺物からみて14世紀前半には機能しており、まもなく廃され埋められたと考えられる。

SK05は調査区東部の第２層上面で検出された直径1.3mの円形土壙である。深さは0.3mである。垂直に近く掘られており、底面は平らである。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒～粗粒砂質シルトで、上部にSK07の埋土である黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトが堆積している。土師器焙烙、丹波焼擂鉢16・17、巴文軒丸瓦18・19、平瓦など17世紀中～後葉の遺物が出土した。

SK07はSK05を壊して掘られた一辺約1mの方形土壙である。底部に拳大の礫が集積していた。

SP12は調査区東北隅で検出された直径0.4mの円形ピットである。にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～粗粒砂質シルトの埋土である。深さは0.35mで、土師器羽釜・瓦器椀・備前焼擂鉢・格子叩き目のある平瓦片が出土した。柱痕跡は確認できなかったが、形状から柱穴の可能性も否定できない。

これら以外の遺構は出土遺物から18世紀後半～19世紀のものである。

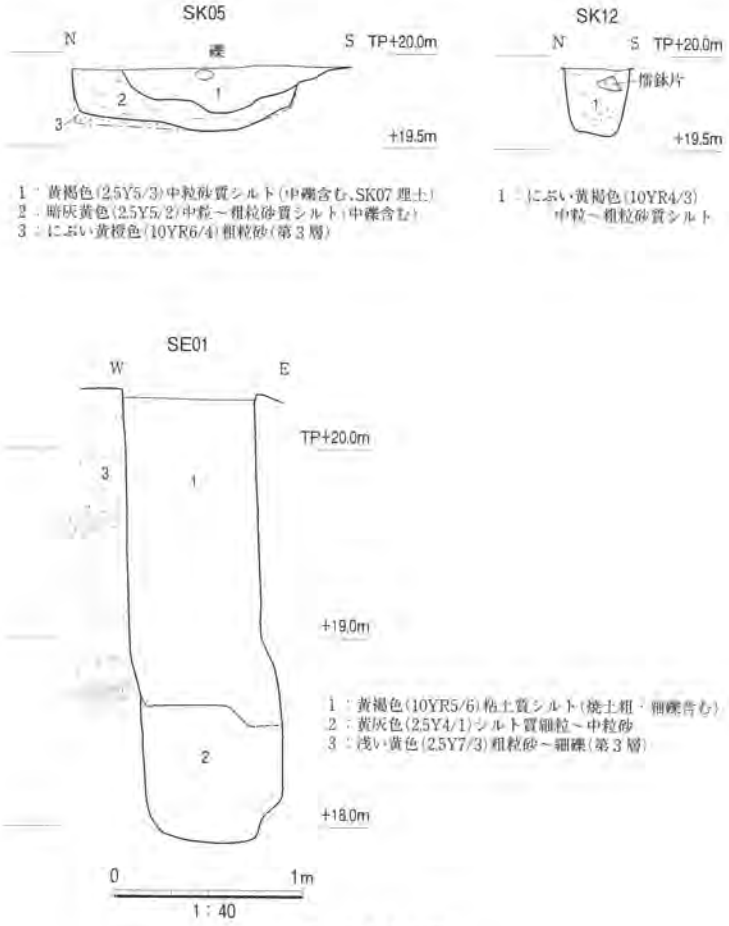


図６　遺構断面図

３)まとめ

今回の調査では、調査区周辺に広く分布する近世の遺構のほか、14世紀前半に埋没した井戸が検出された。敷地西側の熊野街道は平安時代中期以降の熊野信仰による参詣道として栄えたが、庶民の参

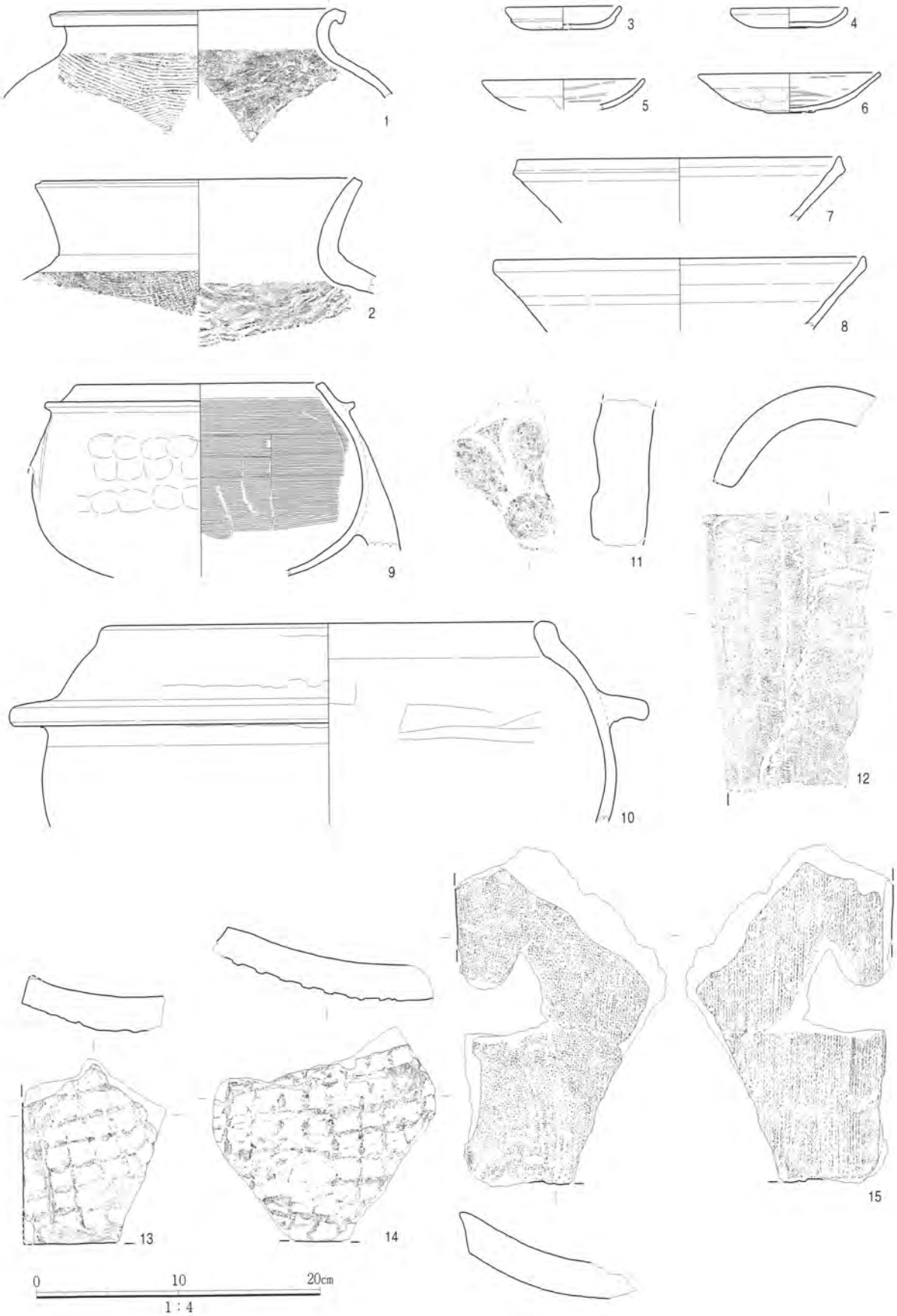


図7　SE01出土遺物実測図

詣が広まったのは室町時代以降、江戸時代にかけてであると言われる。今回の井戸はまさに熊野信仰が庶民階層に普及した時期にあたり、古代～中世の瓦が多く出土する点から熊野参詣に関係する施設があった可能性がある。

熊野街道沿いに置かれた九十九王子社のうち「郡戸王子」が西300mにある高津神社付近と推定されているが根拠はなく、今回の遺構を王子社に関連する遺構とみて、調査地付近に王子社があった可能性も考慮する必要があろう。今後、周辺での調査における検討課題として提起しておきたい。

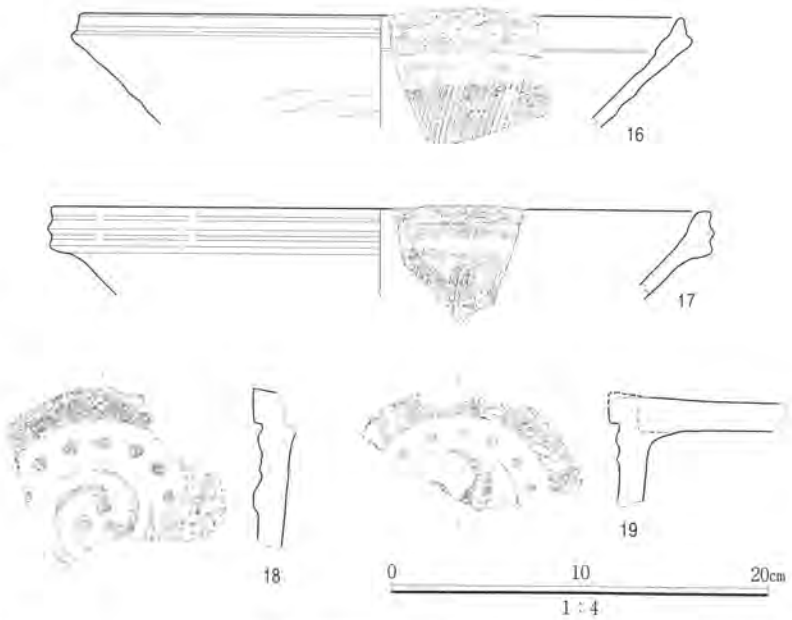


図８　SK05出土遺物実測図

調査区全景
（西から）

SE01断面
（南から）

SE01（北から）

中央区東平一丁目における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH11－9)報告書

調査個所	大阪市中央区東平1丁目2－12・33－1
調査面積	78㎡
調査期間	平成23年8月25日～9月1日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、大庭重信

1）調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の稜線近くに位置しており、古代においては難波京内に位置し、近世には豊臣期大坂城の南端となる惣構堀に近接している。

調査地周辺ではこれまで多くの調査が行われており（図１）、なかでもNW137次、UH94－１・10－１次、UN02－５次の各調査では古代の遺構・遺物が検出されており、周辺には難波宮を前後する時期の遺構が広く分布していることが予想される。特に奈良時代に関しては、今回調査地の東側に位置するNW137次調査地で道路側溝の可能性がある溝が、南西側に位置するUH10－１次調査地では、掘立柱建物や溝が検出されており［大阪市文化財協会1981、大阪文化財研究所2010］、これらの遺構は正方位をとることから、難波京との関わりで注目される。

事前に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、その結果、現地表下100～130cmに中・近世の遺構面の遺存が確認され、調査を実施することとなった。調査個所は試掘結果から遺構の遺存状態が良好であると予想された敷地の北西隅に指定され、敷地内で併行して行われていた工事車両の通路を確保するために当初の予定を縮小し、ここに南北６ｍ、東西13mの調査区を設定した（図２）。

調査は８月25日から開始し、まず現地表下70cmまでの近・現代の地層を重機で除去し、以下を人力で掘り下げ、遺構の検出および記録作業を行った。９月１日には全ての記録作業を終え、機材の撤収を行って現場作業を完了した。

なお、報告で用いた方位および座標は世界測地系に則り、標高はT.P.値（東京湾平均海面値）を用いてTP＋○mと表記した。

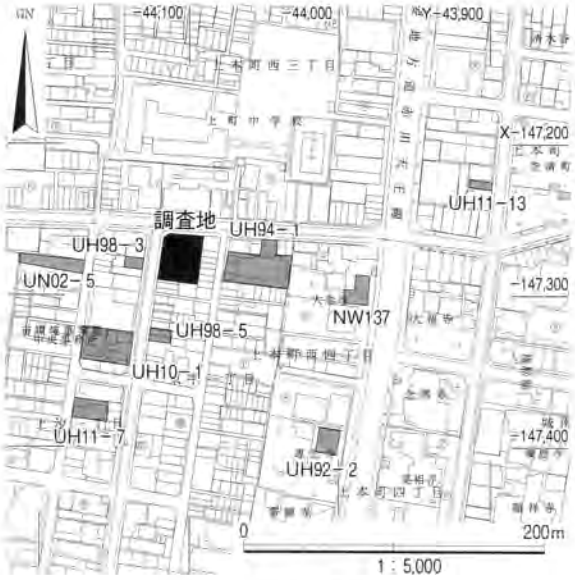


図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

2)調査の結果

i)層序

調査区の層序を第0層～5層に区分した(図3・4)。

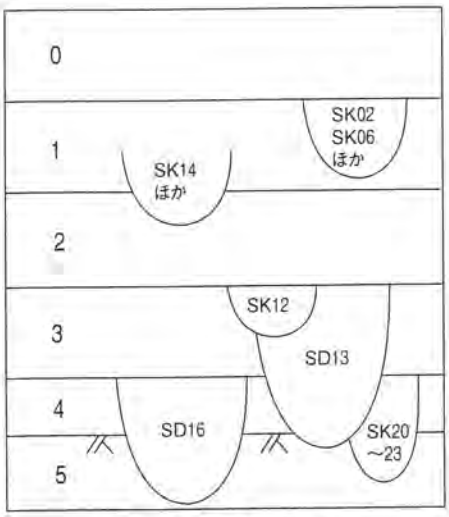


図3　地層と遺構の関係図

第0層：近代以降の整地層で、層厚は70cmあった。

第1層：褐色炭混り砂質シルトからなり、層厚は15cmあった。18・19世紀の土器・陶磁器を含み、本層上面および下面で近世の遺構を検出した。

第2層：地山(第5層)起源の橙色粗粒砂～礫および暗灰褐色砂質シルトの偽礫の互層からなる整地層で、層厚は最大で100cmあった。調査区西半で下位層を大きく削って厚く堆積していた。上下の地層から出土した遺物の年代から、整地の時期は豊臣～徳川期前半と考えられる。

第3層：褐色粘土質シルトからなる古土壌で、炭・土器片を含む。後述する古代のSD16の上半で厚く、層厚は最大で35cmあった。古代～中世の遺物を含み、本層上面で豊臣～徳川初期のSK12、中世のSD13を検出した。

第4層：にぶい黄褐色シルト質細粒砂からなる古土壌で、層厚は5cmあった。本層上面で古代のSD16およびSK20～23を検出した。

第5層：黄褐色礫～礫混り粘土からなる地山で、最上部は粘土であった。

ii)遺構と遺物

第1層下面、第3層上面、第4・5層上面でそれぞれ遺構検出作業を行い、古代・中世・近世の各時期の遺構を検出した(図5)。

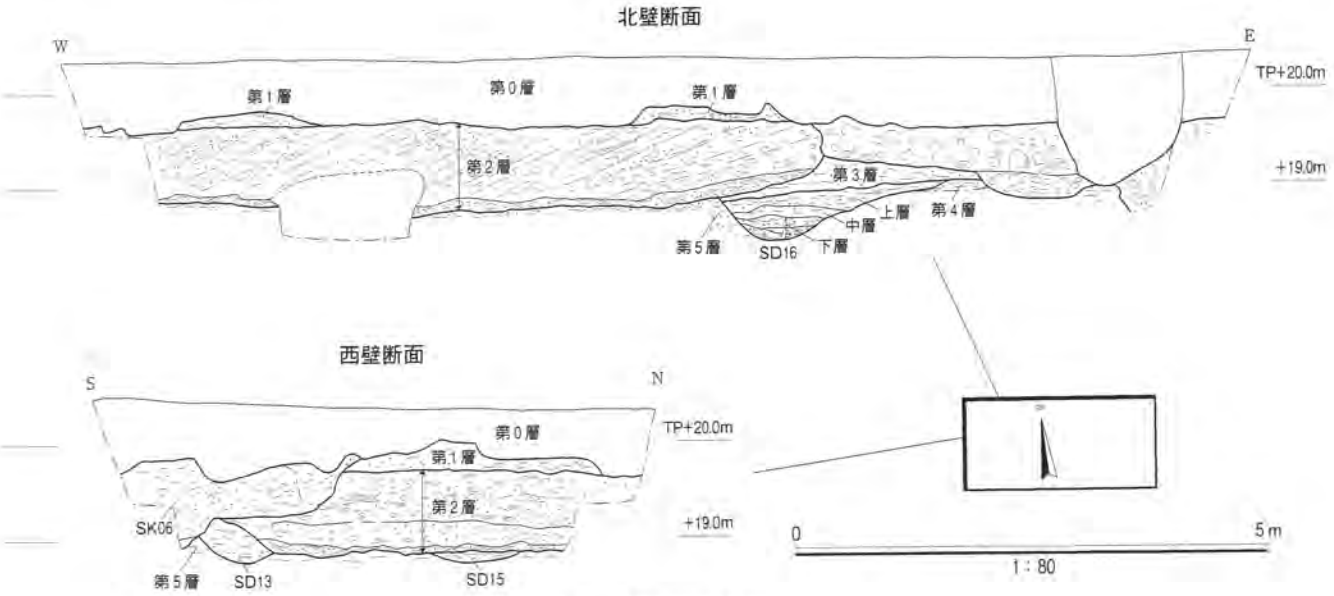


図4　地層断面実測図

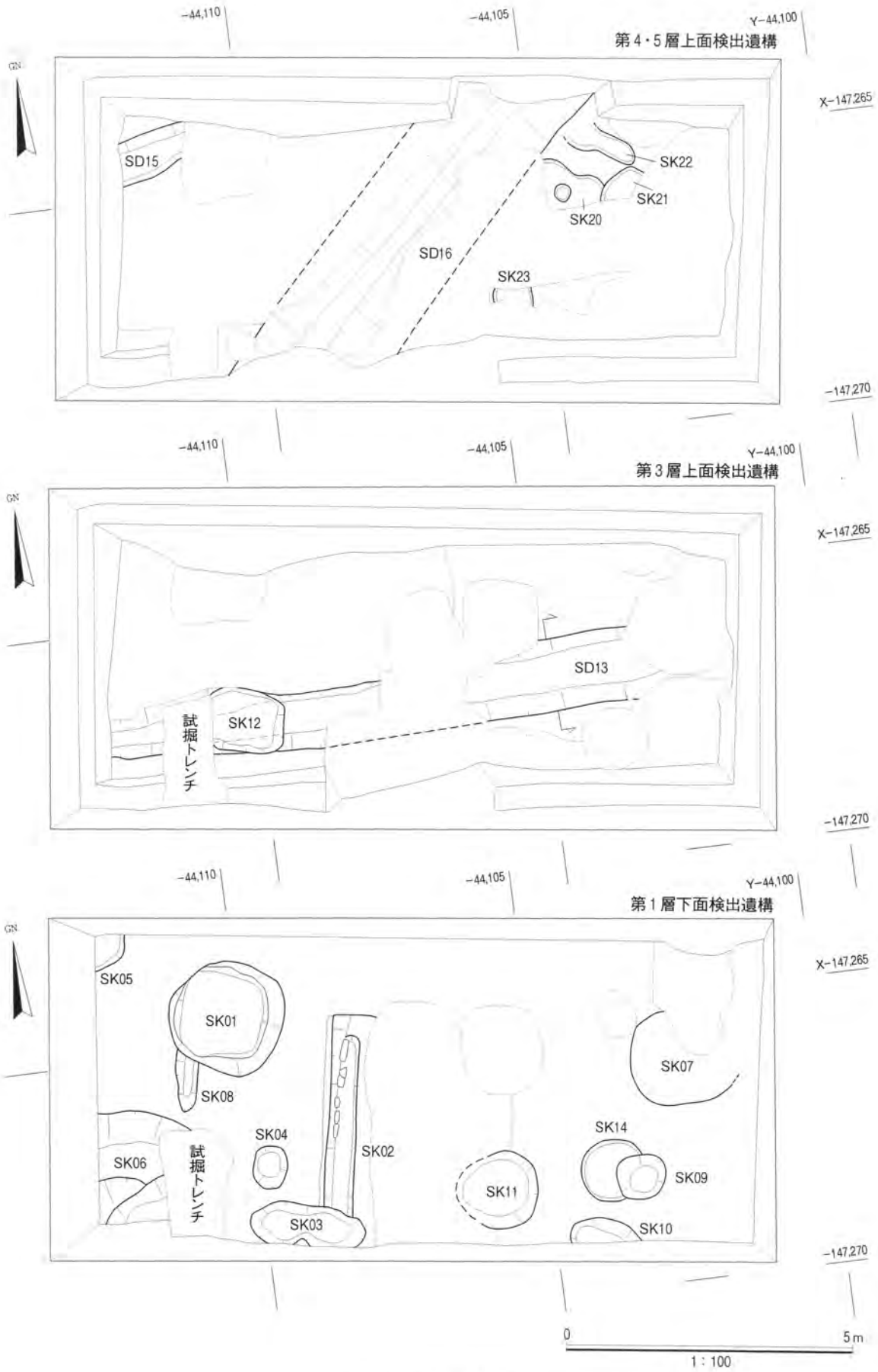

第4・5層上面検出遺構
SD15
SD16
SK20
SK21
SK22
SK23
第3層上面検出遺構
SD13
SK12
試掘トレンチ
第1層下面検出遺構
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SK10
SK11
SK14
試掘トレンチ
-44,110
-44,105
Y-44,100
X-147,265
-147,270
GN
0
5m
1：100

図5　平面図実測図

a．古代

SD15・16、SK20～23を検出した(図５上)。

SD15は、調査区西北隅の第５層上面で検出した東西方向の溝である。遺構の上半は削平を受けており、検出面での幅は0.8m、深さは0.1mであった(図４)。須恵器の小片が出土したことから古代の遺構と判断したが、遺存状態が悪く、詳細は不明である。

SD16は、調査区中央の第４層上面で検出した北東－南西方向の溝である。中央部分が後世に削平されていたが、残存部分から復元すると幅2.0m、深さ0.6mとなる。埋土は大きく３層に区分され、下層はシルト～粗粒砂を主体とした崩落土、中層は滞水域で堆積した粘土質シルト、上層は炭粒を含む砂質シルトからなる暗色帯である(図４)。下層および中層から土師器・須恵器がまとまって出土した。

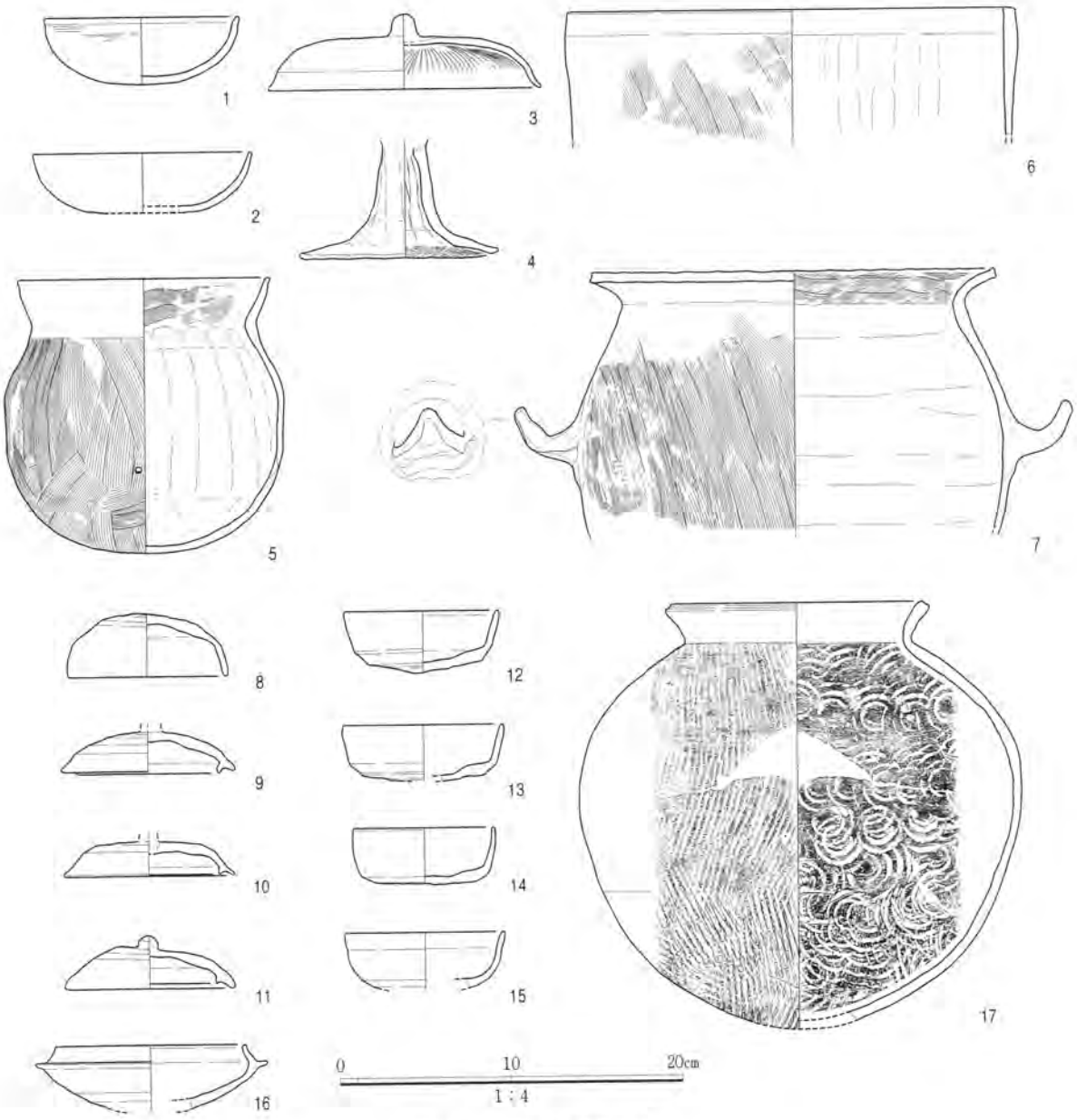


図６　SD16出土遺物実測図

出土遺物は、土師器杯C1・2、蓋3、高杯4、甕5、甑6、鍋7、須恵器杯H蓋8、杯G蓋9～11、杯G身12～15、杯身16、甕17を図化した(図6)。

土師器杯Cは磨滅のため調整が不明であるが、径高指数は1が35、2が27である。3は天井部に乳頭状のつまみをもち、内面には放射状暗文を施している。4は裾部内面に布目の圧痕が残る。5は体部の中央付近に焼成後に小孔を穿っている。須恵器杯は杯Gが大半を占め、口径は蓋が10.0～10.2cm、身が8.2～9.2cmと小型化している。16は有蓋高杯の可能性がある。難波Ⅲ新段階に位置づけられ[佐藤隆2000]、7世紀中～後葉のものであろう。

SK20～23　第4層上面で検出した。いずれも深さが0.1m未満の浅い凹み状の土壙で、土師器・須恵器の細片が出土した。SK21は埋土下半に炭化物を多く含む。

b．中世

第3層上面で正方位の東西溝SD13を検出した(図5中)。規模は幅1.2m、深さ0.5mあり、埋土は3層に大別され、下層が滞水域に堆積したシルトおよび粘土偽礫と粗粒砂からなる崩落土、中層が炭化物や土器・瓦を多く含む暗色化したシルト、上層が砂混りシルトからなる偽礫を多く含む埋戻し土である(図7)。

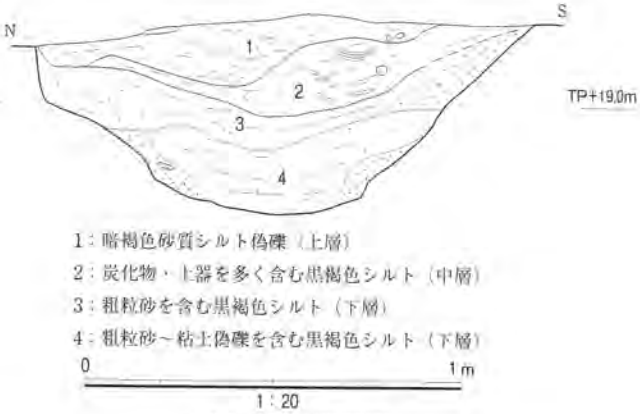


図7　SD13断面図

出土遺物は下層および中層から多く出土し、瓦器椀18～30、皿31・32、土師器皿33～48、羽釜49、東播系須恵器鉢50、中国産白磁碗51・52、壺53、重圏文軒丸瓦54、平瓦55～57を図化した(図8・9)。瓦器椀は口径14.4～15.8cm、器高5.1～5.8cmまでのものがあり、調整は外面が上半を中心にまばらなヘラミガキを施し、内底面は格子状のヘラミガキを主体とし、平行線状のヘラミガキを施す個体もある。29・30は外底面に焼成後に鋭利な工具で同様の線刻を施している。土師器皿は口径9.0cm前後、14.0cm前後の2種類があり、体部に明瞭な稜をもたないものが主体である。瓦器椀は和泉型瓦器椀のⅡ－3期、中国産白磁碗はD期に属し、実年代は12世紀の後半に位置づけられ[中世土器研究会1995]、他の土器も同時期と考えられる。溝の規模や遺物相から、SD13は有力者の屋敷地などの区画溝であった可能性がある。

瓦は重圏文軒丸瓦54のほか、多数出土した平瓦はいずれも内面に布目圧痕があり、外面に縄目タタキ(56・57)や格子目タタキ(55)をもつもので、奈良時代のものと考えられる。遺構の時期を示すものではないが、周辺に奈良時代の瓦葺き建物が存在したことを窺わせる。

c．近世

第3層上面でSK12(図5中)、第1層上面および下面でSK01～11・14を検出した(図5下)。

SK12は平面が南北1.1m、東西1.3m以上の隅丸方形で、深さは0.1m遺存していた。埋土は炭・焼土・スラグを多く含み、羽口および中国産青花・瀬戸美濃焼陶器の小片が出土した。羽口は胎土中に砂礫

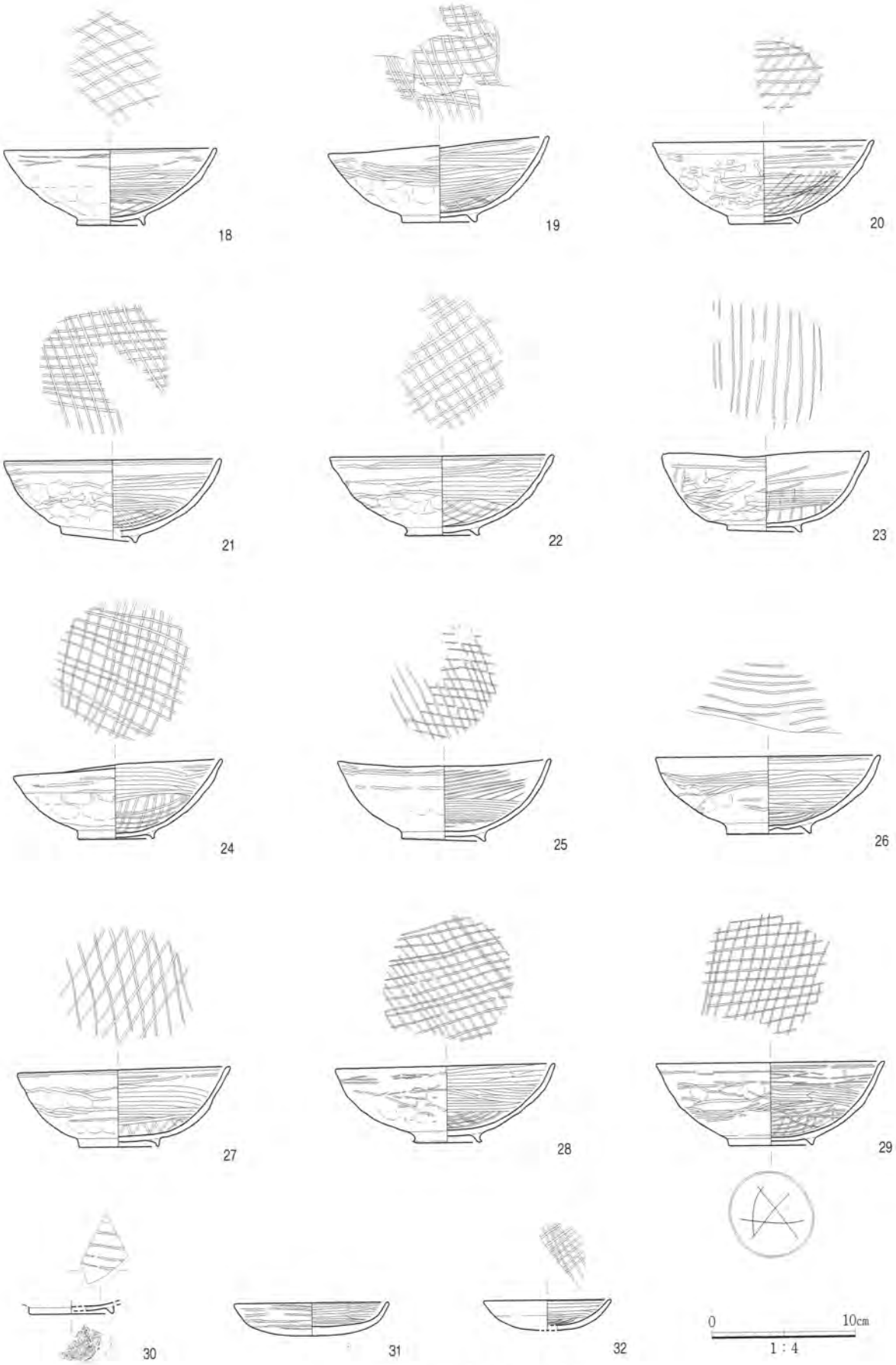


図８　SD13出土遺物実測図（１）

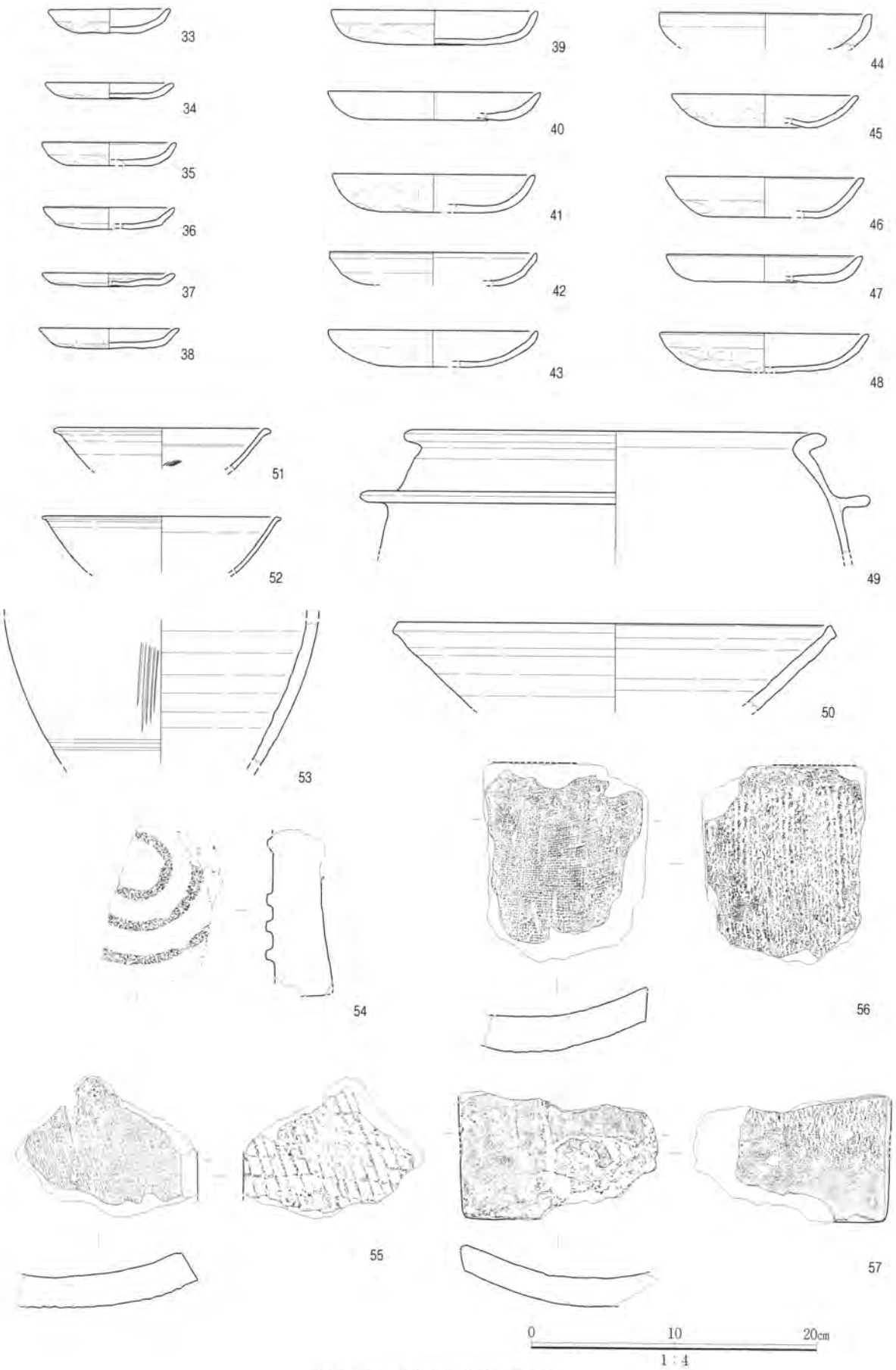


図9　SD13出土遺物実測図（2）

を多く含むことから、徳川期に下る可能性もある。鍛冶作業に伴う廃棄土壙と考えられる。

SK02は東半が近代の攪乱により破壊されており、西辺のみ検出したが、壁面に漆喰を塗った深さ0.8mの方形の竪穴で、穴蔵と考えられる。壁面下端には石列および溝を配していた。19世紀後半代の肥前陶器・肥前磁器・関西系陶器などが出土した。

SK01・07・09・11・14は平面形が円形もしくは隅丸方形の深い竪穴で、完掘できなかったが井戸の可能性がある。SK01・07からは年代のわかる陶磁器類が出土しており、SK01が19世紀前半、SK07が18世紀末～19世紀前半である。

このほか、出土遺物から年代が推定できる遺構は、SK06が18世紀代、SK03が19世紀、SK10が18世紀と、18・19世紀のものが多い。

3）まとめ

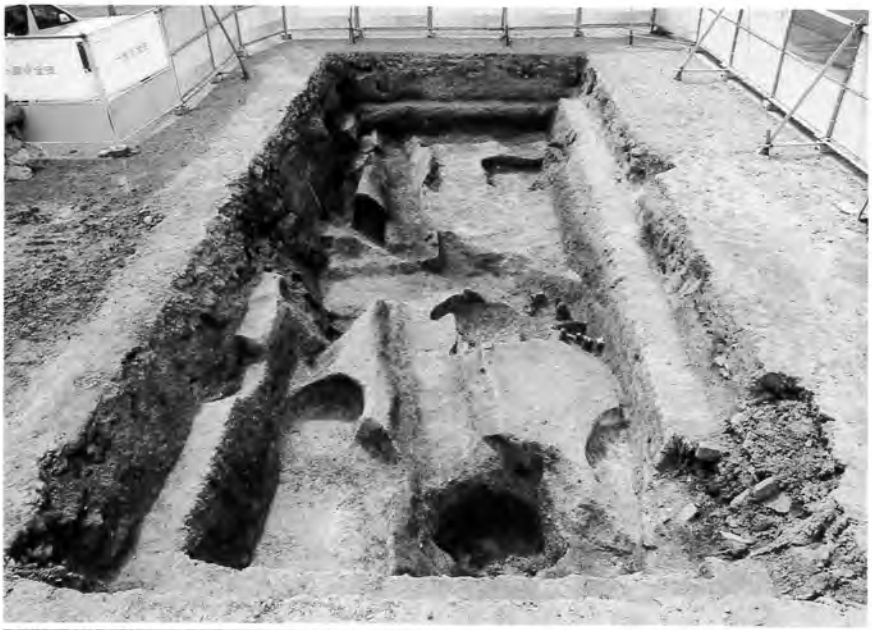
今回の調査では、調査範囲が狭いにもかかわらず、古代～近世の各時期の遺構・遺物が検出され、既存の調査結果と併せて、この地域一帯に濃密な人間活動の痕跡が残されていることが判明した。

特に、難波京の成立と拡がりの歴史的展開を明らかにすることは、本遺跡の最も重要な課題の一つであるが、この点について今回の調査では新たな知見を得ることができた。まず、前期難波宮の時期に併行するSD16が北東－南西方向と正方位をとっていない点である。次いで、12世紀後半の屋敷地の区画溝の可能性があるSD13の方向が正東西である点である。NW137次やUH10－1次調査地では、奈良時代の正方位をとる溝や掘立柱建物が検出されていることから、調査地周辺では飛鳥時代ではなく奈良時代になって正方位地割が成立し、これが中世前半にも踏襲されたことが推測される。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1981、「第137次発掘調査概報」：『難波宮跡研究調査年報』1975～1976.6、pp.118－123
大阪文化財研究所2010、「中央区上汐一丁目における上本町遺跡発掘調査(UH10－1)完了報告
佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：『難波宮址の研究』第十一、pp.253－265
中世土器研究会編1995、『概説 中世の土器・陶磁器』、真陽社、pp.315－337、470－484

遺構完掘状況
（東から）



SD13遺物出土状況
（西から）

SD16（南西から）

天王寺区四天王寺一丁目における建設工事に伴う

上本町遺跡発掘調査(UH11－2)報告書

調査個所	大阪市天王寺区四天王寺1丁目17－5・18－13
調査面積	14㎡
調査期間	平成23年6月21日～6月23日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、京嶋 覚

1)調査の経過

調査地は現在の四天王寺境内の北約150mの地点であり、勝山通りの南に接する敷地である。今回の調査地に隣接するST95－7次・96－7次調査[大阪市文化財協会1998]では中世後期の東西方向の溝が検出され、四天王寺の北限を画するものではないかと考えられている。また、大江小学校敷地内のST88－3次調査[大阪市文化財協会1988]でも中世から近世の遺構・遺物が検出されている。さらに、勝山通りを挟んだ北側では、中世の南北溝が確認されているUS06－2次、UH07－4次・08－10次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008a・2008b・2010]、中世の東西溝が検出されているUS04－1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]などがある。

事前の試掘調査では現地表から1m下で、埋土中に布目のある瓦や土師器片を含む東西方向の溝状遺構の北肩部が確認されており、中世に遡る遺構が存在することが明らかになった。そこで、試掘地点から南側に東西2m、南北7mの調査区を設定し、発掘調査を行うことになった。

6月21日に重機による表土掘削を行い、現地表から約1m下で地山層と思われる地層を確認して、それ以下を人力掘削した。22日に遺構掘削および記録作業を行い、23日には記録作業を完了し、埋戻し作業および機材の撤収作業を行って現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は座標北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。

図1　調査地位置図

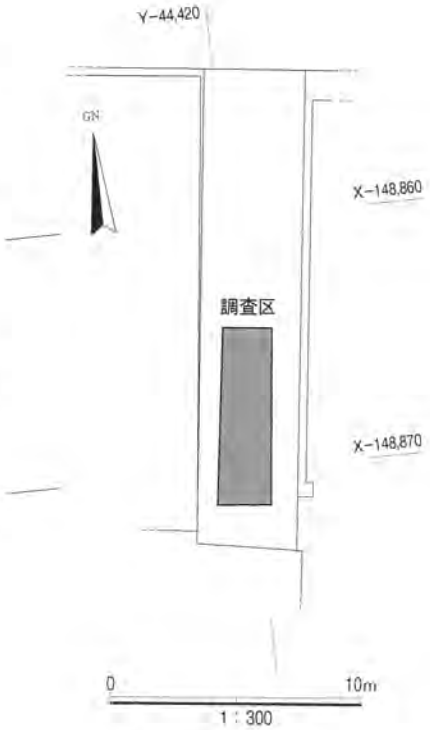


図2　調査区位置図

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

第１層：暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒～粗粒砂質シルト層で、近現代の整地層ないし攪乱壙の埋土である。厚さは60～80cmである。

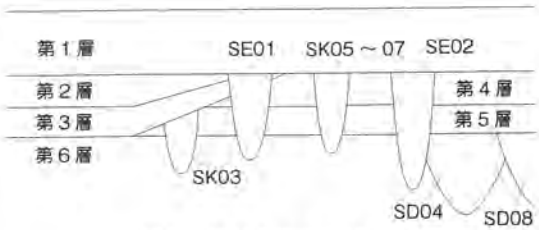


図３　地層と遺構の関係図

第２層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト層で、粗粒砂や細礫を含む整地層である。調査区の南端部の第３層上のみに分布し、古代・中世から豊臣後期の土器・陶磁器のほか、「四天王寺」の文字文軒平瓦６や格子叩き目の残る平瓦７を含む。中世の遺構埋土や包含層を掘削して豊臣後期に整地したものと思われる。層厚は最大で30cmである。

第３層：にぶい黄褐色（10YR5/4）細粒～中粒砂質シルト層である。地山層である第６層の偽礫を多く含む整地層で、調査区南端部のみに分布する。層厚は最大で20cmである。

第４層：にぶい黄褐色（10YR5/3）中粒～粗粒砂質シルト層の作土層である。層厚は15～20cmである。調査区の北半部に分布する。

第５層：黄褐色（2.5Y5/3）シルト質細粒～中粒砂層の作土層である。層厚は最大30cmで、南端を除き調査区全域で確認される。第４・５層からの遺物は土師器、丸・平瓦片が少量あるのみだが、徳川期に下るものは見られない。

第６層：黄褐色（10YR5/8）シルト質中粒～粗粒砂層の地山層である。

ⅱ）遺構と遺物（図５・６）

a．中世～近世の遺構と遺物

第６層上面で東西方向の溝と思われるSD04・08を検出した。SD04は幅2.0mのV字に近い形状で、底部に幅0.3m、深さ0.25mを測る、さらに溝状に掘られた部分がある。検出面から下底までの深さは1.0

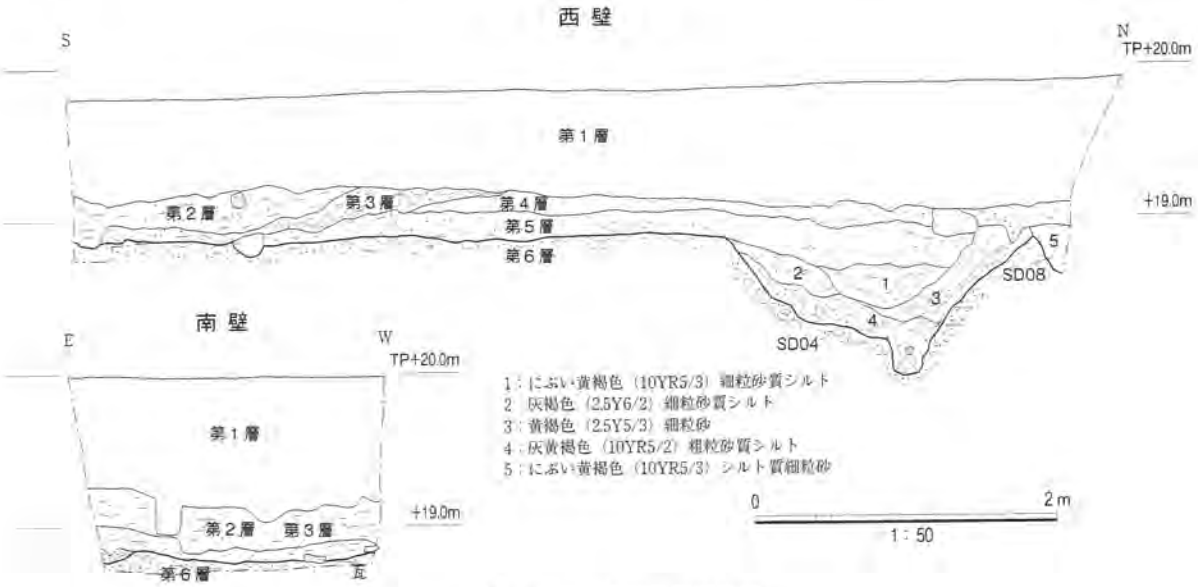


図４　西壁・南壁地層断面図

mである。この底部の溝は調査区西壁面から東に0.9mまでで終っている。埋土は最下部が灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂質シルト、中部が灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質シルト～黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂、上部はにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルトである(図4)。

遺物には土師器小皿1、瀬戸美濃焼天目碗2、中国製白磁皿3、備前焼擂鉢4、瓦質土器鉢、唐草文軒平瓦5、凹面に布目やコビキAが認められる丸瓦、離砂が残る平瓦がある。これらの遺物からみて、溝が最終的に埋没するのは豊臣期である。

SD08は、SD04を切って掘られた東西溝と思われ、調査区北壁際にその南肩部を検出した。試掘時に確認された東西溝の南肩であり、幅は約2mであったと推定される。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂である。出土遺物は無かったが、試掘時に土師器や布目のある平瓦片が出土している。

SD04・08は出土遺物からみて最終的に豊臣期に埋没した溝であり、南に約20m離れたST95－7・96－7次調査などで確認されている東西溝が15～16世紀あるいは豊臣後期とされていることから、これらと同時に存在していた可能性もある。また、推定される古代の条坊ラインに近い位置(図7)にあるが、これまでこの溝の延長線上にあたる地点での調査が行われていないため、どこまでこの溝が続くかは今後の調査を待たなければならない。また、四天王寺周辺で検出されている中世の溝の中で、SD04のように底にさらに溝が掘られた形状の溝は今のところないようであり、時期差や用途の違いを示している可能性がある。

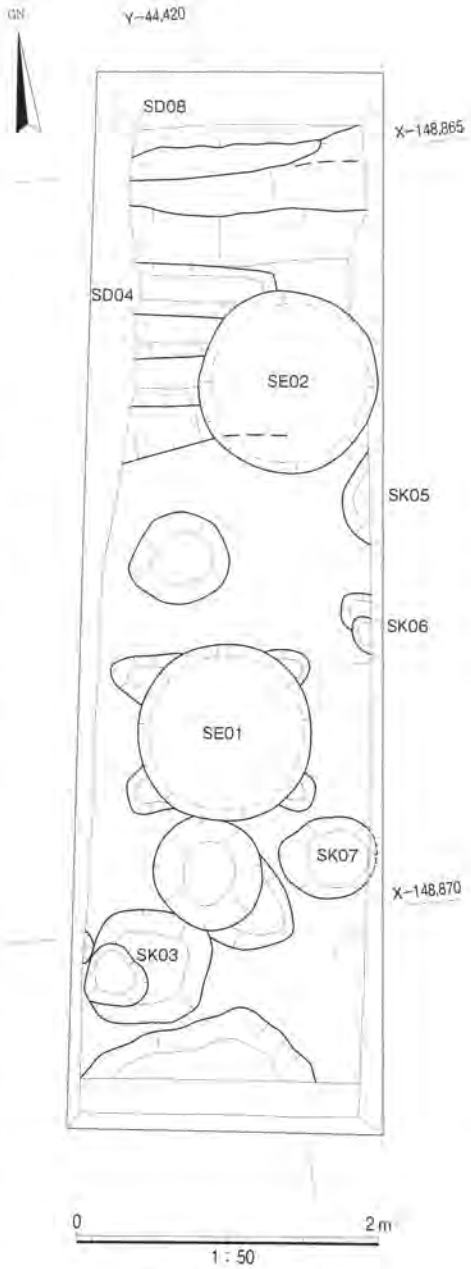


図5　遺構平面図

b．近世の遺構と遺物

第2～4層上面で井戸SE01・02、土壙SK03・05～07を検出した。

SE01は第2層上面から掘られており、徳川期と推定される。SE02はSD04を切る第4層上面からの遺構で、出土遺物に唐草文軒平瓦や丸・平瓦、青花・肥前陶器碗があることから、豊臣後期に比定できる。SK03は第3層直下で検出されており豊臣期の可能性があるが、SK05～07は徳川期の遺物を含むものがあり、徳川期以降であろう。

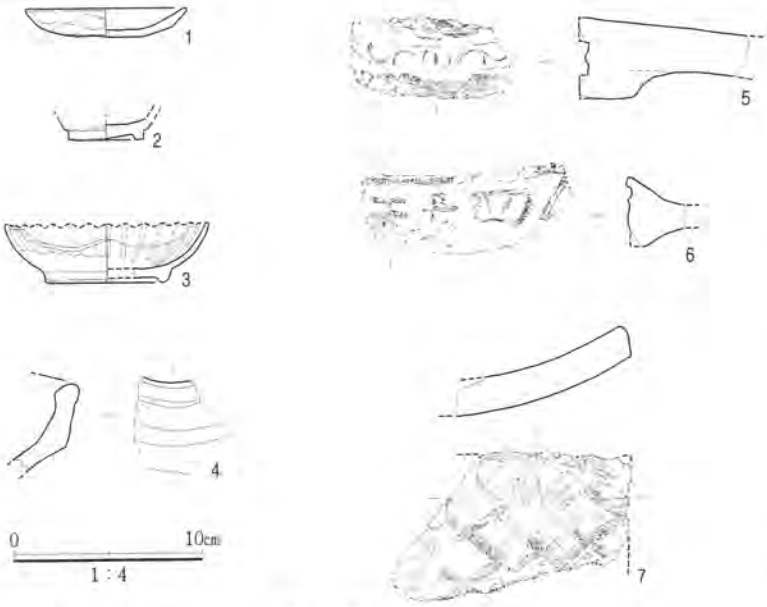


図6　出土遺物実測図
SD04（1～5）、第2層（6・7）

3）まとめ

今回の調査では、狭小な調査範囲であったにも関わらず、豊臣期まで存在した東西方向の2条の溝を検出することができた。これらの溝が何の目的で掘られ、四天王寺北辺においてどのような歴史的意義をもっていたかは、今後の調査成果の蓄積を待って検討するしかないが、調査研究をさらに進展させる資料を提供できたといえよう。

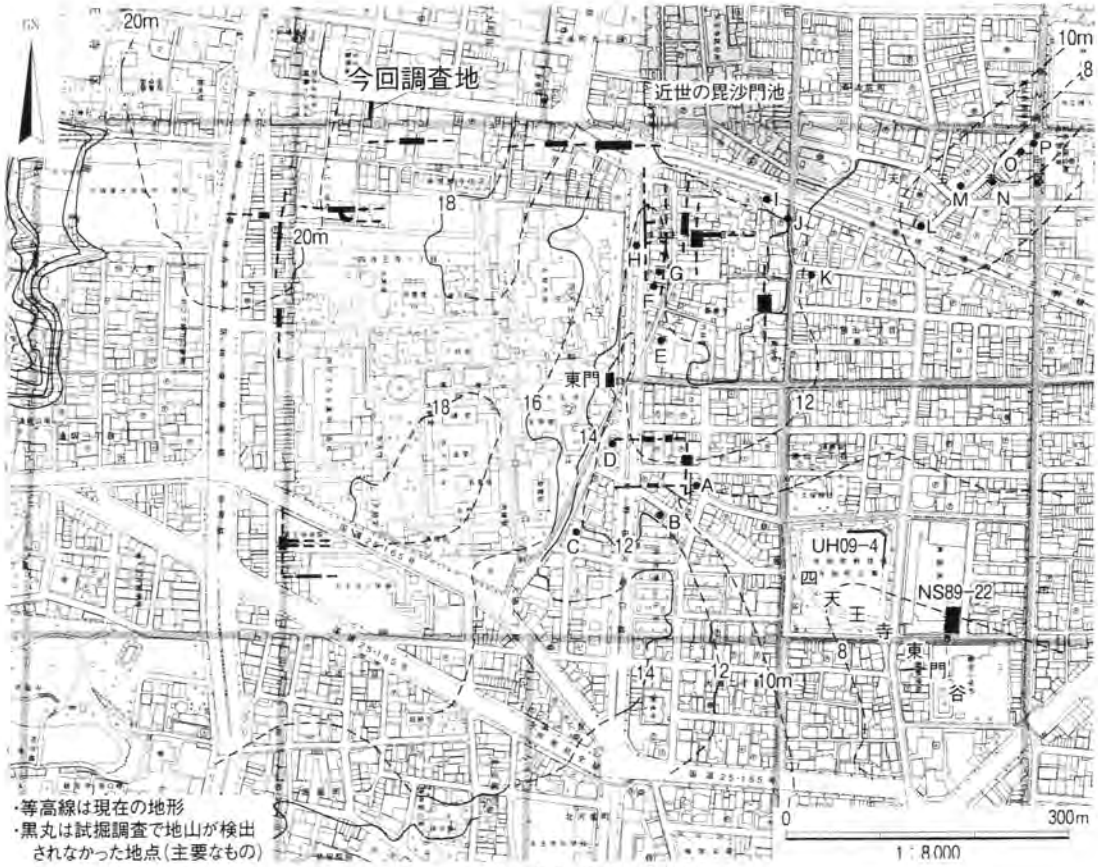


図7　推定される条坊と溝

引用・参考文献

大阪市文化財協会1988、「大阪市立大江小学校々舎建替に伴う四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST88－3)略報

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST96－7)」:『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

2005、「上本町南遺跡発掘調査(US04－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』

2008a、「上本町南遺跡発掘調査(US06－2)」:『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

2008b、「上本町遺跡発掘調査(UH07－4)報告書」:『平成19年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

2010、「上本町遺跡発掘調査(UH08－10)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』

第６層上面全景
（北から）

SE02・SD04・SD08
（東から）

SE02・SD04・SD08
（南東から）

天王寺区上汐三丁目における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH11－11)報告書

調査個所	大阪市天王寺区上汐3丁目6－17・6－30
調査面積	約60㎡
調査期間	平成23年9月7日～9月12日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、上町台地の脊梁部から東縁部にかけて立地する上本町遺跡の中央西端に位置する(図1)。周辺の調査では、北東約80mのUH10－3次調査で18世紀の土採り穴群と東西方向の堀状の遺構が検出された[大阪文化財研究所2011]。その東約100mのUH08－11次調査でも19世紀前半頃の土採り穴群がある[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。UH10－3次調査の土採り穴が不整形であるのに対し、UH08－11次調査のそれは方形あるいは長方形で敷地方向に沿って整然と配列されており、この違いは時期差を反映していると考えられた。

一方、南約80mのUS04－2次調査では、難波京条坊の方向と合致する8世紀前葉の東西溝や掘立柱建物が検出されている。ここでは西日本各地の製塩土器がまとまって出土し、四天王寺北方にあったとされる難波市との関係が推測された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。さらに調査地から南約200mのUS06－1次調査では、少なくとも3時期に及ぶ5棟の8世紀後半～9世紀前半の掘立柱建物が重複して検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。

以上のように、上町台地脊梁部から東側の上汐四丁目・上本町七丁目から四天王寺までの間は、難波市などの難波京関連の遺構が良好に残っており、上汐三丁目・上本町六丁目より北では江戸時代の土採り穴が密集している可能性がある。

本調査は、事前の大阪市教育委員会の試掘調査により、地山上面で中世の可能性のある土壙が観察されたことなどから、敷地東側の東西9m・南北6.5mを対象に実施した(図2)。また、基準点はmagellan社製Pro Mark 3により測位した1点(世界測地系)を既存の地図に合成して座標値および座標北を得た。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

図1　調査地位置図

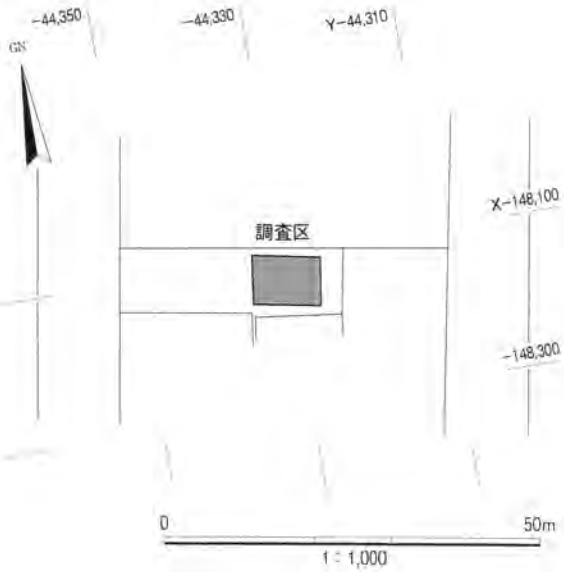


図2　調査区位置図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

厚さ約30～60cmの表土以下に第1～4層があり、第3層以下を人力掘削によって調査した。

第1層：褐色(10YR4/4)中粒砂層で、層厚20～35cmである。近代の畠の作土である。

第2層：第2a層と西南部のみに分布する第2b層からなるが、前後関係はわからない。第2a層は黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂層の盛土で、層厚は15～20cmである。第2b層は暗褐色(10YR3/3)シルト質中粒砂層の盛土で、層厚は8～23cmである。両者は18世紀後半～19世紀と推測される。

第3層：土採り穴群の埋土で、層厚は35～55cmである。3～4に分かれ、西壁では上からにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層、その下が古代の遺物包含層を起源とする褐色シルトなどの偽礫を含む、にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質中粒砂層、最下層が第4層起源の偽礫を含む明黄褐色(10YR6/6)シルト～細粒砂層である。

第4層：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂層で、当地のいわゆる地山である。

ii)遺構と遺物(図4・5)

調査区のほぼ全域を土採り穴が占める。深さはほぼ等しいが、方向はある程度の傾向はあっても一定しておらず、単位も明確でない。この特徴は、UH10－3次調査の18世紀代の土採り穴と似る。底は凹凸があり、掘削具の痕跡が多数残っている。土採り穴の時期は、図5の1の肥前陶器京焼風平碗から、17世紀末～18世紀初めと推定される。江戸時代の土採り穴の中では古い部類に属する。

北西にある方形の遺構には大量の瓦が捨てられていた。穴蔵などを利用して廃棄したもので、ごく新しい時期のものである。土採り穴や攪乱からは、2～4のような古代の須恵器・瓦が出土しており、これらは調査地や周辺にあった遺物包含層に由来する。

3)まとめ

調査区のほぼ全域に17世紀末～18世紀初めに掘られた土採り穴が存在していた。上町台地北部は良好な壁土や陶土の供給地としての土採り穴が多数調査されているが、今回の事例はその中でも古い部類に属する。また、出土遺物から周辺に古代の遺構や遺物包含層が存在したことも推測できる。

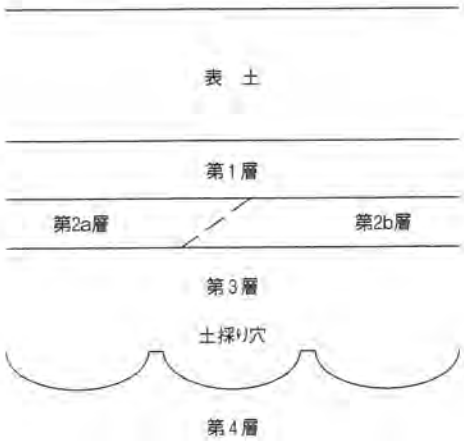


図3　地層と遺構の関係図

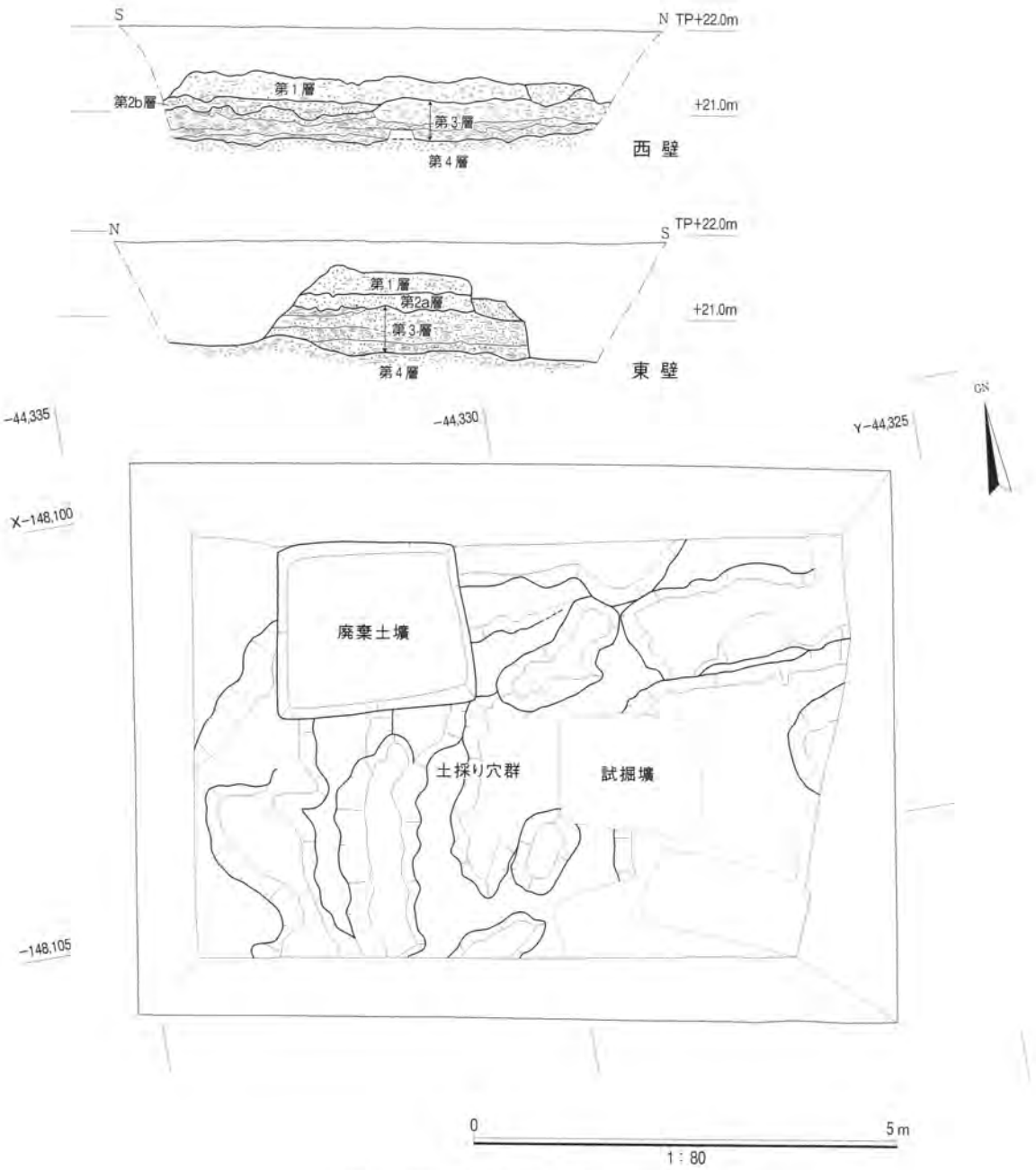


図4　地層断面図および遺構平面図

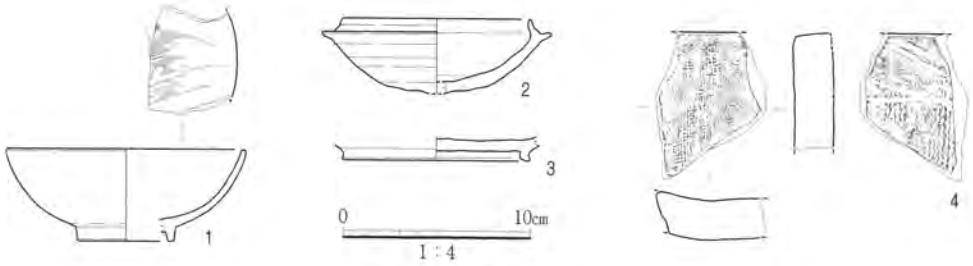


図5　出土遺物実測図

土採り穴（1・3・4）、攪乱（2）

今後は、周辺の時期ごとの遺構の分布状況を把握し、試掘調査の精度を上げることで、より効果的に成果を積上げていかなければならない。

参考・引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「上本町南遺跡発掘調査(US04－2)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.203－210

2008、「上本町南遺跡発掘調査(US06－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.251－259

2010、「天王寺区上本町六丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH08－11)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.379－387

大阪文化財研究所2011、『天王寺区上汐町三丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH10－3)報告書』

遺構検出状況
（西から）

遺構完掘状況
（西から）

土採り穴群の底
（中央は試掘壙
南から）

天王寺区上本町三丁目における建設工事に伴う

上本町遺跡発掘調査(UH11－14)報告書

調査個所	大阪市天王寺区上本町３丁目３－６
調査面積	８㎡
調査期間	平成23年11月７日～11月８日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、大庭重信

1)調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の稜線近くに立地しており、古代においては難波京内に位置し、近世には豊臣期大坂城の南端となる惣構堀に近接している(図1)。

上町筋を挟んだ調査地南西側で行われた調査では、古代から近世にかけての遺構が多く検出されている。これに対し、調査地東側には西南西から東北東へ延びる埋没谷(清水谷)が存在し[高橋工2007]、調査地の位置は谷頭の南肩付近と推定され、現在の東側の道路面も南から北へ傾斜する。

大阪市教育委員会による試掘調査の結果、現地表下約1m下で中世から近世にかけての遺構が確認されたことから、調査を実施することとなった。敷地内西半に南北2m、東西4mの調査区を設定し(図2)、11月7日から調査に着手した。まず、近代の地層を重機で除去し、以下の地層を人力で掘削し、遺構・遺物の検出・記録を行った。翌8日には調査区を埋め戻し、全ての作業を完了した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP+○mと表記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査区の層序を第0層～第3層に区分した。

図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

図3　地層と遺構の関係図

第0層：近・現代の整地層で、層厚は50cmあった。上面の標高はTP＋19.0m前後である。

第1層：18世紀末～19世紀初頭の陶磁器類や瓦を含むSK01の埋土で、地山起源の灰白色シルト質細粒～粗粒砂偽礫や暗褐色細粒砂質シルト偽礫を含む、にぶい黄褐色シルト質砂からなる。層厚は50～70cmあった。

第2層：調査区北東端でわずかに遺存していた整地層で、下半が炭粒を含む褐色細粒～中粒砂、上半が灰黄褐色細粒～中粒砂質シルトからなる。層厚は20cmで、遺物は出土しなかった。

第3層：灰白色粗粒砂～礫質シルトからなる地山層で、最も高い標高はTP＋18.2mであるが、上半は大きく削平されている。

ii)遺構(図4)

地山である第3層上面で、SK01・02を検出した。SK01は調査区全域に及ぶ大型の土壙で、調査区内で北東肩を確認した。深さは最大で70cmある。東側から土砂で埋め戻しており、下半には地山起源の偽礫を多く含む。土採り穴であろう。出土遺物の年代から時期は18世紀末～19世紀初頭と考えられる。

SK02は調査区南東隅で確認した土壙である。SK01と重複し、深さは30cm遺存していた。埋土に偽礫を多く含み、SK01と同様の土採り穴と考えられる。時期はSK01とほぼ同じである。

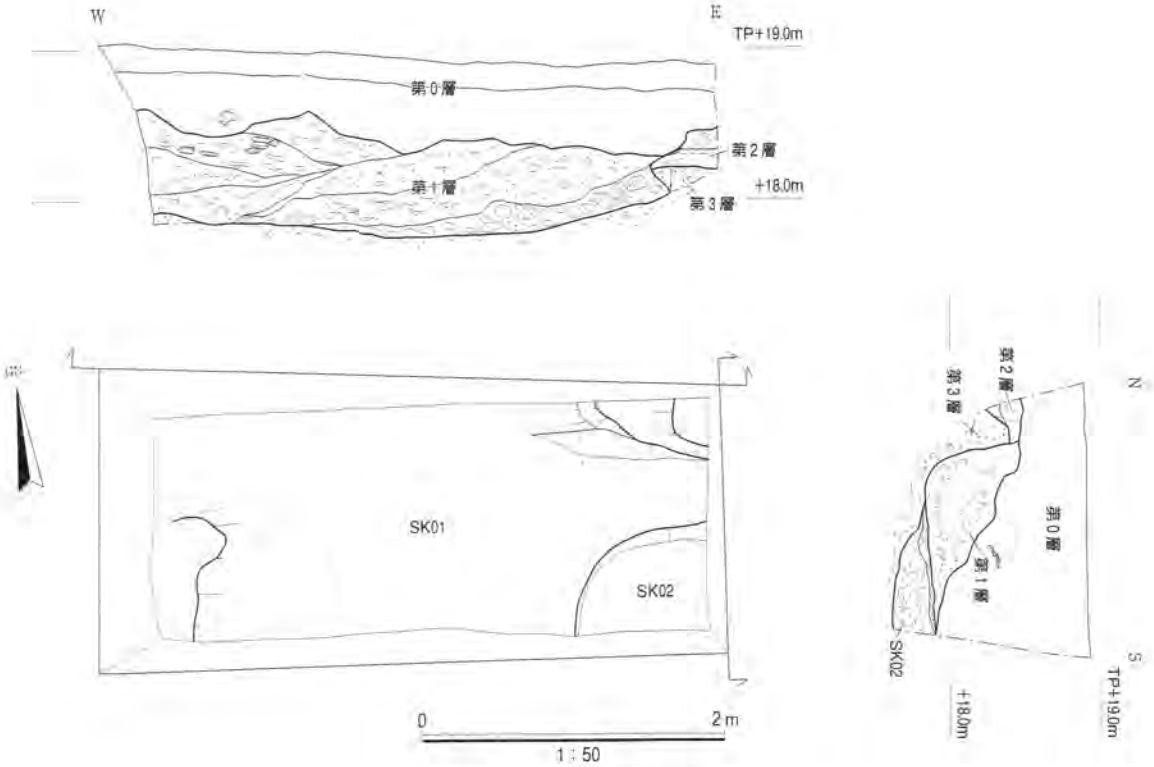


図4　遺構平面・断面図

3）まとめ

調査では、18世紀末～19世紀初頭の土採り穴を検出した。土採り穴は重複しており、周辺には同様の遺構が拡がる可能性が高く、18世紀以前の地層は大きく削平されているものと考えられる。

引用・参考文献

高橋工2007、「細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について」：大阪市文化財協会編『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅱ』、pp.61－68

機械掘削状況
（北西から）

調査区完掘削状況
（西から）

調査区北壁地層断面
（南西から）

旭区新森五丁目における

森小路遺跡発掘調査(MS11－3)報告書

調査個所	大阪市旭区新森5丁目29－2
調査面積	18㎡
調査期間	平成23年7月5日～7月9日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、趙 哲済

1)調査に至る経緯と経過

森小路遺跡は淀川デルタに立地し、弥生時代を中心に繁栄した集落遺跡である。調査地は森小路遺跡の中央に当る新森公園の北東側に位置する(図1)。調査地周辺では多くの周辺調査が行われ、弥生時代中期の土壙や溝などの遺構が多数見つかっているほか、古墳時代の遺構も見つかっている[大阪市文化財協会2001]。

本調査は平成23年6月20日に大阪市教育委員会が当該地で行った試掘調査の結果に基づいて実施されることになったものである。

調査区は敷地の北半部に南北6m・東西3mで設けられ、調査は7月6日から開始した(図2)。近現代整地層を重機によって掘削し、その下位は人力により掘削した。遺構面の精査により、古墳時代と弥生時代の溝・土壙などを検出し、実測図と写真による記録を行った。実働3日間で、7月9日に調査を終了した。調査では方位磁針により北を求めたが、本報告では図1は座標北を、図2・5は磁北を基準に図示した。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと略記した。

なお、出土遺物の記述は調査課学芸員の小田木富慈美が行った。

2)調査の結果

i)層序

調査地の標高は、TP+1.35m前後である。現地表から下位を第0層から第3層に区分した(図3・4)。第0層は現代攪乱層であり、下限は凸凹しており、層厚は10~60cmであった。

図1　調査地位置図

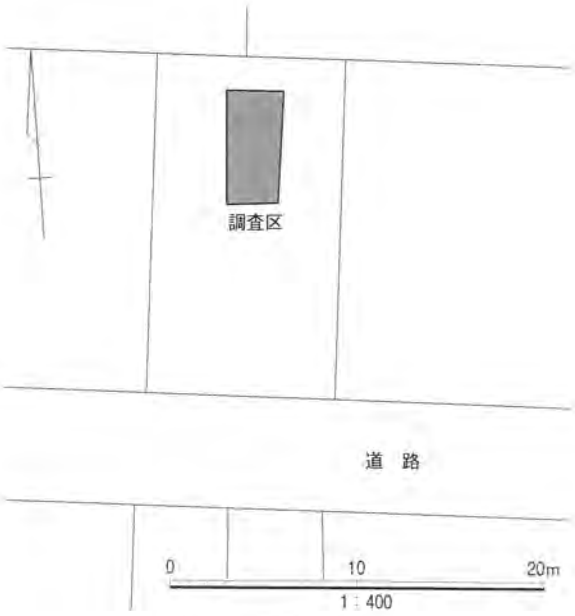


図2　調査区配置図

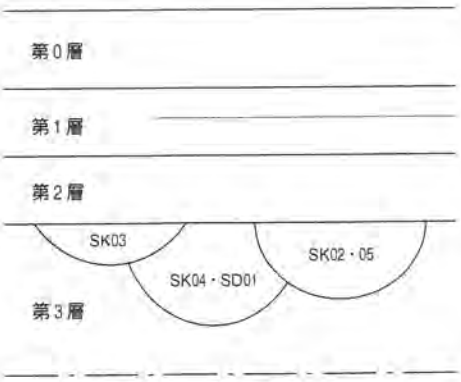


図3　地層と遺構の関係図

第1層は近代の盛土・整地層である。上部・下部に分けられる。上部は黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒～細粒砂からなる整地層(層厚10cm前後)と、下部はにぶい黄色(2.5Y6/3)中粒～細粒中礫サイズの偽礫盛土層(層厚30cm前後)である。偽礫は粗粒～細粒砂質シルトからなり、第3層を母材としている。森小路が区画整理された大正時代の造成であろう。

第2層は近世の作土層である。黄褐色～暗灰黄色(2.5Y5/1～5/2)の粘土からなり、上半部はやや暗く、最上部には層厚0.5cmの腐植質シルト薄層が覆っていた。また、上面から多数の細かな割れ目が認められた。本層から出土した9は肥前陶器皿の底部である。砂目痕が内外面に認められる。17世紀後半頃のものである(図6)。

第3層は氾濫原堆積層である。灰黄色(2.5Y6/2)で、下部は粗粒砂主体、上部では中粒砂主体のシルト質粗粒～細粒砂からなり、シルトも多くなって上方細粒化している。層厚は140cm以上あり、TP−0.82mまで分布を確かめた。上半部は鉛直方向に多数の細い根痕により擾乱されていた。本層の上面で、弥生～古墳時代の遺構を検出した。

ii)遺構と遺物

検出した遺構はいずれも第3層上面の遺構であり、SK04・SD01が弥生時代中期、SK03が古墳時代の遺構である(図5・6)。

SK04は東北東方向に北の肩をもつ土壙か溝であり、東西2.7m以上、南北1.4m以上で、調査区の南側に拡がっている。深さは0.5mである。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)で下部がやや砂質の泥が主体、上部がシルト質細粒砂が主体であるが、全体にコンボルート葉理様の著しい変形が認められる。この変形が人間の踏込みによるものか、地震の揺れによるものかは不明である。この遺構から出土した1～4は弥生土器である(図6)。1は広口壺の口縁部で、端部をやや上方につまむ。内外面にはヘラミガキを施す。2は広口壺の頸部で、口縁部との境に指頭圧痕突帯文を施す。3・4は甕である。3は口縁端部を軽くつまんでおり、4は口縁部を緩やかに外反させる。以上は畿内第Ⅱ様式新段階～Ⅲ様式古段階のものであろう。

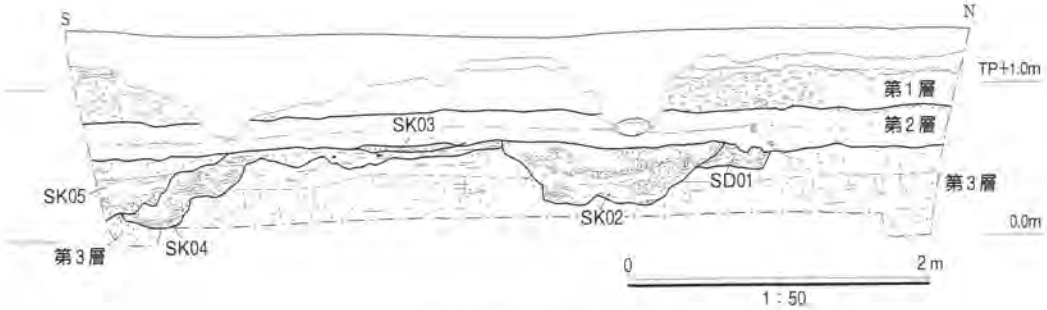


図4　西壁の地層断面図

SD01は東北東－西南西方向に延びる溝である。幅0.8～1.1m、長さ2.9m以上で、断面が逆台形で深さは0.3mである。埋土はSK04の埋土と同様に、灰色粘土と黒灰色粘土が著しく変形していた。少量の弥生土器が出土した。

SK02・05はトレンチの壁面と底で確認した遺構であり、規模の詳細は不明である(図４・５)。SK02はSD01に重なり、SK05はSK04に重なっている。埋土は共に暗灰黄色～黒褐色シルト質細粒砂と泥の互層で成層構造を保っていて変形はみられない。SK04やSD01の埋土変形後に掘り下げられたと考えられる。遺物は見つからなかった。

SK03はSK04に重なる浅く東西に長い窪地であり、幅1.5m、長さ2.6mある。埋土は暗青灰色砂質シルトで炭を含んでいた。２箇所に深さ0.1m余りの浅い凹みがあり、土器片と中粒中礫の花崗岩亜円礫が敷き詰められたかのように、底に密集して分布した。図６の５は土師器甕または甑の体部片である。外面は縦方向のハケ、内面には縦方向の強いナデを施す。古墳時代中期後半～後期のもので、この遺構の時期を示すのであろう。６～８は弥生土器であり、遊離資料である。６・７は壺の体部上半に当る。６は多条の櫛描直線文の間に櫛描波状文、７は多条の櫛

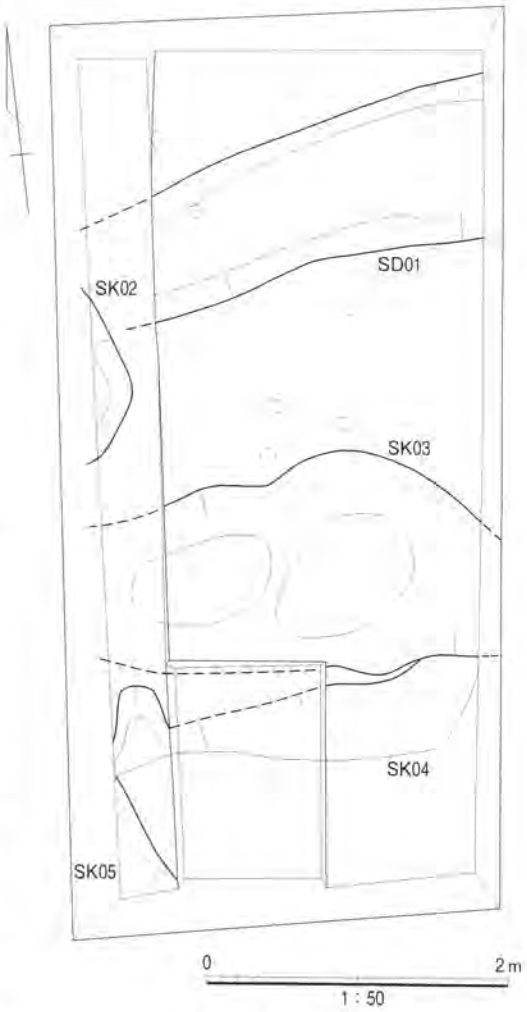


図５　遺構平面図

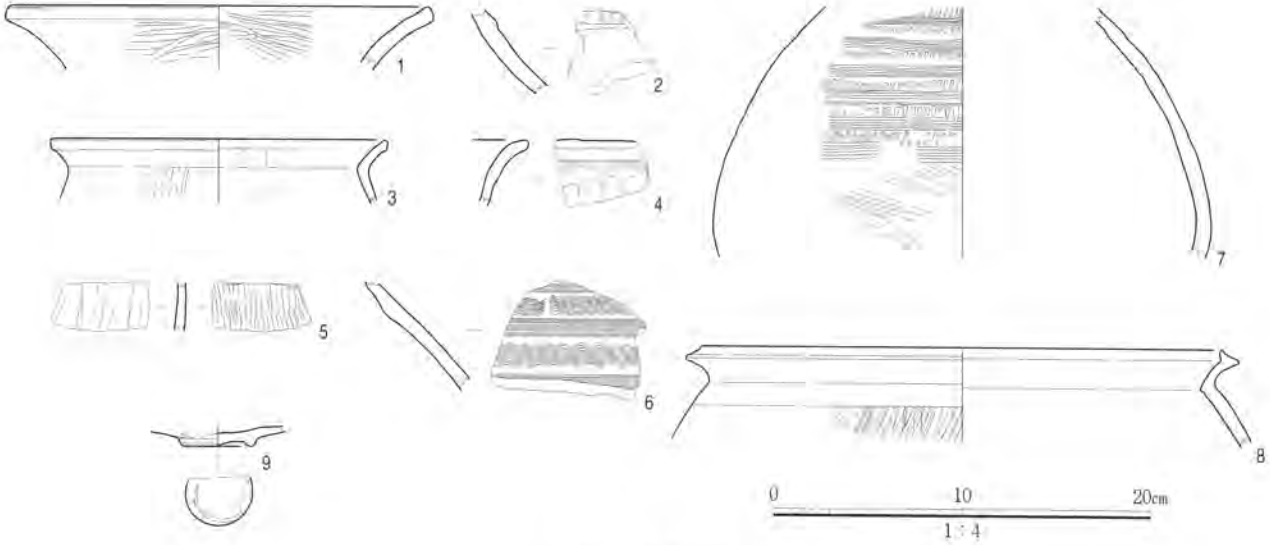


図６　遺物実測図
SK04(１～４)、SK03(５～８)、第２層(９)

描直線文の間にヘラキザミを施している。8は甕の口縁部で、頸部を強く「く」字状に屈曲させ、口縁端部を上方に拡張している。以上の弥生土器は7が畿内第Ⅱ様式で古相を呈するが、ほかはおおむね畿内第Ⅳ様式のものであろう(図6)。

3)まとめ

森小路遺跡の中央東寄りの敷地で調査を行い、弥生時代中期の遺構とこれに重なる遺構、および古墳時代の遺構を検出した。その中で弥生時代中期の遺構埋土には変形が認められ、これに重なる遺構には埋土変形が認められなかった。今後、古地震との関係が課題として浮かび上がってくる。

文献

大阪市文化財協会2001、『大阪市旭区森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ、221ps.

調査区全景
（第３層上面：南から）

地層断面
（西壁）

SK03遺物出土状況
（第３層上面：東から）

旭区新森四丁目における建設工事に伴う
森小路遺跡発掘調査(MS11－5)報告書

調査個所	大阪市旭区新森４丁目65－４の一部
調査面積	30㎡
調査期間	平成23年７月14日～７月16日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、京嶋 覚、清水和明

1）調査の経過

調査地は弥生時代から古墳時代の集落跡である森小路遺跡の南端部に位置する。今回の調査地の北では弥生時代の住居や墳墓などが発見されているが、南側に近接するMS10－１次調査[大阪文化財研究所2010]では中・近世の作土層や土採り穴などが検出されている。

事前の試掘調査では現地表から0.5m下で、遺物を含む地層が存在することが明らかになった。そこで、敷地内に東西10m、南北３mの調査区を設定し、発掘調査を行うことになった。

７月14日に重機による表土掘削を行い、後述の第３層の上部まで掘削した。その後、それ以下の地層と遺構を人力掘削した。翌15日には遺構掘削および記録作業をほぼ完了し、16日に埋戻し作業および機材の撤収作業を行って現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は図１が座標北を、図２・５は磁北を基準にし、水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）で、図中ではTP+○と省略した。

2）調査の結果

ｉ）層序（図３・４）

第１層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質中粒～粗粒砂層で、近現代の整地層ないし攪乱壙の埋土である。層厚は20～50cmである。

第２層：黒褐色（10YR3/2）シルト～粘土質シルト層で、中粒～粗粒砂を含む作土層である。層厚は最大で10～15cmである。

第３層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト質粘土層の作土層である。層厚は15～20cmである。本層下面

図１　調査地位置図

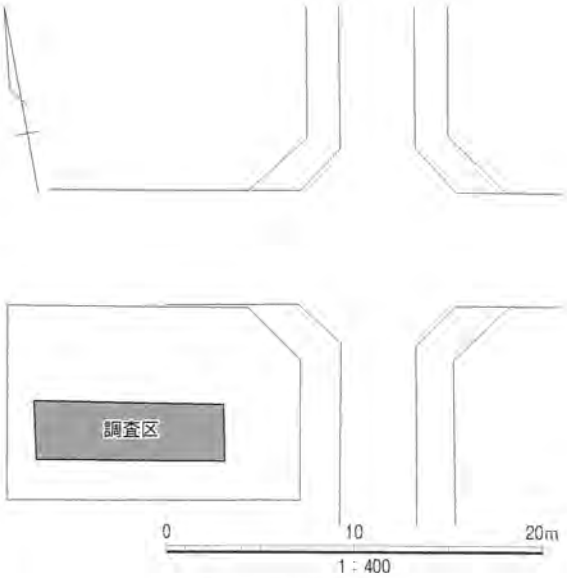


図２　調査区位置図

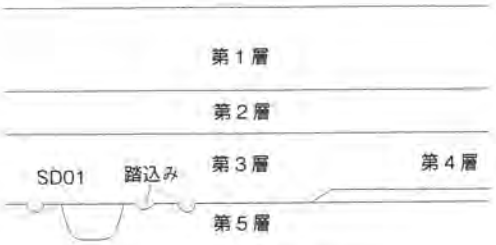


図３　地層と遺構の関係図

では、調査区南側に東西方向に窪みが並んで分布していた。出土遺物には奈良時代の須恵器杯や中世の瓦器椀などの細片が含まれるが、肥前陶磁器など18世紀以降の遺物も出土した。

第４層：黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂層である。層厚は最大で５cmほどで、調査区の北西端のみに分布する。遺物は出土しなかった。

第５層：にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂層で、上面に鉄酸化物の沈着が見られる水成層である。層厚は30cm以上である。遺物は出土せず、この地域の地山層とされる砂層と思われる。本層上面でSD01を検出した。

ⅱ)遺構と遺物(図５)

SD01は幅1.0m、深さ0.2mの南北溝である。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土である。少量の遺物が出土したが、肥前磁器染付片が含まれることから、徳川期の遺構である。第３層の段階では

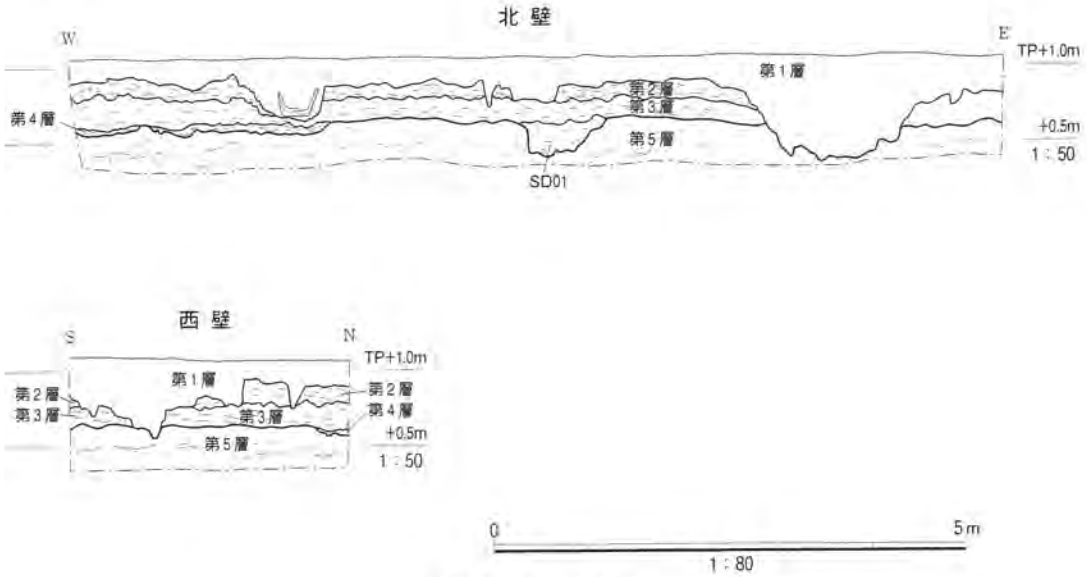


図４　断面実測図

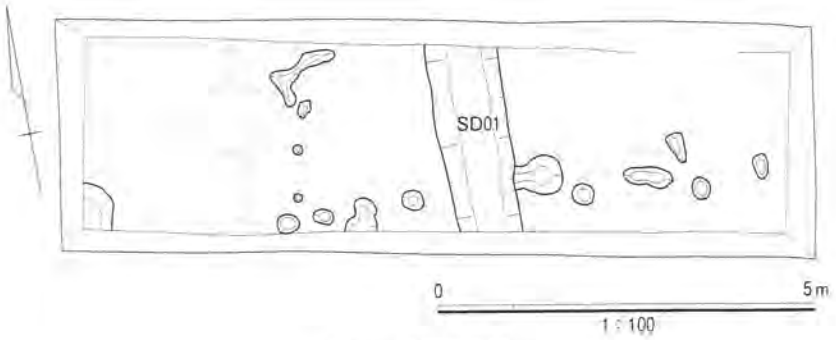


図５　平面実測図

すでに埋没しており、水が流れた痕跡も明瞭でないため、用途は不明である。

また、第３層下面の小さな窪みが、第５層上面で検出された。SD01と直角に交差して東西方向に並ぶように分布しており、第３層の作土の耕作時にできた踏込みなどの圧痕の可能性がある。

３）まとめ

今回の調査では、徳川期の作土層と用途不明のSD01を検出した。この溝は北で東に振る現在の街区と異なる方位をとっており、周辺地域における近世以前の地割の一端を示しているといえよう。今後、当該地域の歴史解明の作業において活用される資料となろう。

引用・参考文献

大阪文化財研究所2010、「旭区新森四丁目における森小路遺跡発掘調査（MS10－１）完了報告」

第５層上面SD01・
踏込み状遺構検出状況
（東から）

第５層上面完掘状況
（西から）

SD01（南から）

旭区清水二丁目における建設工事に伴う
森小路遺跡調査(MS11－8)報告書

調査個所	大阪市旭区清水2丁目8－1・8－8・8－9
調査面積	15㎡
調査期間	平成24年2月24日～2月28日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、高橋 工

1）調査に至る経緯と経過

森小路遺跡は、淀川左岸の沖積平野にあって、淀川の流れに沿って形成された自然堤防上に立地する。弥生～古墳時代の複合遺跡とされるが、発見される遺構・遺物の年代を詳しくみると弥生時代中期と古墳時代中期に中心がある。調査地は遺跡の北端部に近く、近隣でもいくつかの調査が行われている（図１）。調査地の南約30mの東西道路はその整備の際にMS90－25次調査が行われ、弥生土器（畿内第Ⅱ～Ⅳ様式）と５世紀末と７世紀前半の遺物が出土した［大阪市文化財協会2001a］。東約70mの南北道路の整備に伴うMS88－12次調査でも弥生時代中期の土器と石庖丁・尖頭器、古墳時代中期の遺物が出土している［大阪市文化財協会2001b］。また、南約60mのMS10－２次調査では弥生時代中期の土壙群、その東のMS89－41では弥生時代中期の土壙や小穴群が検出されている［大阪文化財研究所2011、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991］。

当該地においては、住宅建築工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下0.25mで弥生時代の遺物包含層が発見され、本調査が行われることとなった。調査範囲は、建築範囲内に東西３m、南北５mのトレンチを設けることとし、近世の地層までを重機を用いて掘削し、その後は人力によって掘削・遺構検出・遺構掘削を行った。途中、適宜に実測、写真撮影によって記録を作成した。本報告書で用いた水準値はT.P.値で、図中ではTPと省略した。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

図１　調査地位置図

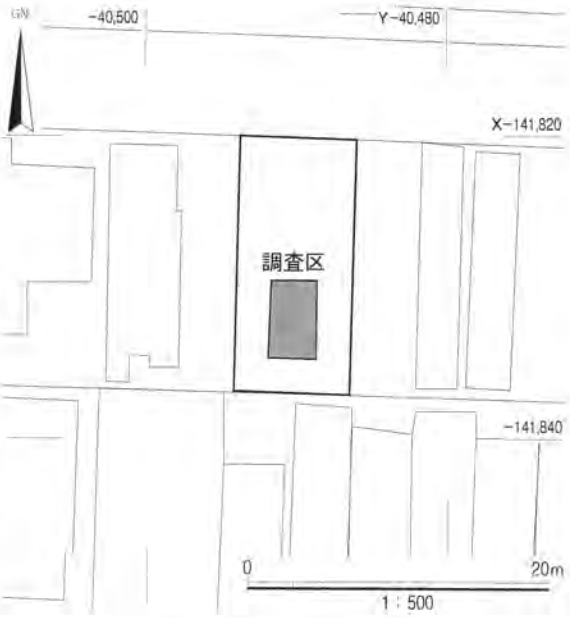


図２　調査区位置図

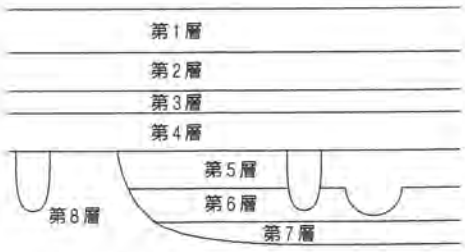


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序

現代の整地層以下に8層を確認した(図3・4)。

第1層：灰褐色細礫～粗粒砂からなる現代の整地層で、層厚は20cmである。

第2層：にぶい黄褐色中粒砂質シルトからなる作土層で、上面は削剥をうけており、層厚は最大で15cmである。遺物は出土せず、詳細な時期は不明であるが、岩相から判断して近世～近代の作土と思われる。

第3層：黄褐色極細粒砂からなる作土層で、上面は削剥をうけてごく部分的に遺存するだけで、層厚は最大で5cmである。瓦器の細片が出土し、中世の作土である。

第4層：黒褐色シルトからなる客土層で、層厚は15cmである。調査区全域に分布し、平坦面を造成しようとしたものとみられた。下位層に起源する弥生土器に混じって古式土師器布留式の甕1(図5)が出土したので、古墳時代前期の地層である。

第5層：黒色細粒砂質シルトからなる客土層で、層厚は20cmである。第8(地山)層を掘り込んだ南西への落込みを埋めた際の客土層で、畿内第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器が出土し、時期は弥生中期後葉に属する。

第6層：黒褐色粘土からなる自然堆積層で、層厚は15cmである。先述の落込み内に堆積しており、畿内第Ⅱ様式の弥生土器(図5の13)が出土し、時期は弥生時代中期前葉に属する。

第7層：地山偽礫を含む灰黄褐色シルトからなり、層厚は5cmである。落込みの加工時形成層で、遺物は出土しなかった。

第8層：黄褐色粘土質シルト～細粒砂からなり、層厚は20cm以上である。上方に細粒化する河成堆積層で、淀川デルタを構成する地層であろう。以下に述べる遺構は本層の上面で検出した。

ii)遺構と遺物

落込み　調査区の南西部は第8層上面が擂鉢状に徐々に深くなっており、南西隅部で深さ約0.2mの落込みになる。加工時形成層とみられる第7層が存在し、基底の層界も明瞭であることから、人為的に掘られたものと判断した。第6層は本遺構内に自然堆積しており、弥生土器畿内第Ⅱ様式の甕13(図5)が出土した。

SX2　調査区の南西部、落込み下面で検出した土壙で、東西0.9m以上、南北2.2m以上、深さ0.2mであった。黒褐色粘土(第6層)が自然堆積しており、畿内第Ⅱ様式の甕14(図5)が出土した。

SK4　SK4は東西0.70m、南北1.10m、深さ0.15mの土壙で、地山偽礫を含む黒色シルト(第5層)で人為的に埋められていた。同様な形状・埋土の状況を示す遺構としてSX6・7がある。いずれも畿内第Ⅳ様式の時期の遺構である。

SK5　SK4・6の間にある土壙で、東西1.5m、南北0.7m、深さ0.3mを測る。埋土の下半部は黒褐色粘土が自然堆積し、上半部は黒色シルト(第5層)で埋められていた。上半部から畿内第Ⅳ様式の甕15が出土した。

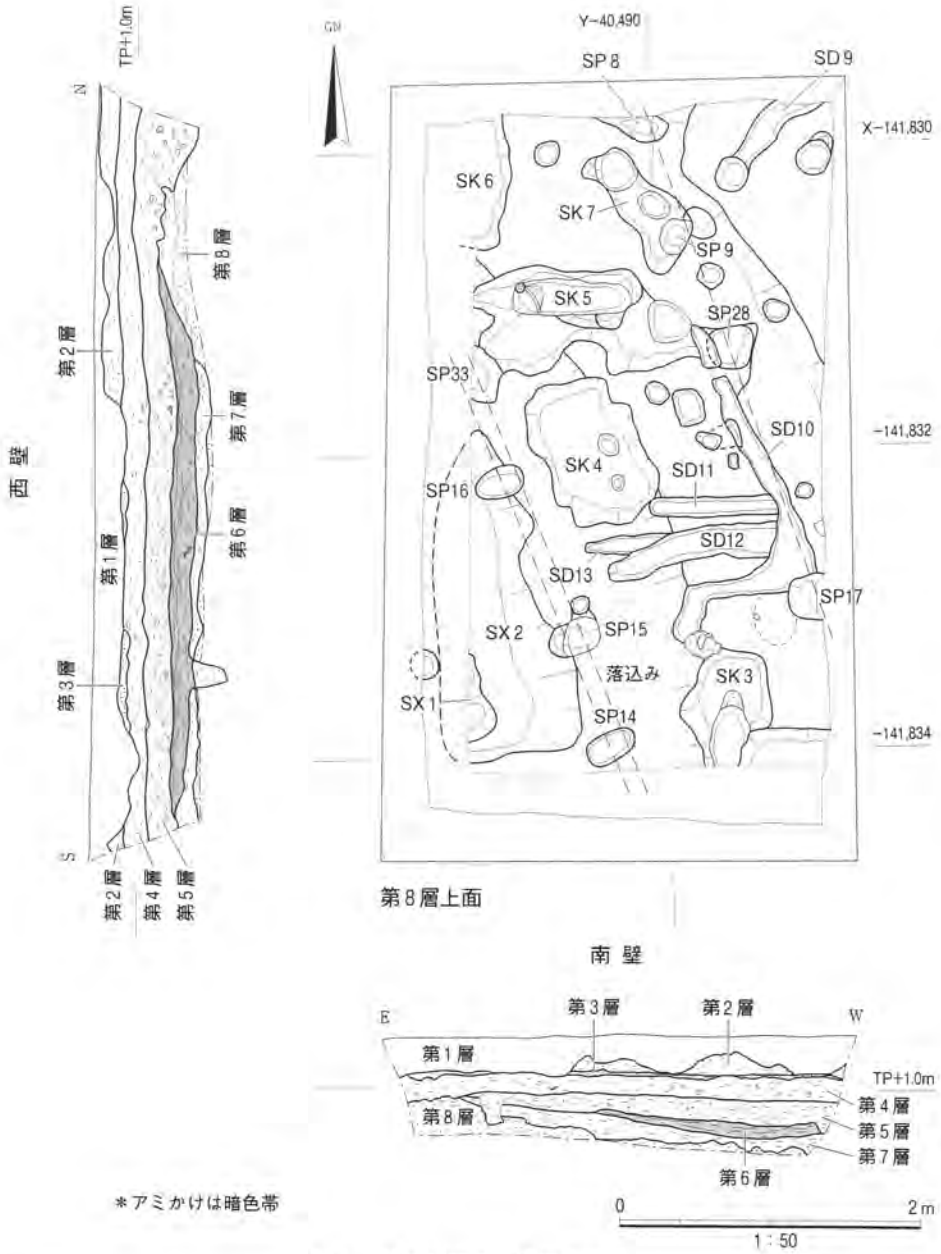


図4　地層断面図・遺構平面図

SD10　調査区東部で検出した溝で、L字に屈曲し、幅0.15m、深さ0.05mである。黒色シルトが自然堆積していた。後述する柱筋の方向に沿っており、建物に関係する溝かもしれない。本遺構に切られてSD11～13があるが、規模・埋土ともにSD10に似る。これらの溝からは弥生土器の細片が出土した。

柱穴・小穴　以上の遺構のほかに約20個の小穴が検出された。いずれも径0.3cm以下で、深さも0.1～0.3mほどであった。SP9は柱の一部が遺存していた。また、SP8－SP28－SP17、SP15－SP33、そしてSP14－SP16は2m弱の間隔とN10°Wの方位をもって規則的に並んでおり、掘立柱建物や柵などの建築物を構成する可能性があるが、調査範囲の中では明らかにすることはできなかった。これらの遺構からも弥生土器の細片が出土し、他の遺構と同様に弥生時代中期に属するものであろう。

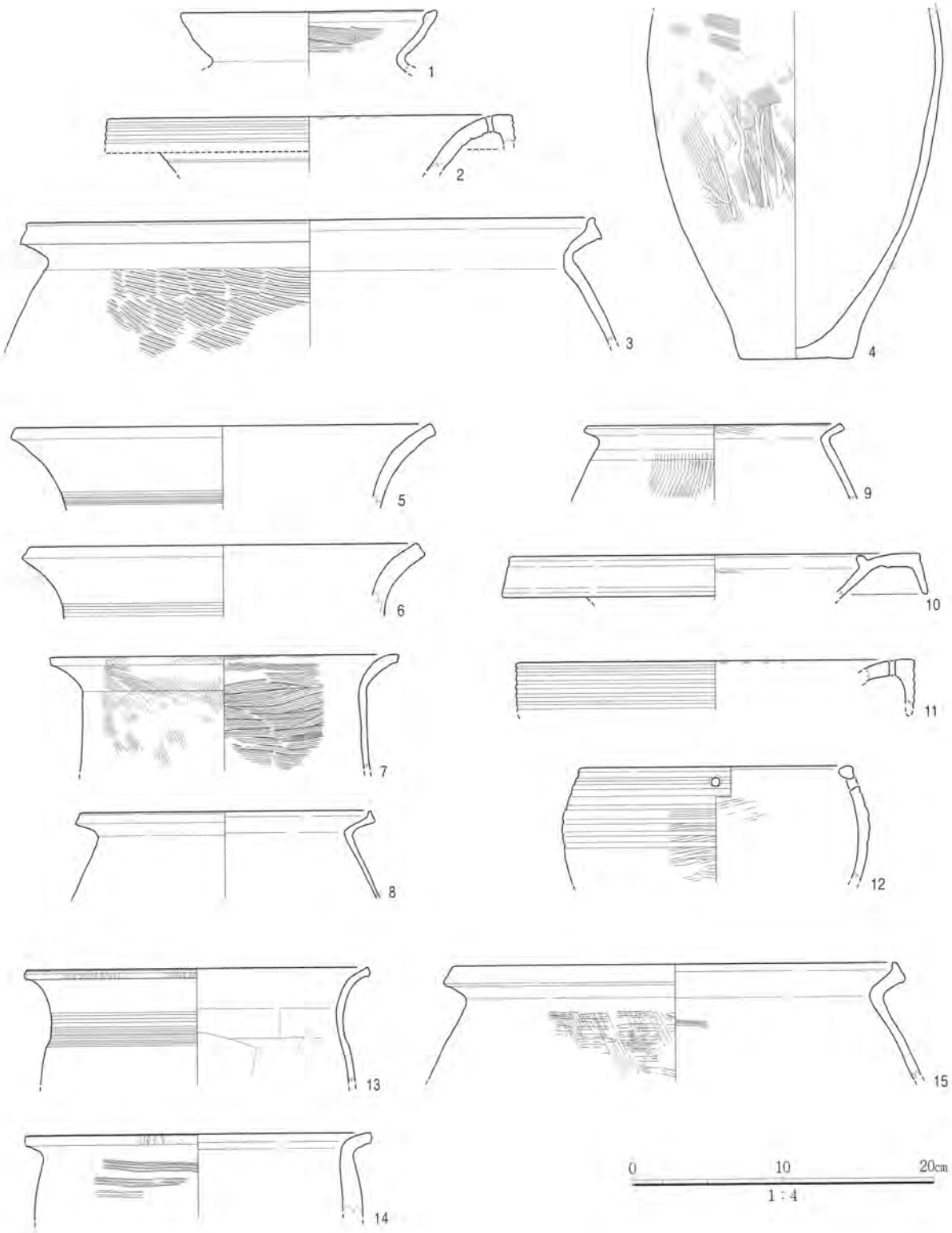


図5　出土遺物実測図

第4層(1～4)、第5層(5～12)、第6層(13)、SX2(14)、SK5(15)

ⅲ)各地層出土の遺物(図5)

第4層出土遺物では、古式土師器1、弥生土器2～4を図示した。古式土師器甕1は口縁部が内湾し、端部内面を肥厚させる。布留式に属し、古墳時代前期のもので、第4層の年代を決定する遺物である。弥生土器広口壺2は口縁部の破片で、端部を垂下させ、その外面に凹線文を施す。甕3は口縁部から体部の破片で、外面に左上りの平行タタキを施している。4は体部～底部の破片で、外面を左上りのハケの後、ヘラミガキで調整している。4は畿内第Ⅱ様式、2・3は畿内第Ⅳ様式に属する。

第5層出土遺物では、弥生土器5～12を図示した。5・6は畿内第Ⅱ様式の広口壺で、口縁部外面下方に櫛描直線文を施している。7は畿内第Ⅱ様式の甕で、口縁部の外端面を刻み目で装飾する。8・9は畿内第Ⅳ様式の甕である。10は高杯、11は広口壺で、ともに口縁部を垂下させ、11はその外面を凹線文で飾る。12は無蓋壺で、外面に凹線文を施している。10～12は畿内第Ⅳ様式に属する。

13は落込み内の第6層から出土した畿内第Ⅱ様式の甕で、頸部に櫛描直線文を、口縁端部に刻み目を施している。

3)まとめ

弥生時代中期の遺構を多数検出した。出土した遺物は畿内第Ⅱ～Ⅳ様式のものであり、これは森小路遺跡の一般的な傾向に合致している。検出された遺構は土壙・落込み・溝と柱穴や小穴で、柱穴は建物の一部である可能性があった。調査区の南西に土壙や落込み、北東に柱穴・小穴が集中するように見える。おそらくは、ゴミ捨て場(土壙・落込み)と居住空間(柱穴・小穴)の境界部分に相当するのではなかろうか。

本調査地は森小路遺跡の北端に近いものと思われるが、遺構・遺物の出土量は多く、集落はまだ北方に展開するものとみられる。この点、今後の調査で、北端部とその構造が明らかにされることを期待する。

引用文献

大阪市教育員会・大阪市文化財協会1991、「金崎氏による建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS89－41)略報」:『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.115－118

大阪市文化財協会2001 a、「MS90－25次調査」:『森小路遺跡発掘調査報告』、pp.163－168

2001b、「MS88－12次調査」:『森小路遺跡発掘調査報告』、pp.123－133

大阪文化財研究所2011、『旭区新森五丁目における建築工事に伴う森小路遺跡(MS10－2)報告書』

南壁地層断面

検出遺構全景
（北西から）

検出遺構全景
（南西から）

阿倍野区松崎町二丁目における建設工事に伴う
阿倍寺跡発掘調査（AB11－2）報告書

調 査 個 所	大阪市阿倍野区松崎町２丁目10－７
調 査 面 積	48㎡
調 査 期 間	平成23年10月６日～10月11日
調 査 主 体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、清水和明、谷崎仁美

1)調査に至る経緯と経過

調査地は阿倍寺跡推定範囲の中央よりやや南に位置し、金堂跡と考えられている土壇跡に東接する(図1)。土壇跡にはかつて礎石が残存し、第二次世界大戦直後までは存在していたと言われているが、周囲の開発により現在は跡形も無い。また、南側には塔心礎が見つかった松長大明神がある。松長大明神の境内では戦前に塔心礎が見つかり、「一本松礎石」として大阪府史蹟[大阪府学務部1931]に指定されていた。現在、心礎は西成区天下茶屋公園に移設され、松長大明神の祠付近は「阿倍寺跡推定地」として大阪市顕彰碑が設置されている。

阿倍寺跡推定範囲内では白鳳期の瓦が出土するため、以前から創建時期が古代に遡ると考えられてきた。本格的な発掘調査はAB98－5・6次調査が初めてである[大阪市文化財協会2001]。この調査地は土壇跡に北接し、磨滅をあまり受けていない古代～中世の瓦がまとまって出土したことから、それらと土壇跡との関連が注目されている。また、14～16世紀前半の大溝が検出され、寺域の北・東を画するものであるとともに防御的な性格が推測され、大溝の廃絶後は瓦の出土が途絶えることから、寺院の存続期間を考える手掛かりを得た。これ以後の調査では、AB06－1・08－1・09－1次調査が行われているが、古代瓦細片・中世前半に遡る溝のほかは近世の土採り穴が見つかっており、阿倍寺自体に関する資料は少ない[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008・2010、大阪市文化財協会2009]。今回の調査地は、こうした阿倍寺跡と考えられる範囲では、まさに阿倍寺の中心部分と言える。

大阪市教育委員会による試掘調査で、地表下約0.3mで古代の土器・瓦片などを含む遺物包含層が検出されたため、調査を実施することとなった。調査は平成23年10月6日から開始した。現代の盛土層である後述の第0層を重機で除去し、それより下位を人力による掘削で調査を進めた。層序ごとに遺

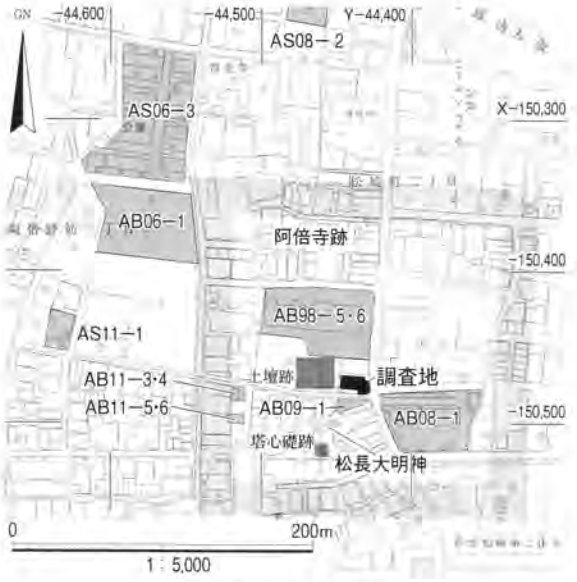


図1　調査地位置図

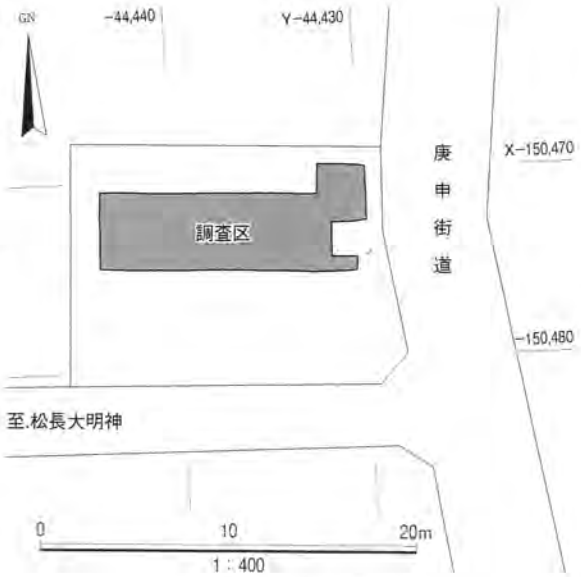


図2　調査区配置図

構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、同年10月11日に埋戻しを含む現地におけるすべての作業を完了した。なお、調査区の東側が、AB98－5・6次調査で見つかった寺域の東を区画する大溝の延長線上に当ると推定されたため、調査区を東へ3m拡張して調査を行った。また、基準点は街区多角点を与点としたトラバース測量を行い、本報告で用いた方位は世界測地系に基づき座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地は、西から東へ緩やかに低くなる地形である。西側は現代の削平を深く受けており、第0層を除去するとすぐに第5層とする段丘構成層を検出した。

第0層：近～現代の盛土などで、層厚は40～60cmである。瓦・レンガ・コンクリートブロック・焼土などを含む。調査区中央で、「和泉瓦製造組合員　安□田甚太郎」(□は判読不可)や「泉州仝製」と刻印のあるいぶし瓦が大量に投棄された土壙があった。調査地が更地になる前に建っていた住居に使用された瓦であると思われる。

第1層：黄褐色(2.5Y5/3)のシルト混り中粒砂質細粒砂層で、極細粒砂質シルト偽礫や酸化マンガン粒を多く含む。層厚は10～18cmで、近世の作土層である。本層は調査区西側で部分的に見られた。上面でSX001・002を検出した。肥前磁器・軒丸瓦・丸瓦・平瓦のほか、瓦質土器・須恵器が出土した。

第2層：中世の盛土層で、上下に二分できる。第2a層は、褐色(10YR4/6)の中礫を含むシルト混り中粒砂質細粒砂層で、層厚は20cm以下である。本層は調査区西側では完全に削平されており、東側で見られた。土師器・瓦器・瓦質土器・軒丸瓦・丸瓦・平瓦のほか、須恵器が出土した。第2b層は、黄褐色(2.5Y5/3)～褐色(10YR4/4)の中粒砂混り極細粒砂質細粒砂層で、中礫～粗粒砂を含む。層厚は16～20cmである。第2a層と同様に、調査区西側では完全に削平されており、東側で見られた。中礫や粗粒砂を含む量によって、さらなる細分は可能であるが、盛土の単位であると思われる。瓦器・瓦質土器・軒丸瓦・丸瓦・平瓦・管状土錘・不明土製品が出土した。出土遺物からみて第2a層と第2b層との間に明確な時期差は見られなかった。

第3層：SD101の埋土で、人為的な埋め土の第3a層と機能時の水成層である第3b層に分かれる。第3a層は、にぶい黄褐色(10YR5/4)の粗粒砂質中粒砂層で、シルト質細粒砂偽礫を含む。層厚は25～45cmである。SD101内の東壁地層断面で、長径90cm程の盛土の単位を観察したが、盛土する方向などの知見までは得られなかった(図4)。第3b層は、黄褐色(2.5Y5/4)の粘土質中粒砂層で、細礫質極粗粒砂のラミナが狭在する。層厚は20～36cmである。粘土質中粒砂層に細礫質極粗粒砂層が狭在するのは、水漬きの堆積と土砂の崩落を繰り返しながら徐々に堆積した結果と考えられる。第3層の出土遺物はa・b層一括で採り上げた。瓦器・丸瓦・平瓦のほか、須恵器・鉄滓が出土した。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)または褐灰～灰黄褐色(10YR6/3.5)の粘土混り極粗粒砂質中粒砂層で、層厚は最大で10cmである。SD101加工時の形成層である。東壁地層断面の観察により、後述する陸橋状遺構の際で25cmの堆積が見られ、南に向かって傾斜するようすが見られた(図4)。これは、

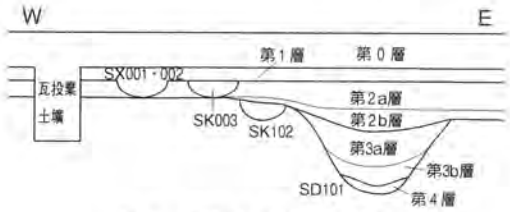


図3　地層と遺構の関係図

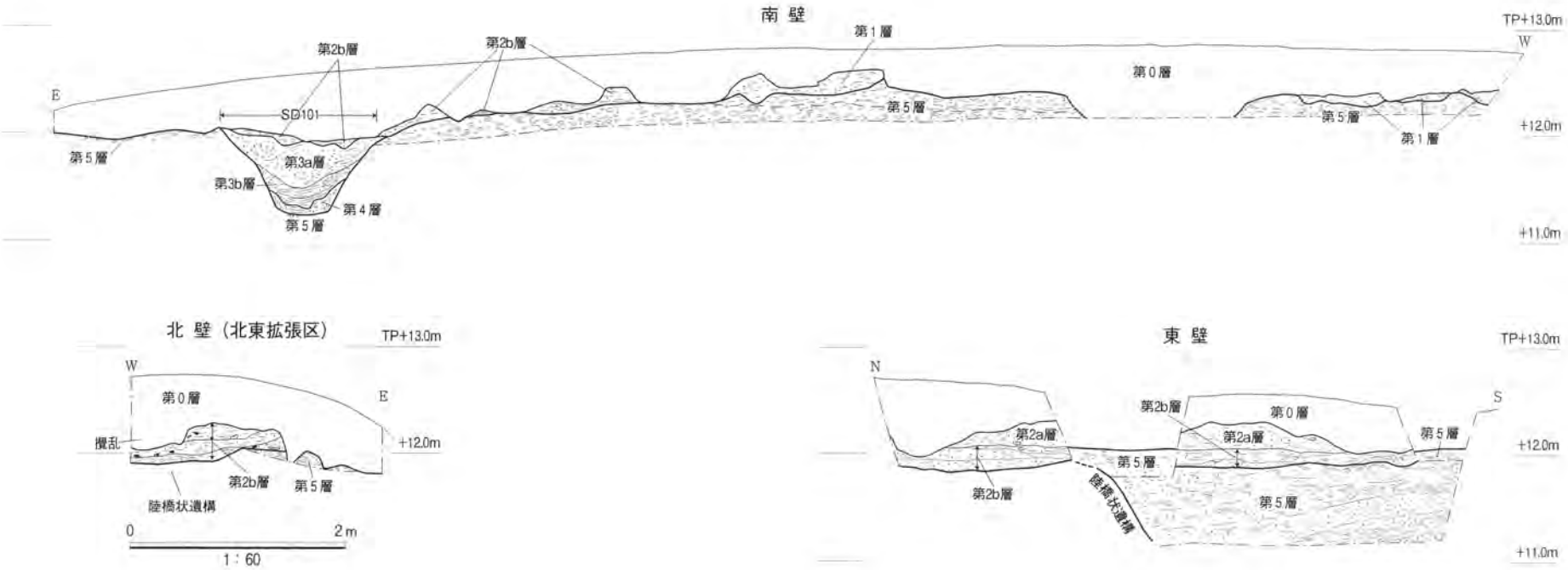


図4　調査区地層断面図

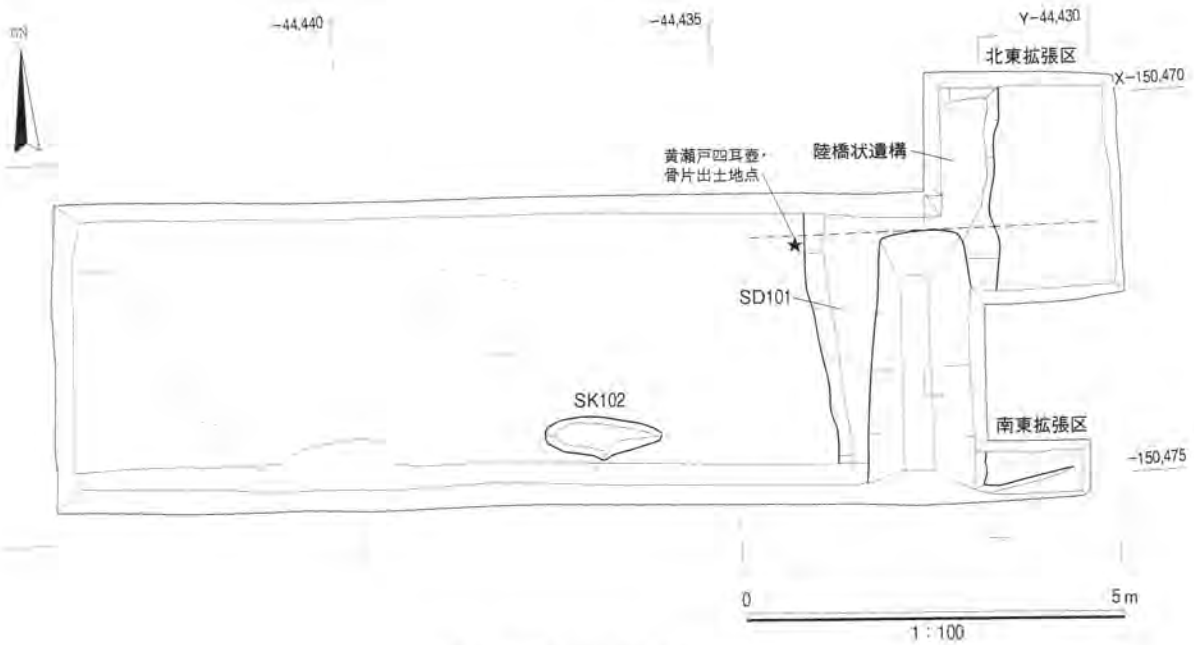


図５　14世紀以前の遺構平面図

第3b層でラミナを観察したことから、機能時に溝の中に水が溜って、陸橋状遺構の際に土砂が堆積しやすかったことが原因と考えられる。出土遺物はなかった。

第５層：明黄褐色(10YR6/8)の中礫混り細粒～粗粒砂層で、段丘構成層である。直上で古瀬戸が出土した。

ii)遺構と遺物

a．14世紀以前の遺構(図５)

第５層上面でSD101・SK102を検出した。

SD101は、第５層を掘り込む南北方向の溝である。検出面での東西幅は2.0～2.5m、深さは0.7mである。深さ0.2m程まではゆるやかに傾斜し、以下は急傾斜で落ち込んで、底はV字に近い逆台形状を呈している。掘り直した痕跡は見られず、水漬きの堆積と土砂の崩落を繰り返しながら徐々に埋没し(第3b層)、土砂で一気に埋められている(第3a層)ことが分かった。北側では、第５層を掘り残している部分が見られた。南北長は、調査区外にわたるため不明であるが、少なくとも1.8m以上ある。高さはSD101の検出面とほぼ一致し、上面は0.10m程凹んでおり、第２層を盛土する際の削平によるものか、当初の形状を踏襲しているかは不明である。これを「陸橋状遺構」と名づけた。

SD101は、AB98－５・６次におけるSD01およびSD02の延長上に位置し、さらに、溝の形状や規模、埋没状況などが一致するため、いずれかと同一遺構であることが予想された。SD01はSD02を踏襲して開削されており、両者は東西66m以上、南北34m以上のＬ字に曲がる大溝である。SD01は、埋土からの出土遺物から、16世紀前半に埋没したと考えられ、SD01に破壊されているSD02は14世紀前半代に埋没し、開削時期はそれ以前に遡るとされている[大阪市文化財協会2001]。今回のSD101を埋める第３層からの出土遺物の中で最も時期が新しいと考えられるのが瓦器椀の細片である。体部のみで、図化はできなかった。しかし、体部外面のヘラミガキを施さず、指頭圧痕が目立つことや、内面

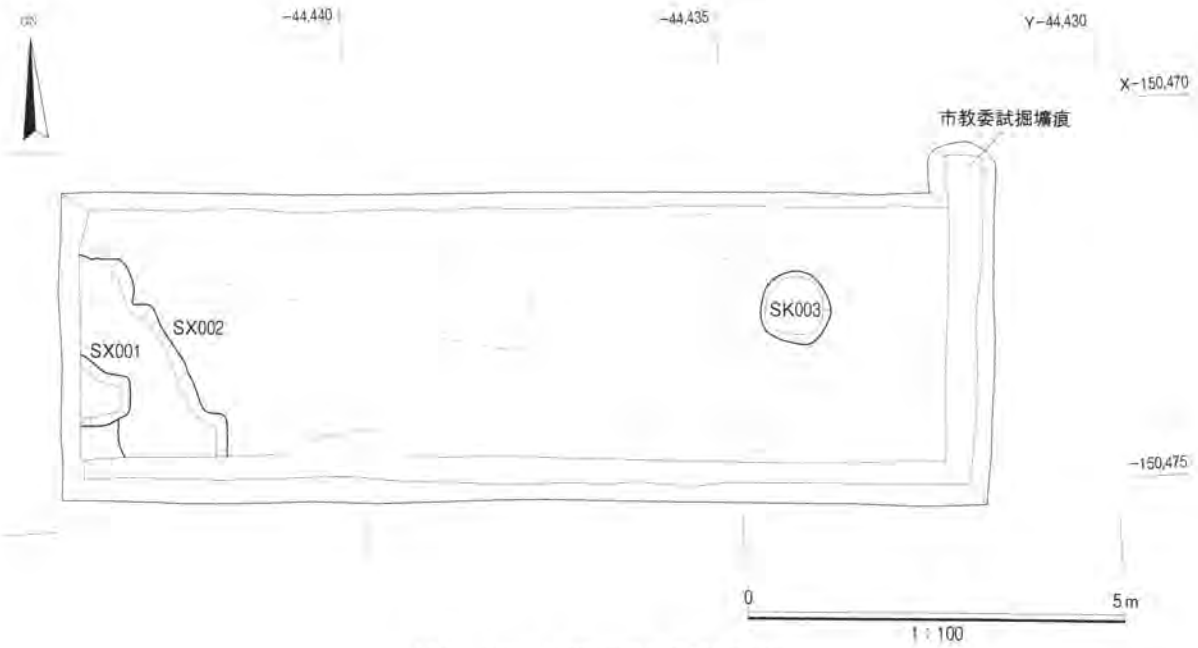


図6　15世紀中頃以降の遺構平面図

の圏線ミガキが非常に疎らで1cm以上隙間があるものや、5cm間に全くミガキが見られないものもあるので、和泉型Ⅳ－3～5期のものと考えられる[森島康雄1995]。さらに、SD101が埋没した後で周辺を整地しているのは、第2層の出土遺物から15世紀中頃以降であると考えられる。つまり、SD101は13世紀末～14世紀代には埋没していたと考えられ、14世紀前半代に埋没したと考えられるSD02と同一遺構である可能性が高い。しかし、今回は調査面積が狭く、AB98－5・6次と比べると情報量に差があるため、あくまでも可能性を指摘するに留めておく。

SK102は、検出面での長さ1.60m、幅0.55m、深さ0.07～0.15mの土壙状遺構である。出土遺物はなかった。

また、陸橋状遺構の南西、SD101の西側上端の外側で骨片・炭とともに古瀬戸の四(三)耳壺(図7－8)が出土した。骨は火葬された人骨である可能性が高い。埋納に係わる掘形は見られなかったが、骨片・炭・壺片が一点に集中していたことや、底部の破片が1点のみで体部の6分の1程しか接合復元できなかったことから、本来は埋納されていたものが、整地の際に埋納壙ごと破壊されたものと考えられる。ただし、中世で寺域内に骨壺を埋納することは類例がなく、骨壺として良いか判断しがたい。

b．15世紀中頃以降の遺構(図6)

第2a層上面でSK003、第1層上面でSX001・002を検出した。

SK003は、検出面での幅1.0m、深さ0.08～0.12mの土壙でほぼ正円形である。瓦の細片が出土した。第1層が堆積する前に埋没しているため、15世紀後半から近世までの遺構であると考えられる。

SX001は、検出面で幅0.66m以上、深さ0.16mの性格不明遺構である。SX001に一部破壊されるSX002は、検出面で南北幅2.65m、東西幅1.45m、深さ0.03～0.05mの性格不明遺構である。第1層が作土なので耕作に係わる遺構であると考えられる。いずれも出土遺物はなかった。

c．各層の出土遺物(図7・図8)

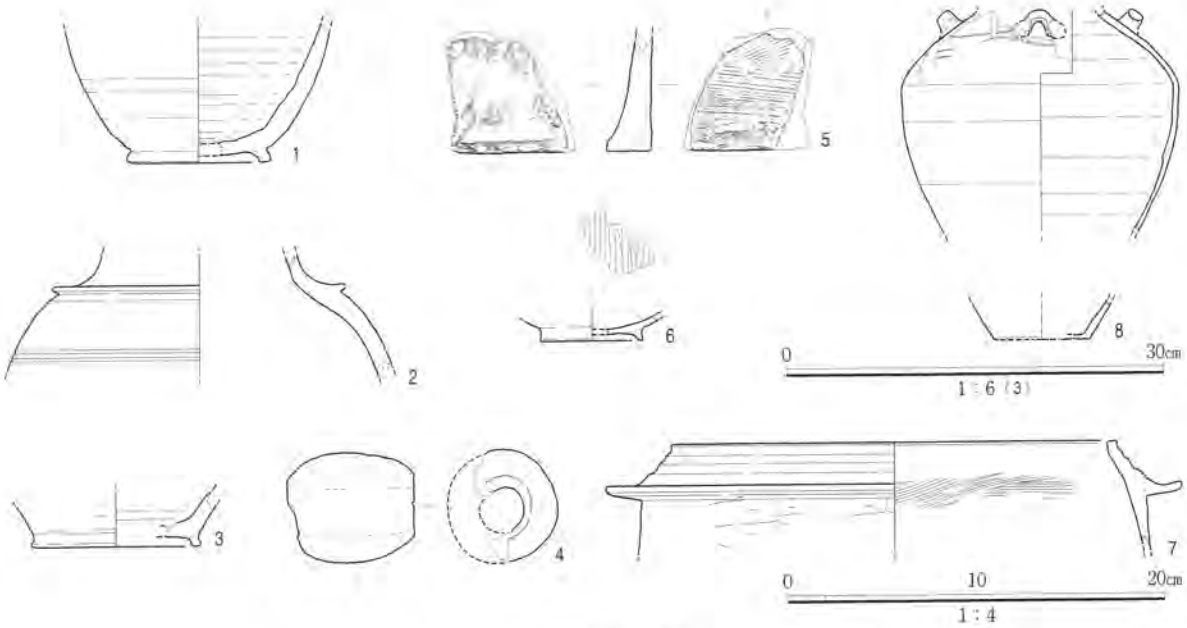


図7　出土遺物実測図

第5層（8）、第3層（3）、第2b層（4・7）、第2a層（1・2）、第2層（5・6）

出土遺物の大半は古代～中世の丸・平瓦である。

8は第5層直上で出土した。古瀬戸の四(三)耳壺である。成形技法は粘土紐輪積み成形で、体部のほぼ中央で粘土紐と粘土紐の間を指先で押して接合している痕跡が見られた。底部は細片であるが、調整はしていないと思われる。外面は磨滅が激しいが、灰釉がかけられ黄土色に発色している。肩部にはヘラなどで施されたのであろう陰刻が見られる。内面は回転ユビナデ調整で仕上げられている。本資料の特徴は、器厚が薄いことと底部の形状が挙げられる。古瀬戸の耳壺には高台が付く例が一般的であるが、本資料は瓶子のような平底である。このように、形態が珍しいため、従来の編年観で位置付けることが難しい。

3・10は第3層からの出土である。3は須恵器の壺である。器表面・断面ともに青灰色で焼成は堅緻である。外面はヘラケズリの後に回転ナデを施し、内面も回転ナデを施している。貼付け高台は底部と口縁部の屈曲部にある。断面形状は方形で、外面を強くユビナデするので外側へ踏ん張ったような形である。底部にはハケメ状の擦痕が残っており、高台を貼り付ける前に底部を板ナデ調整していると考えられる。8世紀代のものである。10は一枚作りの平瓦である。表面・断面ともに赤褐色で焼成が甘く、磨滅が激しい。縦方向の縄目叩きを施した後に補足で斜め方向の縄目叩きを施している。このような叩きを施す例は、日置荘遺跡出土瓦にも見られ、13世紀後半～14世紀の遺構から出土している[市本芳三1995]。縄目叩きのみで詳細な年代を与えることは難しいが、ここではそのような年代を想定しておく。

4・7・11は第2b層、1・2・9・12は第2a層から出土した。4は管状土錘である。器表面は内外面ともに暗灰色のいぶし風で、断面は灰白色を呈し、瓦質焼成である。器表面は磨滅が激しい。7は瓦質土器の羽釜で、15世紀中頃の年代が与えられる。11は一枚作りの平瓦である。凸面は縦方向の縄目叩きで、条の不整合が見られないため、原体は17cm以上ある長いものであったと考えられる。凹面

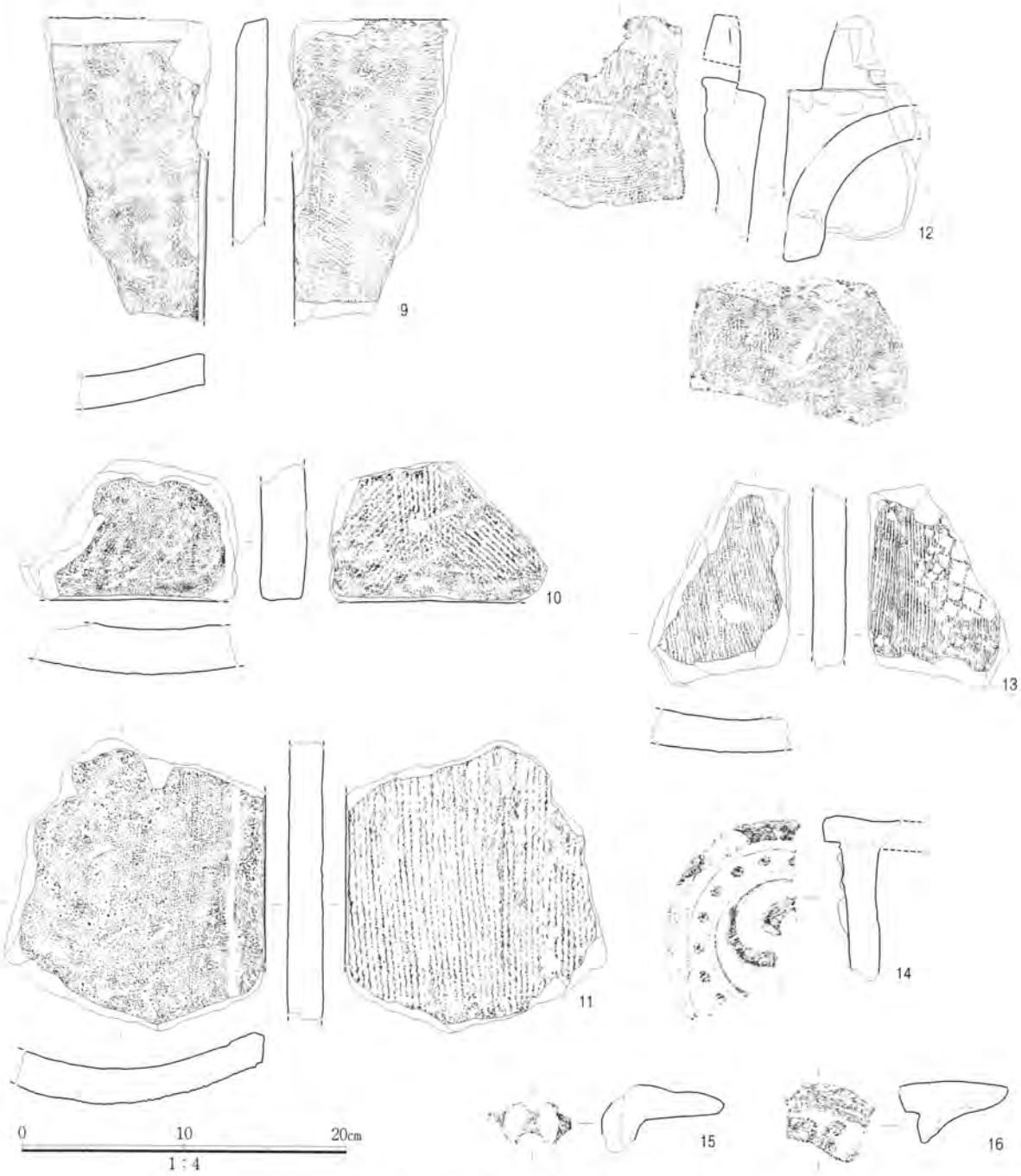


図８　出土遺物実測図(瓦)
第３層(10)、第2b層(11)、第2a層(９・12)、第２層(13～15)、重機掘削中(16)

は磨滅が激しいが、糸切り痕の上に布目圧痕があり、未調整である。側端は深いヘラケズリをし、布端の痕跡が見られる。１は須恵器の壺である。外面はヘラケズリの後に回転ナデを施し、内面も丁寧な回転ナデを施している。高台は貼付けで、外側に踏ん張ったような形である。底部調整はナデ消されており、不明である。３と同様の８世紀の年代が与えられる。２は須恵器の器台である。内外面ともにヘラミガキが施されている。器表面は青灰色で断面はセピア色で、胎土は密で焼成は堅緻である。古墳時代のものである。９は一枚作りの平瓦である。表面・断面ともに赤褐色で焼成は堅緻である。二次的に火を受けている可能性がある。凸面は斜め方向の板ナデ調整がされており、凹凸面に離れ砂

が付着している。離れ砂使用の上限年代は12世紀で、13世紀代に増加するが[市本1995]、本資料の詳細な年代は不明である。12は玉縁式丸瓦である。玉縁の接合技法はC1手法である[大脇潔1999]。凸面は縦方向の縄目叩きを施し、ナデ調整で擦り消している。凹面は布目圧痕が玉縁端部まで及び、未調整である。

また、側溝掘削中などで、第2a層と第2b層を区別せずに採り上げたものは、5・6・13・14・15である。5は不明土製品である。表面・断面ともに灰白色で焼成は堅緻である。外面とした側面は上から下へ板ナデ調整されて細かいハケメが残る。底部付近はその上からユビナデをしている。内面とした側面は、外面よりも粗いハケメが残り、斜め方向のナデ調整の後横方向にナデ調整している。6は和泉型瓦器椀である。断面形状が三角形の貼付け高台で、見込みには幅3㎜程の平行線状暗文が密にある。和泉型のI期かそれに近い時期に属するものであろう[森島1995]。13は平瓦である。小片のため成形技法は不明である。表面は黄白色で断面は赤褐色で、焼成は甘い。凸面は格子目叩きを施し、板ナデ調整で擦り消しているため、ハケメが明瞭に残る。14は三巴文軒丸瓦である。表面は暗灰色のいぶし風で断面は黄白色、焼成は堅緻である。文様の断面形状は半円形で、巴頭部は丸く先端が尖り、互いに接しない。尾部は長いが、尾部とは独立した圏線が巡る。珠文帯の外側には圏線が巡る。14世紀代のものである。15は無子葉単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁の一部分のみの資料であるし、磨滅が激しいため詳細は不明であるが、AB98－5・6次に素文縁無子葉単弁蓮華文軒丸瓦が出土しているため[大阪市文化財協会2001]、これも四天王寺NMⅢaないしⅢb型式と同様のもので、8世紀代のものと考える[網伸也1997]。

図9　中世大溝と陸橋の位置

16は重圏文縁複弁蓮華文軒丸瓦である。重機掘削中の出土であるが、阿倍寺創建期に使用されたものと考えられる。表面の磨滅が激しい。

3）まとめ（図9）

今回の調査では、阿倍寺の寺域を区画する溝と陸橋状遺構を検出し、中世の阿倍寺の景観を考える上で重要な成果を得た。

SD101は阿倍寺の東側を画する大溝で、AB98－5・6次におけるSD02の延長であると考えられる。開削年代が白鳳時代まで遡るかは不明であるが、14世紀には埋没していたと考えられる。SD101が埋没した後、15世紀中頃以降に周辺が整地されており、その年代がAB98－5・6次におけるSD01の埋没年代とほぼ一致することから、阿倍寺の廃絶年代を大溝の埋没年代に当てる説を補強する知見が得られた。

また、幅1.8m以上にわたる陸橋状遺構は、金堂跡とされる土壇跡のほぼ真東に位置する。これは、付近に東門が存在したことを示唆する成果であり、阿倍寺の景観を考える上で重要である。

今回、調査面積が50㎡に満たず、阿倍寺について多くの知見を得たAB98－５・６次調査に比べると情報量にかなり差がある。しかし、このような調査の積み重ねにより、「阿倍寺千軒」と呼ばれ広大な伽藍を有していたという阿倍寺の歴史が徐々に明らかにされていくであろう。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「阿倍野筋２丁目における埋蔵文化財発掘調査(AB06－１)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.317－326

2010、「阿倍寺跡発掘調査(AB08－１)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.473－480

大阪市文化財協会2001、「阿倍寺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』

2009、『阿倍野区松崎町三丁目における建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB09－１)報告書』

大阪府学務部1931、「寺院、寺院址」：『大阪府史蹟名勝天然記念物』第５冊、pp.80

網伸也1997、「四天王寺出土瓦の編年的考察」：『堅田直先生古稀記念論文集』真陽社、pp.539－549

市本芳三1995、「日置荘遺跡出土瓦の分析」：『日置荘遺跡』(財)大阪府文化財センター

大脇潔1999、「丸瓦の製作技術」：『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所、pp.31－32

森島康雄1995、「瓦器椀」：『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社、pp.315－337

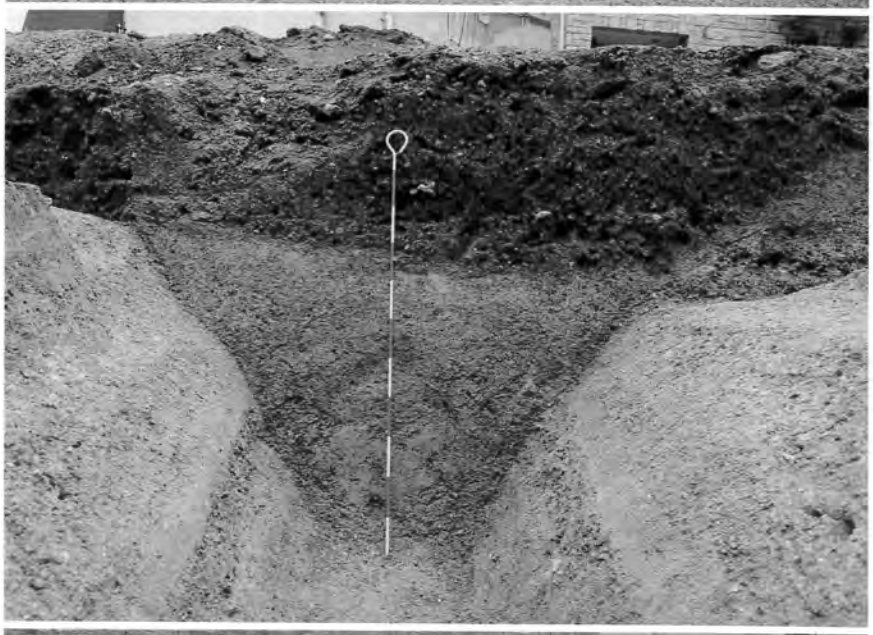
調査区全景
（第５層上面、西から）

東壁地層断面
（西から）

古瀬戸壺、骨片出土状況
（西から）

SD101
（北から）

SD101南壁地層断面
（北から）



SD101
（南から、
奥は陸橋状遺構）

阿倍野区松崎町三丁目245－19における建設工事に伴う
阿倍寺跡発掘調査（AB11－4）報告書

調査個所	大阪市阿倍野区松崎町３丁目245－19
調査面積	約17㎡
調査期間	平成23年12月15日～12月17日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、谷﨑仁美

1)調査に至る経緯と経過

調査地は阿倍寺跡推定範囲の南西に位置する(図1)。阿倍寺は、第二次世界大戦直後までは存在したと言われる土壇跡や、南側の塔心礎が見つかった松長大明神と合わせて四天王寺式伽藍配置をとる古代寺院である[明山大華1933]。また、推定範囲内で重圏文縁複弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦が出土するため、創建期は7世紀後半～末頃まで遡ると考えられている。

本格的な発掘調査はAB98－5・6次調査が初めてである[大阪市文化財協会2001]。この調査地は土壇跡に北接し、磨耗をあまり受けていない古代～中世の瓦がまとまって出土したことから、それらと土壇跡との関連が注目されている。また、14～16世紀前半の大溝が検出され、伽藍地(註1)の北・東を区画するものと推測され、大溝の廃絶後はより新しい瓦の出土が途絶えることから、寺院の存続期間を考える手掛かりとなった。この後行われたAB06－1・08－1・09－1次調査では、古代瓦細片・中世前半に遡る溝のほかは近世の土採り穴が見つかり、阿倍寺自体に関する資料は少なかったが[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008・2010、大阪市文化財協会2009]、最近行われたAB11－1・2次調査で、AB98－5・6次調査で見つかった東大溝と一連の南北溝が検出され、伽藍地を区画する大溝が寺の四方を囲っていた可能性が強くなった。それとともに、土壇跡のほぼ真東の位置で陸橋状遺構が発見されたため、阿倍寺の景観を考える上で重要な知見が着実に増加していると言える[大阪文化財研究所2012]。今回の調査地は、こうした阿倍寺跡と考えられる範囲では南西辺に位置し、未だ知られていない阿倍寺の西側の景観についての新たな知見を得ることを目的とした(図2)。

大阪市教育委員会の試掘調査で、地表下約0.6m以下のところで古代から近世の遺物包含層が検出されたため、調査を実施することとなった。現代の盛土層である後述の第0層を除去し、それより下位を人力による掘削で調査を進めた。層序ごとに遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、12月17日に埋戻しを含む現地におけるすべての作業を完了した。なお、調査区の東側で、阿倍寺の寺域の西を区画する大溝が当ると推定されたため、調査区の北東側に1.0m×1.6mの拡張区を設けた。また、座標値は街区基準点を与点としたトラバース測量により求めた。本報告で用いた方位は世界測地系に基づき座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと略記した。

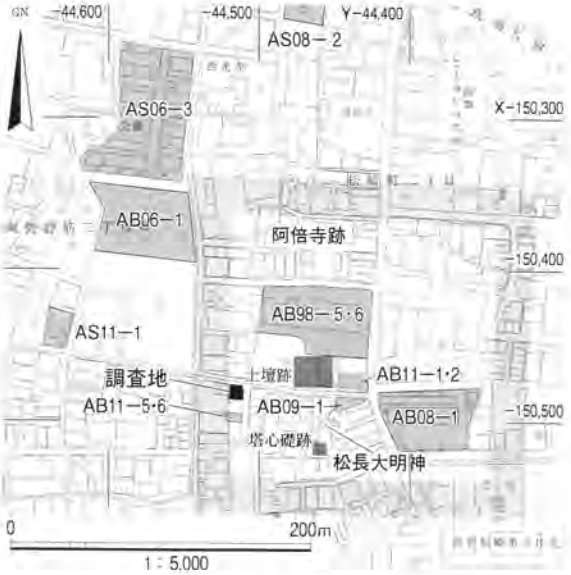


図1　調査地位置図

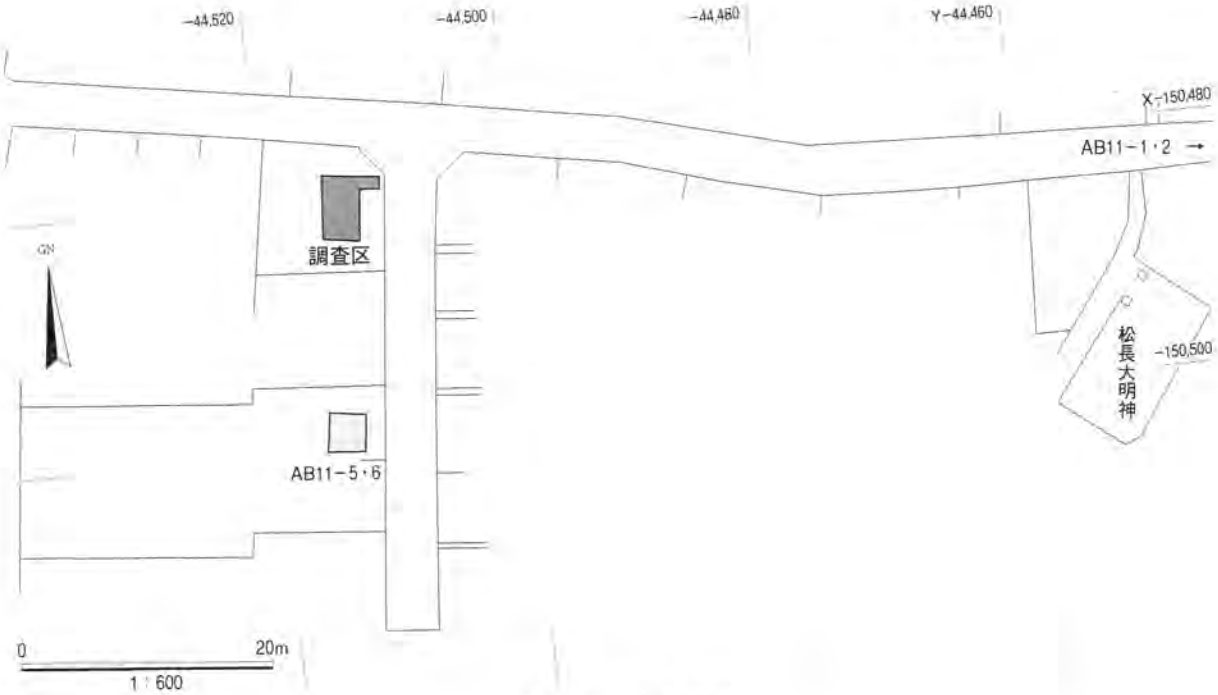


図２　調査区配置図

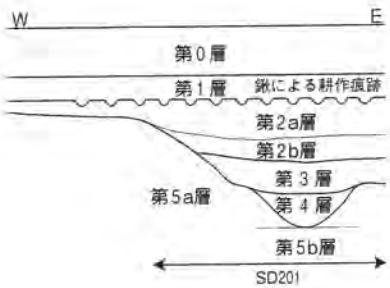


図３　地層と遺構の関係図

２）調査の結果

ｉ）層序（図３・４）

第０層：現代の盛土などで、層厚は60cmである。上部は整地のための砂利が敷かれている。

第１層：近世～近現代の作土層である。黒褐色(2.5Y3/2)の細粒～極細粒砂層で、層厚は60cmである。下面で鍬による耕作痕跡や小穴群を検出した。肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器・関西系陶器・瓦が出土した。

第２層：近世の整地層で、ａ・ｂ層に二分できる。第2a層は、灰色(7.5Y4/1)～にぶい黄色(2.5Y6/4)のシルト質細粒砂偽礫や酸化マンガン粒を含む中粒～細粒砂層で、層厚は10～30cmである。土師器・瓦器・瓦質土器・軒丸瓦・丸瓦・平瓦が出土した。第2b層は、灰色(5Y4/1)～黄褐色(2.5Y5/4)のシルト質極細粒砂偽礫を含む中粒～細粒砂層で、第2a層よりも細かい偽礫を多く含む。層厚は10～15cmである。肥前磁器のほか、土師器・瓦質土器・軒丸瓦が出土したが、いずれも細片だった。

第３層：SD201の埋土である。灰黄色(2.5Y6/2)のシルト質細粒砂偽礫やシルト混り中粒～極細粒砂偽礫・炭化物を含む中粒～細粒砂層で、所々で鉄分の沈着が見られる。層厚は30～38cmである。土師器・瓦質土器・軒丸瓦のほか、平安時代や奈良時代の瓦が出土した。出土遺物から、SD201の埋没時期は15世紀第４四半期～16世紀第１四半期と考えられる。

第４層：SD201機能時の水成層である。灰色(5Y5/1)の極細粒砂質シルト層で、粘土質シルトや中粒砂を主体とする細粒砂のラミナが狭在する。層厚は35cmである。第３層のものと同様の瓦質土器のほか、13世紀代の土師器や奈良時代と思われる平瓦を含むが、SD201の掘削時期は不明である。

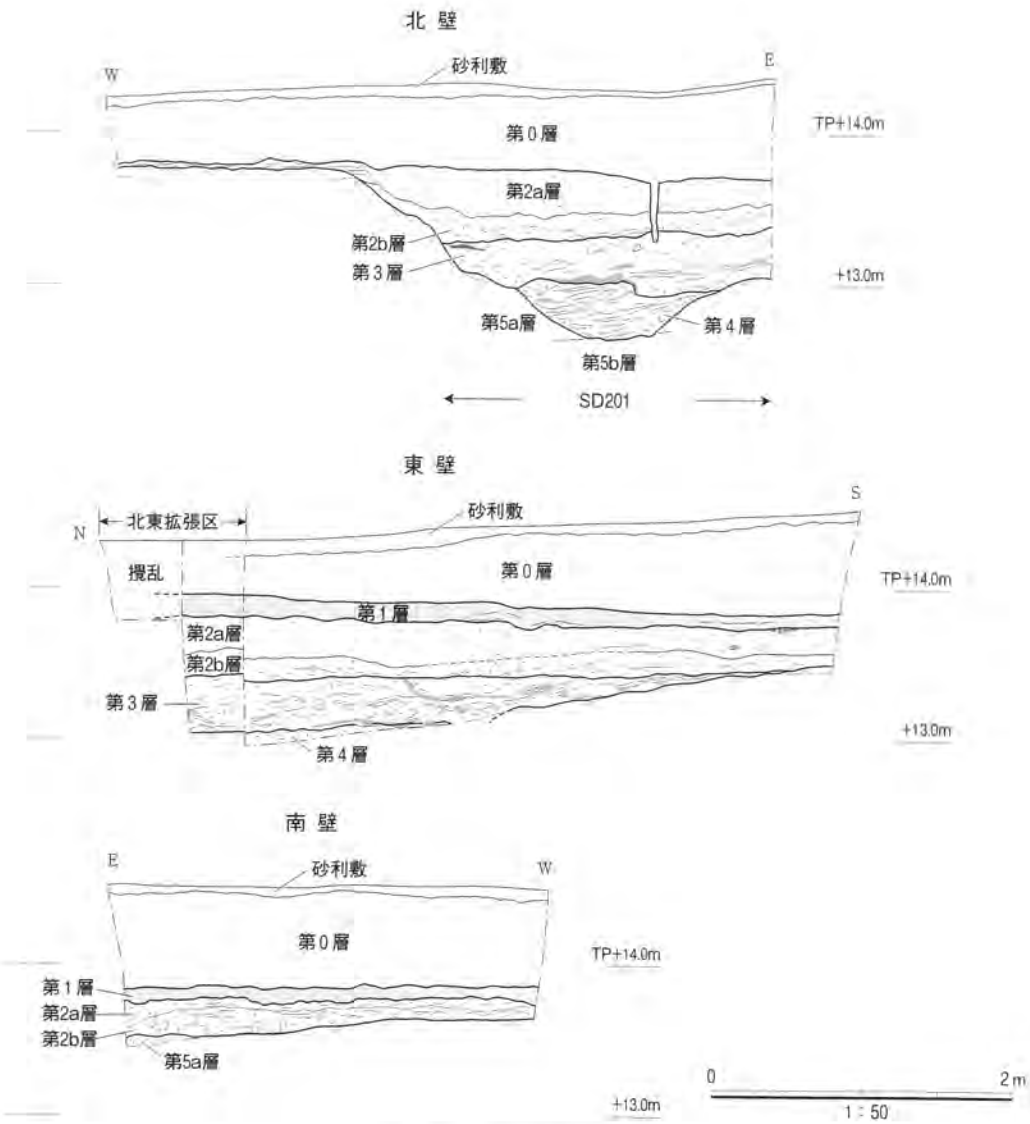


図4　地層断面図

第5層：段丘構成層で、a・b層に二分できる。第5a層は、灰色(7.5Y5/1)の細粒砂混りシルト質極細粒砂層で、層厚は110cmである。第5b層は、灰色(5Y6/1)のシルト質粘土層で、層厚は不明である。

ii)遺構と遺物

a．SD201(図5)

SD201は、第5層を掘り込む南北方向の大溝である。南北長は調査区外に続くため不明であるが、検出面での東西幅は2.2m以上、深さ0.67mで、底の断面形は丸みを持つ逆台形状を呈する。浚渫の痕跡は見られない。水漬きの堆積と土砂の崩落を繰り返しながら徐々に埋没し(第4層)、土砂で埋められている(第3層)ことが分かった。埋立ての方向は不明である。

SD201の規模や方向は1.6㎡という極めて狭い拡張区で確認するほか方法がなかったので、その性格について、西から東に傾斜する谷の落ち際である可能性も捨てきれない。しかし、谷の落ち際であれば、西から東へ落ちる地層の傾斜が見られるはずであるが、地層はすべてほぼ水平に堆積しており、それと合わせて、拡張区で東側の立ち上がりを一部検出したことから、SD201は南北方向の大溝と判

図５　調査区地形図(第５層上面)

断した。第４層の出土遺物ではSD201の掘削時期は不明であるが、第３層の出土遺物から15世紀代第４四半期～16世紀第１四半期には埋没したと考えられる。

SD201は北でやや西に振れるもののおおむね正方位に沿っている。さらに、溝の規模や埋没状況の類似性から考えて、[大阪市文化財協会2001]や[大阪市文化財協会2012]で見つかっているものと同様の阿倍寺の伽藍地を囲繞する大溝と考えられる。ただし、これらが同時併存したかどうかは不明である(註２)。

ｂ．SD201埋没後の整地(図６)

SD201が埋没した後、調査地は第２層によって整地されている。第2b層の出土遺物から、整地の時期は近世と考えられる。現地表面では分からないが、第５層が南東へ向かって低くなっており(図５)、調査区南側の地層の還元変色が著しいことから、低い所で水が溜まりやすい環境だったことがわかる。そのため、TP＋13.5m辺りまでの低い所を第2b層で盛土し、その上を第2a層で盛土して整地する必要があったと考えられる。

ｃ．近世～近現代の遺構(図７)

第１層下面で、鍬による耕作痕跡や小穴群を検出した。鍬による耕作痕跡は、１条が検出面での幅

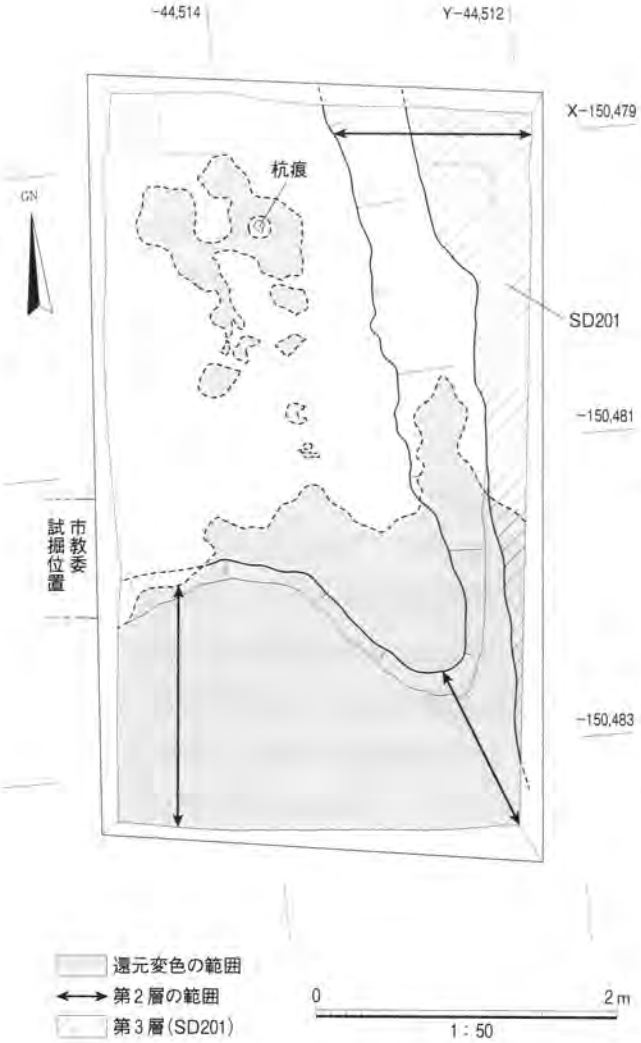


図6　整地層の堆積範囲と還元変色の範囲

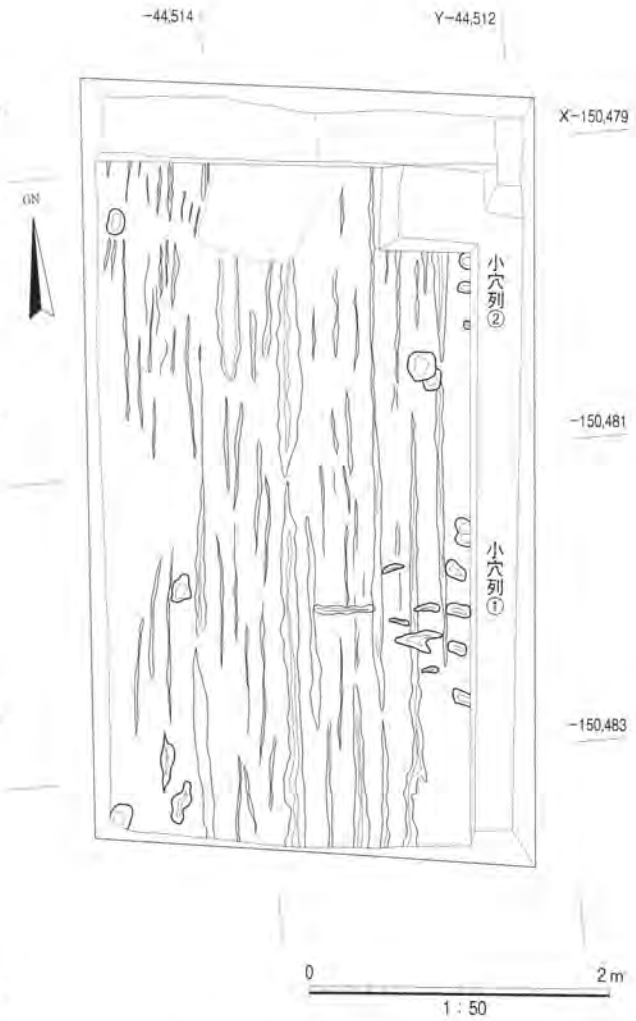


図7　第1層下面遺構平面図

0.05～0.15m、深さ0.05mで、南北方向に延びている。調査区東ぎわの小穴列①は、1つの小穴が直径0.15m、深さ0.10mで、0.15～0.20m間隔で南北方向に並んでいる。1.20m程離れた北側にも同じような小穴列②があり、何らかの柵の痕跡と考えられる。

d．各層の出土遺物(図8・9)

第4層からは、1・2・6が出土した。1・2は瓦質土器の羽釜である。1の焼成は堅緻で瓦質だが、2は土師質である。堺環濠都市遺跡SKT202地点における出土資料と比較して、口縁や鍔の形態から、第5次焼土層のものと類似する[佐藤隆1996、續伸一郎1989]。よって、15世紀第4四半期～16世紀第1四半期の年代が与えられる。6は土師皿である。乳白色のザラザラとした胎土で、底部は糸切りである。伊野編年のFタイプに相当し、底部から口縁部にかけて湾曲せずに直線的に立ち上がる形状から13世紀代のものと考える[伊野近富1995]。

第3層からは、3～5、10～13が出土した。3は瓦質土器の羽釜である。2と同様の年代が与えられる。4は瓦質土器の鉢である。器表面の磨耗が著しく、調整や擦り目の痕跡が見られないが擂鉢であろう。直線的な体部をもち、縁部は下端を強くナデることにより断面三角形を呈している。5は瓦質土器の

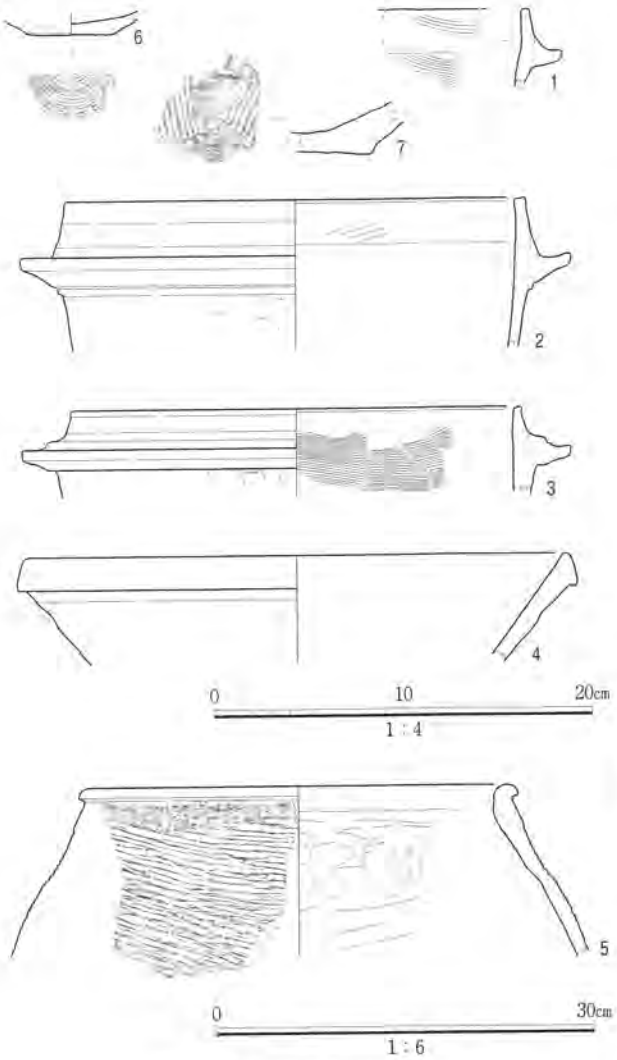


図８　出土遺物実測図（土器類）
第４層（１・２・６）、第３層（３～５）、側溝掘削中（７）

甕である。表面は暗褐色で断面は赤褐色を呈している。頸部が短く、口縁端部が肥厚してやや折り返される。外面は平行叩きが施され、内面には手の平の腹で押さえた痕跡が明瞭に残る。４・５は、先述したSKT202地点における第６次整地層～第７次整地層のものと類似し、いずれも15世紀第２四半期～第３四半期の年代が与えられる[續1989]。10は複弁蓮華文軒丸瓦である。AB09－11で同様の瓦が出土しており[大阪市文化財協会2009]、平安時代の瓦である。11は三巴文軒丸瓦である。文様の断面形状は半円形で、巴頭部は丸く、互いに接しない。尾部は長いが、独立したやや太めの圏線が巡る。珠文帯の外側に圏線は無い。12は玉縁式丸瓦である。青灰色で焼成は堅緻である。凸面は縦方向の縄目叩きを施し、ナデ調整で擦り消している。凹面は布目圧痕が玉縁部まで及ぶが、玉縁部の先端は横方向の深いケズリ調整が施されている。玉縁接合技法はＣ１技法[大脇潔1999]である。13は平瓦である。暗青灰色で焼成は堅緻である。凸面は縦方向の縄目叩きが隙間なく施され、凹面は磨滅しているため布目圧痕ははっきりしないが、糸切り痕と指頭圧痕が残る。

第2b層からは８が出土した。重圏文縁複弁蓮華文軒丸瓦で、阿倍寺創建時に使用されたと考えられているものである。

第2a層からは９が出土した。重圏文軒丸瓦である。細片のため詳細は不明であるが、圏線の幅が0.7cmと太く、第２圏線と第３圏線と思われる線の間隔が0.3cmで極端に狭いことが特徴である。難波宮式重圏文軒丸瓦には類例がない。

７は側溝掘削中に、14は壁面清掃中に出土した。７は備前焼の擂鉢である。細片のため詳細は不明であるが、擦目は少なくとも７条はあり、それで１単位である。14は平瓦である。赤褐色で焼成は甘い。凸面は、格子目叩きの後、板ナデ調整で格子目を一部擦り消している。凹面は、模骨痕と布目圧痕が見られる。

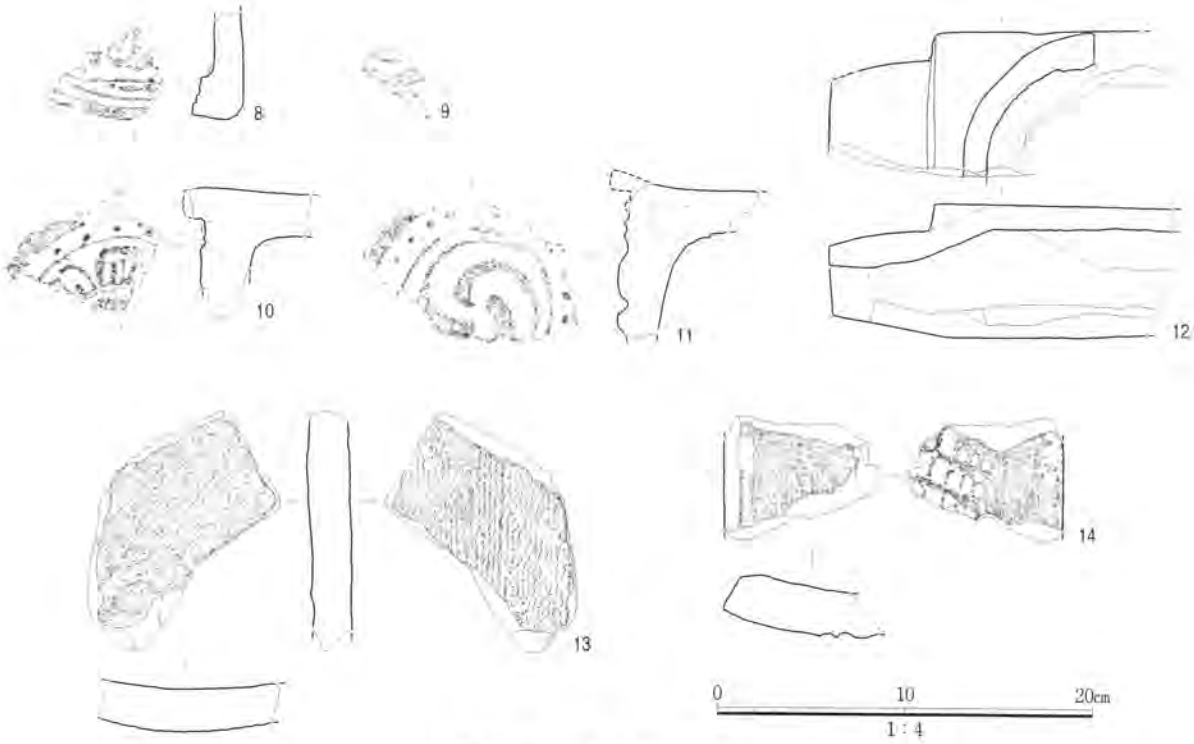


図９　出土遺物実測図(瓦)
第３層(10～13)、第2b層(８)、第2a層(９)、壁面清掃中(14)

3)まとめ

今回の調査では、阿倍寺の伽藍地の西を区画すると推定される大溝の存在と西側の旧地形が明らかになった。

SD201の発見により、中世阿倍寺の伽藍地の四方を大溝が囲繞していたことがわかった。調査面積が狭いため、規模や方向などの十分な情報を得たとは言い難い。しかし、中世阿倍寺の大溝の存在は、AB98－５・６やAB11－１・２次調査の成果と合わせて、中世四天王寺周辺で見つかっている大溝などと比較検討することで、中世寺院の寺域・堀の性格・景観を考える重要な資料となるに違いない。

また、阿倍寺中心伽藍の西側の地形が、西から東・南東に低くなっていることが分かった。さらに、南側は水が溜まりやすい環境であったことが推測されるため、SD201の掘削年代は不明であるが、少なくともSD201が機能していなければ、中心伽藍の西側には湿地が拡がっていた可能性がある。阿倍寺の金堂と推定される土壇跡、そして塔心礎跡の中間から西側の一帯がそのような環境にあったことは、創建時からの阿倍寺の景観を考える上で重要な成果である。

AB11－１・２次調査に引き続き、今回も小さな調査面積の調査ではあったが、このような調査の積み重ねにより、着実に阿倍寺の歴史を明らかにしていきたい。

註)

(１)［大阪市文化財協会2001］などでは、大溝の性格を「寺域」を区画するものと表現していた。しかし、「寺域」とは「塔・金堂からなる伽藍地と僧坊・食堂・政所院などからなる僧地を内に含み、四周を門や遮蔽施設などで囲繞した、いわゆる寺院本体部分を指す」という［李陽浩2008］の定義に従うと、阿倍寺の「伽藍地」を区

画する溝と表現するほうが適していると思われる。よって、この報告では「伽藍地」という用語を用いる。

(2)出土遺物から、[大阪市文化財協会2001]のSD02は14世紀前半に埋没し、それを踏襲して掘削されたSD01は16世紀前半に埋没したと考えられる。そしてSD01の埋没以後、より時期が新しい瓦の出土が途絶えるため、SD01の埋没年代と阿倍寺の廃絶年代が一致する可能性を指摘している。[大阪市文化財協会2011]のSD101は15世紀中頃に埋没し、その後周辺が整地されていることが分かった。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「阿倍野筋2丁目における埋蔵文化財発掘調査(AB06－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.317－326

2010、「阿倍寺跡発掘調査(AB08－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.473－480

大阪市文化財協会2001、「阿倍寺跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』

2009、『阿倍野区松崎町三丁目における建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB09－1)報告書』

2011、『阿倍野区松崎町二丁目における建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB11－1)報告書』

明山大華1933、「阿部寺塔心礎に就て」:『考古学雑誌』第23巻第12号、pp.51－52

伊野近富1995、「土師器皿」:『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社、pp.225－244

大脇潔1999、「丸瓦の製作技術」:『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所、pp.31－32

佐藤隆1996、「中世後期の陶磁器・土器について」: 大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告Ⅰ』、pp.81－92

續伸一郎1989、「堺環濠都市遺跡発掘調査報告　SKT202地点」: 堺市教育委員会編『堺市文化財調査報告』第49集、pp.1－89

李陽浩2008、「古代四天王寺における寺域の再検討」:『建築史学』第50号、p.2

第２層上面遺構検出状況
（北東から）

第５層上面遺構検出状況
（南から）

SD201北壁地層断面
（西から）

東壁地層断面
（西から）

南壁地層断面
（北から）

SD201
（写真上が北）

阿倍野区松崎町三丁目245－21における建設工事に伴う
阿倍寺跡発掘調査（AB11－6）報告書

調査個所	大阪市阿倍野区松崎町３丁目245－21
調査面積	９㎡
調査期間	平成24年１月10日～１月12日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、谷崎仁美

1）調査に至る経緯と経過

調査地は阿倍寺跡推定範囲の南西に位置する（図１）。阿倍寺は、第二次世界大戦直後までは存在したと言われる土壇跡や、南側の塔心礎が見つかった松長大明神と合わせて四天王寺式伽藍配置をとる古代寺院である［明山大華1933］。また、推定範囲内で重圏文縁複弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦が出土するため、創建期は７世紀後半～末頃まで遡ると考えられている。

本格的な発掘調査はAB98－５・６次調査が初めてである［大阪市文化財協会2001］。この調査地は土壇跡に北接し、磨耗をあまり受けていない古代～中世の瓦がまとまって出土したことから、それらと土壇跡との関連が注目されている。また、14～16世紀前半の大溝が検出され、伽藍地（註１）の北・東を画するものであるとともに防御的な性格が推測され、大溝の廃絶後はより新しい瓦の出土が途絶えることから、寺院の存続期間を考える手掛かりとなった。この後行われたAB06－１・08－１・09－１次調査では、古代瓦細片・中世前半に遡る溝のほか、近世の土採り穴が見つかり、阿倍寺自体に関する資料は少なかったが［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008・2010、大阪市文化財協会2009］、最近行われたAB11－１・２次調査やAB11－３・４次調査では、AB98－５・６次調査で見つかったものと同様の大溝が検出され、伽藍地を画する大溝が四方を囲っていた可能性が強くなった［大阪文化財研究所2012a、2012b］。今回の調査地は、こうした阿倍寺跡と考えられる範囲では南西辺に位置し、AB11－３・４次調査地の南約14mに位置する（図２）。

大阪市教育委員会の試掘調査で、地表下約0.5～1.2mのところで中世から近世の遺物包含層が検出されたため、調査を実施することとなった。なお、調査区の東側で、AB11－３・４次調査で検出したSD201の延長があたることが想定されたが、作業日数と作業量とを勘案して、調査区を拡張することはできなかった。現代の盛土層である後述の第０層を除去し、それより下位を人力による掘削で調査を進めた。層序ごとに遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、１月12日に埋戻しを含む現地におけるすべての作業を完了した。また、本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mとした。

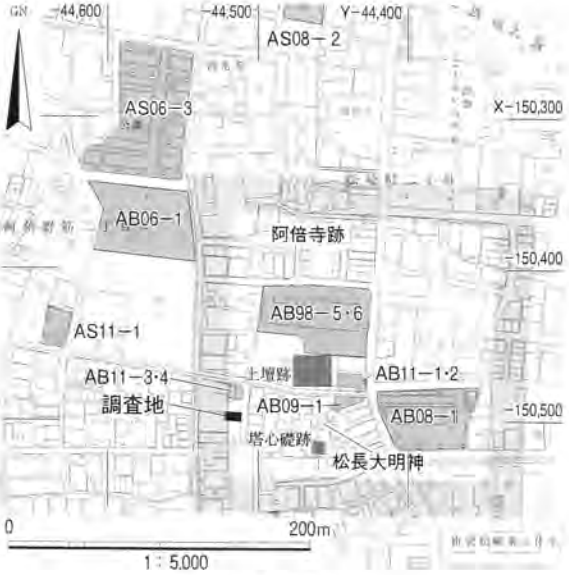


図１　調査地位置図

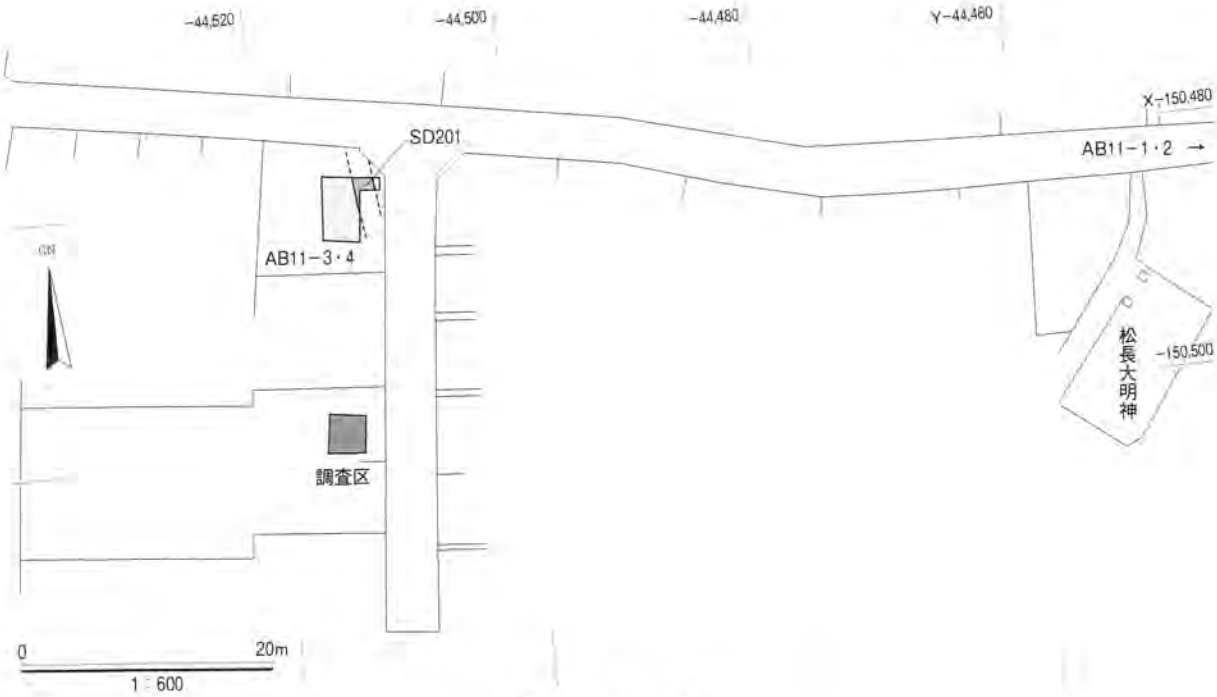


図２　調査区配置図

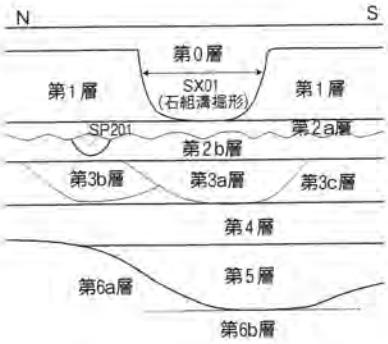


図３　地層と遺構の関係図

２)調査の結果

ｉ)層序

第０層：現代の盛土などで、層厚は20～90cmである。土師器・肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器・レンガ・土管のほか、プラスチック容器・木片などを含む瓦礫が出土した。

第１層：近～現代の盛土などで、層厚は70cmである。上面で、北側から延びて東側へＬ字形に曲がる石組溝(SX01)を検出した。焼土・炭化物を含み、瓦・鉄屑などが出土した。

第２層:近世～近代の作土層で、土中に含まれる焼土や炭化物・酸化マンガン粒の密度、色調からａ・ｂ層に二分できる。第2a層は、オリーブ褐色(2.5Y4/3) ～褐灰色(10YR4/1)の酸化マンガン粒・焼土・炭化物を含む中粒砂を主体とする細粒～極細粒砂層で、層厚は15cmである。上部はより暗色化しており、鉄分が沈着する。第2b層は、にぶい黄褐色(10YR5/3)の酸化マンガン粒を含む中粒砂を主体とする細粒～極細粒砂層で、層厚は５～10cmである。第2b層上面で、SP201、SD202・203を検出した。第２層からは、土師器・肥前磁器・土管・瓦のほか、瓦器が出土したが、いずれも細片であった。第2a層はAB11－３・４次調査における第１層、第2b層はAB11－３・４次調査における第2a層に相当すると考えられる[大阪文化財研究所2012b] (註２)。

第３層：整地層である。層厚は20cmである。AB11－３・４次調査における第2b層[大阪文化財研究所2012b]に相当する。地層断面で切り合い関係が判別でき、ベースに第3c層があり、第3b層→第3a層の順で盛土されている。第3c層はさらなる盛土の単位による細分が可能である。第3a層は、灰黄褐色(10YR4/2)の中粒～細粒砂層で、第４層や第６層由来の極細粒砂質シルト偽礫を含む。所々で

鉄分の沈着が見られる。第3b層は、にぶい黄褐色(10YR5/3)の中粒砂を主体とする細粒～極細粒砂層で、第4層や第6層由来の極細粒砂質シルト偽礫を含む。第3c層は、黄灰色(2.5Y4/1)のシルト混り中粒～細粒砂層で、第4層や第6層由来の極細粒砂質シルト偽礫を含む。第3層からは、瓦の細片が1点出土したのみで時期は不明であるが、層序的に近世と考えられる。

第4層：近世の水成層で、層厚は25cmである。暗褐色(2.5Y3/1)でシルト混りの含水率の高い泥層である。肥前磁器・関西系陶器・瓦のほか、土師器・瓦質土器が出土した。いずれも器表面の磨耗が著しく、細片であった。

第5層：SX501の埋土である。層厚は30～50cmである。暗褐色(2.5Y3/2)のシルト質細粒砂層で、粘土質シルト偽礫を含む。第5層からは、肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器・関西系陶器・土製品のほか、瓦器が出土した。いずれも器表面の磨耗が著しく、細片であったが、出土遺物から、SX501が埋められた年代は18世紀後葉～末頃と考えられる。

第6層：段丘構成層で、a・b層に二分できる。第6a層は、黄灰色(2.5Y5/1)の細粒砂混りシルト質極細粒砂層で、層厚は50cmである。第6b層は、灰オリーブ色(5Y5/2)のシルト質粘土層で、層厚は20cm以上である。第6a層は、AB11－3・4次調査における第5a層、第6b層は同じく第5b層に相当する[大阪文化財研究所2012b]。

ⅱ)遺構と遺物

a．調査地の旧地形と環境(図5)

第6層上面で、北から南・南東へ低くなる旧地形が明らかになった。SX501が谷頭か溜池かは明らかにできなかった。埋没年代は、出土遺物から18世紀後葉～末頃と考えられる。AB11－3・4次調査では、西から東・南東へ低くなる旧地形が明らかになり、さらに、南側の地層の還元変色が著しいことから、南側は水が溜まりやすい環境で、阿倍寺の中心伽藍の西側にあたる一帯は湿地である可能性を指摘した[大阪文化財研究所2012b]。この予見通り、SX501が埋没した後、調査地は湿地であっ

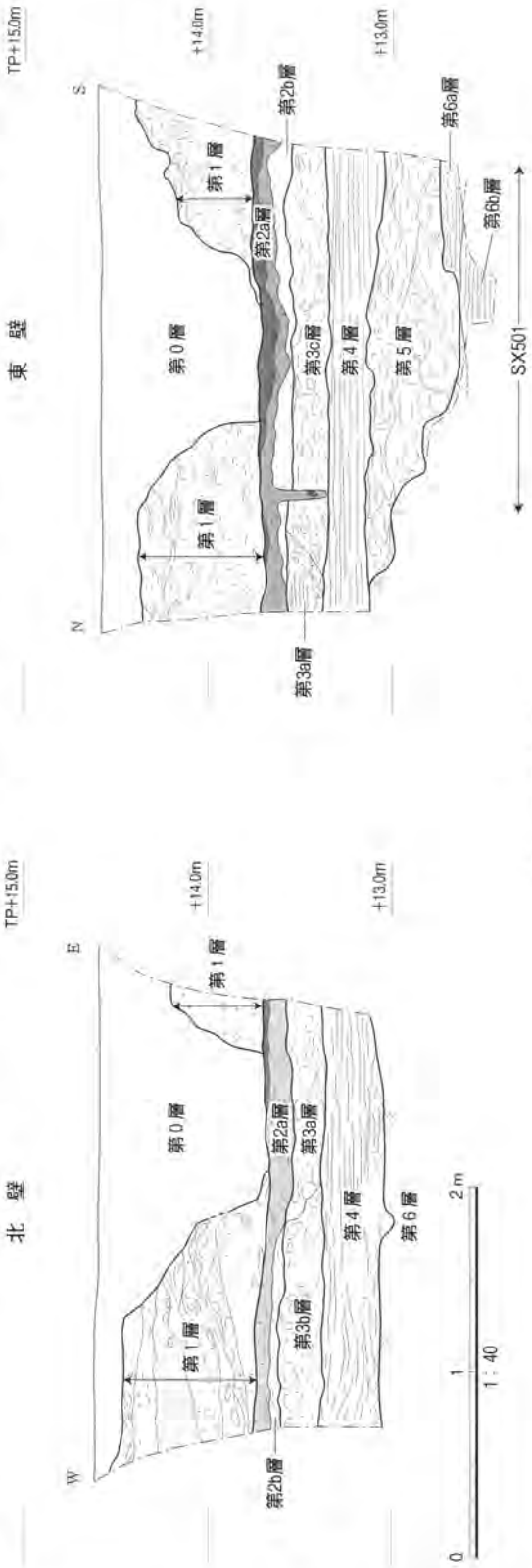


図4　地層断面図

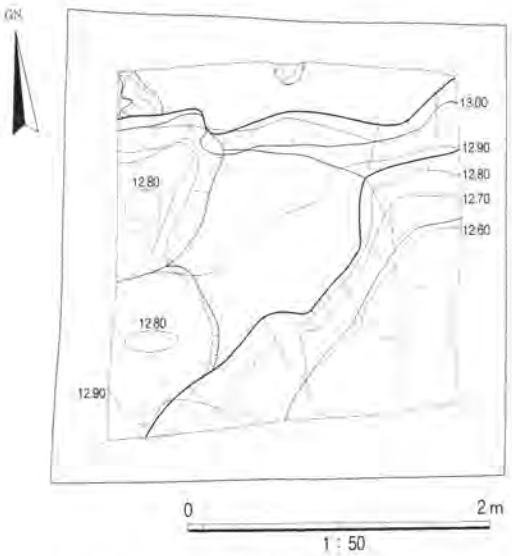


図５　調査区地形図(第６層上面)

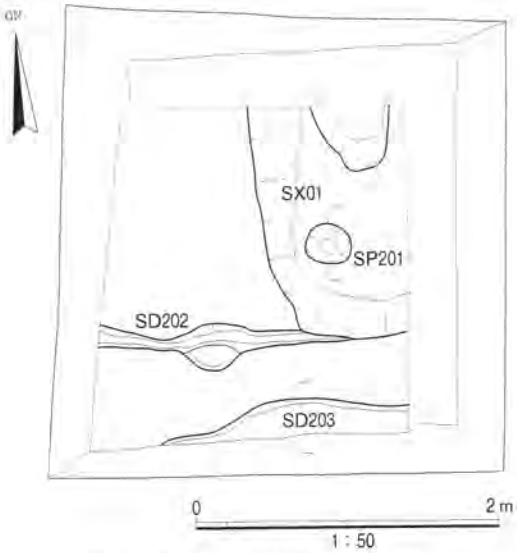


図６　第０層・第２層遺構平面図

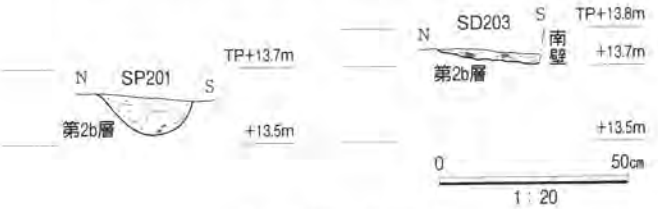


図７　遺構断面図

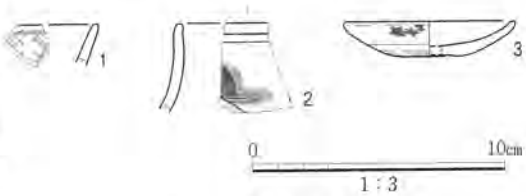


図８　出土遺物実測図
SX501(１)、第４層(２・３)

た(第４層)。ただし、SX501が溜池だった場合、第５層はSX501加工時の形成層の可能性もある。

ｂ．近世～近代の遺構(図６・７)

湿地の上を盛土して整地し(第３層)、耕作が行われたようである(第２層)。SP201は検出面での直径0.26mで、深さは0.10m。暗灰色(2.5Y4/2)の炭化物を含むシルト質細粒～極細粒砂で埋没している。SD202は、検出面での幅0.10～0.20m、東西長が1.70m、深さ0.05mの溝状遺構で、鍬による耕作痕跡の可能性がある。同様の規模で東西に延びるSD203は、南側が調査区外にわたるが、幅0.27m、深さ0.05mで、黄褐色(2.5Y5/3)の暗色シルト質細粒砂偽礫を多く含むシルト質細粒～中粒砂で埋まる。

ｃ．出土遺物(図８)

第５層からは、肥前磁器１が出土した。青磁染付碗の口縁部分である。内面の四方襷文は粗い。第４層からは、肥前磁器２と関西系陶器３が出土した。２の外面はコンニャク印判装飾され、やや端反りである。３は灯明皿で、外面は露胎で口縁部にススが付着し、内面は透明釉がかかる。１・３は18世紀後葉～末頃のものであるが、２は口縁部の形状から、19世紀初頭まで下る可能性がある。

３)まとめ

今回の調査では、阿倍寺の伽藍地の西側の旧地形と土地利用の変遷が明らかになった。

今回は、今までで最も調査面積が狭く出土遺物が少なかったが、全くと言って良いほど寺院に係る

発見がなかった。北に14mしか離れていないAB11－３・４次調査では、阿倍寺の西を画すると推定される大溝(SD201)から阿倍寺に係る瓦が出土したが、今回出土している瓦は、近～現代に下る燻瓦の細片ばかりで、調査地にもともとあった宅地に係わるものと考えられた。AB11－３・４次調査におけるSD201が南に続いているのであれば、本調査地は伽藍地「外」に位置する。今回、寺院に係る発見がなかったことが、SD201の区画溝としての性格を補強するとともに、阿倍寺の「寺域」に関する知見を増やしたと言っても良いのではなかろうか。

調査地周辺の西から東へ傾斜する谷と、水が溜まりやすい環境が明らかになったが、この地形と環境そのものが、阿倍寺の「寺域」を制限していたのではないだろうか。AB11－３・４次調査におけるSD201の方位が、AB98－５・６次調査やAB11－１・２次調査で見つかっている大溝より北からやや西へ傾いているのも、溝の掘削方向が地形と環境に制限された可能性がある。四天王寺の東側には谷、南側には河底谷があって、四天王寺の北側以外は谷地形によって寺域が制限されていたことが分かっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、市川創2011]。さらに[李陽浩2008]によると、中世四天王寺の建物あるいは大垣が、寺域東辺と西・南辺とでは方位が異なることが挙げられ、これは、谷などに規制される場合は寺域が方形でないこともあったと指摘している。阿倍寺もまさに同様の状況であったのではなかろうか。

今回も調査面積が十分に得られなかったため、中世阿倍寺の「伽藍地」、「寺域」の範囲や景観については推測の域を出ないが、さらなる調査の積み重ねにより、阿倍寺の歴史を明らかにしていきたい。

註)

(１) [大阪市文化財協会2001]などでは、大溝の性格を「寺域」を区画するものと表現していた。しかし、「寺域」とは「塔・金堂からなる伽藍地と僧坊・食堂・政所院などからなる僧地を内に含み、四周を門や遮蔽施設などで囲繞した、いわゆる寺院本体部分を指す」という[李2008]の定義に従うと、阿倍寺の「伽藍地」を区画する溝と表現するほうが適していると思われる。よって、この報告では「伽藍地」という用語を用いる。

(２) [大阪文化財研究所2012b]では、第2a層を、耕作に関連するような遺構はもちろん遺構そのものが検出されず、作土とする積極的な根拠がなかったため整地層としたが、土中に炭化物・酸化マンガン粒を多く含むことから、作土層である可能性もある。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、「岩崎邸建築に伴う発掘調査(ST94－６)」:『平成６年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.37－44

2008、「阿倍野筋2丁目における埋蔵文化財発掘調査(AB06－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.317－326

2010、「阿倍寺跡発掘調査(AB08－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.473－480

大阪市文化財協会2001、「阿倍寺跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―1998年度―』

2009、『阿倍野区松崎町三丁目における建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB09－１)報告書』

大阪文化財研究所2012a、『阿倍野区松崎町二丁目における建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB11－1)報告書』
2012b、『阿倍野区松崎町三丁目における建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB11－3)報告書』
明山大華1933、「阿部寺塔心礎に就て」:『考古学雑誌』第23巻第12号、pp.51－52
市川創2011、「考古学からみた中世四天王寺とその周辺」第50回1617会　発表資料
李陽浩2008、「古代四天王寺における寺域の再検討」:『建築史学』第50号、pp.2－30

第２層上面遺構検出状況
（西から）

第６層上面遺構検出状況
（北西から）

東壁地層断面
（北西から）

住吉区帝塚山東五丁目における建設工事に伴う
荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査(SG11－2)報告書

調 査 個 所	大阪市住吉区帝塚山東５丁目23－13
調 査 面 積	16㎡
調 査 期 間	平成23年10月21日～10月26日
調 査 主 体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、絹川一徳

1)調査に至る経緯と経過

調査地は大阪府の指定史跡に指定されている荘厳浄土寺の西側に位置する(図1)。荘厳浄土寺の創建年代は明らかではないが、応徳元(1084)年に住吉大社神主である津守国基により再興され、以後津守氏の庇護のもとに存続した。鎌倉時代には西大寺に末寺として属したが、室町時代後半には伽藍のほとんどが喪失し荒廃した。その後、17世紀には豊臣秀頼により本堂再建が行われたが、その本堂も現在は失われている。荘厳浄土寺境内遺跡は中・近世を中心とするもので、現在の境内と周辺が遺跡として周知されている。遺跡は上町台地の南部で細江川の北側に位置する。南側は細江川に向かって緩やかに下降しているが、東側は北北東－南南西の方向にある谷地形のために大きく落ち込んでいる。周辺には西約500mに住吉大社、北東約100mに弁天塚古墳、南西約500mに住吉行宮跡・津寺廃寺、南東側に南住吉遺跡がある。これまで寺院境内と隣接地を中心に試掘調査や遺物の表面採集が行われているが、本格的な発掘調査が実施されたのは寺院西側のSG86－1次と北西側のSG02－1次調査の2箇所のみである。SG86－1次調査では、近世に廃絶する南北方向の溝が検出され、埋土から平安～鎌倉時代の瓦片が出土した。SG02－1次調査では、飛鳥～奈良時代の溝、鎌倉時代の井戸・柱穴、江戸時代の井戸・池跡などが見つかっており、瓦を中心に中・近世の遺物が多数出土した[大阪市文化財協会2004]。

今回の調査は住宅建設に伴うもので、大阪市教育委員会が10月6日に試掘調査を行った結果、遺構の存在が確認されたため、本格的な発掘調査を実施することとなった。調査は10月21日から着手した。東西4m×南北4mの発掘区を設定し、重機により現代盛土と攪乱土を除去したのち、以下を人力により地層の掘削を行った。併せて遺構の検出・掘削とともに実測・写真撮影などの作業を適宜実施し、

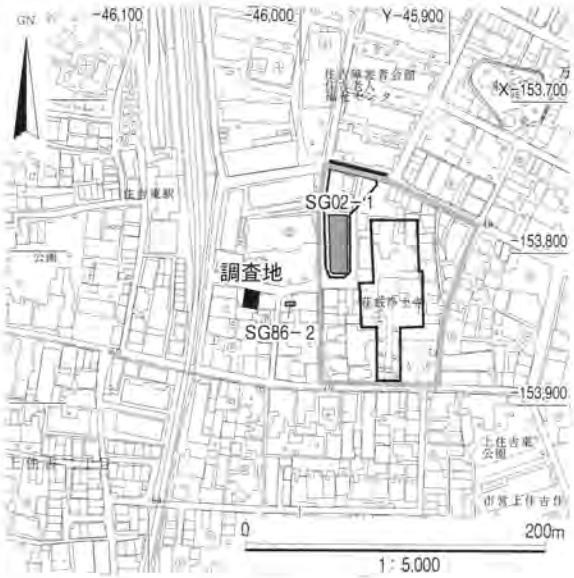


図1　調査地の位置

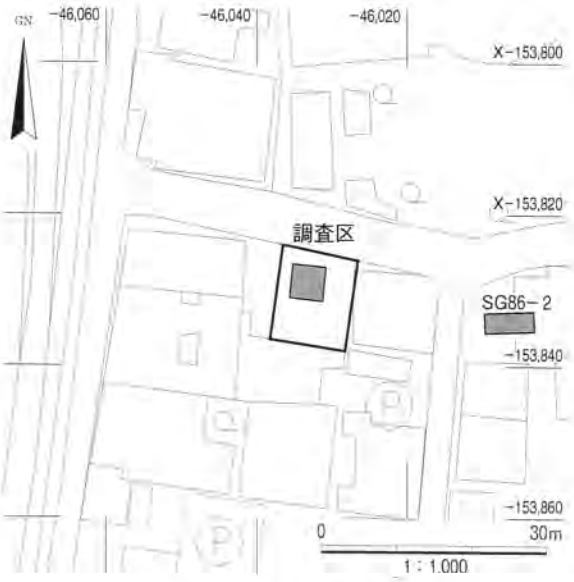


図2　試掘壙配置図

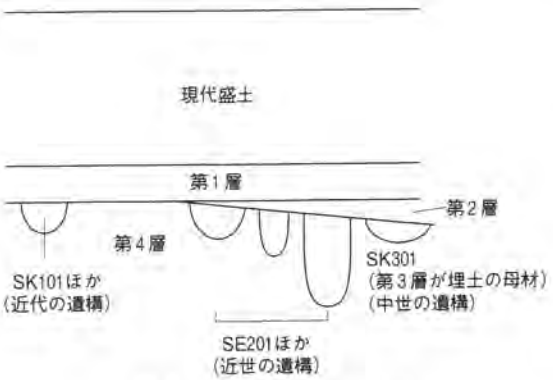


図3　地層と遺構の関係図

10月26日に埋戻しと資材・機材の撤収作業を行って、現地における全ての作業を完了した。

なお、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1／2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP＋○mと表記した。

2)調査の結果

i)層序(図3)

調査地は平坦で現地表の標高はTP＋7.3mであった。現代盛土が全域に40～50cmの厚さで堆積していた。現代盛土層以下では次の地層が確認できた。

第1層：黒褐色(10YR3/2)の粘土混り細粒砂質シルトの作土層で層厚は約10cmであった。大きく削平を受けており、調査区の東側で部分的に認められた。近代以降の作土層である。

第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)の細粒砂混り粘土質シルトの作土層で層厚は5cm以下であった。ほとんど削平されており、部分的に薄く堆積したのみで、大半は遺構埋土として認められた。出土遺物から16世紀後半～17世紀前半に形成された地層とみられる。

第3層：褐色(10YR4/6)の細礫および細粒～中粒砂混り粘土質シルトの作土層で、ほとんど削平されており、調査区の南東側で遺構埋土としてのみ認められた。SG02－1次調査地の第3層に対比され、中世の地層とみられる。

第4層：にぶい黄褐色または褐色(10YR4/3.5)の砂礫質粘土～砂礫層で更新世堆積物である。

調査区では、現代の攪乱によって第1層以下の地層の大半が削平を受けていた。そのため、すべての遺構検出作業は地山層である第4層上面で行った。

ii)遺構と遺物

a．中世の遺構と遺物

調査区の東側で土壙SK301を検出した(図4・5)。南北1.2m、東西0.9m以上、深さ0.2mの円形の土壙である。埋土は第3層の細礫および細粒～中粒砂混り粘土質シルトで、炭・焼土を多く含んでいた。遺物は認められなかったが、SG02－1次調査で検出された鎌倉時代の遺構群に対応するものと思われる。

b．近世の遺構と遺物

調査区全域で小穴SP203～205・208・210・211・214～221・223・224、SK202・206・213・222・225、溝SD207・209・212、井戸SE201の遺構を検出した(図4・5)。いずれも第2層が遺構埋土の母材となっている。

SP203～205・208・210・211・214～221・223・224は小穴である。調査区内では掘立柱建物や柵列として明確に組合うものは確認できなかったが、SP203・208・210・217・220はいずれも深さ30

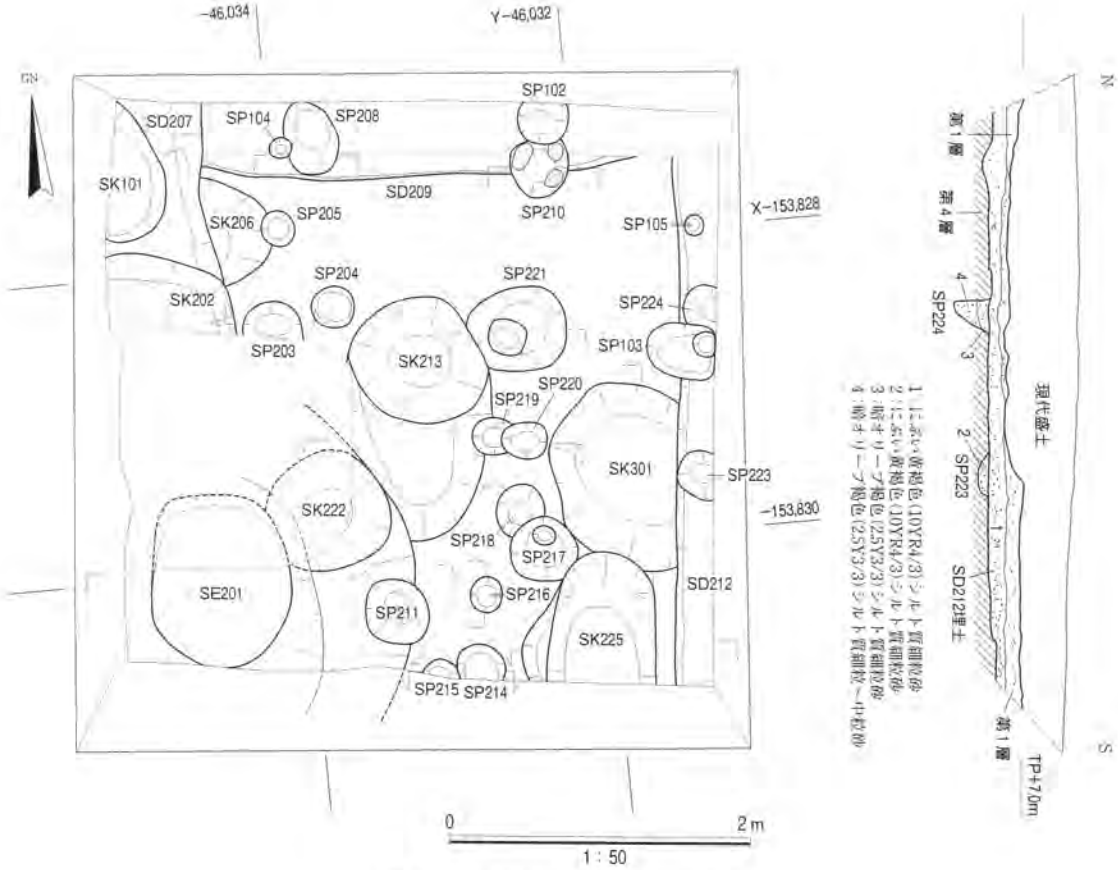


図4　遺構平面図および東壁断面図

cm以上で柱痕跡が認められるものがあり、東西または南北方向に並列していることから、これらは掘立柱建物などの柱穴であった可能性が高い。なお、SP210では柱を固定した根石がそのまま残されていた。

SK202・206・213・222・225、SD207・209・212は円形または楕円形の土壙である。SK202は、調査区内では全体の1/4が認められた。南北0.45m以上、東西0.8m以上、深さ0.2mであった。SK206はSD207とSP205が重複して遺構を切っているため、全体の1/2弱が残存する。南北0.7m、東西0.4m、深さ0.1mであった。SK213は調査区中央で認められた楕円形の二段に掘り込まれた土壙である。南北1.6m、東西0.9m以上、深さ0.85mであるが、北側は径0.8mの円形の土壙がさらに0.2mの深さで掘り込まれていた。西側がSE201と重複して遺構が切られている。土壙の深さからみて、井戸であった可能性がある。SK225は調査区の南東側で検出した長楕円形の土壙である。調査区内では北半部1/2が認められた。南北0.9m以上、東西0.85m、深さ0.28mであった。

SD207・212は南北方向の溝、209は東西方向の溝である(図4・5)。SD207は幅0.7m以上、深さ0.2mであるが、一部を調査区内で検出したのみで、全体の規模は不明である。SD209は幅約0.3mと推定され、深さは0.05mであった。鋤溝とみられる。SD212は幅0.25m以上、深さ0.1～0.15mで南北方向に調査区外へと延びている。鋤溝あるいは畝間溝など耕作に伴うものと考えられる。

SE201は調査区の南西側で検出した井戸である(図4・5)。井戸掘形は径2m以上で、中央には井戸側を抜き取ったとみられる隅丸方形の土壙が認められた。この土壙の大きさは南北1.15m、東西

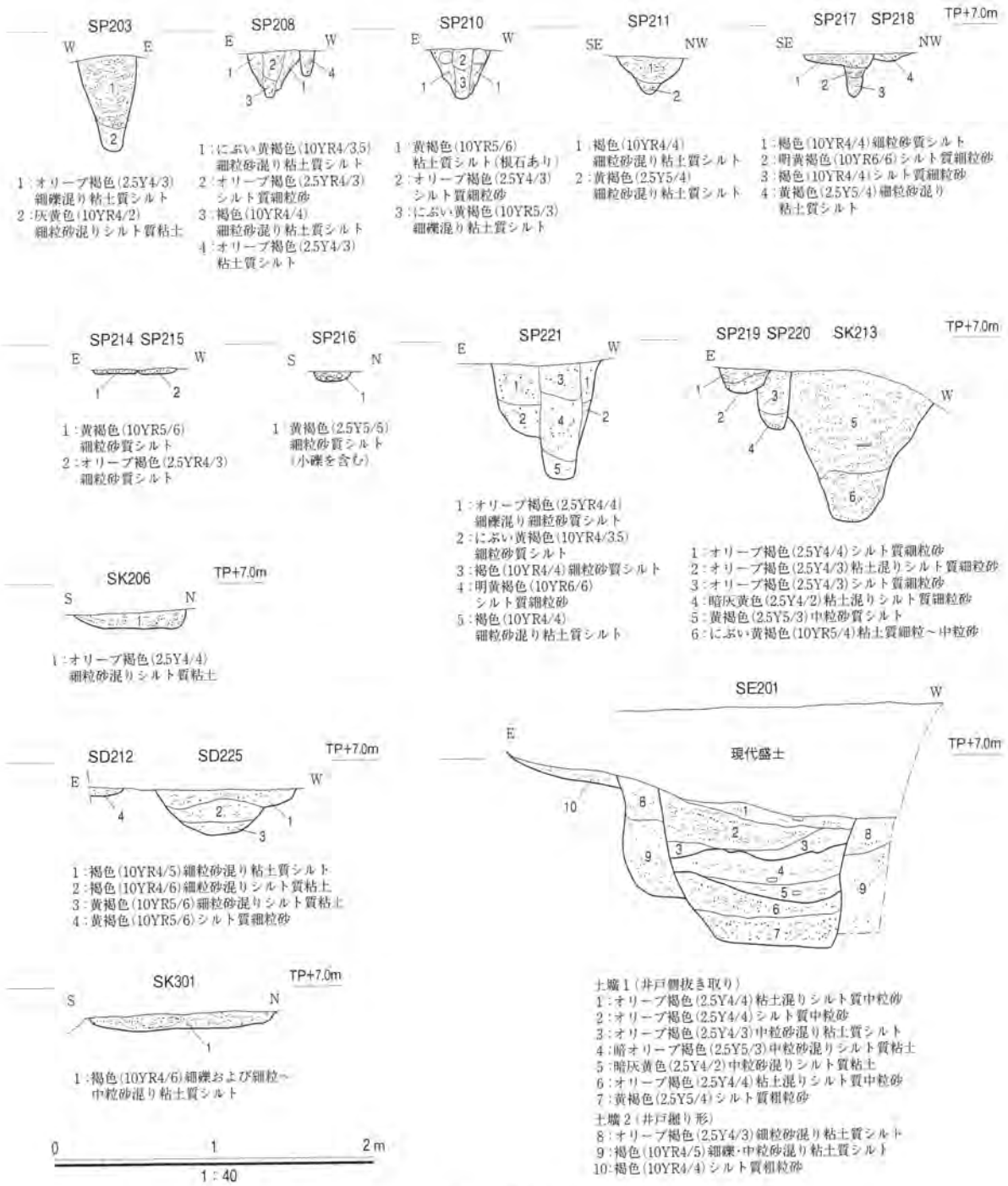


図5　遺構断面図

0.9m、深さ0.9mで、上部は現代の攪乱により削平されていた。この土壙の埋土からは、後述するように瓦や陶器、土師器など16世紀後半～17世紀前半を中心とする遺物が多数出土した。

近世の遺構に伴う出土遺物には土師器小皿・皿・羽釜、須恵器鉢、青磁椀、中国産青花皿、肥前陶器、備前焼壺、丹波焼壺、瓦などがある(図6)。

SP224からは土師器小皿2・皿3が出土した。2は胎土が灰白色で口縁部はヨコナデ、底部はナデで仕上げている。皿3は胎土がにぶい橙色で内面に煤が付着している。

SK202からは東播系須恵器片口鉢4が出土した。口縁端部がほぼ直立する。これらの遺物は13～14

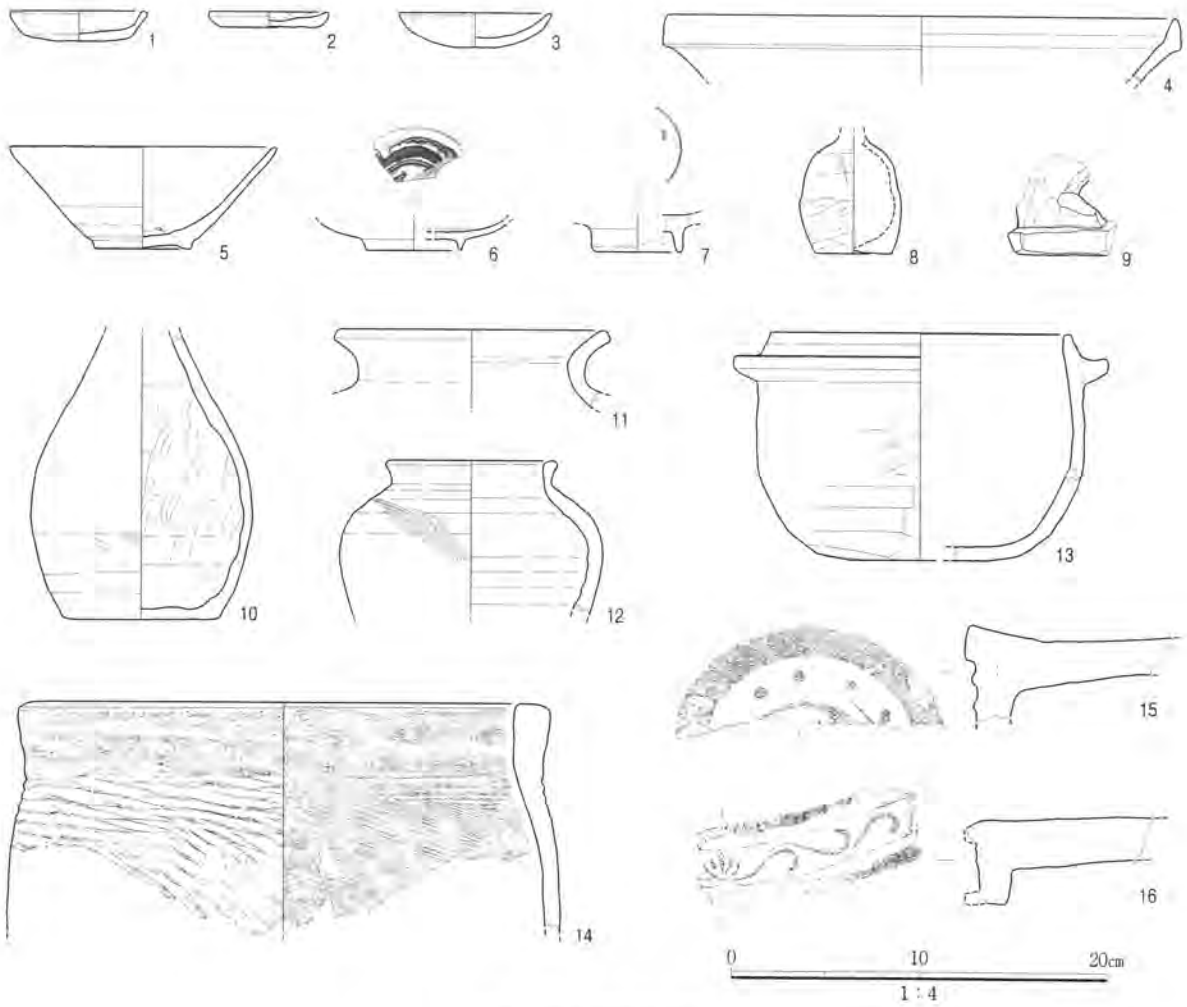


図6　出土遺物実測図

SK101(1)、SP224(2・3)、SK202(4)、SE201(5～16)

世紀のものであり、下位層からの混入品とみられる。

SE201からは瓦片をはじめ多数の遺物が出土した(図6－5～16)。主要なものを図6に掲載した。5は肥前陶器碗で体部に乳白色の釉がかかっている。体部から口縁にかけて直線的に外反する。6は景徳鎮窯の青花皿である。いずれも16世紀後半から17世紀前半のものであろう。7は龍泉窯の青磁椀で見込に文様が認められる。高台畳付と高台内部が露胎である。中世のもので、下位層からの混入品とみられる。8は備前焼の小徳利で、底部はヘラ切りによる。9は凝灰岩製の動物形である。稲荷狐を模したものであろう。10は肥前陶器徳利形瓶で、体部上半に白色の釉がかかっている。内面には当て具痕が残る。11は丹波焼壺、12は備前焼壺で、肩部にやや太い櫛描き様の施文が認められる。13は土師器羽釜で、口径が15.9cmの小型品である。鍔部から口縁にかけてはヨコナデ、体部下半はケズリにより仕上げられている。本品も中世後期のもので、混入品とみられる。14は土師器の長胴甕である。外面は平行タタキ、内面はハケメにより仕上げられている。15は左巻き三つ巴文の軒丸瓦である。瓦当裏面には布目痕が残る。16は軒平瓦で、中心飾りは五葉の蓮華、左右に唐草を三転させて圏線で囲んでいる。15・16は16世紀後半のものとみられる。以上のようにSE201から出土した遺物の多くは16世紀後半～17世紀前半のものであった。

c．近代の遺構

調査区の北側を中心にSK101、SP102～105を検出した(図３)。各遺構の埋土は共通しており、第１層を母材とするもので、暗褐色のシルト質細粒砂である。いずれも近代の遺構とみられる。SK101からは土師器小皿１が出土した(図５)が、中世後期のものとみられ、下位層からの混入品である。

３)まとめ

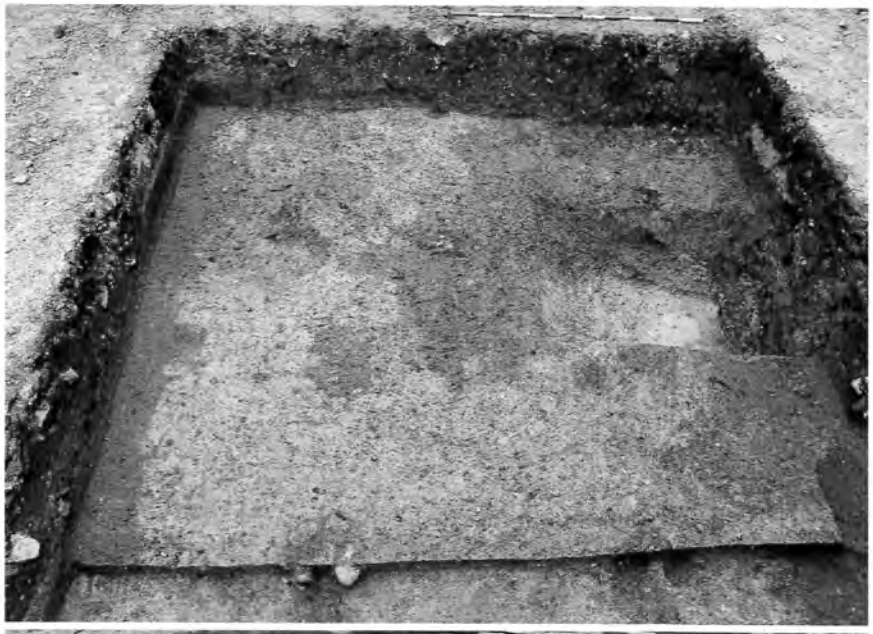
今回の調査では中世の遺構であるSK301と近世前半の井戸・柱穴・土壙などを検出した。後者のうちSE201からは豊臣期の遺物が多数出土した。荘厳浄土寺は16世紀前半以降、荒廃が進み、多くの堂宇が喪失し伽藍の大半が礎石のみになっていたが、その後、豊臣秀頼の復興によって慶長11(1606)年に本堂の再建が行われた[大阪市文化財協会2004]。今回、第２層が遺構埋土の母材となった近世の遺構群からは同時期の遺物が出土していることから、これらの遺構大半が近世初頭に行われた荘厳浄土寺の復興事業に関係する施設に伴うものであった可能性が高い。

今回の調査では、平安期の伽藍やそれに関連する遺構の検出はできなかったが、17世紀初頭に実施された大規模な寺院復興に関連するとみられる遺構群を検出した。当遺跡の調査事例は多くはなく、わずかな面積ではあるが、荘厳浄土寺の西側において近世前半の土地利用を明らかにできた意義は大きい。今後も当寺に関する考古学的知見の進展が望まれる。

引用文献

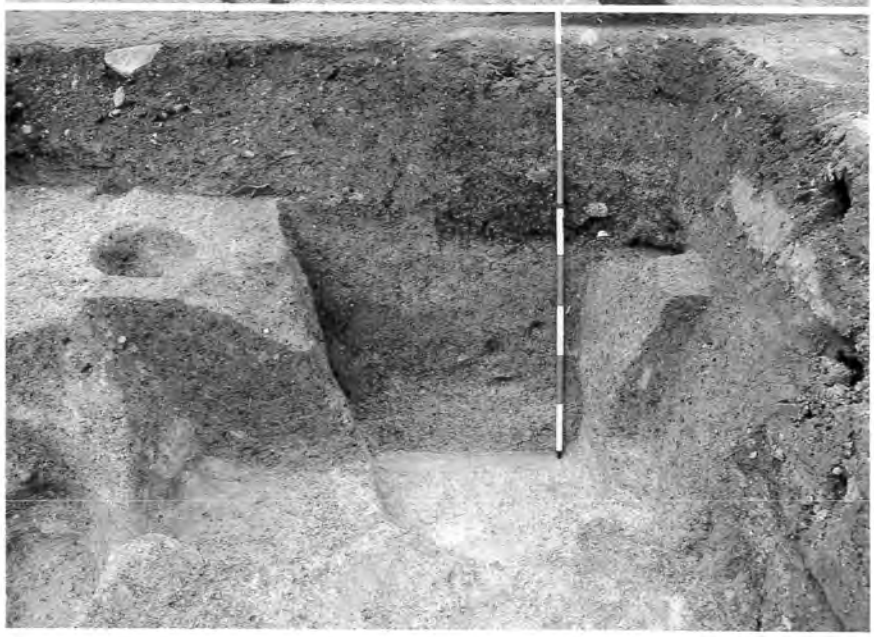
大阪市文化財協会2004、『荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査報告』

遺構検出状況
（北から）



遺構完掘状況
（北から）

SE201遺構埋土断面
（北から）



東住吉区山坂一丁目における建設工事に伴う
難波大道跡発掘調査(ND11－2)報告書

調査個所	大阪市東住吉区山坂1丁目100－18
調査面積	16㎡
調査期間	平成23年7月19日～7月23日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、難波宮朱雀大路からまっすぐ真南へ続く古代の道路跡とされる難波大道の推定地に当る(図1・2)。難波大道は大和川を越えたところでは推定位置で遺構が検出されているが、大阪市内では古くからの開発もあり確かな遺構は確認されていない。周辺では南西約130mのND94－13次調査で中世の溝や基壇などの可能性もある凝灰岩の破片、龍泉窯青磁などが出土し、調査地点南にある法楽寺との関係が推測された。また西100mのND06－1次調査では、中世後半の北でやや東に振る畠境界や耕作溝が検出され、方向が難波大道と近いことが指摘された。

本調査は、大阪市教育委員会が行った試掘調査で中世の遺物包含層が検出されたことから実施した。南端では地山が現地表下0.5mで検出されたが、調査区の大部分を北へ深くなる落込みSX501が占め、北半部で現地表下約1.7mまで調査したが、それ以下は掘削せずに埋戻した。本報告では方位は座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3～5)

第1層：にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質粘土層で、層厚は22cmである。近現代の水田作土である。

第2層：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土層で、最大層厚は28cmである。近世の水田作土で、18世紀後半頃の土師器焙烙3が出土した(図4)。

第3層：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト～粘土層で、最大層厚は43cmである。下部に偽礫が残るが、

図1　調査地位置図

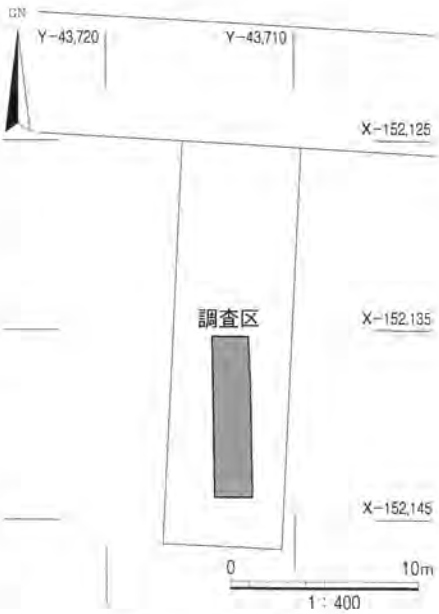


図2　調査区位置図

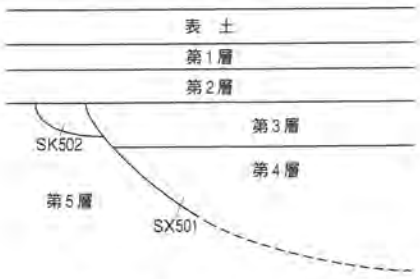


図3　地層と遺構の関係図

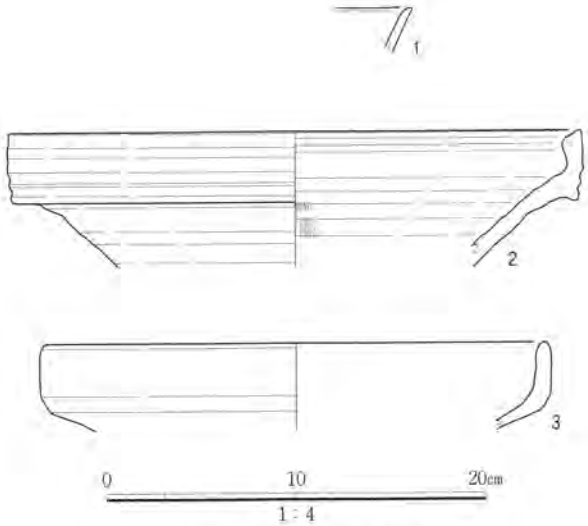


図4　出土遺物実測図
SX501（1・2）、第2層（3）

中位から上部は作土化している。中国製白磁碗1と備前焼擂鉢2が出土し、2から16世紀後半と推定される。

第4層：SX501の埋め土で、層厚は80cm以上である。最下部に褐灰色(7.5YR6/1)の薄い水成層があり、黄褐色(10YR5/6)細粒砂～シルト・灰黄褐色(10YR6/2)シルトなどの偽礫からなる。

第5層：上部は明黄褐色(2.5Y7/6)細粒砂層、下部は極粗粒砂～細礫層である。当地のいわゆる地山である。

ii）遺構と遺物（図4・5）

SX501　南北8m以上、深さ1.2m以上ある大きな落込みである。南から北へ深くなり、底は出ていない。その規模や南肩の形態から人工のものではないと推定され、東西方向の小さな開析谷などの可能性がある。第3層の出土遺物からSX501が埋められたのは16世紀後半と考えられる。

SK502　調査区南西部にある第5層上面検出の土壙である。南北1.3m以上、東西0.7m以上、深さ0.5mで、埋土は

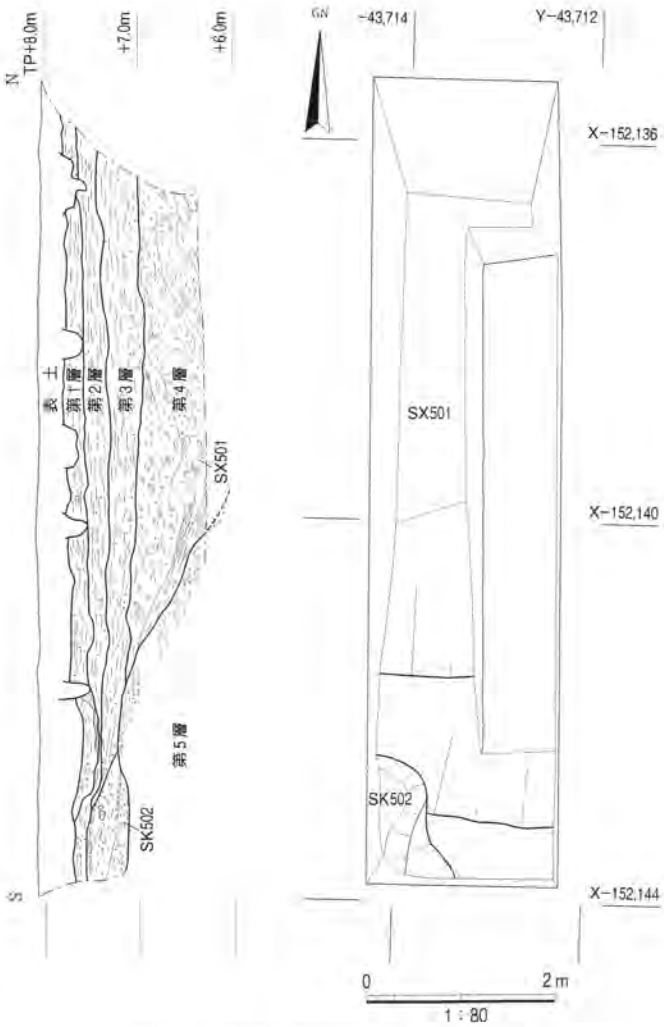


図5　西壁地層断面図および遺構平面図

黄褐色(10YR5/6)粗粒砂質シルトである。時期は判然としないが、中世まで下る可能性が高い。

3)まとめ

上町台地には数多くの埋没した谷があり、調査地周辺の山坂・南田辺地域にも埋もれている可能性がある。難波大道はこれらを乗り越えなければ南北に通すことはできず、難波大道や古代～中世の集落との関係で、旧地形のデータが必要である。また現状では手がかりがないが、SX501が埋められた契機も法楽寺や周辺の集落の歴史と関係があろう。

調査区全景
（南から）

SX501（北から）

SX501断面
（北東から）

東住吉区南田辺一丁目における建設工事に伴う
難波大道跡発掘調査(ND11－4)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区南田辺１丁目４－14
調 査 面 積　18㎡
調 査 期 間　平成23年７月14日～７月21日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、難波宮朱雀大路からまっすぐ真南へ続く古代の道路跡とされる難波大道の推定地に当る(図1・2)。難波大道は大和川を越えたところでは推定位置で遺構が検出されているが、大阪市内では古くからの開発もあり確かな遺構は確認されていない。周辺では北北西約130mのND90－10・94－15次調査で6世紀の掘立柱建物や溝が検出され、この時期の集落が存在することがわかった。北西約50mのND10－1次調査では、7世紀後半～8世紀の遺物を出土する南北方向の幅3m以上の溝が検出され、この時期の集落が近くにあることが予測されるとともに、6世紀の集落と関係する可能性のある柱穴も見つかった。

本調査は、大阪市教育委員会が行った試掘調査で中世の遺物包含層が検出されたことから実施した。中央部で中世の土壙、南部で古代の2時期の柱穴を調査した後、埋戻した。本報告では方位は座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第1層：黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルト層で、SK01の埋土である。13～14世紀と推定される。

第2層：明黄褐色(10YR6/8)細粒砂質シルト層で、いわゆる地山である。

ii)遺構と遺物(図4・5)

最古の遺構は柱穴SP03・06で構成される掘立柱建物SB08である。SB08は柱間2.20mで、柱穴が東西に長いことと北側に組合う柱穴がないことから、南に拡がる東西棟の可能性が高いと考えられる。

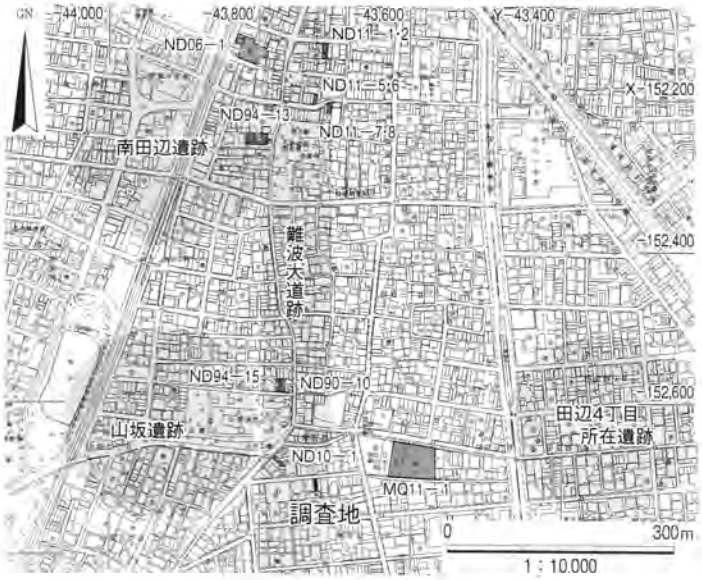


図1　調査地位置図

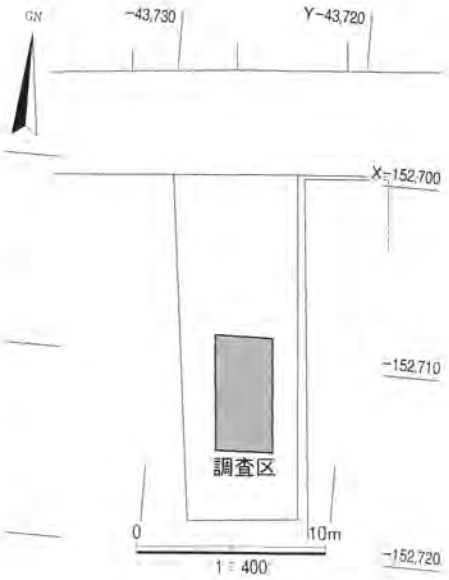


図2　調査区位置図

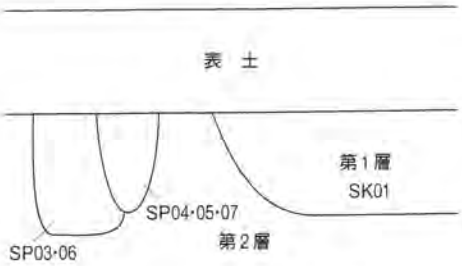


図3　地層と遺構の関係図

方向はほぼ真東西に合っており、東で約3°南へ振っている。SP03は長さ1.05m、幅0.77m、深さ0.60mあり、柱痕跡は直径29cmである。SP06は長さ0.85m以上、幅0.65m、深さ0.49mあり、柱痕跡は27cmである。時期が判別できる最新の遺物はSP03出土の須恵器杯1（図5）で、SB08はTK209型式以降である。柱穴の形態と大きさ、ND10－1次調査の7世紀後半～8世紀の遺物を出土する南北方向の溝の存在などから、少なくとも7～8世紀の間と推定できよう。

次にSP04・05・07の一群があり、SP07がSP06を切る。柱痕跡を判別できていないが、深さなどから建物の柱穴であるのはまちがいない。直径0.35～0.45mの円形で、深さはSP04で0.53m、SP05で0.64mである。SP07から土師器椀2が出土しており、10世紀末～11世紀前半の建物があったと考

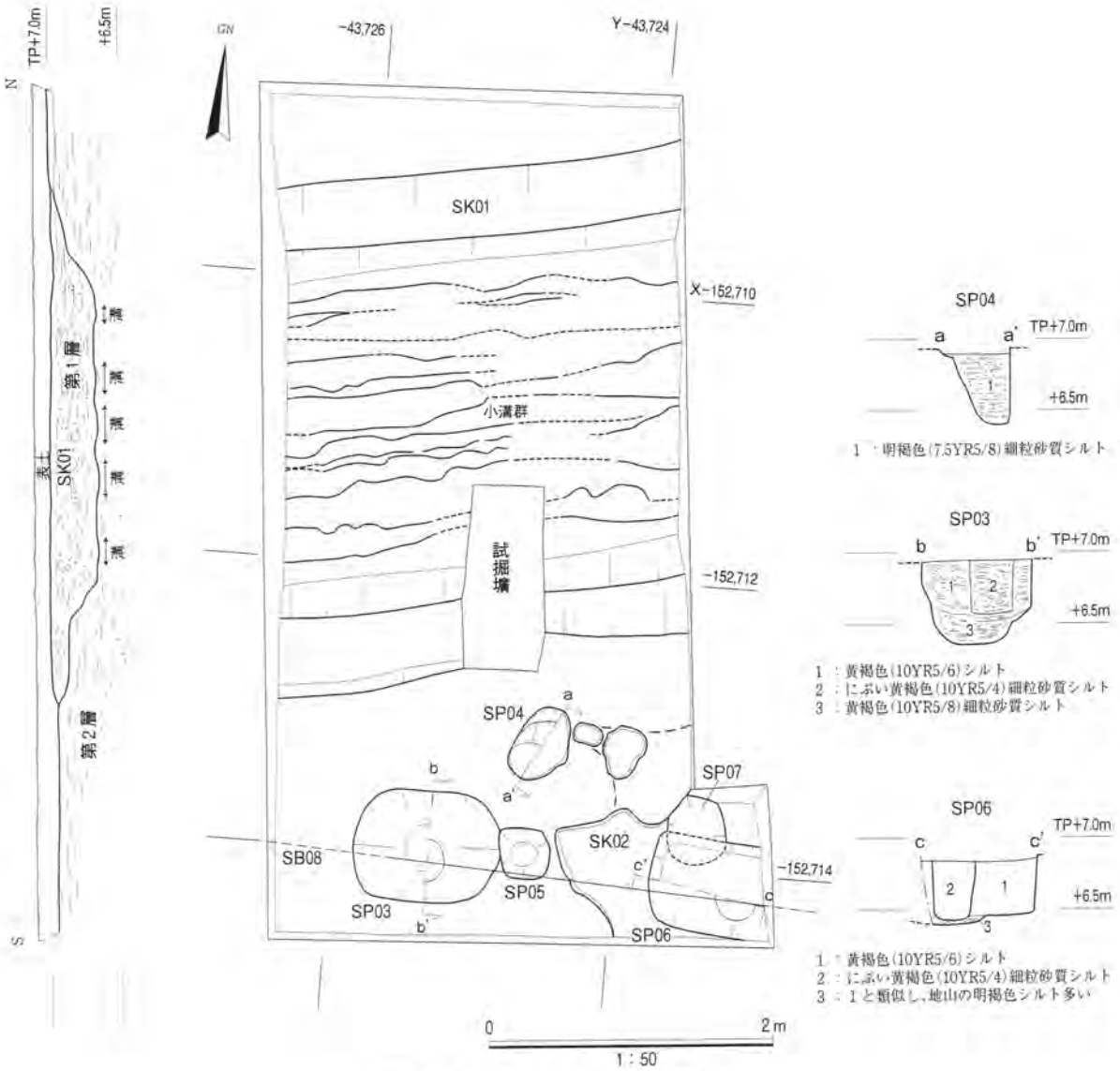


図4　西壁地層断面図および遺構平面図

えられる。

中世の遺構にはSK01がある。幅約3.5m、深さ0.45mの土壙で、肩が直線的に東西方向に延びる。埋土は作土に似て底に東西方向の小溝群が見える。耕作に係る遺構と推定するが、用途はよくわからない。SK01からは瓦器椀4～6、同皿3が出土した。遺構の時期は13～14世紀と推定される。

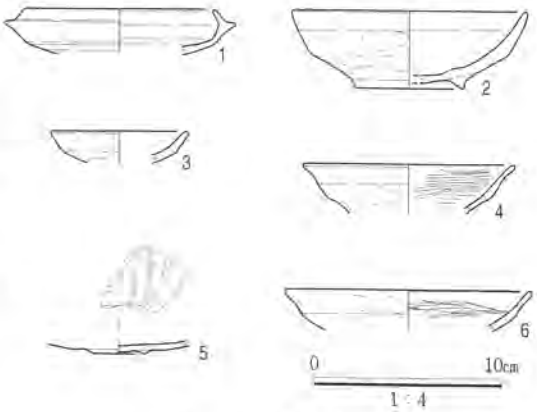


図5　出土遺物実測図
SP03(1)、SP07(2)、SK01(3～6)

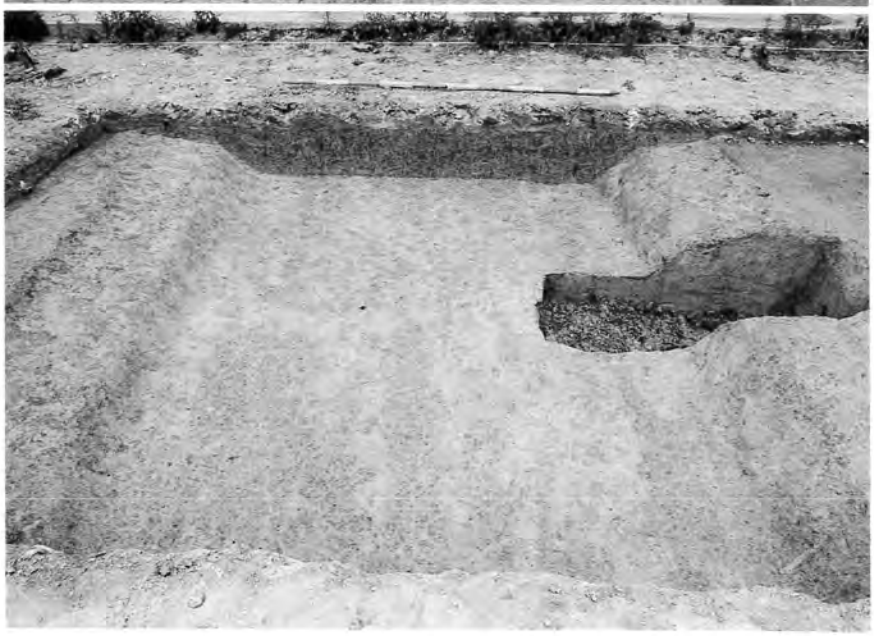
3)まとめ

本調査では、7～8世紀と推定されるSB08が発見されたことが大きな成果である。SB08は真東西に合っており、柱や柱穴もある程度大きく、今後の周辺での当該期の建物群の検出が期待できる。「田辺」の名は古代の豪族である田辺史に由来するとされ、これとの関係も想起される。また真東西に近い建物方位は、難波大道の設置との関係も考慮しなければならない。さらに10～11世紀にも周辺に集落が拡がっていたと考えられる。今後は、山坂神社周辺では6世紀の集落、そこから東側では7～8世紀の建物と11～12世紀の集落などを念頭に成果を挙げていかなければならない。

調査地全景
（南から）

SB08（西から）

SK01と小溝群
（西から）



東住吉区山坂一丁目95における建設工事に伴う
難波大道跡発掘調査(ND11－6)報告書

調査個所	大阪市東住吉区山坂1丁目95－1・2
調査面積	10㎡
調査期間	平成23年7月21日～7月22日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、平田洋司

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は上町台地上にあり、難波宮から南下する古代の道路跡とされる難波大道の推定地内に位置する(図1)。難波大道跡については大阪市内では後世の開発による削平もあり未検出である。近隣の遺跡としては西に中世の集落跡とされる南田辺遺跡がある。周辺の調査としては南東約100mの地点で行われたND94－13次調査があり、中世の溝のほか、基壇の可能性がある凝灰岩の破片や龍泉窯青磁などが出土し、東に位置する平安時代末に平重盛が開いた寺とされる法楽寺との関係が推測された。また、北西約100mのND06－1次調査では、中世後半の北でやや東に振る畠の境界や耕作溝が検出され、難波大道との方位が近いことが指摘された。さらに今回の調査とほぼ並行して行われた北約60mのND11－1・2次調査では、16世紀後半に埋められた谷が検出され、南東約20mのND11－7・8次調査では13～14世紀代の井戸や土壙、柱穴などが見つかっている。このように調査地周辺では中世の遺構・遺物が検出されており、南に位置する法楽寺との関係が注目される地点である。

工事に先立ち大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、中世の可能性がある地層と遺構とが検出されたことから、本調査を実施することとなった。敷地北側に東西2.5m、南北5mの調査区を設定する予定であったが、隣地との余地および残土置場を確保する必要から、東西幅は2mに減じて調査を行った(図2)。重機による掘削は近世作土層である後述の第3層までとし、以下は人力による掘削で進めた。第5層上面にて遺構検出・掘削・記録などの諸作業を行い、調査終了後は埋戻し作業を実施し、現地における作業を完了した。

本報告では方位は座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP＋○mと表記した。

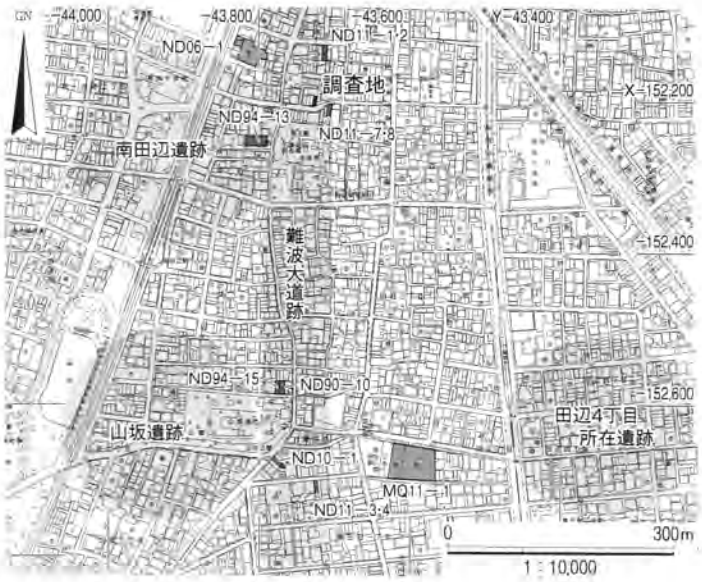


図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

本調査地では地層を以下の5層に大別した。

第1層：現代の盛土層で、層厚は10～20cmである。

第2層：黒褐色(10YR2/3)シルト偽礫を多量に含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂からなる近代以降の整地層で、層厚は30cmである。北東方向から盛られている。偽礫として含まれるシルトは水漬きの堆積物に由来しており、近隣溝あるいは池が存在し、これらを浚渫したものと推定しうる。

第3層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトからなる作土層で、層厚は10cmである。遺物は出土しなかったが、周辺の調査成果から江戸時代の地層と判断できる。

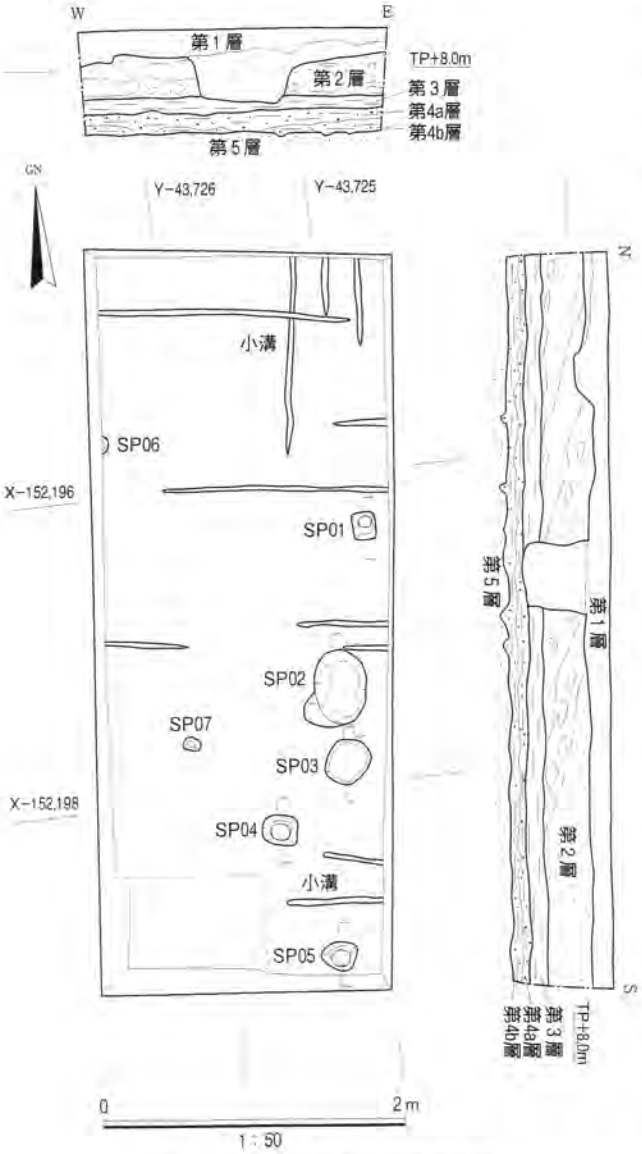


図4　調査地の層序と遺構平面図

第4層：第4a層・第4b層に細分した。いずれも作土層である。第4a層は褐色(10YR4/4)中粒～粗粒砂質シルトからなり、層厚は10cm未満である。下面には耕作に伴う凹凸が認められた。第4b層は褐色(10YR4/4)細粒～中粒砂質シルトからなり、層厚は10cm未満である。下面にて耕作に伴う小溝が確認された。これら第4層からは土師器あるいは瓦細片がごく少量出土したのみであり、直接的に時期を比定することはできないが、試掘調査時に瓦器片が出土していること、および近隣のND11－7・8次調査の成果から、鎌倉～室町時代と推定できる。

第5層：明黄褐色(7.5YR5/8)細粒砂からなる段丘構成層である。本層上面にて柱穴・小穴が検出された。

ii)遺構と遺物(図4・5)

第5層上面にて柱穴・小穴SP01～06を第4b層下面にて小溝群を検出した。以下おもなものについて記す。

SP01　一辺0.2mの平面形が隅丸方形を呈する柱穴で、深さは0.2mである。柱痕跡は直径9cmであった。

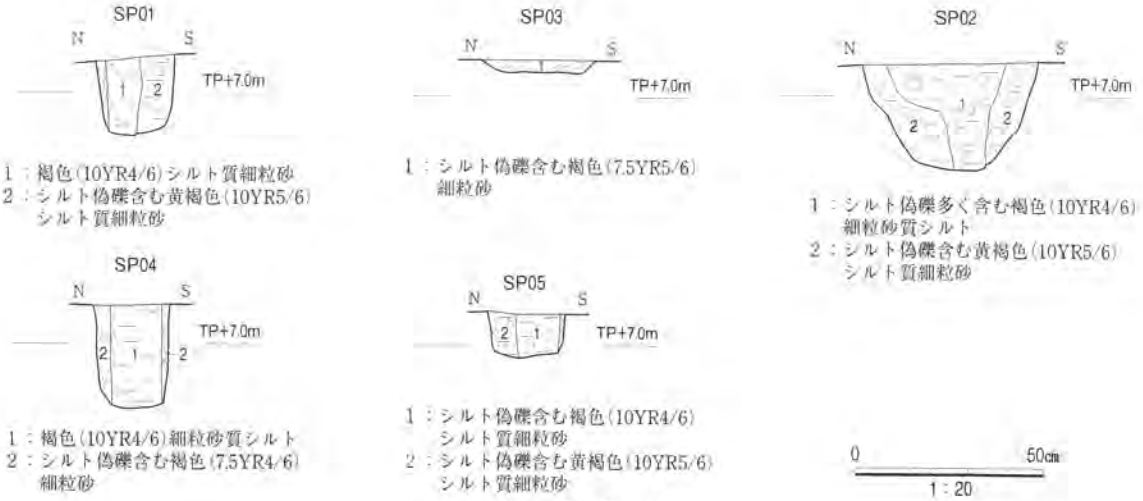


図5　遺構断面図

SP02　直径0.4mの平面形が円形の柱穴で、深さは0.3mである。柱の抜取痕が認められ、底付近では柱痕跡が直径10cmで確認できた。

SP03　直径0.3m、深さ0.1m未満の小穴で、柱痕跡は確認できなかった。

SP04　一辺0.2mの平面形が隅丸方形を呈する柱穴で、深さは0.3mである。柱痕跡は直径13cmであった。

SP05　直径0.2mの平面形が円形を呈する柱穴で、深さは0.1mである。柱痕跡は直径12cmであった。

SP06　直径0.1m、深さ0.1m未満の小穴である。

SP07　直径0.1m、深さ0.1m未満の小穴である。柱痕跡は確認されなかった。

これらの柱穴および小穴は建物として復元することはできなかったが、隅丸方形の柱穴の向きからは南北あるいは東西方向の建物が存在した可能性がある。また、これらの遺構からは遺物が出土せず、直接時期を決することが困難であるが、ND11－7・8次調査の成果から、鎌倉～室町時代と推定できよう。

小溝　第4b層下面で検出した。幅深さともに0.1m未満である。耕作に伴う小溝であろう。断面形は「V」字状であり、先端の尖った耕具によると考えられる。方位は北でやや東、あるいは東でやや南に振る。遺物は出土しなかった。

3）まとめ

今回検出した遺構は鎌倉～室町時代と考えられ、周辺のこれまでの調査成果とあわせ、近隣に中世の集落が展開していたといえ、南に位置する法楽寺との関連が注目される。また、今回の調査結果からは建物が建つ場所から耕作地への変化を確認することができた。さらなる調査の積重ねにより、より具体的な様相や変遷が明らかとなろう。

調査地全景
（北から）

調査地全景
（南から）

東壁地層断面
（南西から）

東住吉区山坂一丁目89－６における建設工事に伴う
難波大道跡発掘調査（ND11－８）報告書

調査個所	大阪市東住吉区山坂1丁目89－6
調査面積	12㎡
調査期間	平成23年7月29日～7月30日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、難波宮朱雀大路からまっすぐ真南へ延びる古代の道路跡とされる難波大道の推定地内、法楽寺のすぐ北東に当る(図1・2)。周辺では西約100mのND94－13次調査で中世の溝や基壇などの可能性もある凝灰岩の破片、龍泉窯青磁などが出土し、調査地点南にある法楽寺との関係が注目された。また、北西130mのND06－1次調査では、中世後半の北でやや東に振る畠境界や耕作溝が検出され、方向が難波大道と近いことが指摘された。さらに近年では北西20mのND11－5・6次調査では中世と考えられる小穴、北70mのND11－1・2次調査では中世まで下る可能性が高い土壙や、16世紀後半に埋め立てられたと考えられる大きな落込みが検出された。

本調査は、大阪市教育委員会が行った試掘調査で中世の遺物包含層が検出されたことから実施した。敷地南側に、3m×4mの調査区を設け、現地表下約0.6mまでの現代盛土および近世以降の作土層(第1層)を重機で掘削し、以下を人力で行った。本報告では方位は座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第1層：褐色(10Y4/4)細粒砂質シルト層で、層厚30～50cmである。近世以降の作土である。

第2層：粘性が強い、にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂質シルト層で、層厚15～25cmである。中世の包含層で、13～14世紀代の瓦器椀の小片が出土した。

第3層：明黄褐色(10YR6/6)細粒砂質シルト層で、地山である。

図1　調査地位置図

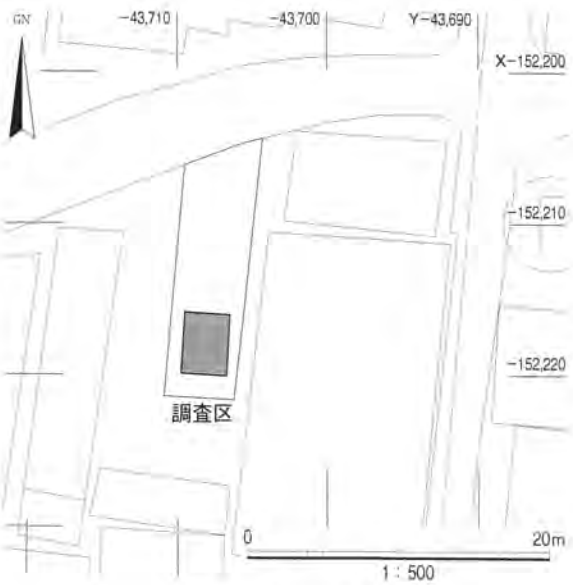


図2　調査区位置図

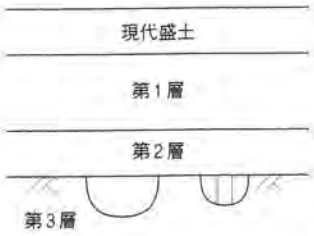


図3　地層と遺構の関係図

ii)遺構と遺物(図4・5)

旧地形は南が高く、北に緩やかに傾斜する。地山上面で、柱穴・井戸・土壙などおもに中世に属する遺構を約10基検出した。

SE01　径0.70～0.75mの素掘り井戸で、埋土は偽礫を多く含む黒褐色細粒砂質シルトである。遺構の保存が可能であったため、掘削は深さ0.7mまでに留めた。埋土からは、瓦器椀1・2、三足釜4が出土した。1・2は和泉型の瓦器椀で、内面に疎らな平行線状の暗文を施し、4の三足釜とともに13世紀代に位置づけられる。

SK02　幅1.9m、長さ2.9m以上、深さ0.4mで、平面形は方形を呈する遺構である。底は平坦で、側面の立ち上がりが直線的である。区画溝の可能性も考えられる。主軸は正方位に対し、約15度東に振る。埋土はオリーブ黒色極粗粒砂質シルトを主体とする埋戻し土で、土師器皿・瓦器椀の小片が出土した。

SP03　径0.2m、深さ0.2mの小穴である。遺物は出土しなかったが、埋土は偽礫を含む褐色細粒砂質シルトであり、中世のものと考えられる。

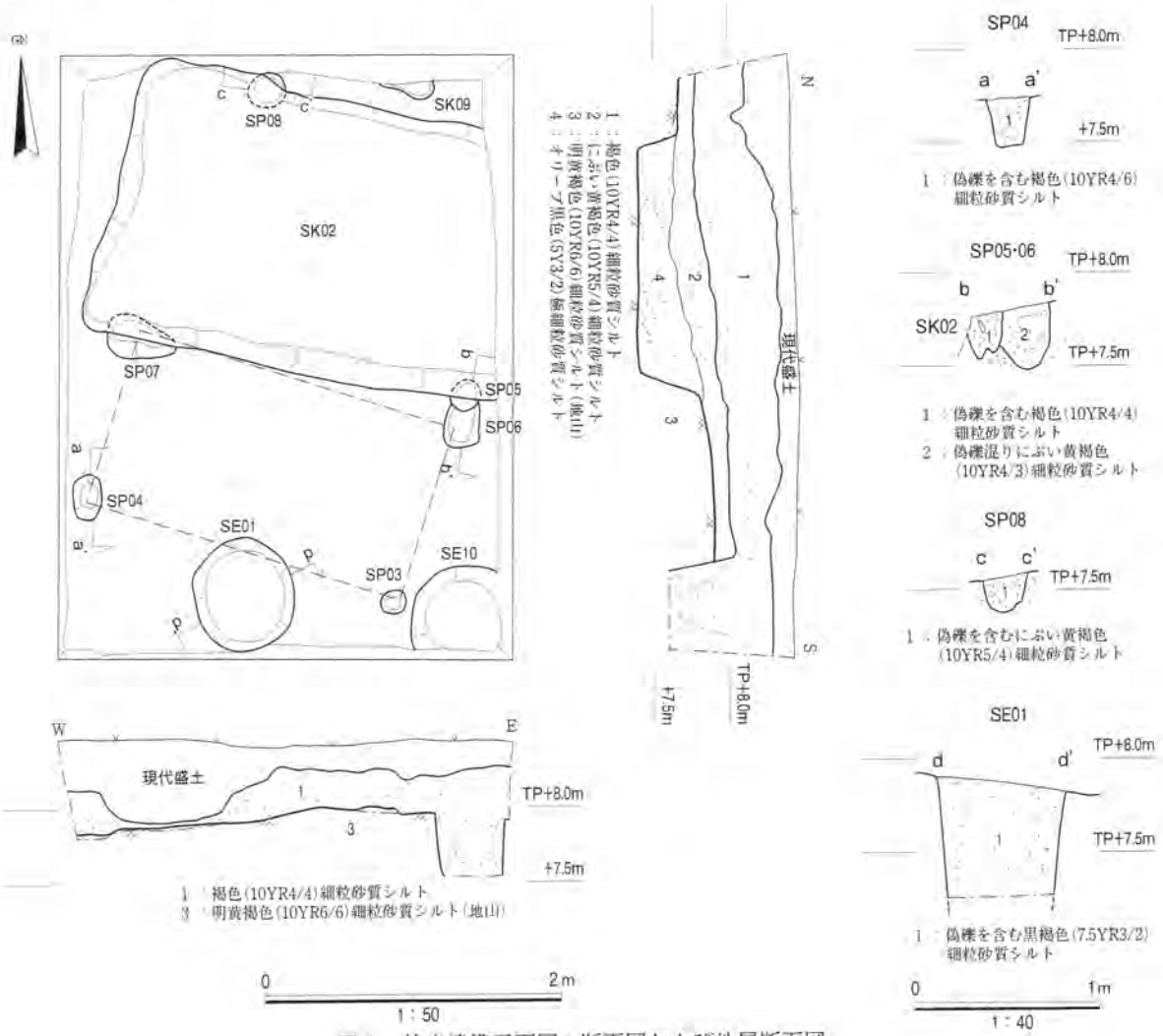


図4　検出遺構平面図・断面図および地層断面図

図5　出土遺物実測図

SE01(1・2・4)、SP05(3)

SP04　幅0.2m、長さ0.3m、深さ0.3mの柱穴である。埋土は偽礫を含む褐色細粒砂質シルトであり、13世紀代の瓦器椀の小片が出土した。

SP05　一辺0.2m、長さ0.2m、深さ0.2mの柱穴で、埋土は偽礫を含む褐色細粒砂質シルトであり、瓦器椀3のほか、土師器皿・東播系須恵器鉢の小片が出土した。SP06を切る。3は内面に粗雑な渦巻き状の暗文を施し、高台のない和泉型の瓦器椀で、おおむね13世紀末～14世紀初頭に位置づけられる。

SP06　幅0.2m、長さ0.4m、深さ0.4mの柱穴で、埋土は偽礫を含む褐色細粒砂質シルトである。

なお、SP03·04·06·07は組み合い、掘立柱建物跡となる可能性がある。その場合の規模は、東西2.2m、南北1.2mである。

SP07　幅0.3m、長さ0.5m、深さ0.2mの柱穴で、埋土は偽礫を含む褐色細粒砂質シルトである。

SP08　幅0.3m、深さ0.3m、深さ0.2mの柱穴で、埋土は偽礫を含む褐色細粒砂質シルトである。

SK09　幅0.2m以上、長さ0.4m以上、深さ0.1mの土壙で、埋土は偽礫を含む褐色細粒砂質シルトである。

SE10　径0.8mの近世以降の素掘りの井戸である。埋土からは肥前磁器・関西系陶磁器の小片が出土した。

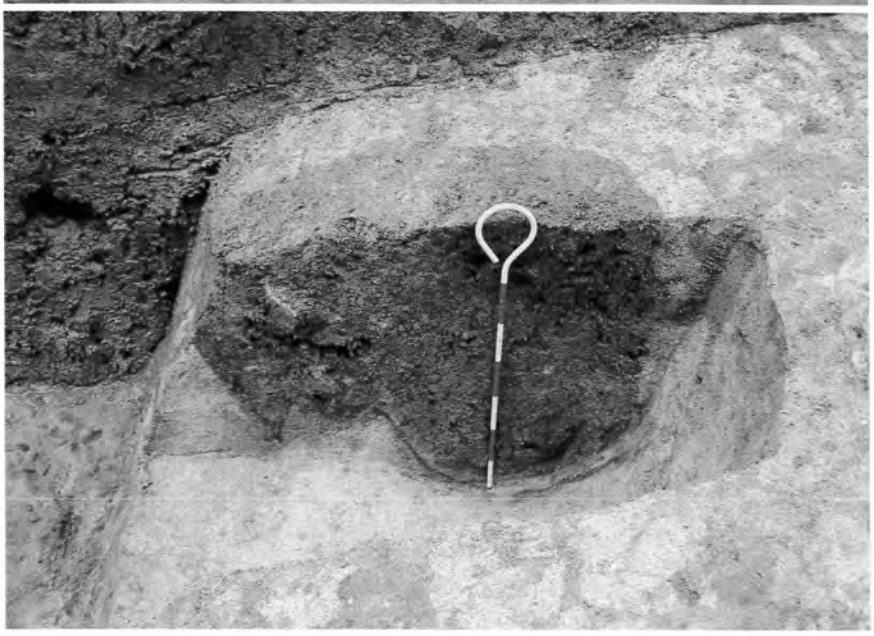
3)まとめ

今回の調査で、法楽寺のすぐ北東に13～14世紀の生活空間が拡がっていることが明らかになった。法楽寺は、現在の本堂·堂舎は元亀2(1571)年の織田信長の兵火以後の再建であるが、治承2年(1178)に平重盛が開いた寺との伝承がある。現在、「田辺のお不動さん」として広く地域に親しまれている当寺院の成立に関わる可能性のある貴重な成果が得られた。

遺構検出状況
（北から）

東壁地層断面
（西から）

SP05・06
（西から）



東住吉区鷹合二丁目における建設工事に伴う
酒君塚古墳発掘調査(SA11－2)報告書

調査個所	大阪市東住吉区鷹合２丁目47－８・47－９
調査面積	30㎡
調査期間	平成24年２月９日～２月16日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南秀雄、平田洋司

1）調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の東縁部に位置する。調査地の東には今川、西には駒川がそれぞれ北流しており、これらに挟まれた微高地上に立地している。近隣の遺跡としては北西約50mの地点に酒君塚古墳がある（図１）。酒君塚古墳は『日本書紀』仁徳天皇紀にある酒君伝承に基づいた古墳として知られているが、その実態は長らく不明であった。平成14年に公園整備の一環としてSA01－２次調査が行われた［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003］。この結果、現在の墳丘状の形は江戸時代以降に施された約２mもの盛土によることが明らかとなった。ただし、この盛土の下位には削平は受けているものの古い時期の盛土が遺存しており、埴輪片が出土したことからも本来この地に古墳が存在した可能性が高くなった。また、墳丘下の旧地表面からは庄内期の土器が出土し、周辺に当時の遺跡が存在していたことを示す資料となった。

今回調査地において大阪市教育委員会によって試掘調査が行われたところ、弥生時代前期の土器を多く含む地層が約60cm確認されたことから調査を実施することとなった。現地における調査は平成24年２月９日より開始した。敷地内に排土を仮置きする必要があることから、調査区は東西９m、南北３mとし（図２）、江戸時代以降に相当する後述の第３層までを重機によって除去した。その後再び重機により第４層を除去し、遺構検出作業・記録作業を行った。途中、古墳時代の竪穴建物と弥生時代前期の土器を多く含む土壙が見つかったことから、これらについては一部調査区を拡張し、その全容の把握に努めた。これらの拡張を含む最終的な調査面積は30㎡である。２月16日に埋戻し作業も含め、現地における作業を完了した。

基準点はmagellan社製Pro Mark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標

図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

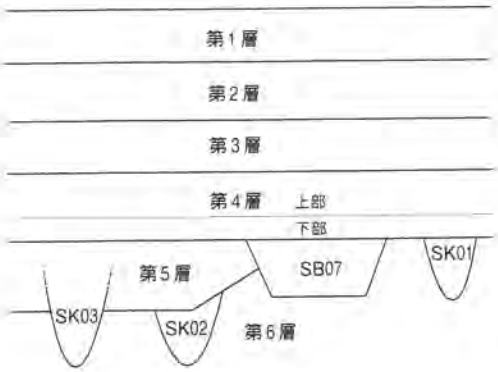


図3　地層と遺構の関係

北を基準とした。標高は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、本文・挿図中ではTP＋○mと略記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地の現地表面はほぼ平坦であり、標高はTP＋5.3mである。調査地の層序は以下のとおり区分した(図3・4)。

第1層　砕石を主体とする現代の盛土層で、層厚は20～30cmである。

第2層　明黄褐色の粘土偽礫を主体とする現代の整地層で層厚は10～20cmである。

第3層　粗粒砂混りの黄褐色中粒砂質シルトからなる近世の作土層で層厚は5～10cmである。本層の下面では耕作痕跡が認められた。

第4層　上部の黄褐色中粒砂質シルトからなる作土層と下部のにぶい黄橙色粗粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は上部が10～15cm、下部は5cm未満である。上部からは瓦器片が出土し、中世の作土層に対比できる。

第5層　暗褐色礫混り粗粒砂質シルトで調査地東部に層厚20cmで認められたほか、遺構埋土として存在する。東へ下がる緩やかな斜面に堆積しているが、この傾斜は自然の傾斜なのか遺構の一部なのかは調査地内では判断することはできなかった。遺構には本層内に掘込み面があるものや本層を除去した時点で検出されるものがある。弥生時代前期の土器を多く含み、ヘラ描き沈線には多条化したものが認められる。

第6層　黄褐色中粒砂質シルト～粗粒砂からなる段丘構成層である。

ii)遺構と遺物(図4・5、写真1)

第6層上面において、柱穴・土壙など、多くの遺構を検出した。第5層が分布する調査地西端では第5層内で検出できるものもある。見つかった遺構は弥生時代前期と古墳時代後期の2時期があるが、後述のSB07を除いては、弥生土器のみを出土し、また、SB07は他の遺構と埋土の色が異なっていることから、検出したほどんどの遺構は弥生時代前期と推定しうる。以下おもな遺構についてその概略を記す。

SK01　調査区北部で検出した土壙である。試掘調査時に多くの弥生土器を含む厚い地層として報告されたものである。平面形は直径1.5mの円形で、深さはもっとも深い部分を検出した試掘調査の所見によれば検出面より0.6mである。埋土は黒褐色シルト～粗粒砂質シルトであり、多くの弥生時代前期の土器が出土した。土器は細片でしかも脆いものが多く特徴的な部位は少ないが、口縁部直下に段をもつ甕や、体部に段を削出し段上に沈線を施した壺などがある。また、壺には木葉文とみられるヘラ描き沈線による文様を有するものもある。ヘラ描き沈線は確認できたものはすべて2～3条と少条である。

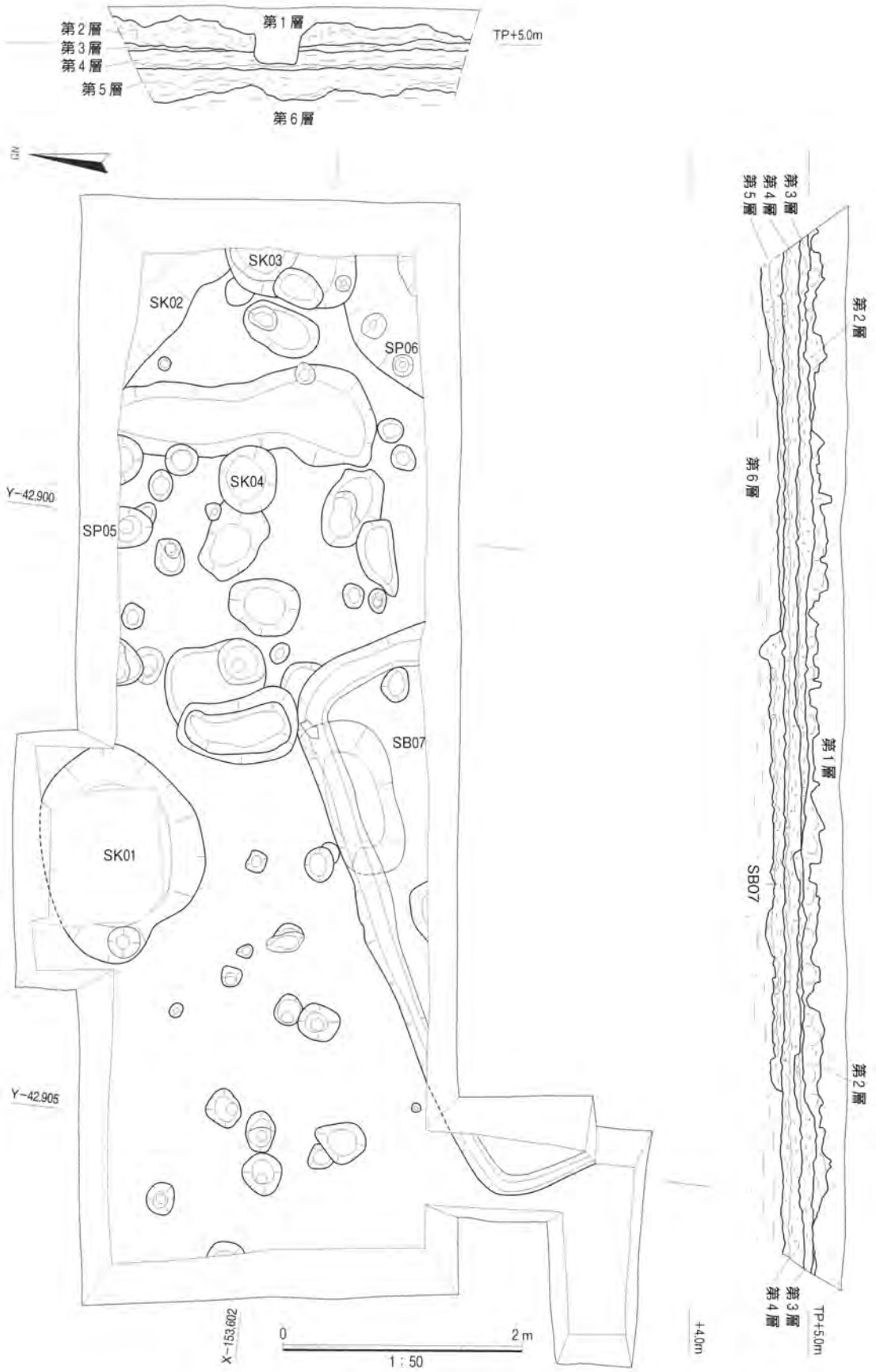


図4　地層断面図および遺構平面図

写真1　弥生土器

これらの特徴から弥生時代前期でも中段階に遡る特徴をもつといえよう。

SK02　調査区東北端で検出した土壙で、北東に向けて深さ0.2m下がっている。肩部のラインが直線的であり、溝の可能性もある。第5層を除去した時点で検出された遺構である。遺物は少量の弥生土器片が出土したのみである。

SK03　調査区東端で検出した長軸長1.2mの平面形が楕円形の土壙で、深さは0.2mである。第5層内に掘込み面をもつ遺構である。

なお、SK02・03などの遺構上部に拡がる第5層からの出土遺物も弥生時代前期の土器であるが、ヘラ描き沈線が9条以上と多条化した個体が見受けられることから、第5層の形成は前期新段階まで下る可能性がある。

SK04　調査区東部で検出した直径0.5m、深さ0.2mの土壙である。埋土には炭を多く含み、建物の中央穴の可能性がある。遺物は弥生土器細片が出土したのみである。

柱穴・小穴　調査地全域で30基以上もの柱穴や小穴を検出した。建物や構造物として復元することはできなかった。確認できた柱痕跡はすべて10cm以下である。深さは0.1～0.3m遺存する例がほとんどであるが、SP05・SP06のように0.4mを超える柱穴もある。

これらの遺構からの出土遺物は弥生土器のみである。細片が多いが、確実に中期に下る資料はないことから、弥生時代前期中段階から新段階にかけての集落が存在したと考えられよう。遺構の見かけの分布からは、西に柱穴が多いのに対して、東では土壙が多い。第5層が東に向けて厚くなることから推定すると、調査区より東ではさらに標高が低くなることが予測され、集落の縁辺部に当っている可能性がある。

SB07　調査区南部で検出した周壁溝を伴う方形の竪穴建物で、一部を拡張したところ東西は4.7mであることがわかった。検出面からの深さは0.1～0.2mが遺存し、床面には5cmほどの厚さで偽礫を含む層が存在する。意識的に床を貼ったものか、加工時の形成層かは明らかにできなかったが、東北部に0.1mほど埋土の基底が深くなった部分があり、この部分が平坦に埋められていることから、少なくとも床面を平坦に均していたようである。周壁溝はこの偽礫を含む層から掘られ、深さは0.10～0.15mである。遺構上部の埋土の色は褐色(7.5YR4/4)で弥生時代の遺構の埋土の色が暗褐色(10YR3/3)～黒褐色(7.5YR3/2)であることと比べるとやや淡い色調である。

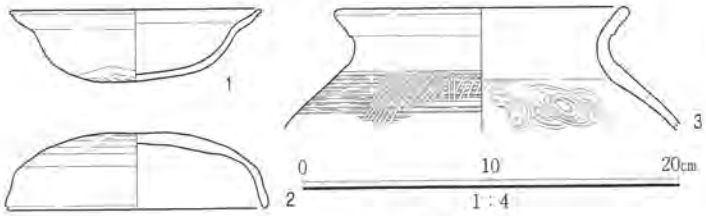


図5　SB07出土遺物

埋土からは土師器・須恵器が出土

した。1は土師器鉢で、口縁部は外方に開く。2・3は須恵器で2は杯蓋、3は口縁部が幅広く肥厚する甕である。これらの遺物の特徴から竪穴建物の時期は6世紀後半に位置づけられよう。

今回検出した遺構で土師器・須恵器が出土したのは本遺構のみである。検出した遺構のなかには古墳時代に下るものも含まれていると考えられるが、古墳時代の遺物が含まれないこと、埋土の色調が異なることから、存在したとしてもごく少量であると判断できる。

3)まとめ

今回の調査では、酒君塚古墳周辺でこれまで不明であった弥生時代と古墳時代の集落を検出することができた。特に上町台地における弥生時代前期中段階に遡る集落の発見は、弥生文化の河内湖沿岸への定着の過程を探るうえで重要な資料となろう。また、古墳時代の集落の発見も酒君塚古墳の時期を含んだ古墳時代の当地周辺の動向を探るうえで興味深い。

これまでの成果をあわせると酒君塚古墳周辺には少なくとも弥生時代前期、庄内期、古墳時代の集落が存在したと考えられる。遺跡の拡がりや性格を探るうえでもより広範囲で注目すべき遺跡であり、今後の周辺の調査の進展が期待される地域である。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「酒君塚古墳発掘調査(SA01－2)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2003)』、pp.113－118

南壁地層断面
（北西から）

調査地全景
（西から）

SB07（西から）

平野区瓜破東一丁目における建設工事に伴う
瓜破遺跡調査(UR11－3)報告書

調査個所	大阪市平野区瓜破東1丁目931－1の一部
調査面積	24㎡
調査期間	平成23年11月4日～11月8日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、高橋 工

1)調査に至る経緯と経過

瓜破遺跡は、河内台地から北へ派生した瓜破台地の先端部から周辺の沖積平野にかけて立地し、後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。瓜破台地上には幾筋もの開析谷が存在することが知られており、本調査地のすぐ東にもその一つである西谷がほぼ北に向って延びている(図1)。

近隣の調査で、北150mのところでは、西谷からその西肩の台地にかけてUR07－1次調査が行われている。台地上では弥生時代中期初頭の竪穴建物と、弥生～古墳時代の灌漑用とみられる溝が発見され、西谷内では中期旧石器時代から中世に至る各時代の流路・堆積層が検出され、縄文時代前期初頭の土器以後、各時代の遺物が出土している[大阪市文化財協会2009]。また、東約300mの一帯は成本廃寺の推定地で、周辺の各調査地では古代瓦が出土している。

本調査地では、住宅建築工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下40cmで中世とみられる遺物を包含する地層が発見され、今回の調査が行われることとなった。調査区は、建築の予定地内で東西6m、南北4mの範囲で設定した(図2)。掘削は、近世の作土層とみられる地層までを重機を用いて行い、その下位層準は人力によった。本報告書で用いた水準値はT.P.値で、図中ではTPと省略した。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

2)調査の結果

i)層序

現代の整地層以下に7層を確認した。(図3・4)。

図1　調査地位置図

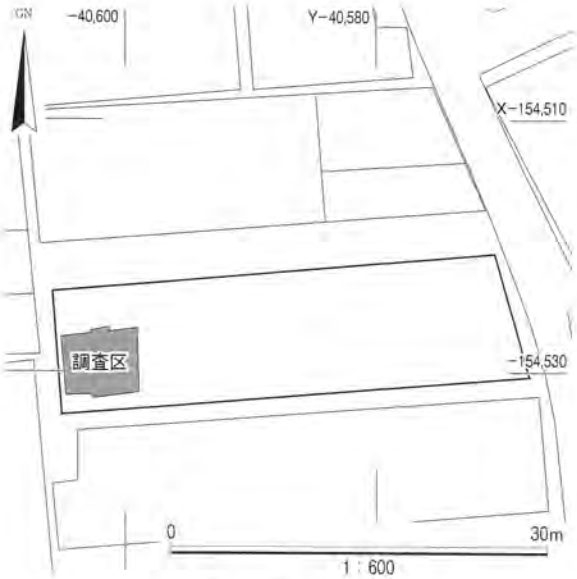


図2　調査区位置図

図3　地層と遺構の関係図

第1層：灰褐色シルト質粘土偽礫からなる現代の整地層で、層厚は20cmである。

第2層：褐色または暗オリーブ色粗粒砂質粘土からなる作土層で、層厚は30cmである。本層からは17世紀後半のものとみられる肥前磁器碗1(図5)が出土した。

第3層：オリーブ灰色粘土質極細粒砂からなる作土層で、層厚は10cmである。遺物は出土しなかったが、岩相は上位層に似ることから近世の地層と判断した。

第4層：中世の作土層で、層厚は東南部で最も厚く、40cmである。以下の3層に細分することができた。土師器羽釜2(図5)が出土した。

第4a層：灰色または灰オリーブ色粗粒砂質粘土層。

第4b層：灰オリーブ色または暗オリーブ色細礫混りシルト質粘土層。

第4c層：灰オリーブ色細粒砂質シルト質粘土層。

第5層：堀状遺構SX1を埋めた客土層で、東南部で最も厚く、35cmである。以下の2層に細分することができた。15世紀頃の瓦質土器擂鉢3、土師器甕？ 4、平瓦5(図5)が出土した。

第5a層：地山層偽礫を含む灰色粘土質シルト層。

第5b層：暗緑灰色地山層の偽礫層。

第6層：堀状遺構SX1の最下部に堆積した泥質な自然堆積層で、灰色粘土からなる。層厚は10cmほどであった。14～15世紀の土師器羽釜6(図5)が出土した。

第7層：緑灰色または黄褐色シルト～粘土質シルトからなる地山層である。上面でSX1・2を検出した。上面の標高は最も高い西北部でTP+8.5mである。

ii)遺構と遺物

SX1　調査区南部で検出した堀状の遺構で、東西方向に5m以上延び、幅は南北で1.9m以上、深さ0.5mである。底部は周囲より0.10～0.15mさらに深くなり、その部分に泥質な第6層が自然堆積していた。その後、第5層によって完全に埋められていたが、東壁地層断面では第6層は、南から北へ向って投入された第5層の荷重で北側へ押しやられ、最大35cmの厚さで盛り上がった状況が看取された。泥質な堆積物の存在から、滞水状態にあったとみられるので、堀のような機能が考えられる。第5・6層の出土遺物からはさほどの時期差はないとみられ、14～15世紀の遺構である。

SX2　調査区北部で検出した、平面形が東西に長い長楕円形の土壙状の遺構で、SX1に切られる。東西4.7m以上、南北1.7m以上、深さ0.2mを測る。底部には極細粒砂が自然に堆積した薄層がみられ(図4中の4)、上部は地山層の偽礫で埋められていた(同3)。土師器・須恵器の細片が出土したが、詳細な時期はわからなかった。ただし、SX1よりは古く、中世以前の遺構ではある。埋土の状況からは土採り穴である可能性もある。

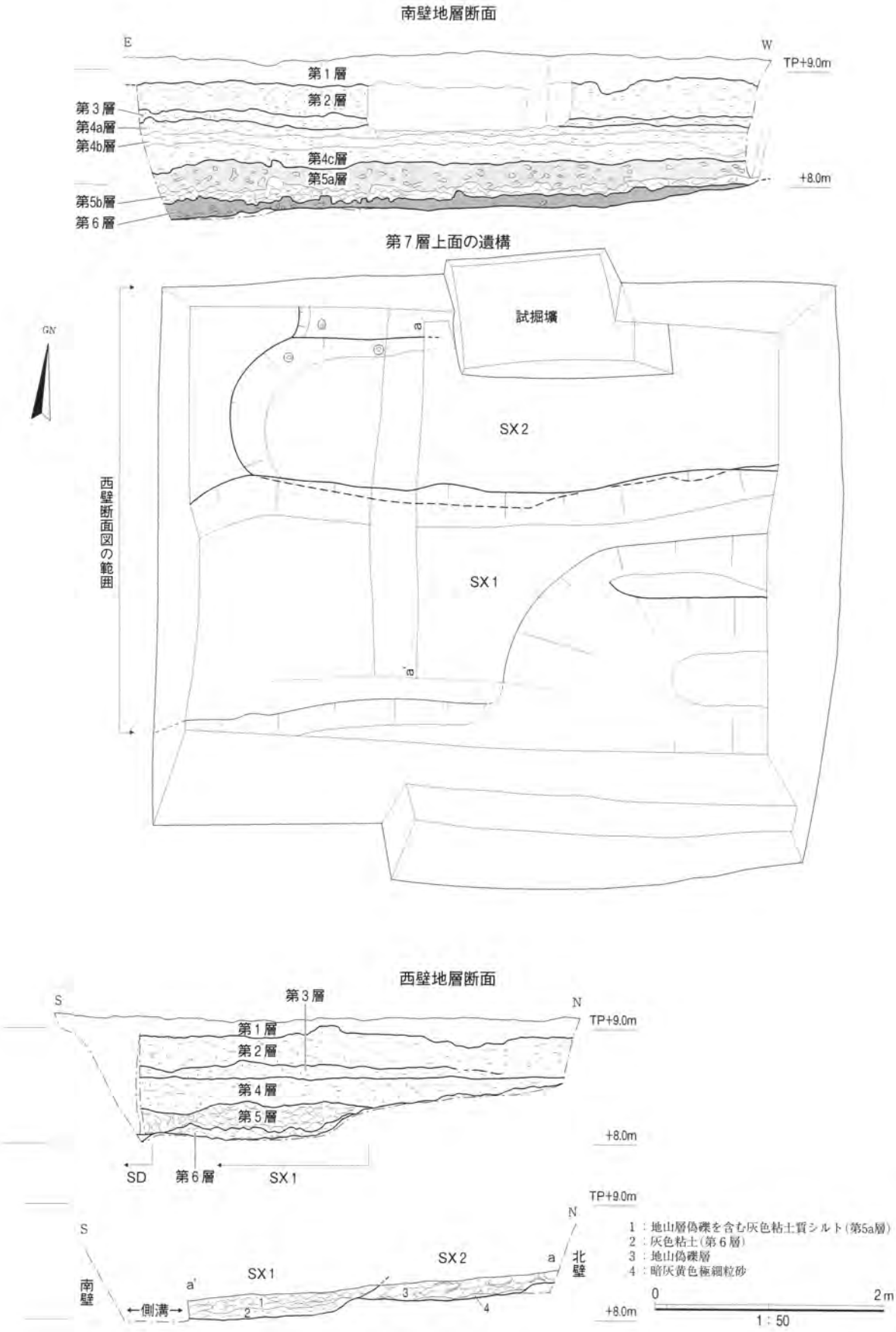


図4　遺構平面・断面図と地層断面図

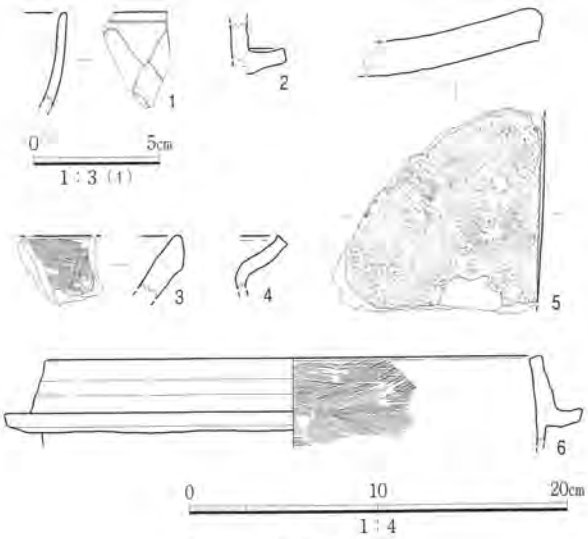


図５　出土遺物実測図
第２層（１）、第４層（２）、
SX１：第５層（３～５）、SX１：第６層（６）

３）まとめ

中世の堀状遺構とそれより古い時期の土壙状遺構を発見し、この地の土地利用が中世後半に遡ることがわかった。堀状遺構は屋敷地の区画溝である可能性も考えられ、周辺における今後の調査の進展が期待される。

引用文献

大阪市文化財協会2009、『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

SX１と層序
（北西から）

SX１とSX２
の検出状況
（南西から）

遺構完掘状況
（東から）

平成２３年度　大阪市内埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

発行日　平成25年3月29日

発　行　大阪市教育委員会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編　集　大阪市教育委員会文化財保護担当
（大阪市北区中之島1-3-20）

印　刷　株式会社フォーラムK